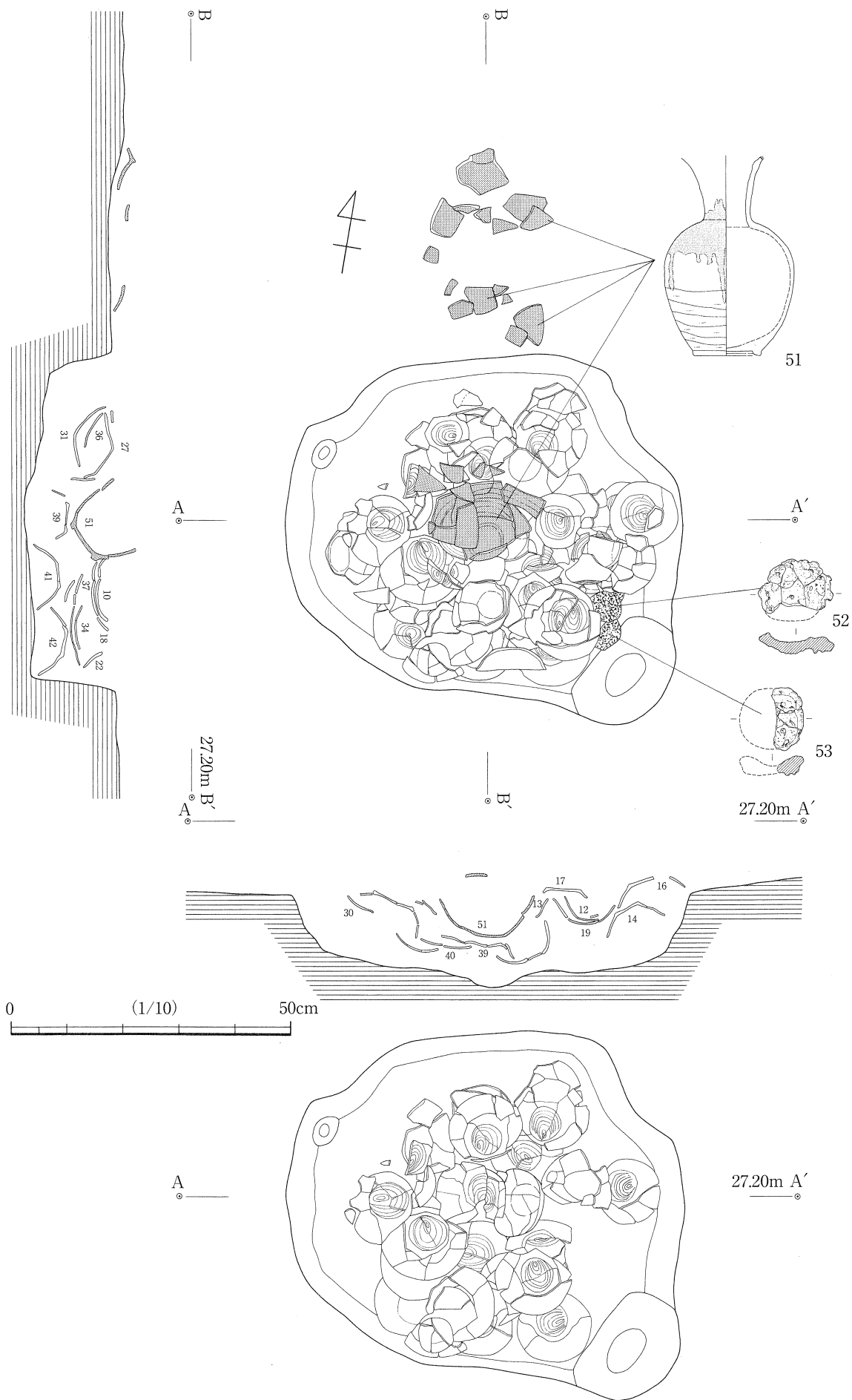


第3節 祭祀遺構

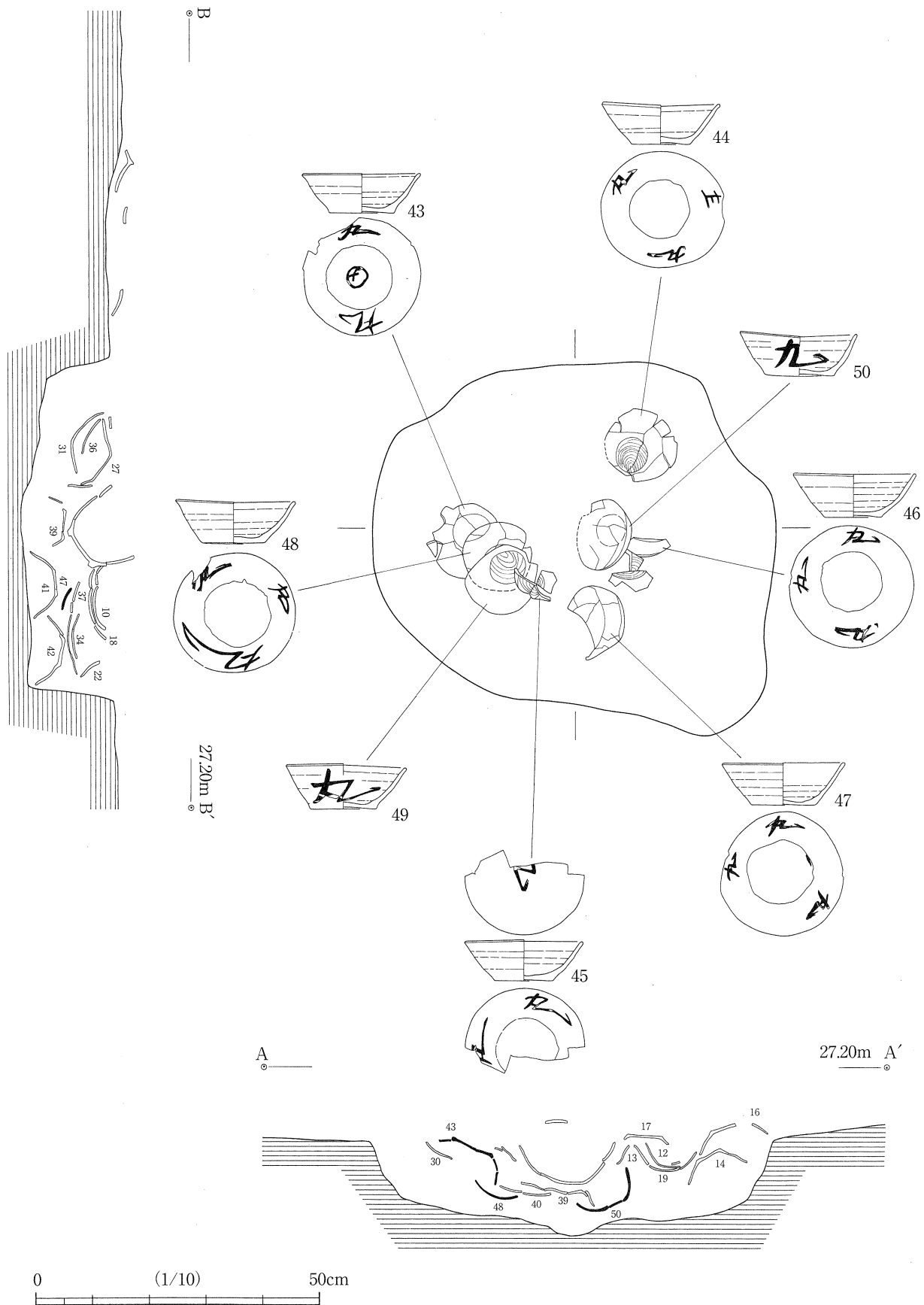
遺跡内から検出された祭祀遺構や祭祀関連遺構は、土器埋納遺構・集石遺構・土器廃棄遺構・焼土を伴う遺構がある。土器埋納遺構には、1～5号の出土状況が明らかな遺構がある。また、この他にも、グリッド遺物として取り上げ、出土状況が不明ながら K13区の P2 や I7 区 P7～8 も土器埋納遺構的なピットである可能性がある。集石遺構は 8 基。土器廃棄遺構 4 基。焼土を伴う遺構には、37号住居跡覆土のような厚く堆積した焼土中に土器が散在して検出され祭祀行為が明らかに感じられるものと、30号住居跡のような覆土中に焼土がブロック状に形成されるもの、また、23～25号住居跡のように覆土中に焼土粒を多量に含み墨書土器や土師器大型台付鉢等の祭祀関連遺物が集中して出土する 3 遺構が上げられる。



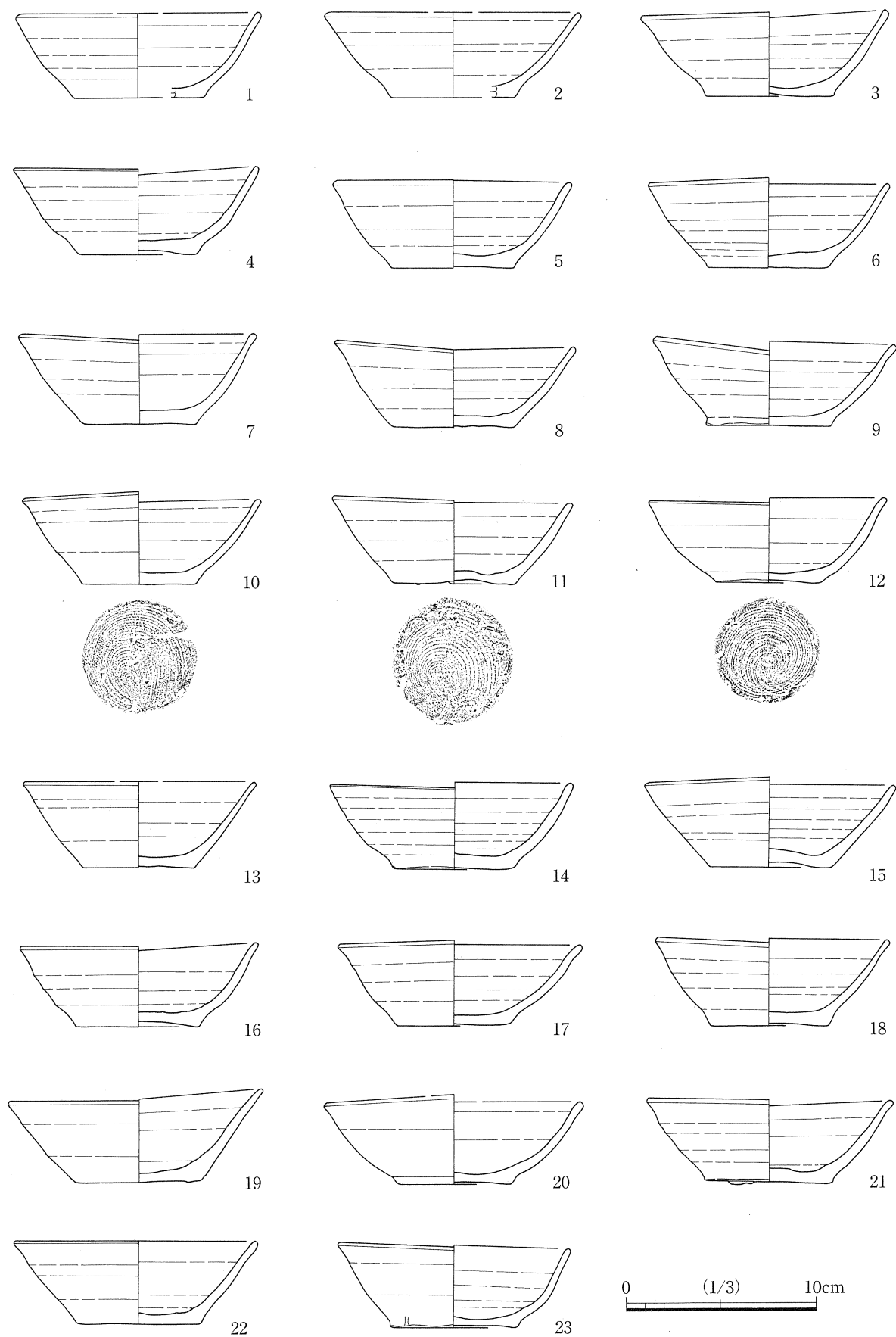
第196図 E地区祭祀遺構分布図



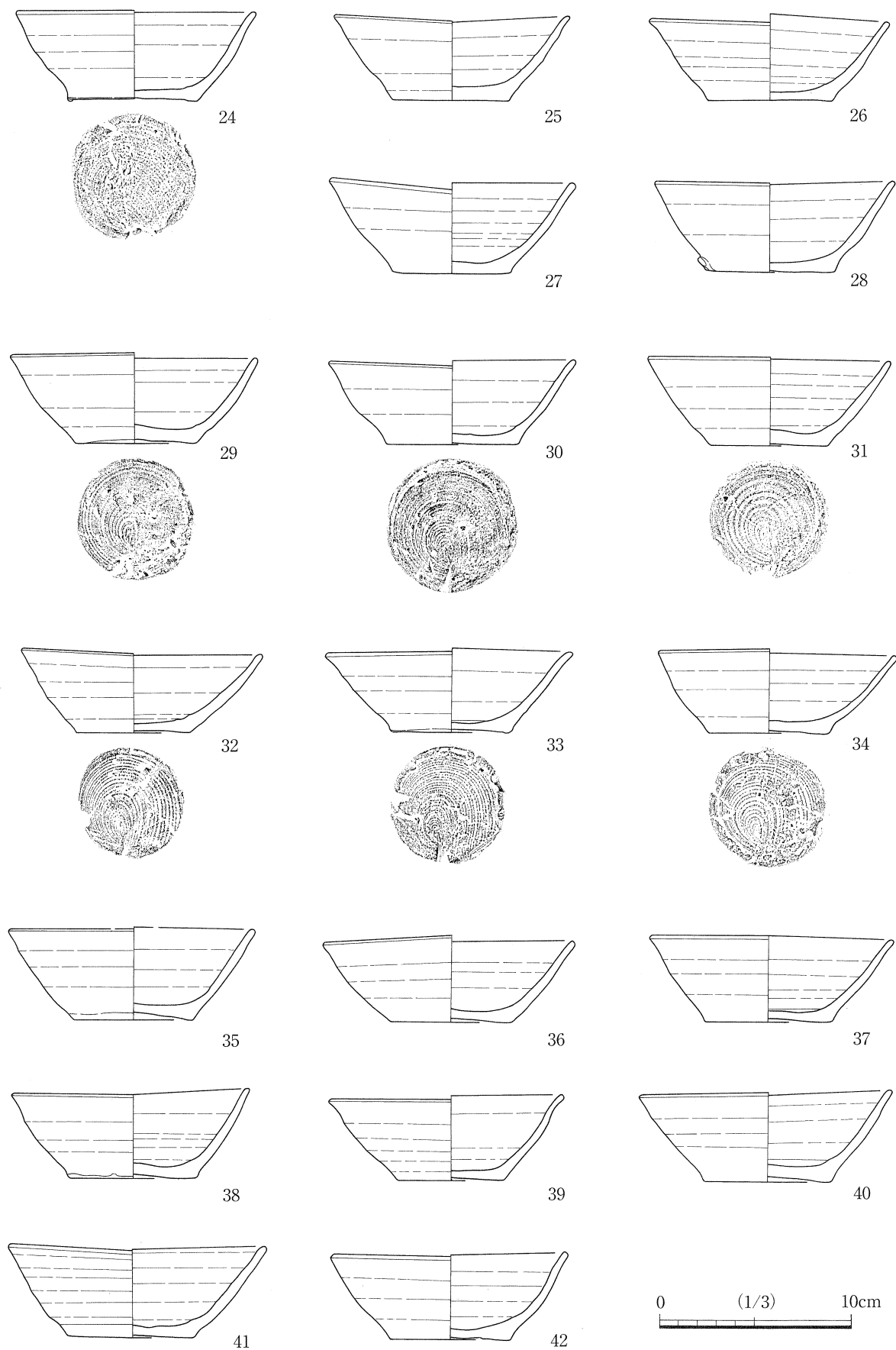
第197図 1号土器埋納遺構(1)



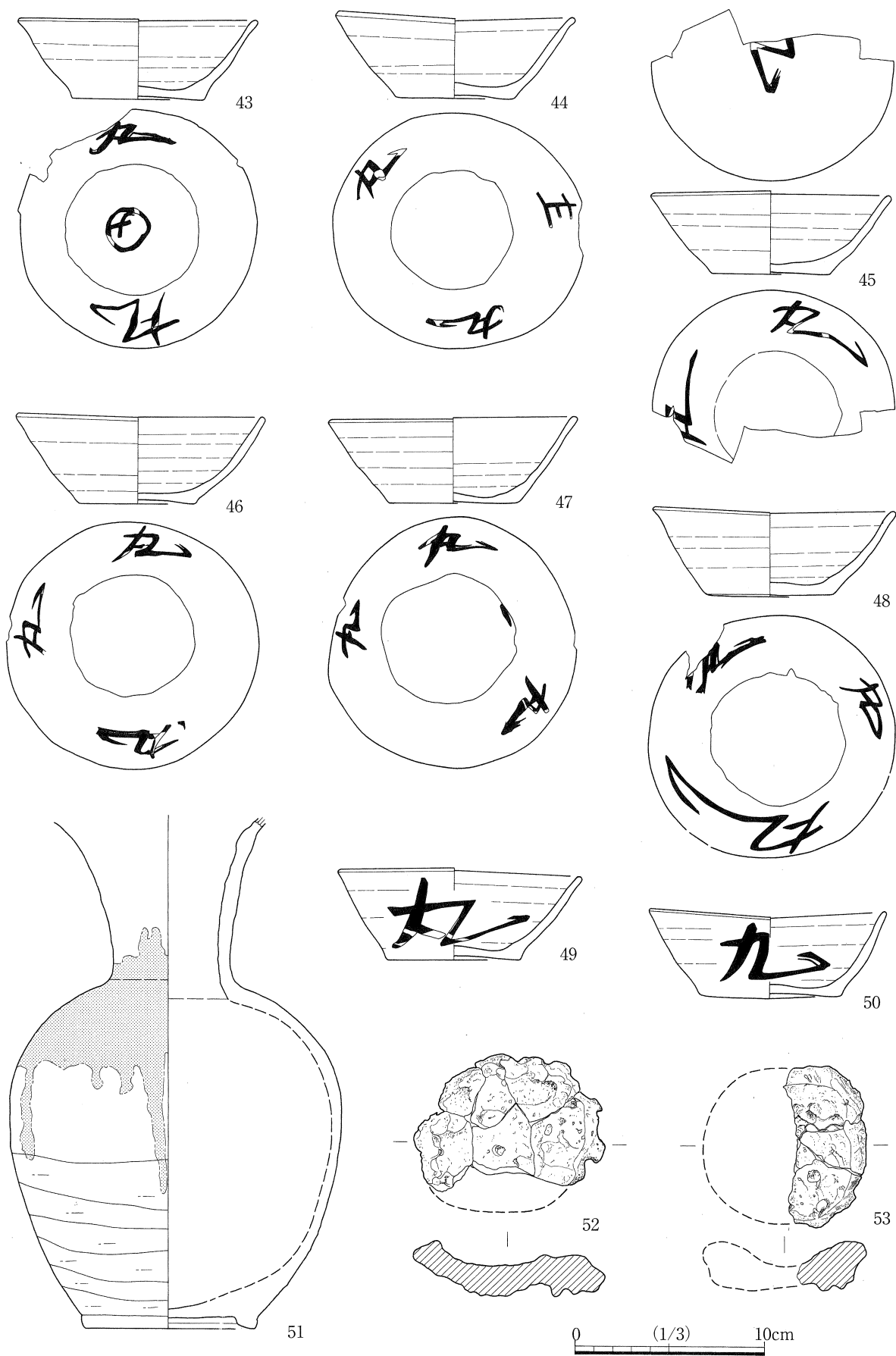
第198図 1号土器埋納遺構(2)



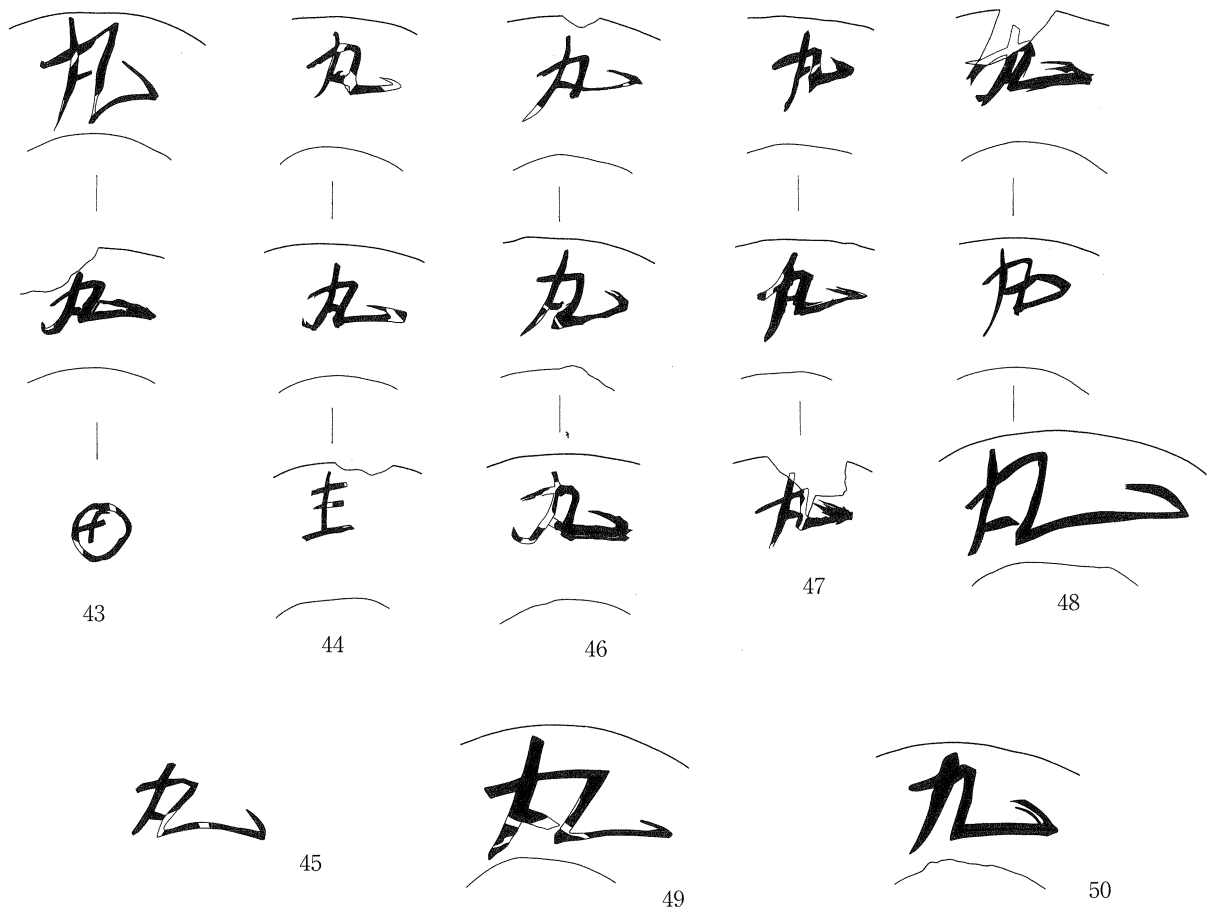
第199図 1号土器埋納遺構出土遺物(1)



第200図 1号土器埋納遺構出土遺物(2)



第201図 1号土器埋納遺構出土遺物(3)



第202図 1号土器埋納遺構墨書(4)

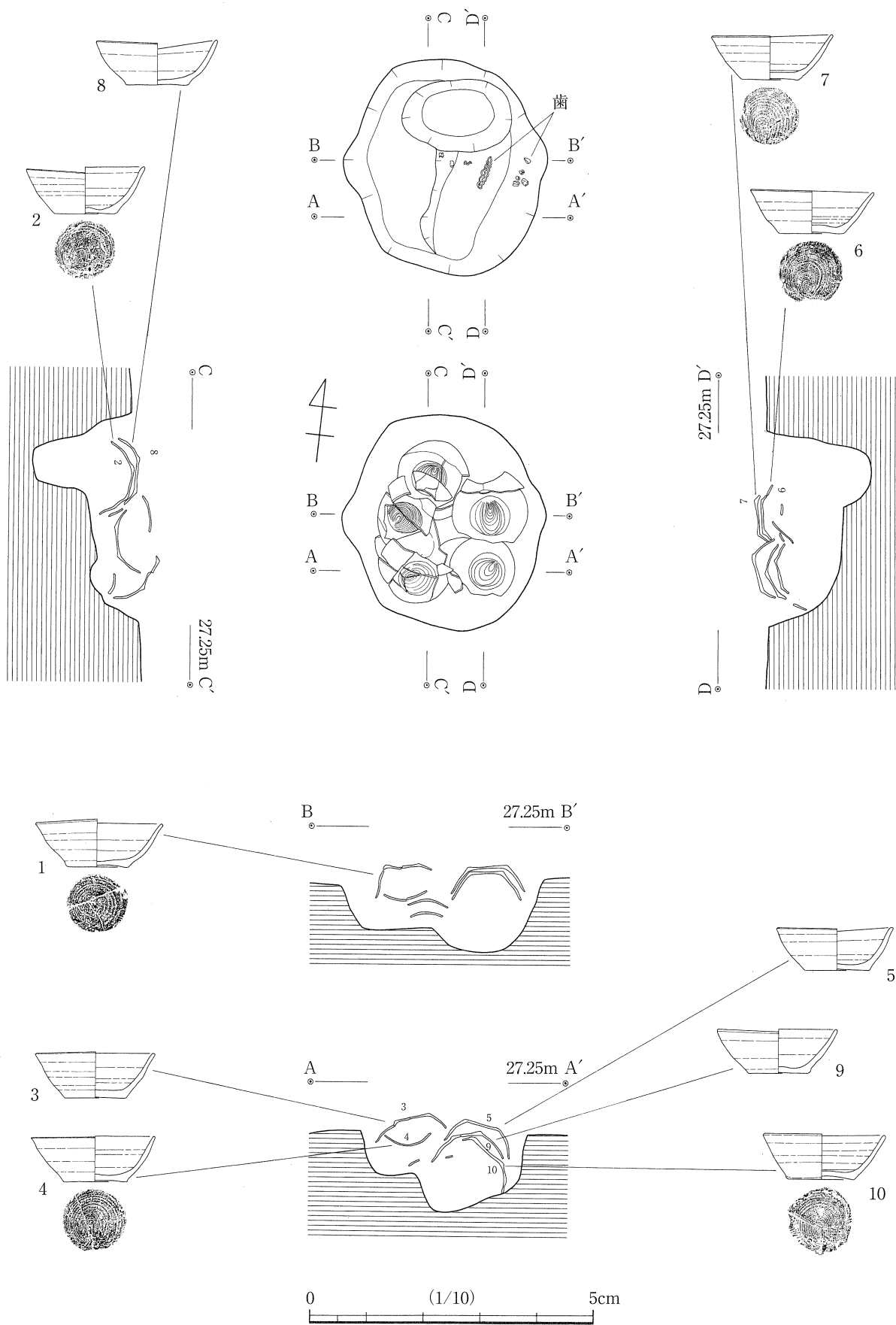
土器埋納遺構

1号土器埋納遺構(第197～202図)

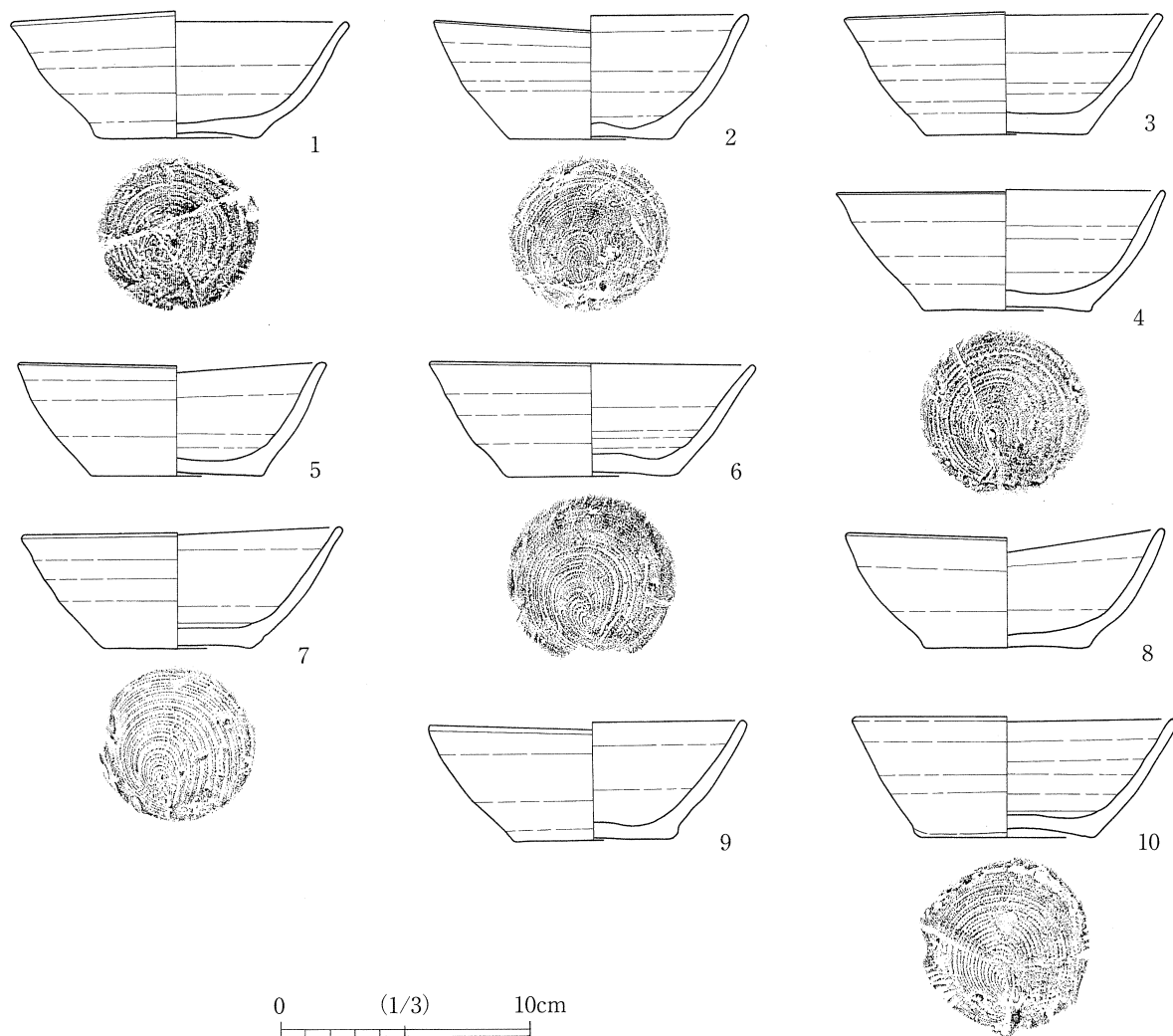
E地点東側の四面廂付建物跡の切り合う南側のL13区から検出する。平面形は不整な円形で小竪穴状を呈し、プラン南西に小ピットを複合する。遺構の規模は、確認面東西長0.71m・南北長0.6m、法面下東西長0.6m・南北長0.55m、確認面からの深さ0.15～0.2m(標高26.91m)を計測する。また、平面プランは確認できないものの、中央に埋納された灰釉長頸壺が不整円形のプラン外へ0.38m程広がりを見せ検出することから、確認面上面の平面プランは更に北側に広がるものと思われる。遺構の深さは当時の地表面が標高27.4mまで確認できることから、本遺構の当時の地上面からの深さは、0.5m以上と復元できる。床は中央が僅かに窪むものの平坦で軟弱である。

出土遺物は、復元した土器だけでも回転糸切り無調整のロクロ土師器坏50点・灰釉長頸壺1点、碗形鉄滓2点がある。出土状況は、ロクロ土師器坏を伏せ、また、合子状に合わせ口で埋納し、灰釉長頸壺はその中央に据えられている。ロクロ土師器坏の内43～50には墨書が書かれ、43は体部外面に「丸」二箇所と底部中央に「⊗」がある。「丸」字の筆跡は別人であろう。44の体部外面には「丸」が二箇所と「主」の墨書がある。「丸」字の筆跡は別人であろう。45には内面底部中央と外面体部2箇所が確認でき配列から3箇所が想定されるが、それぞれ「丸」の墨書がある。46～48の体部外面には3箇所、49・50には体部外面に1箇所それぞれ「丸」の墨書がある。灰釉長頸壺は坂野Ⅳ期古相に比定され、稻荷台Ⅳ期-a(10世紀第1四半期)の土器編年の基準資料とした。

ロクロ土師器坏は、体部中位に張りを有し、口縁端部は強いロクロナデにより僅かに外反する。底



第203図 2号土器埋納遺構



第204図 2号土器埋納遺構出土遺物

部は全て回転糸切りである。焼成は全体に不良で接合作業中に粒子状の粒となって土器からこぼれ落ちてしまうほどである。色調は橙色を呈するものが多く、同時に焼成されたものと看取され、また、手慣れたロクロ整形や器の特徴から、ロクロ土師器工人は、1人ないし2人程度にとどまるものと看取される。ロクロ土師器坯の平均計測値は、口縁径12.77cm・底径6.36cm・器高4.63cmを計る。

2号土器埋納遺構（第203・204図）

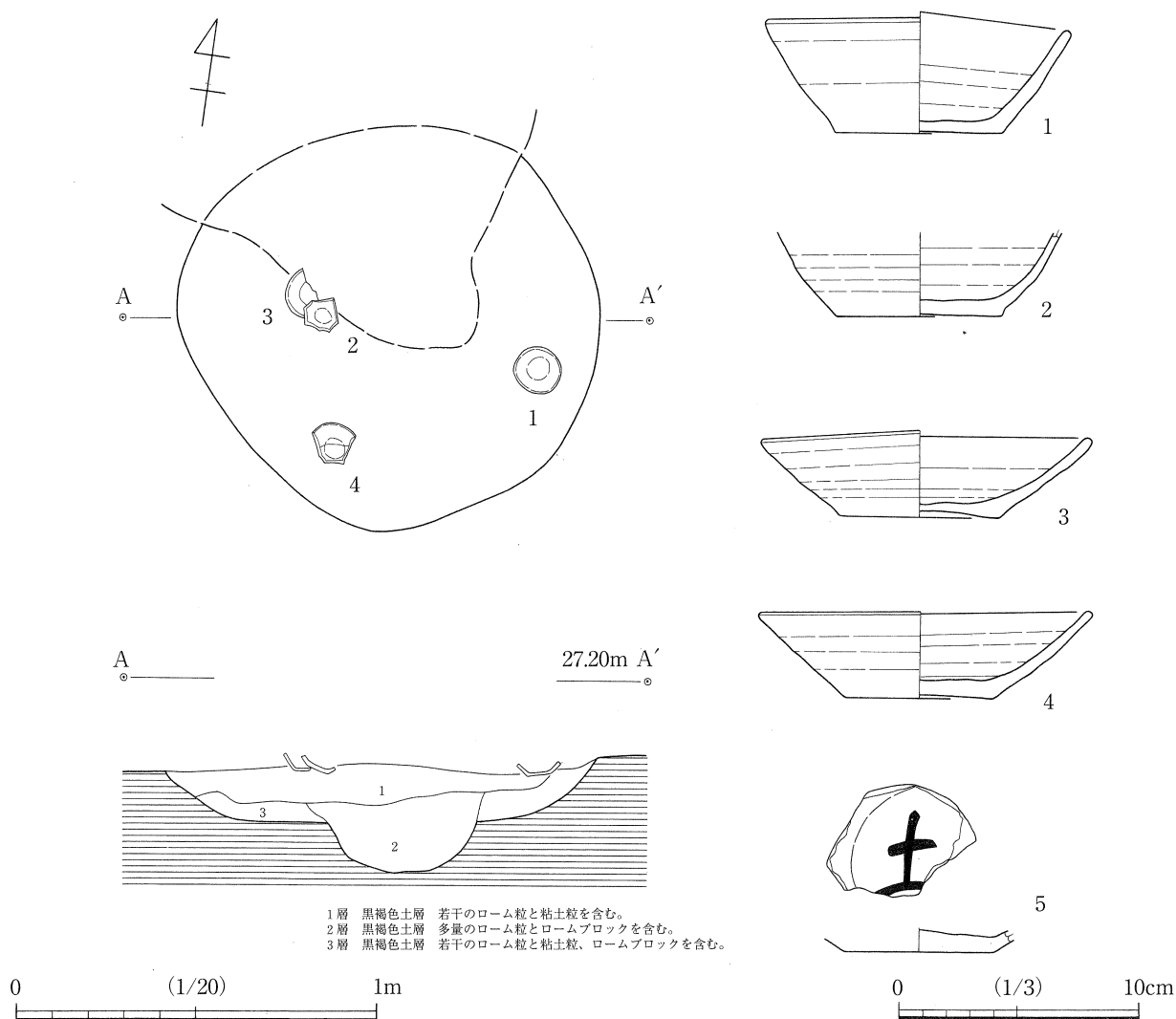
E地点東側の四面廂付建物跡の切り合う南側L13区、1号土器埋納遺構の東0.6mに接して検出する。平面形は楕円形の小ピット状を呈する。遺構の規模は、確認面南北長0.38m・東西長0.32m、確認面からの深さ0.08～0.15mを測るだけである。底面は3段あり、北側のピット状の底面標高は26.97mを計測する。遺構の深さは当時の地表面から0.43m以上掘り込まれている。ピット状の遺構の中には10点のロクロ土師器坯が伏せて置かれ、ピット底面から鹿の歯が顎の形状をとどめて検出された。この鹿の歯とロクロ土師器坯の出土状況から、ピット中には切断された鹿の頭部を置きその上に次々にロクロ土師器坯を伏せていった状況が復元できる。ロクロ土師器坯は回転糸切り無調整のもので墨書は書かれていない。

出土したロクロ土師器坯10点は、1号土器埋納遺構出土土器と比較するとやや肉厚で、体部下端に

張りを持つものも存在し、口縁に強いロクロナデによる外反はない。平均計測値は、口縁径12.9cm・底径6.76cm・器高4.8cmを計る。時期的には37住覆土焼土中土器群と1号土器埋納遺構との中間のⅢ期-bの所産と考えるのが妥当であろう。

3号土器埋納遺構（第205図）

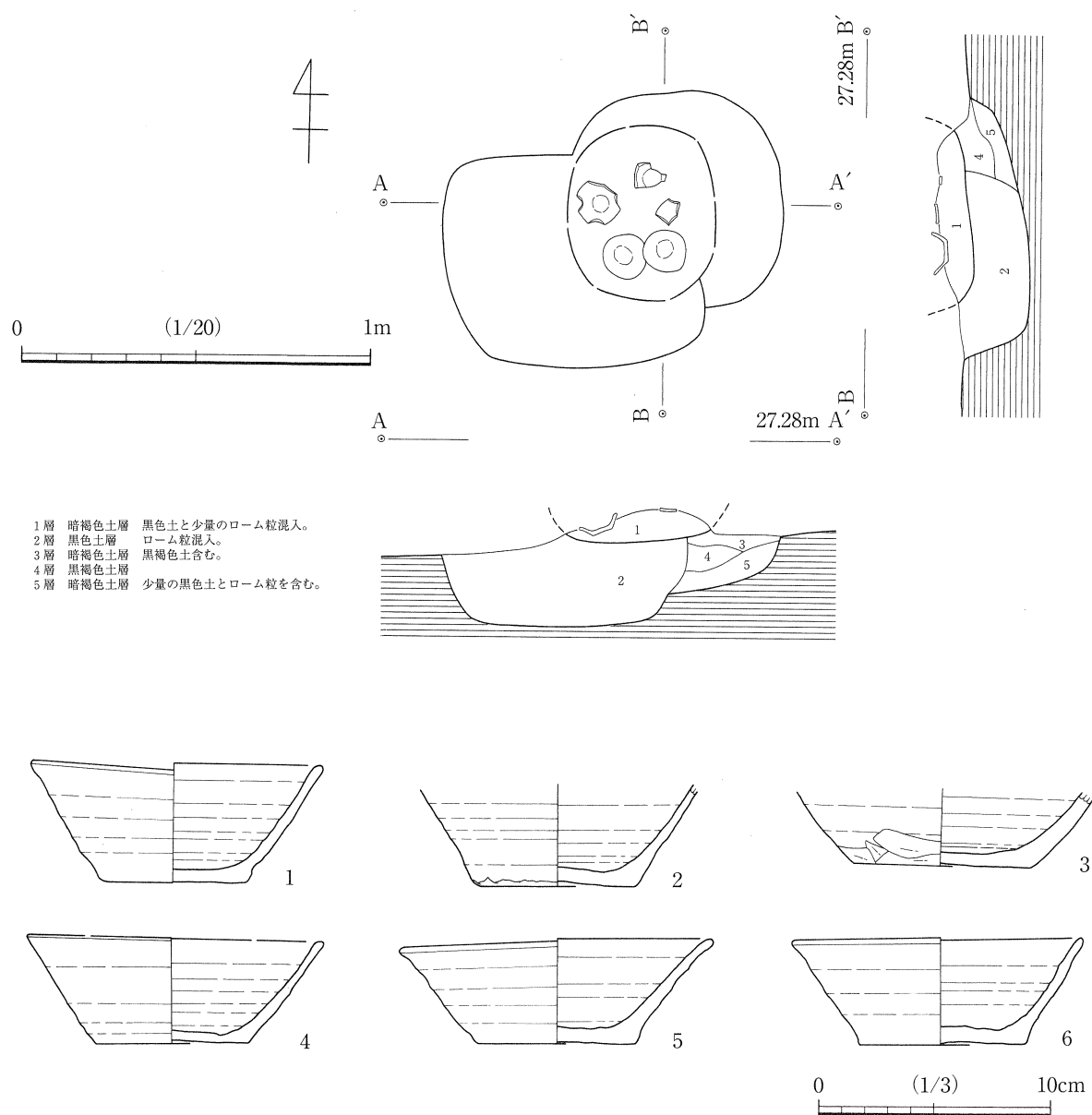
E地点検出遺構であるが検出位置を正確に示せない。しかし、E6区の18号掘立柱建物跡北東隅柱掘方に接して検出された可能性がある。本遺構は、1・2号の様な入れ子状の埋納状況は無く土坑内に土器が僅かに検出されただけである。平面形は不整な円形を呈し、径1.1m程を計測する。確認面からの深さ0.18mを測る。下層に他の遺構が存在する。底面標高は26.8mを計測する。遺構の深さは当時の地表面から0.6m以上掘り込まれている。遺構内からはロクロ土師器杯2点と皿2点の他、底部内面に「土」と墨書されたロクロ土師器杯底部を出土する。ロクロ土師器は全て回転糸切り無調整である。所属時期は、3・4の皿からⅡ期-bの9世紀第3四半期の所産であろう。



第205図 3号土器埋納遺構と出土遺物

4号土器埋納遺構（第206図）

E地点の南側のM11区から検出され、3号同様に入れ子状の埋納状況を示さない遺構である。平面形は他の遺構覆土中に掘られ不鮮明であるがほぼ楕円形を呈し、長径0.5m・短径0.42mを計測する。確認面からの深さ0.1mで、底面標高は27.0mを計測する。当時の地表面標高27.4m以上とすると深

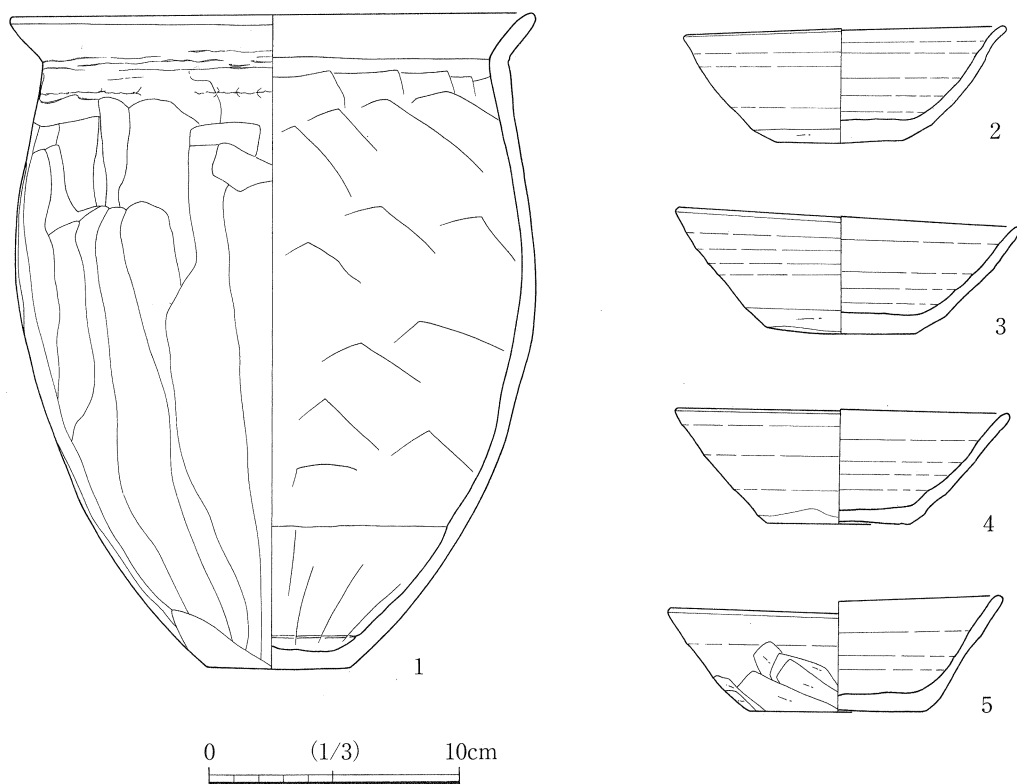
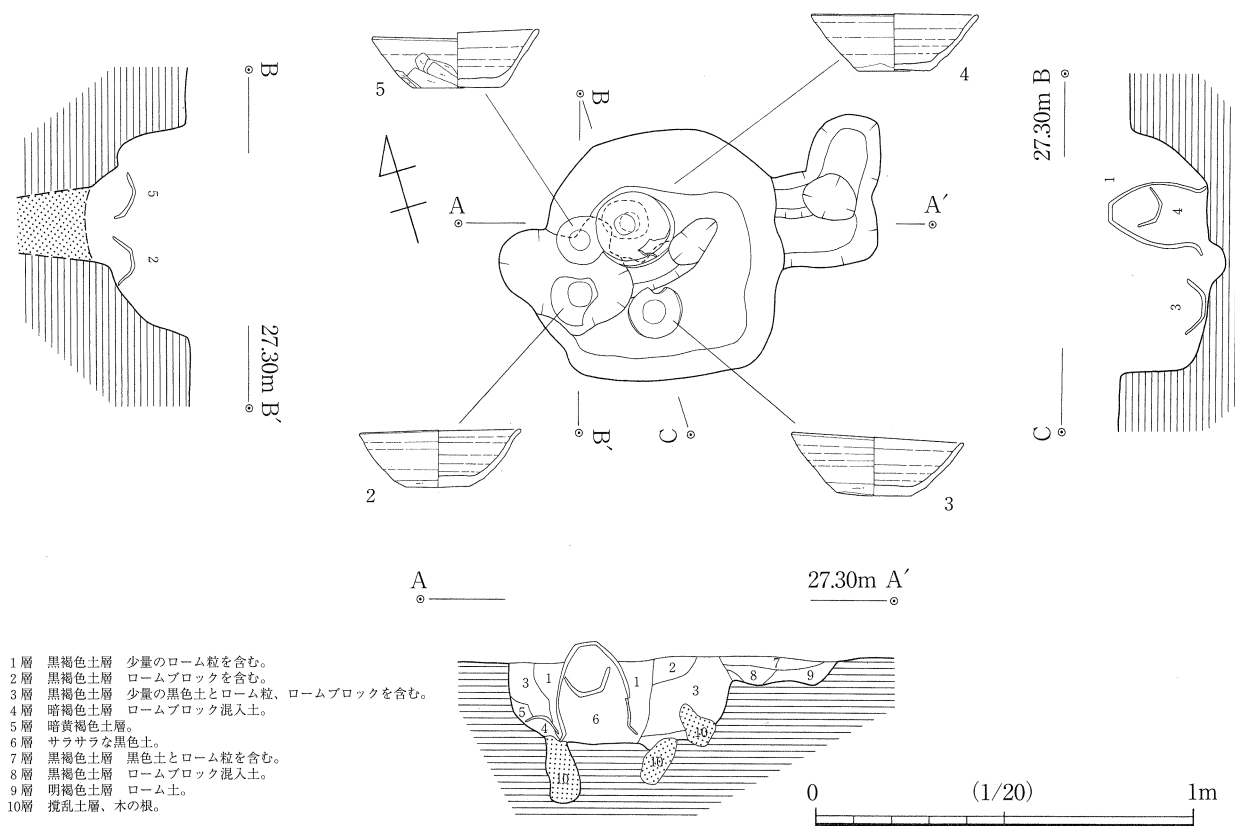


第206図 4号土器埋納遺構と出土遺物

さ0.4m以上に復元できる。出土遺物は1・2・4・5の回転糸切り無調整のロクロ土師器坏と、6の底部回転糸切りを残す体部下端および底体部手持ち篋削りを施すロクロ土師器坏がある。時期は、稻荷台Ⅲ期-bが下限である。

5号土器埋納遺構（第207図）

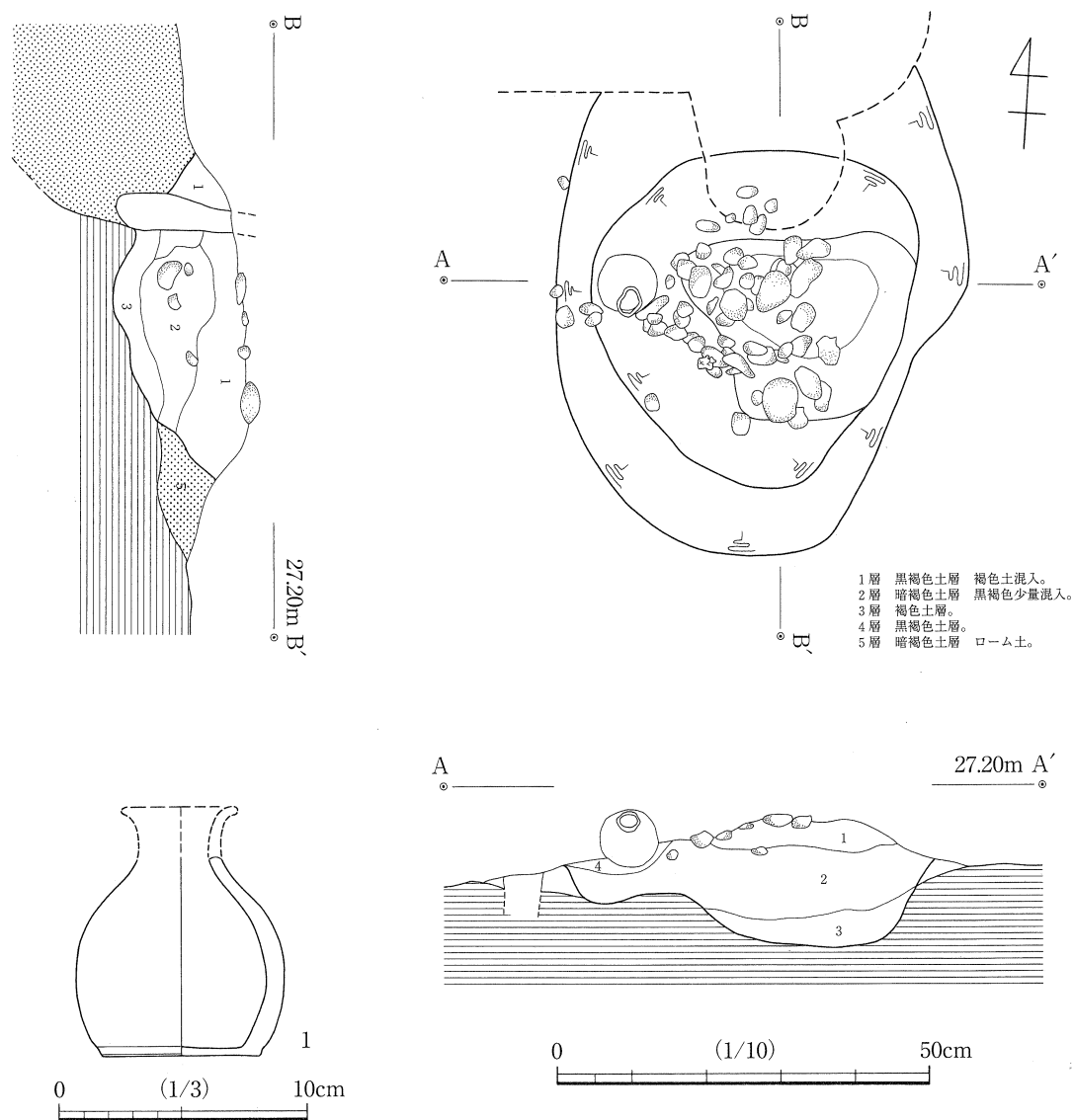
E地点東側の四面廂付建物28・29号掘立柱建物跡が占地する南側のK13・K14区に跨り検出し、プラン東側に後世のピットが掘り込んでいるものの遺存状態は良好である。平面形は胴張りする方形を



第207図 5号土器埋納遺構と出土遺物

呈し、長軸長0.65m・短軸長0.6m、深さは0.22mを測り、床面標高は26.91mに置き、当時の地表面標高27.4m以上とすると深さ0.5m以上に復元できる。

土壌内からは土師器甕1点とロクロ土師器坏4点出土する。土師器甕は伏され中には4点のロク



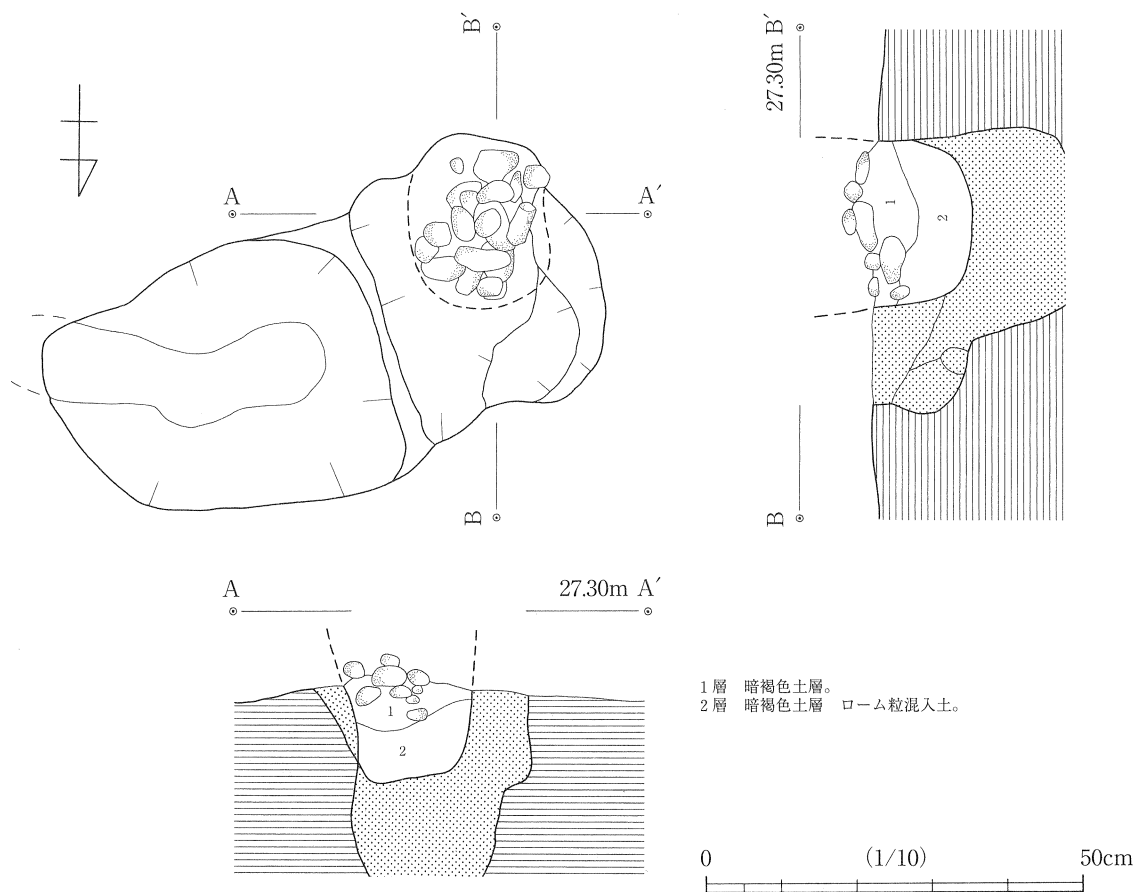
第208図 1号集石遺構と出土遺物

ロ土師器坏が置かれていた。坏内には石や歯などは検出されない。供物などの有機質のものが供えられたのであろうか。ロクロ土師器坏は2と5は伏され、3は正位置で置かれ埋納されていた。ロクロ土師器坏2・3は底体部回転篋削り、4は体部下端に手持ち篋削りを、5は底部に回転篋削りを施し、体部下端に微調整の手持ち篋削りを施している。出土遺物から、稻荷台Ⅱ期-bの所産と考えられる。

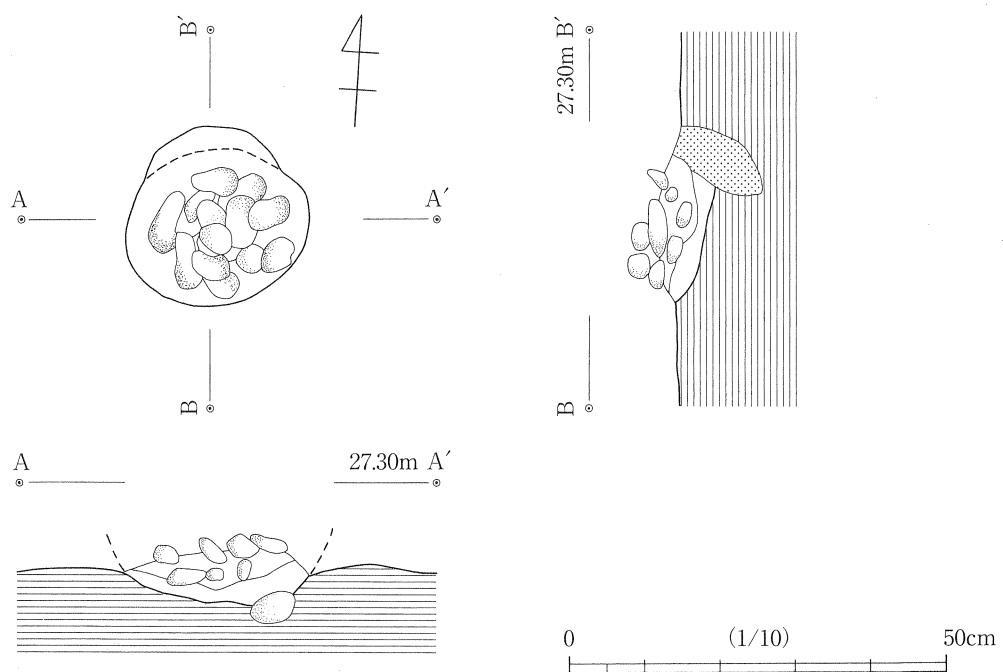
集石遺構

1号集石遺構（第208図）

E 地点東側の四面廂付建物28・29号掘立柱建物跡が占地する南側の K14区に5号土器埋納遺構の東

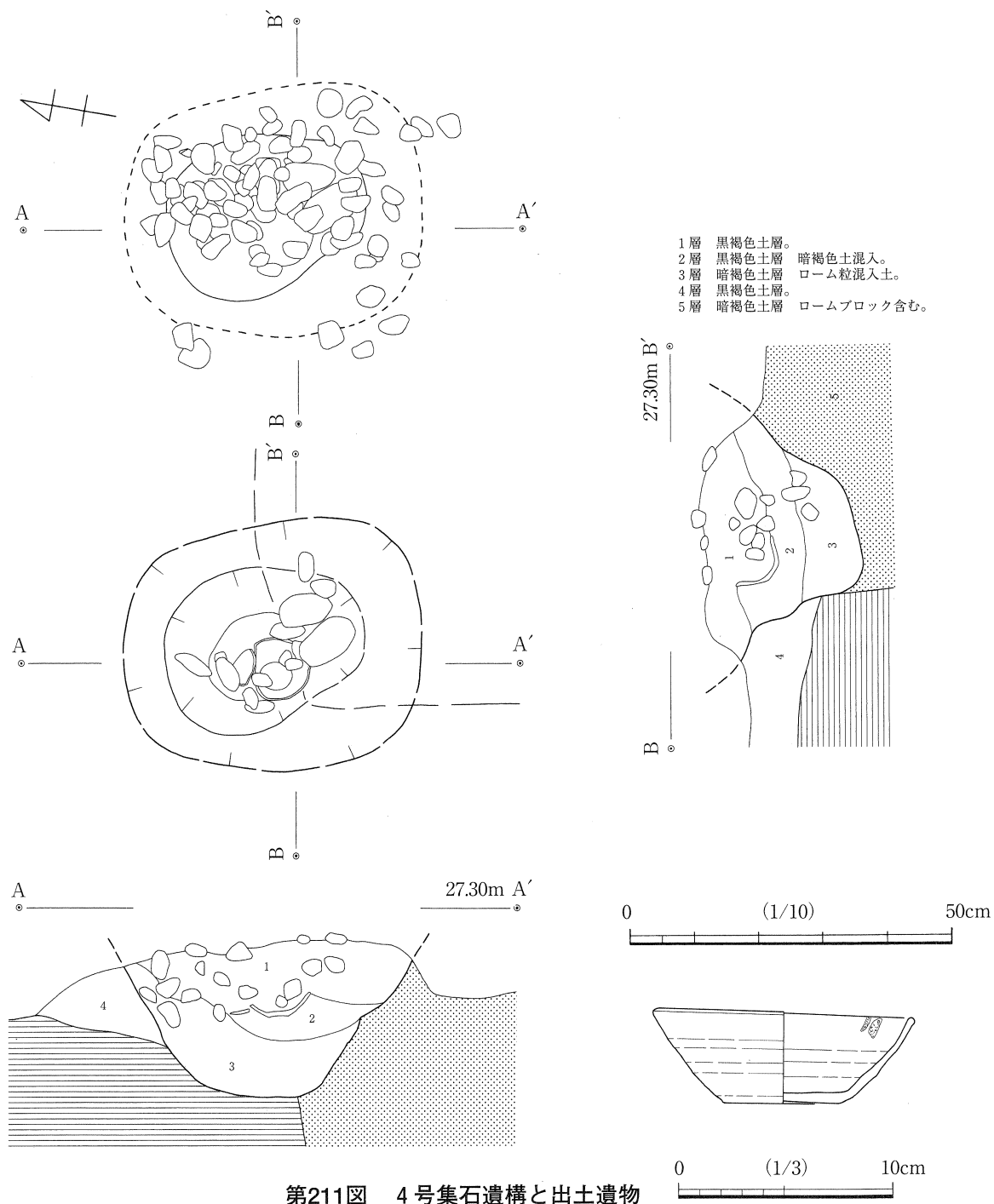


第209図 2号集石遺構



第210図 3号集石遺構

に接して検出する。平面形はプラン下層に古い攪乱穴（風倒木痕）が在り、やや不明確な個所もあるもののほぼ円形を呈する。径0.55m・深さ0.17mで、床面標高は27.08mを計測する。遺構内上層には径1～4cm程の小石を含み、緑釉小壺と猪の歯を検出する。猪の歯は、断片の遺存であるものの

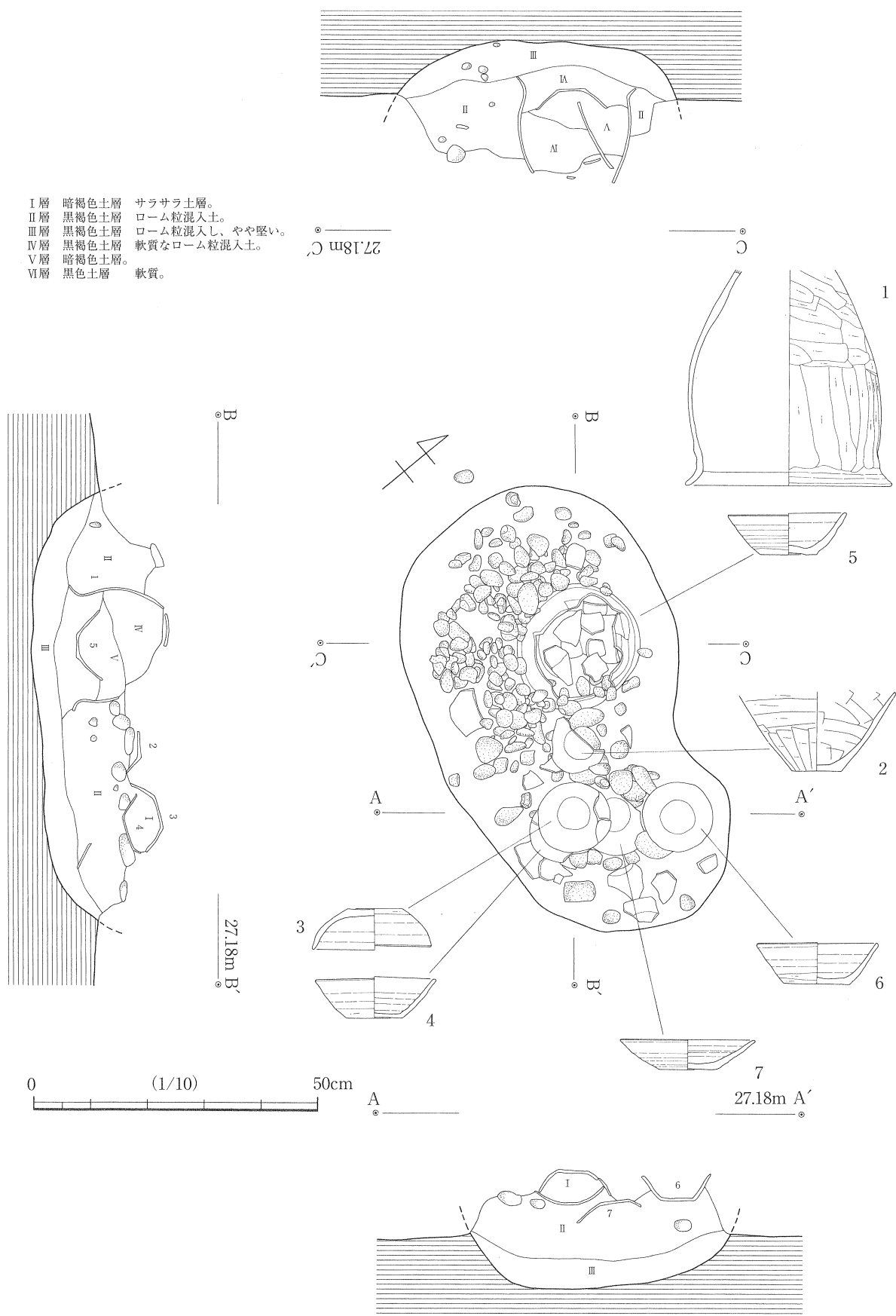


第211図 4号集石遺構と出土遺物

本来は、2号埋納遺構同様に動物の頭部だけを埋納したものと考えられる。時期は、緑釉小壺から稻荷台Ⅱ期-a～bと看取される。

2号集石遺構（第209図）

E地点東側の四面廂付建物28・29号掘立柱建物跡が占地する南側のK14・L14区に位置し、1号集



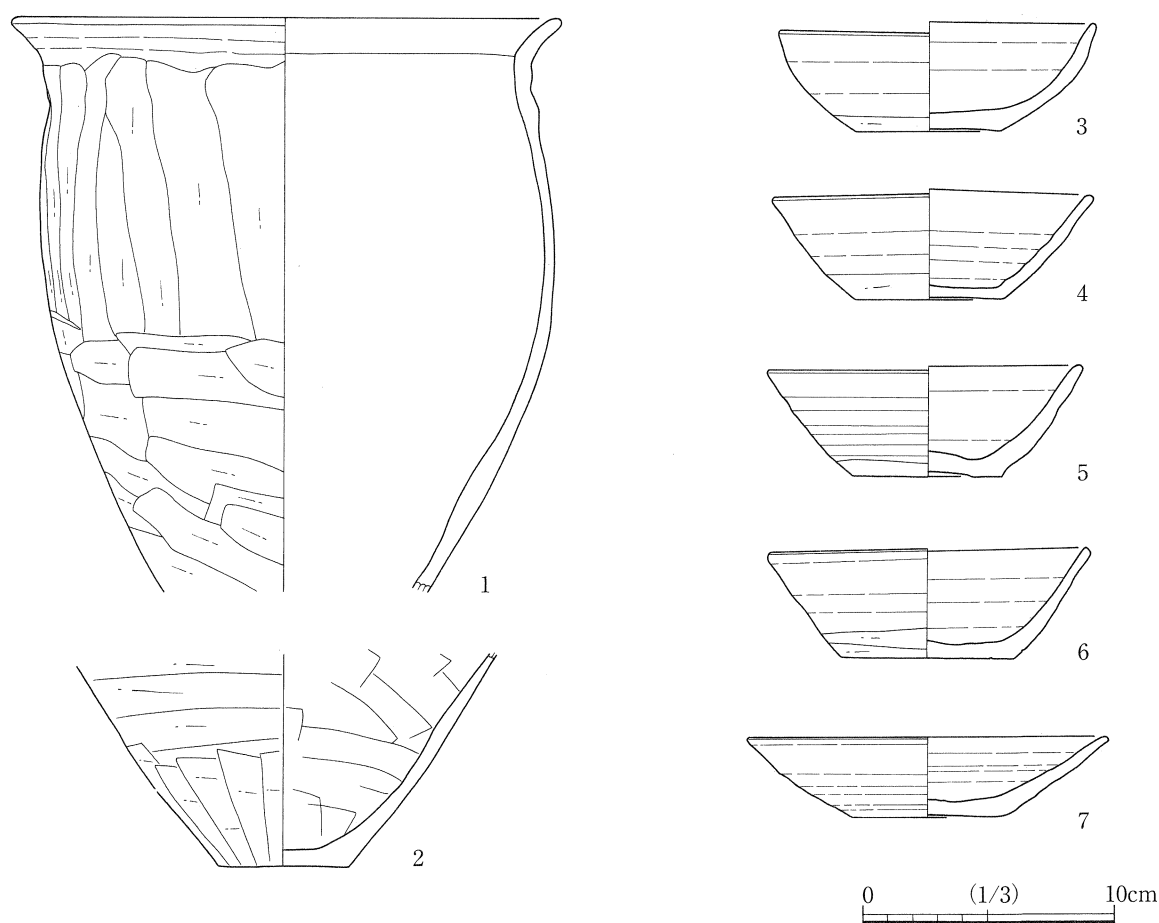
石遺構の南東に接して検出する。平面形はプラン下層にピットが複合し、やや不明確な個所もあるものの楕円形を呈する。径 $0.23 \times 0.19\text{m}$ ・深さ 0.15m 程で、床面標高は 27.08m を計測する。遺構内覆土上層には径 $1 \sim 6\text{cm}$ 程の小石を含み、小石は25個、総重量 1300g である。土器の出土はないが、あえて時期をあてるならば、遺物の少ない4号集石遺構と同時期の、Ⅲ期－bに比定可能であろう。

3号集石遺構（第210図）

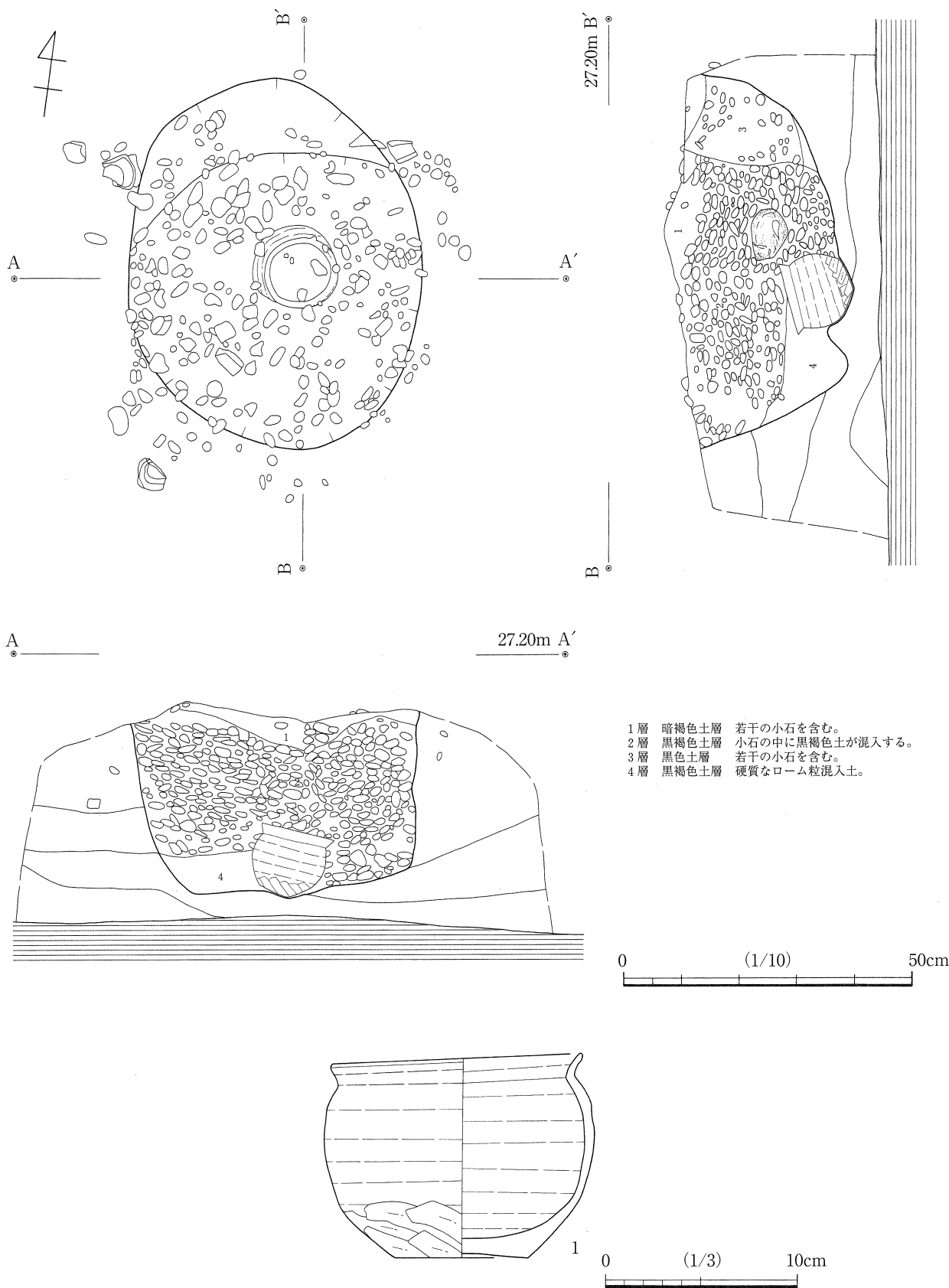
E地点東側の四面廂付建物28・29号掘立柱建物跡が占地する南側のL14区に位置し、2号集石遺構の南東 1.7m に検出する。平面形は、プラン下層に木の根による攪乱があるものの良好に遺存し、径 $0.25\text{m} \times 0.2\text{m}$ ・深さ 0.1m 程の楕円形を呈する。床面標高は 27.15m を計測する。遺構内覆土上層には径 $3 \sim 8\text{cm}$ 程の小石を含む。出土遺物はないが、2号集石同様にⅢ期－bに比定可能であろう。

4号集石遺構（第211図）

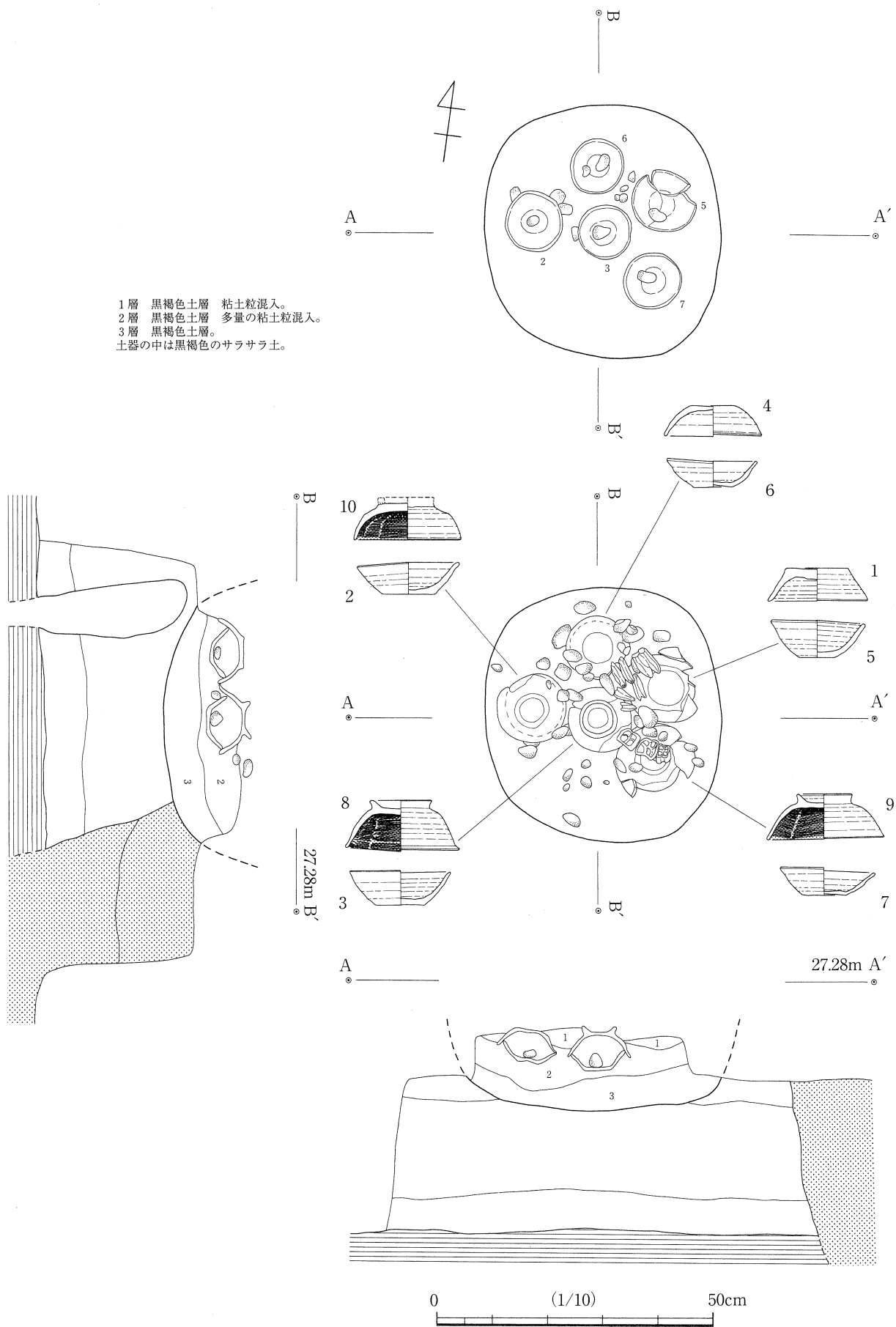
E地点東側J14・K14区に跨り、四面廂付建物28号掘立柱建物跡の南側廂南東端柱掘方上層に複合して検出する。平面形は楕円形を呈し、径 $0.46\text{m} \times 0.39\text{m}$ ・深さ 0.25m 程で、床面標高は 27.0m を計測する。遺構内覆土上層には径 $3 \sim 8\text{cm}$ 程の小石を含み、小石は145個、総重量 3800g である。出土遺物は回転糸切り無調整のロクロ土師器坏1個がある。坏は正位置で覆土中層に据え置かれ、口縁外面にタール状のカーボンが付着し灯明用皿に使用されたものである。時期は、ロクロ土師器からⅢ期－bの9世紀第4四半期から10世紀初頭に比定できる。



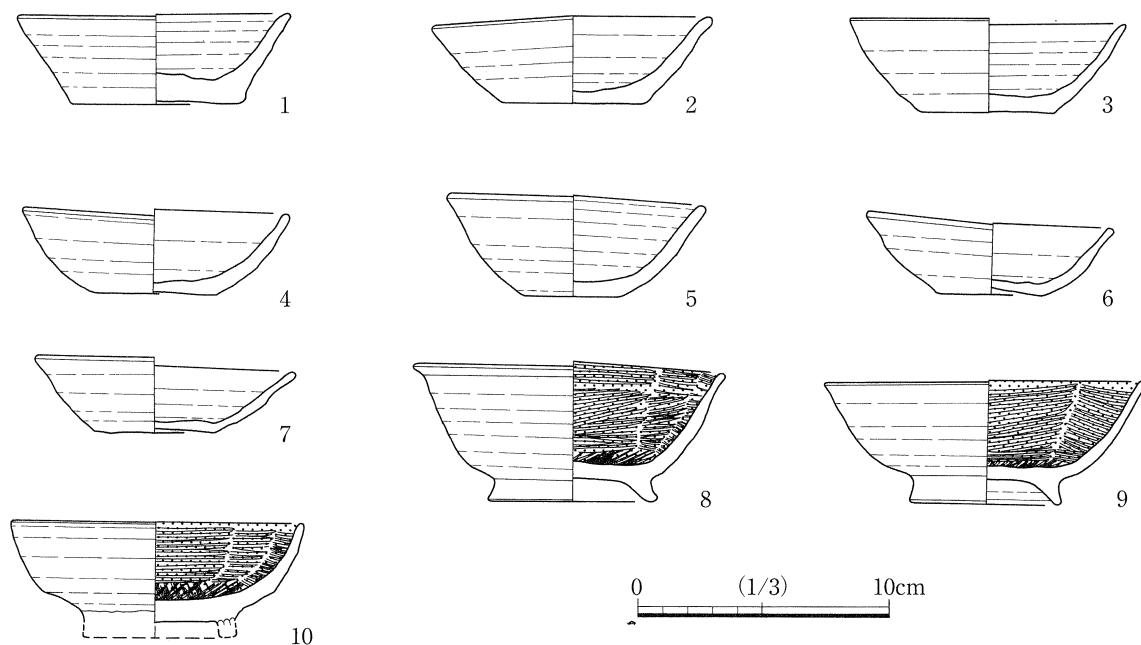
第213図 5号集石遺構出土遺物



第214図 6号集石遺構と出土遺物



第215図 7号集石遺構



第216図 7号集石遺構出土遺物

5号集石遺構（第212・213図）

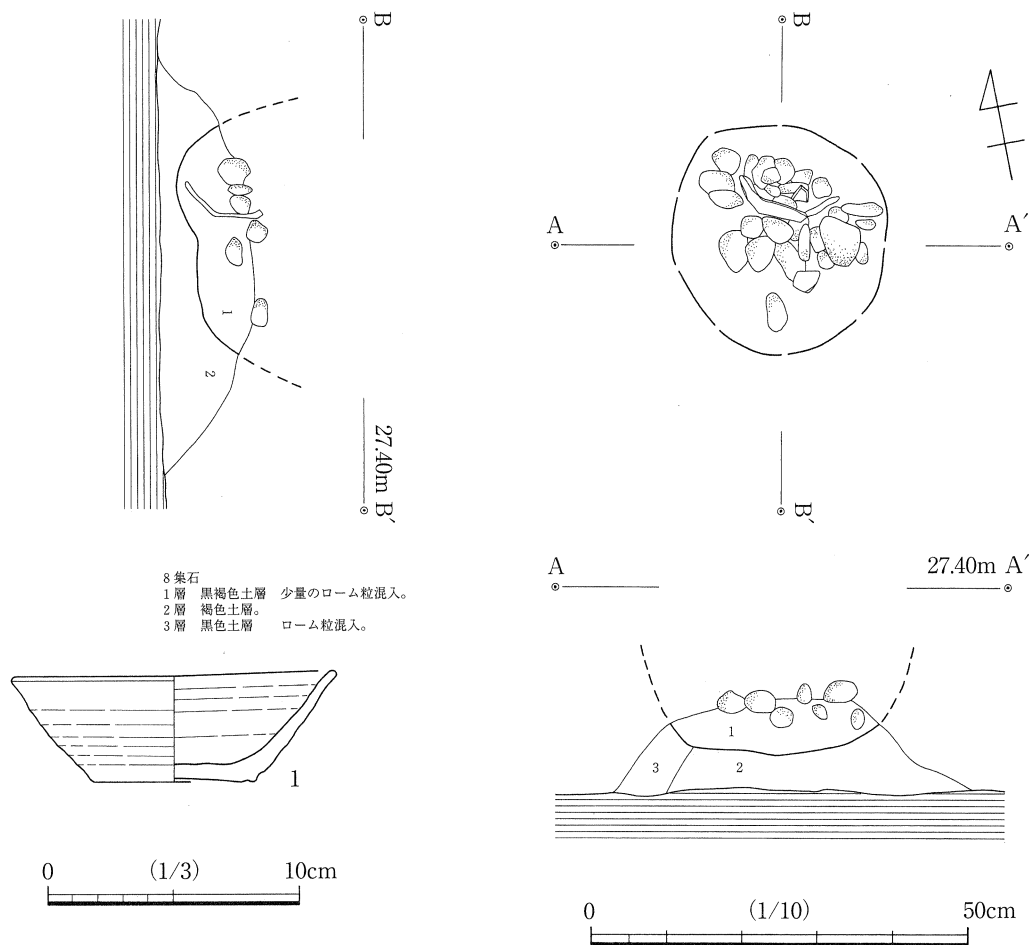
E地点西側北東部の32号住居跡→12号掘立柱建物跡のC9区に検出し、32号住居跡覆土中に掘り込まれた土坑である。平面形は長楕円のそら豆形を呈し、長径0.81m×短径0.47m・深さ0.25m程で、床面標高は26.82mを計測する。当時の地表面が標高27.4m以上であったことを考慮すると0.6m以上掘り込まれた遺構である。遺構内覆土上層には径2～6cm程の小石を多量に含み、小石は211個、総重量4100gである。土坑内には5の甕が伏せ置かれ、4と3の甕が合口状に置かれ、2の甕と7の皿が伏せられ埋納されていた。合口にされた中には遺物等の検出は無く5号土器埋納遺構同様に、供物などの有機質のものが供えられたのであろうか。

ロクロ土師器甕3～6は回転篋削りを施し、7の皿は回転糸切り無調整である。3は4・5のロクロ土師器甕と形状を異にし内湾する。甕は1・2号土器埋納遺構より明らかに古相を呈し、稻荷台Ⅱ期-aからⅡ期-bに比定できる。

本跡は具体的な祭祀遺構としてE地区西側のコの字状に配置された建物群の中庭とも言える空間から検出されている。このことは、東側の四面廂付建物跡群の南側から集中して検出された祭祀遺構とは異なった検出状況を示すものである。本跡から土師器甕が出土するが、他の祭祀遺構では5号土器埋納遺構だけであり、5号土器埋納遺構より本遺構出土のロクロ土師器甕は古相を呈し、祭祀遺構の古い段階に土師器甕が使用された状況を示すものである。従って、本跡の所属した時期のⅡ期-a～bにはコの字状に配置された建物群が存在していて、その中の空間で祭祀が行なわれた可能性を示唆するものである。

6号集石遺構（第214図）

E地点中央のK10区の38号住居跡覆土上層中に検出した土坑である。本地区の表土剥ぎは人力で行なったことから良好な状態で検出した。平面形は覆土中に掘り込まれ不明瞭だが楕円形を呈し、長径0.64m×短径0.52m・深さ0.35m程で、床面標高は26.78mを計測する。当時の地表面が標高27.4m以



第217図 8号集石遺構と出土遺物

上であったことを考慮すると0.6m以上掘り込まれた土坑である。遺構内覆土は径2～4cm程の小石を多量に含み、小石は15,161個、小石の総重量45.3kgである。土坑床面中央にはロクロ甕が正位置で据え置かれている。ロクロ土師器甕は、口縁径13.0cm・底径6.9cm・器高10.3cm・胴径13.9cmを計り、全体に球状を呈し、ロクロ土師器甕では後出で、Ⅳ期～Ⅴ期の所産であろうか。

7号集石遺構（第215・216図）

E地点中央のI9区に検出した土坑である。本地区も6号集石同様に表土剥ぎを人力で行なった事から良好な状態で検出した。平面形は包含層中に構築されやや不明瞭な個所もあるものの長楕円形を呈し、長径0.46m×短径0.43m・深さ0.15m程で、床面標高は27.06mを計測する。当時の地表面が標高27.4m以上であったことを考慮すると0.35m以上掘り込まれた土坑である。土坑内覆土には径2～4cm程の小石を多量に含み、小石は104個、小石の総重量660gである。土坑内には5個の合子状に合口にした坏が検出され、中には小石が1個ないし2個入れられている。5個の土器上層には牛の歯だけが残ри、一部は顎の形状をとどめていた。このことから切断した牛の頭部を土器の上に据え置き埋納したものと看取される。

1～7のロクロ土師器坏は回転糸切り無調整で、土器の計測平均値は、口縁径10.4cm・底径5.7cm・器高3.35cmを計測し、縮小化が著しい。8～10は内黒ミガキのロクロ土師器高台付碗で口縁径12.17cmを計測する。

8号集石遺構（第217図）

E 地点東側の南の M13区に検出し、42号住居跡東壁に接している。平面形は包含層中に構築されやや不明瞭な個所もあるものの径0.3m 程の円形を呈するものであろう。深さ0.08m 程で、床面標高は27.15m を計測する。当時の地表面が標高27.4m 以上であったことを考慮すると0.25m 以上掘り込まれた遺構である。遺構内覆土には径2～4cm 程の小石を多量に含み、小石は72個、小石の総重量1900g である。土坑内から回転糸切り無調整のロクロ土師器坏1 点を出土する。ロクロ土師器坏は横向きの状態で出土している。この土器から本跡の所属時期は、Ⅲ期-b の9 世紀第4 四半期を中心とするものであろう。

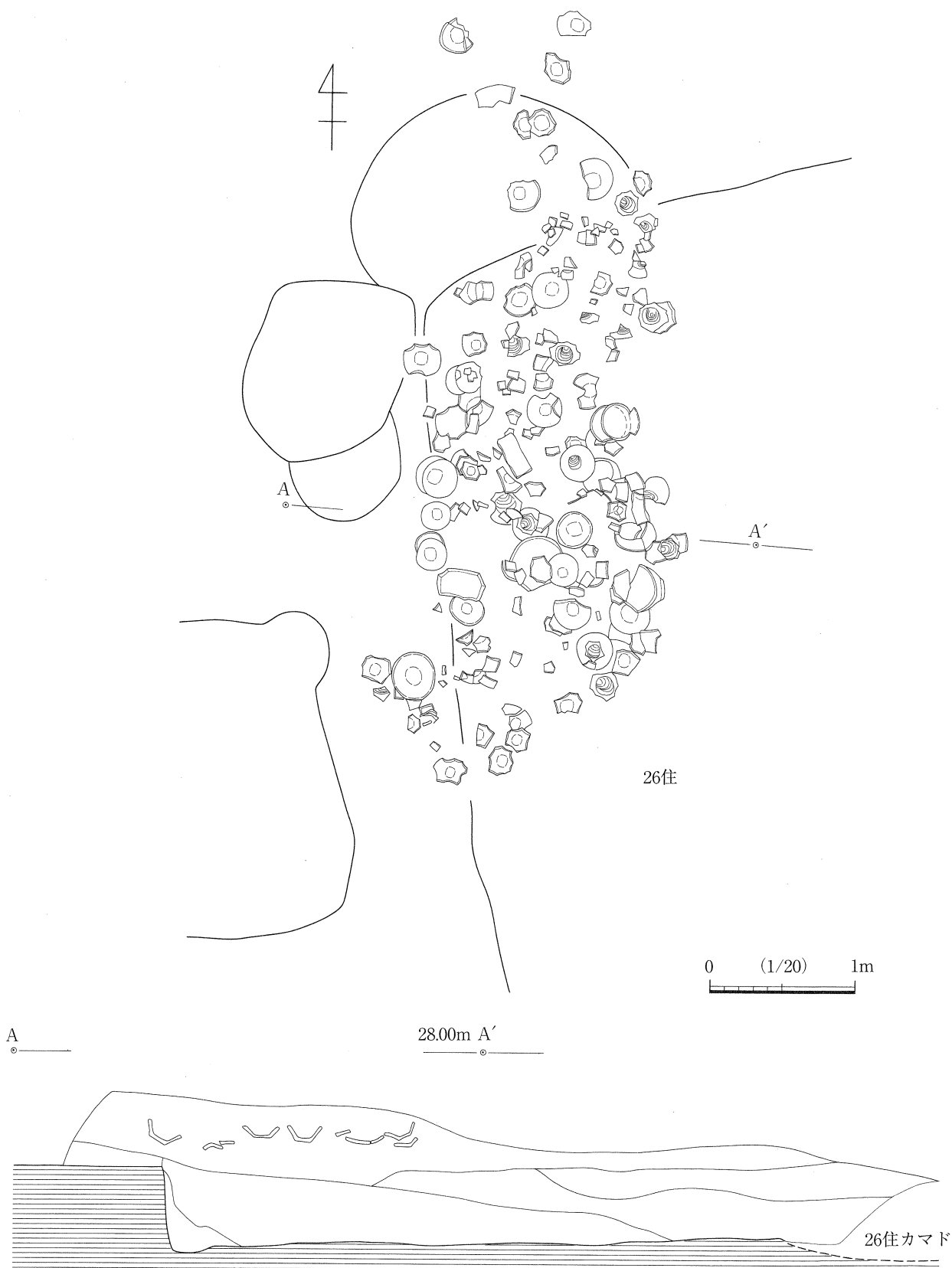
土器廃棄遺構

1 号土器廃棄遺構（第218～225図）

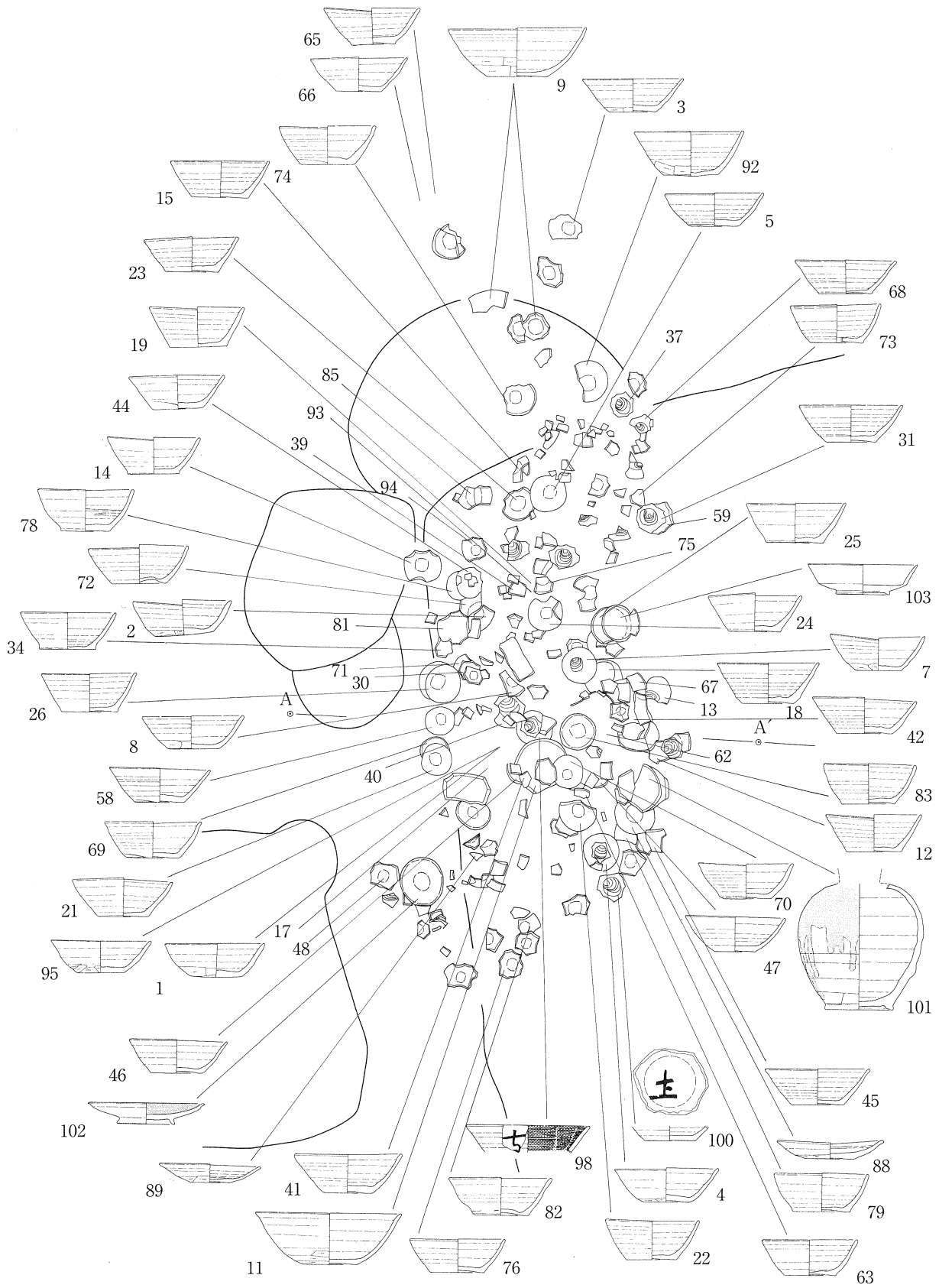
E 地点東側の K17区から26号住居跡覆土上層から多量の土器が廃棄された状況で検出する。32号掘立柱建物跡東廂の北端柱掘方によって掘り込まれる状況であった。26号住居跡は稻荷台Ⅰ期の9 世紀第1四半期を中心とした時期が想定され、土器群の廃棄は住居跡廃絶後完全に埋没した状況で廃棄されたものと想定するが、土器に風化が見られないことから土器を窪みに廃棄した後埋めたものか、短期間に埋没したものと看取される。廃棄範囲は南北2.7m・東西1.0m 程で、出土状況から西側から廃棄され、土器類がほとんど完形に近い状態で三重四重に重なり出土し、投げ込みではなく据え置くように廃棄されたものと看取される。

図示した土器は、以下図の103固体であるが、廃棄された土器総重量25.8kg を計り、単純に1 個当たり150g とすると172固体を数え、重機で表土剥ぎを行なった為、失われたものも存在し、総数は200点を遙かに超える土器が廃棄されていたものであろう。図示した土器は、1～11が回転篋削りのロクロ土師器坏、12～86が回転糸切り無調整のロクロ土師器坏である。87～91はロクロ土師器皿で87・88が回転篋削り、89が手持ち篋削り、90・91が回転糸切りを施す。92は底部回転糸切りで体部下端のみ微調整の手持ち篋削り施す。93～95は体部下端および底部手持ち篋削りを施すロクロ土師器坏の一群である。1～8の回転篋削りを施す一群の法量の平均計測値は、口縁径13.10cm・底径6.28cm・器高4.44cm を計測する。12～86の回転糸切りは、平均口縁径12.8cm・底径6.8cm・器高4.85cm を計測する。87～89の回転篋削りの皿は、平均口縁径13.3cm・底径5.97cm・器高2.57cm。90・91の回転糸切り皿の平均値は、口縁径14.0cm・底径7.0cm・器高3.25cm を計測する。

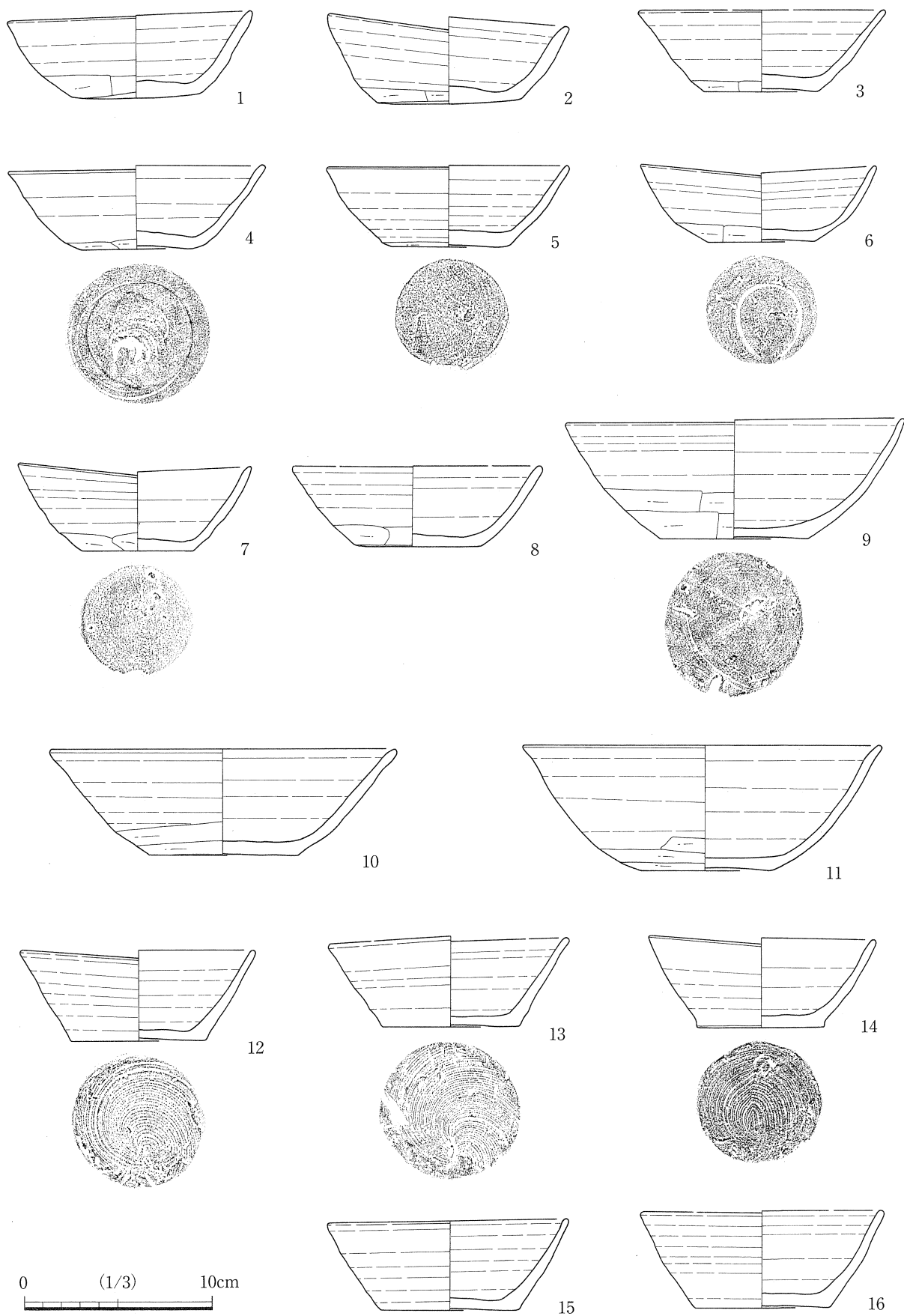
96～100は墨書土器である。96はロクロ土師器坏体部小片で墨書は判読不能であるが横位に書かれたものと思われる。97は坏底部外面に書かれ判読不能であるが、字以外の記号と看取される。98は「立カ」、または「主カ」とも読み取れる。99は「上」の行書体であろうか本遺跡では唯一の書体となる。100のロクロ土師器坏底部内面には「主」が墨書される。101は灰釉長頸壺で頸部上半を欠損する。肩から胴部に多量の降灰があり、ブクが器表面全体にみられる。102の灰釉皿は内面に三又トチン跡を留め、内面薄く淡緑の釉が掛かる。高台は八の字に開き気味で、端部面取り、体部外面は削りをロクロナデにより消し去っている。103は緑釉蛇の目高台稜碗である。全体にやや厚く施釉があり、内外面に三又トチンを留めている。灰釉陶器の時期は、101は坂野Ⅱ期古相～新相、102はⅡ期古相に比定されている。また、緑釉陶器も102同様の年代感に比定されるものであろう。従って本遺構の年代は、稻荷台Ⅱ期-a～b の9 世紀第3 四半世紀でも前半と言えるものである。



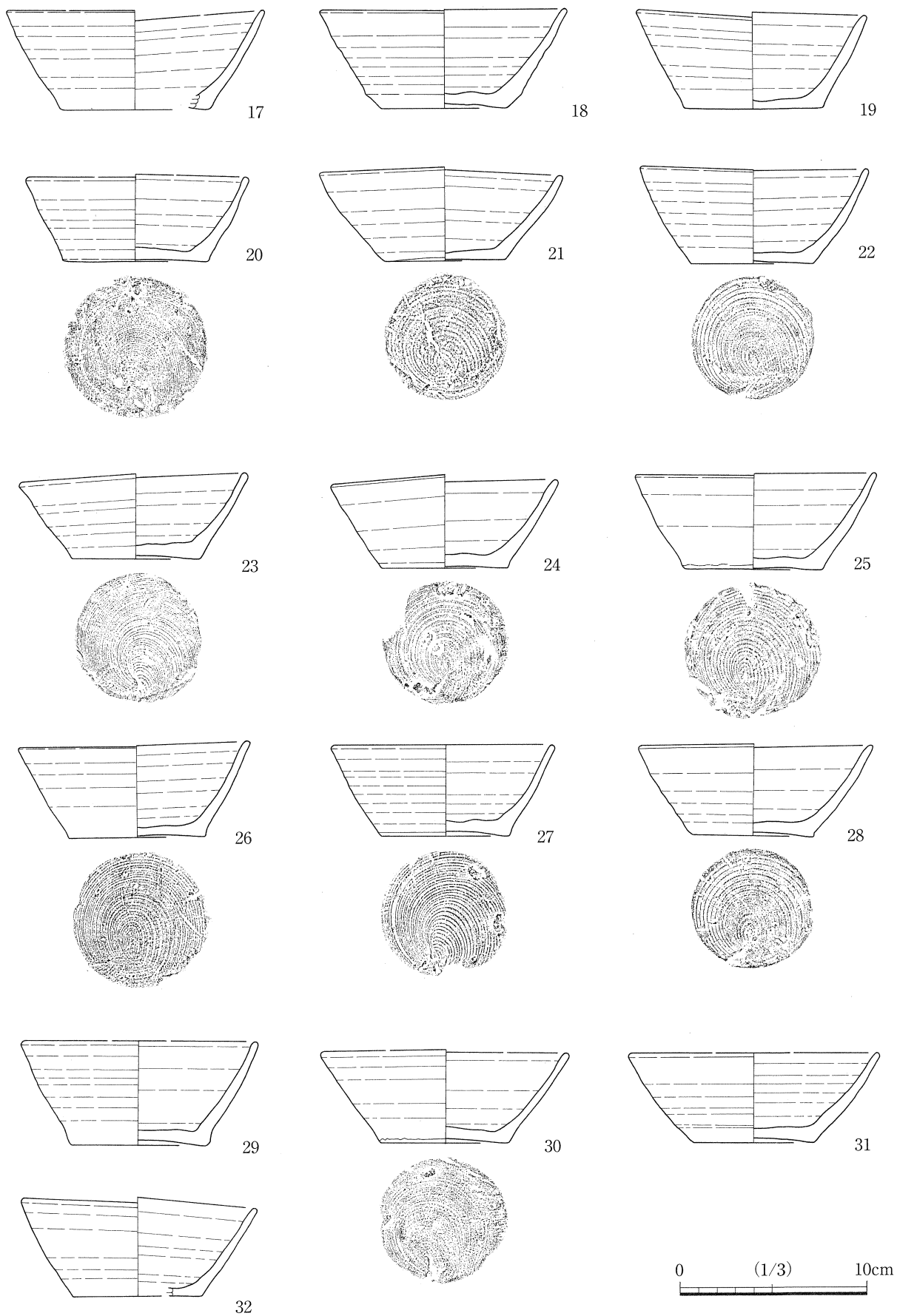
第218図 1号土器廃棄遺構(1)



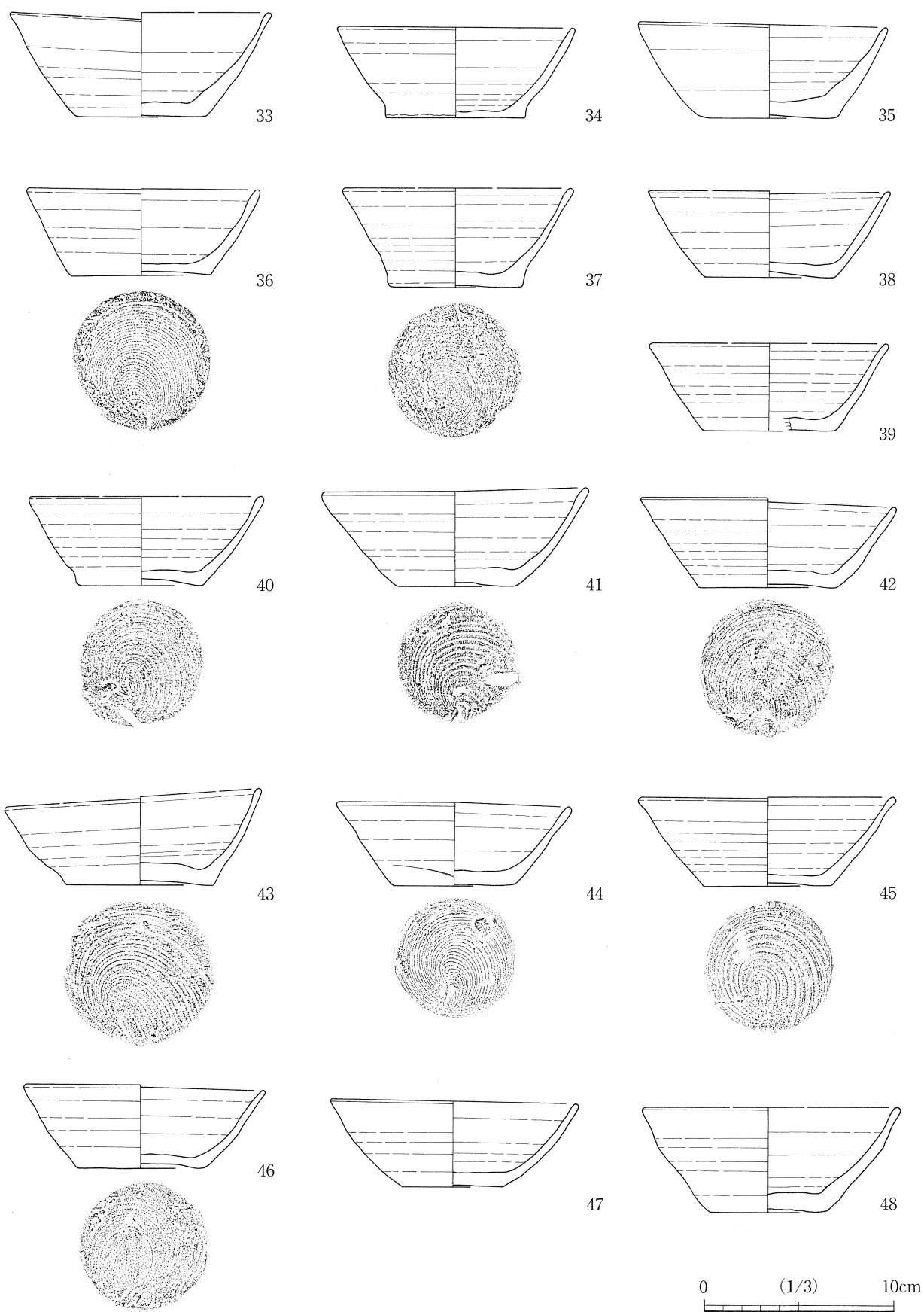
第219図 1号土器廃棄遺構(2)



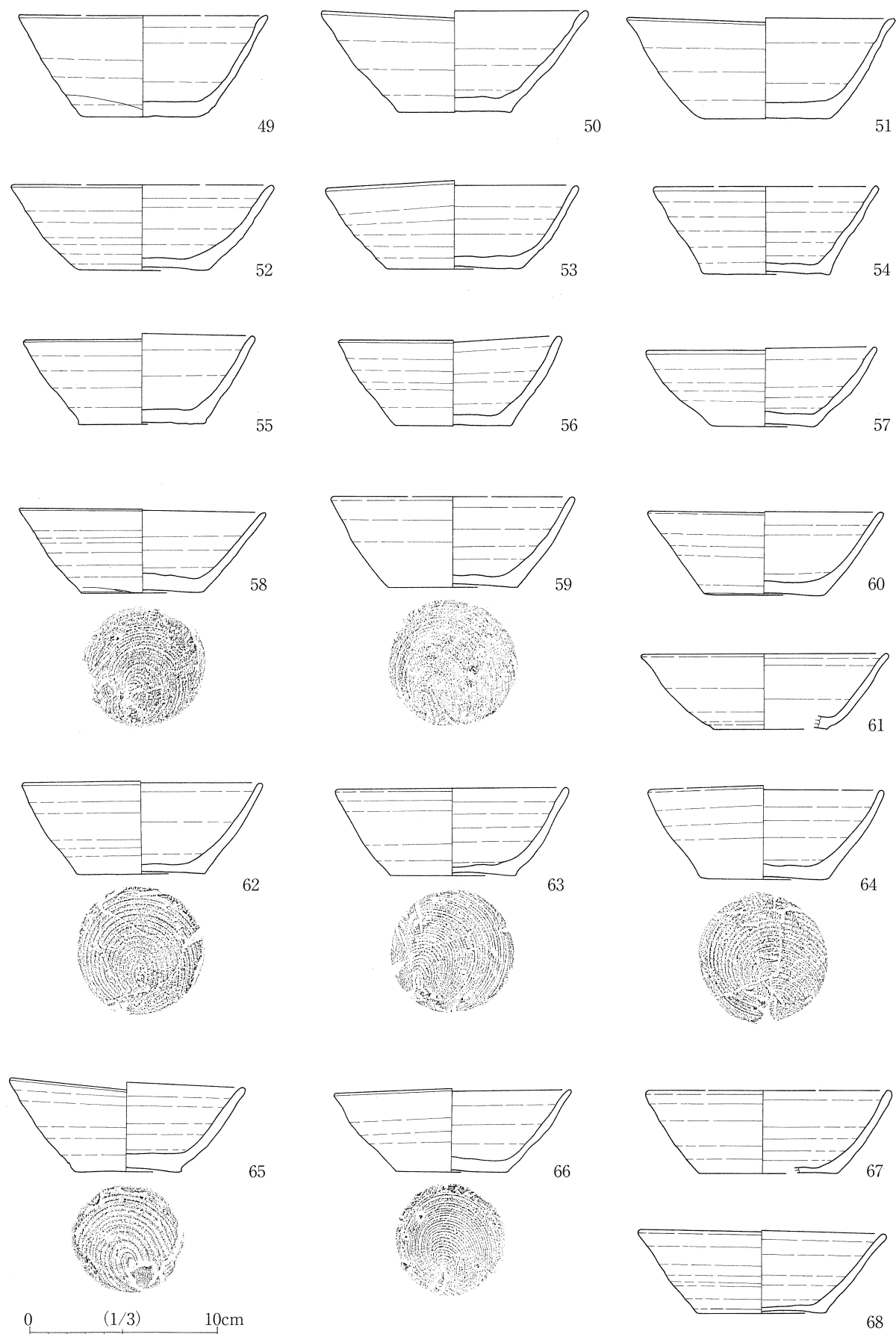
第220図 1号土器廃棄遺構出土遺物(1)



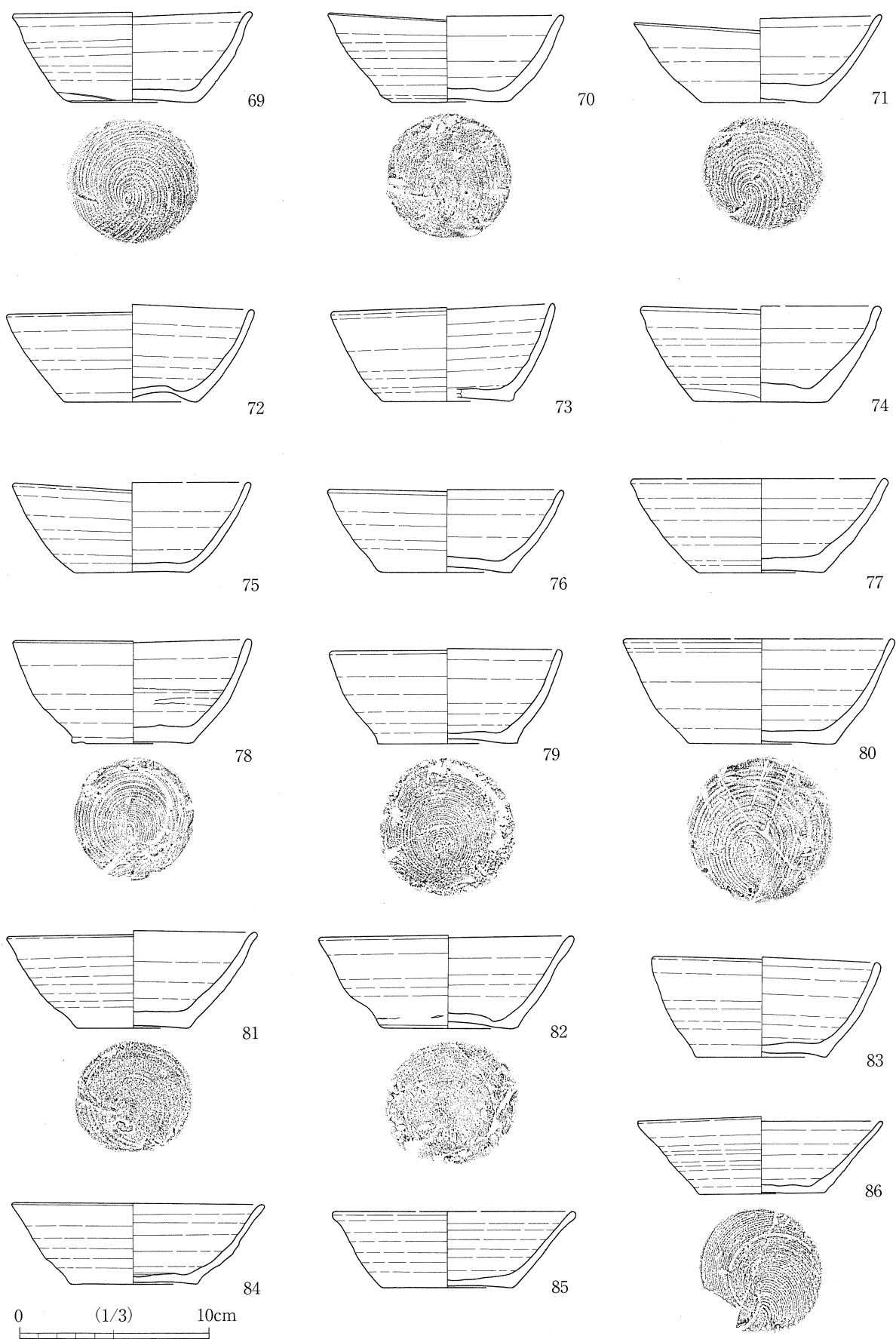
第221図 1号土器廃棄遺構出土遺物(2)



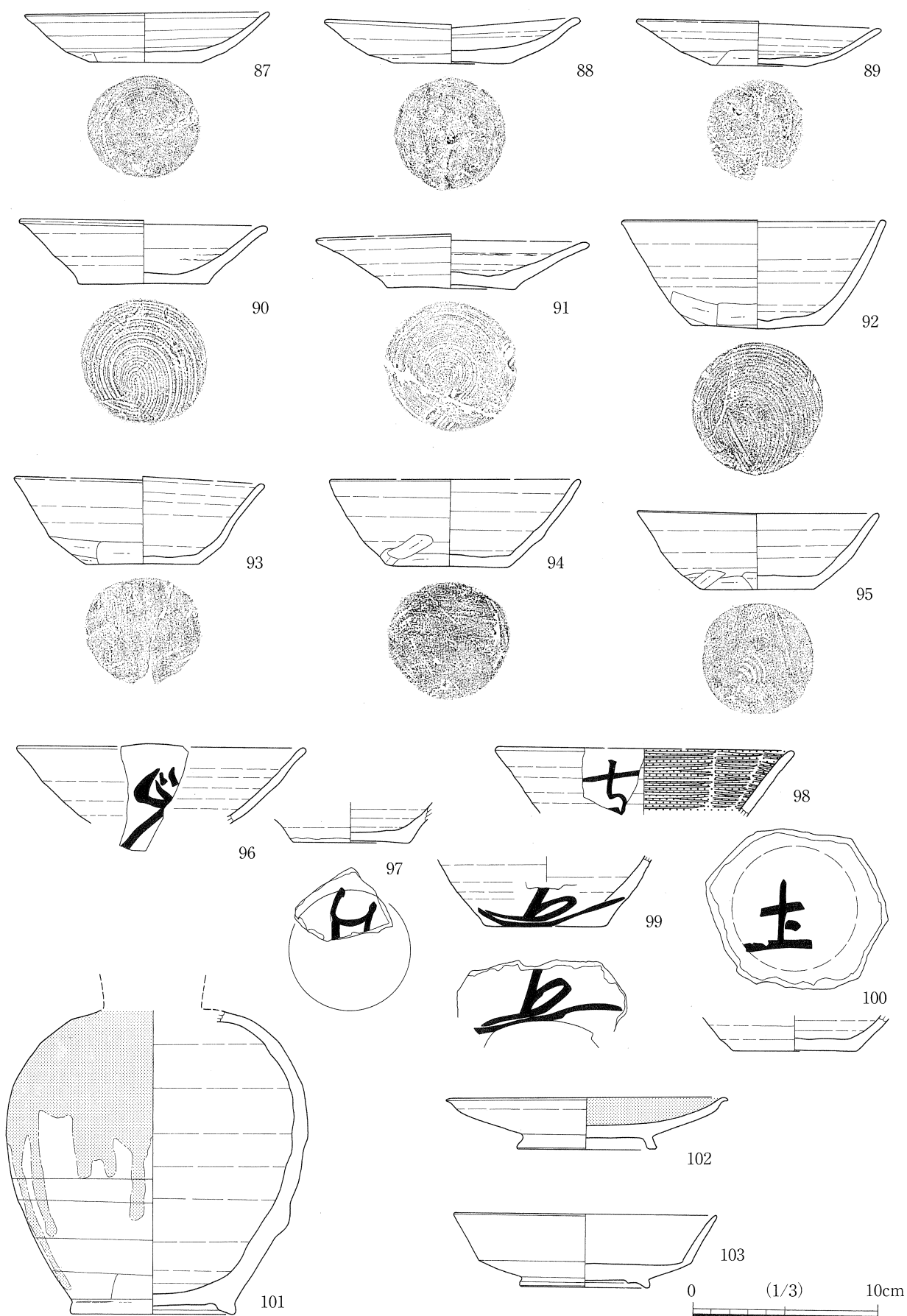
第222図 1号土器廃棄遺構出土遺物(3)



第223図 1号土器廃棄遺構出土遺物(4)



第224図 1号土器廃棄遺構出土遺物(5)



第225図 1号土器廃棄遺構出土遺物(6)

2号土器廃棄遺構（第226～229図）

E地点東側の南N13・N14区に跨り土器が廃棄された状況で検出する。土器群は北と南側とに分かれるが出土状況から一連のものであろう。土器の廃棄は1号廃棄遺構同様に窪みに廃棄されたものであろう。廃棄範囲は南北2.3m・東西0.7mと溝状の窪地を想定させるものである。土器は坏類がほとんどで完損形に近い状態で出土するものも多く存在する。

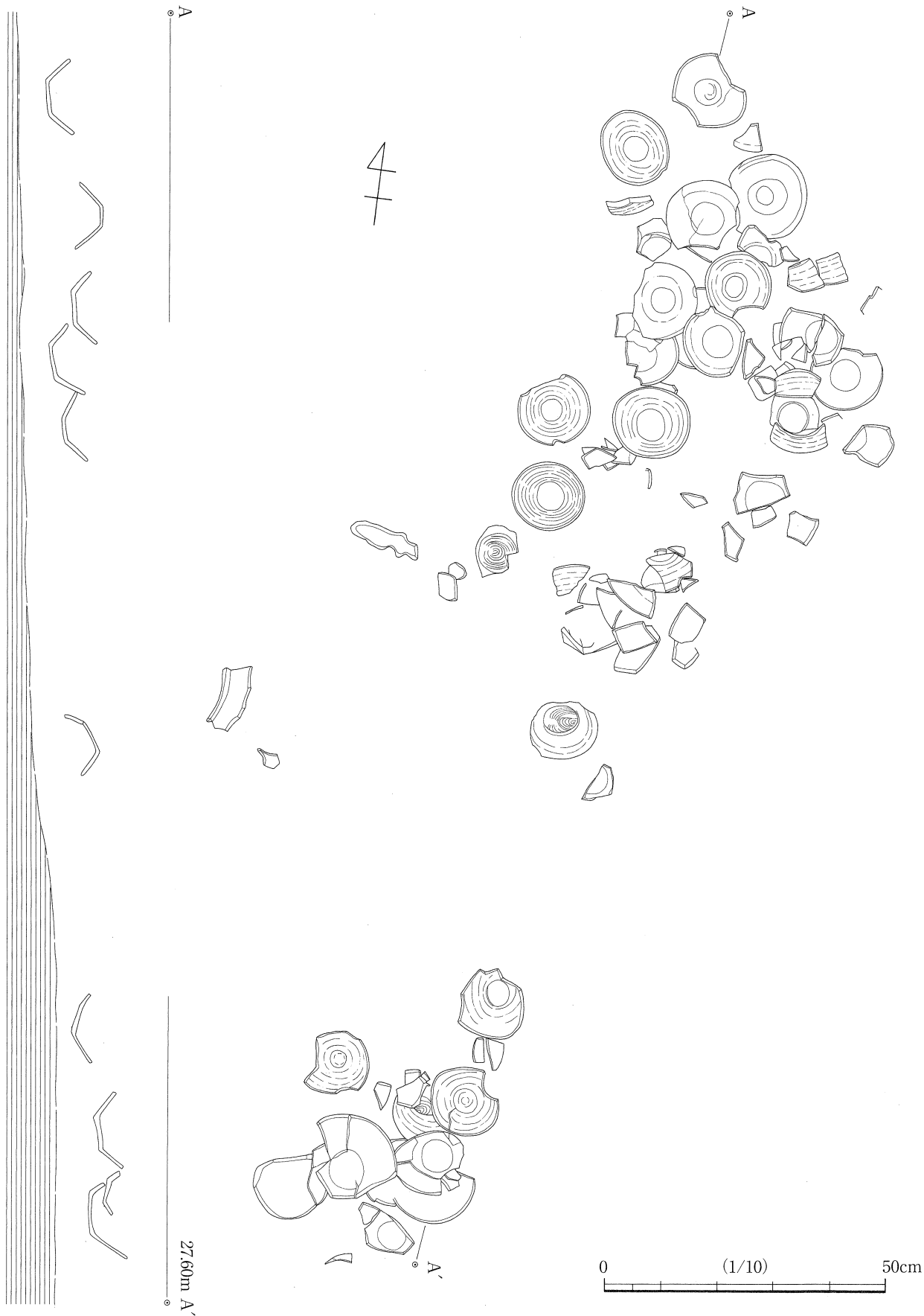
廃棄された土器は総重量6.1kgで単純に1個当たり150gとすると40固体となるが、図示しない遺物の底部片から10数個体に加わる可能性があり、全体で50個体程になろうか。また、当範囲は手掘りで表土剥ぎを行なうことができた為遺存状態は良好である。図示した土器、1～10は回転篋削りを基本とするロクロ土師器坏である。11～14は底体部に手持ち篋削りを基本とし、14内面はミガキを施す。15～17は内黒ミガキで、共に高台を有するものであろう。18～31は回転糸切り無調整のロクロ土師器坏である。32は内黒ミガキで底体部回転篋削りを施し、外面体部に「丸」を墨書する。33は底体部回転篋削りを施し、外面体部に「丸」を墨書する。34は体部小片であるがやや大形の坏で体部に「土」を墨書する。35は灰釉碗で、内面に重ね焼痕跡を留める。施釉は漬け掛け、釉色は淡緑色を呈する。坂野Ⅲ期新相に比定され、9世紀第4半期前半を中心とする時期である。

1～10・33の回転篋削りを施す一群の法量の平均計測値は、口縁径13.9cm・底径5.7cm・器高4.58cmを計測する。18～30の回転糸切りは、平均口縁径13.34cm・底径6.42cm・器高4.61cmを計測する。11～14の手持ち篋削りの平均計測値は、口縁径14.98cm・底径6.45cm・器高5.1cm。

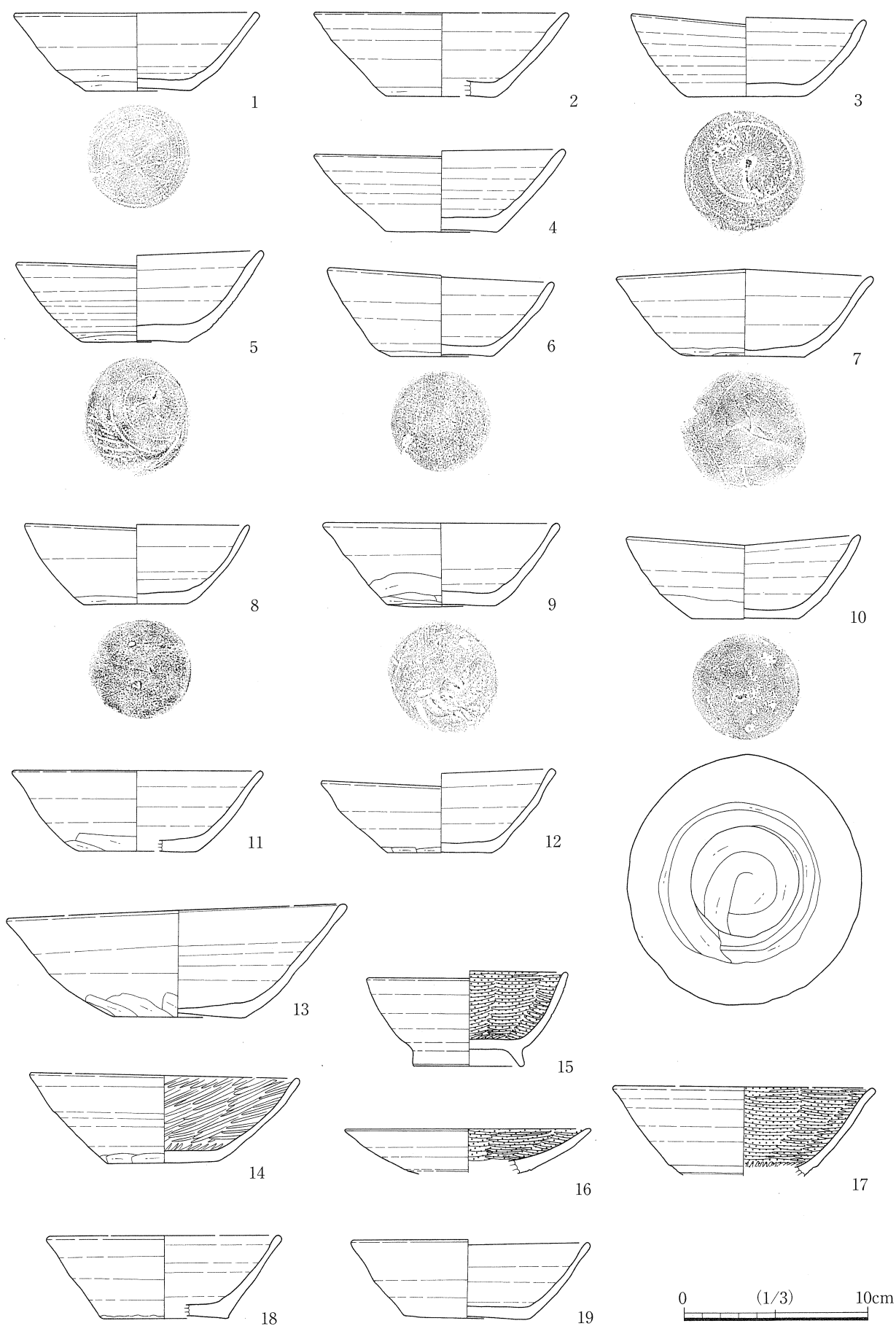
3号土器廃棄遺構（第230～236図）

E地点東側の南M14・N14区に跨り土器が廃棄された状況で検出する。2号土器廃棄遺構同様の理由から依存状況は良好である。土器群は包含層中に南北1.8m・東西0.8m程の範囲に重なり合い出土する。土器群下層の遺構確認面である下層のソフトローム上層面に幅0.55m・長さ1.12m以上の浅い落ち込み状の遺構を検出し、土器が廃棄された遺構の存在を示すものと考えられる。土器はロクロ土師器坏がほとんどであるが、須恵器大甕片2点・灰釉碗1点なども存在する。

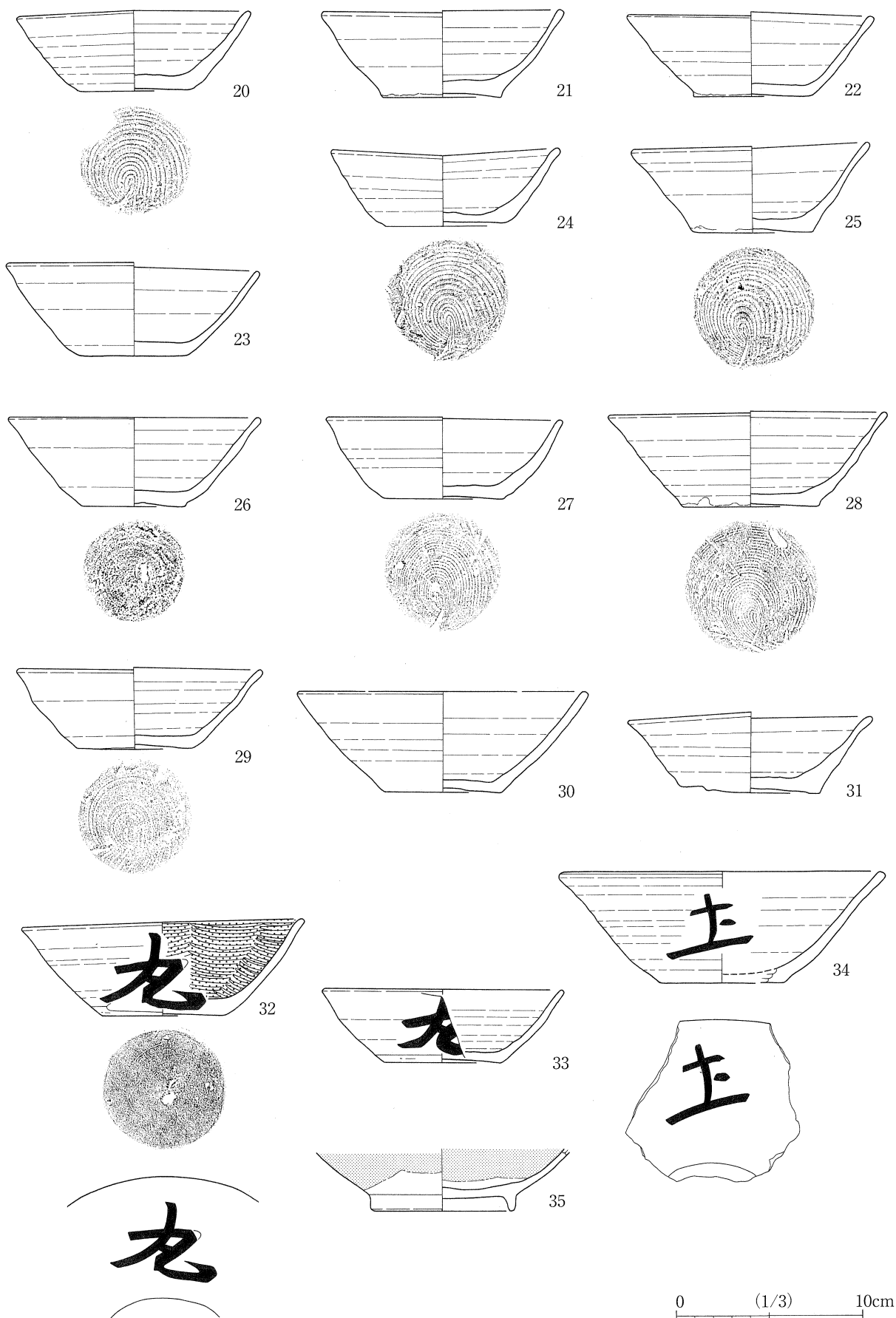
廃棄された土器は総重量10.74kgで単純に1個当たり150gとすると71固体ほどであろう。図示した土器、1は、須恵器大形甕で胴部大型片も出土している。2・3は手持ち篋削りロクロ土師器坏で平均計測値は、口縁径13.9cm・底径6.9cm・器高4.7cm。4～6は回転篋削りを基本とする一群で、平均計測値は、口縁径13.6cm・底径5.8cm・器高4.8cm。7・8はやや大ぶりの底体部手持ち篋削り坏である。9は体部下端のみ手持ち篋削り調整し底部は回転糸切り、10～45は回転糸切り無調整の一群である。9～45の平均計測値は、口縁径13.3cm・底径6.73cm・器高4.72cmを計る。46～53はロクロ土師器皿である。46は回転篋削り。47～51は回転糸切り無調整で平均計測値は、口縁径13.18cm・底径6.64cm・器高3.18cm。52・53は手持ち篋削りで平均計測値は、口縁径13.8cm・底径6.25cm・器高3.05cm。54は内黒内面ミガキの削り出し状の高台を有するロクロ土師器皿である。55・56はやや大振りの内面内黒ミガキで削り出し状の高台を有するロクロ土師器坏で、56内面には秋草が強い篋磨きにより暗文で描かれている。58～64は墨書土器である。58は内黒ミガキの体部下端および底部手持ち篋削りで、底部外面に「丸⊕カ」を墨書している。59・60は回転糸切り無調整で体部外面には「丸」1字が墨書される。61はやや大振りの体部下端および底部回転篋削りの内面ミガキを施し、体部外面に「丸」がある。58～61の墨書「丸」を比較すると、59・60は同一人物の可能性はあるが、他は別人



第226図 2号土器廃棄遺構(1)



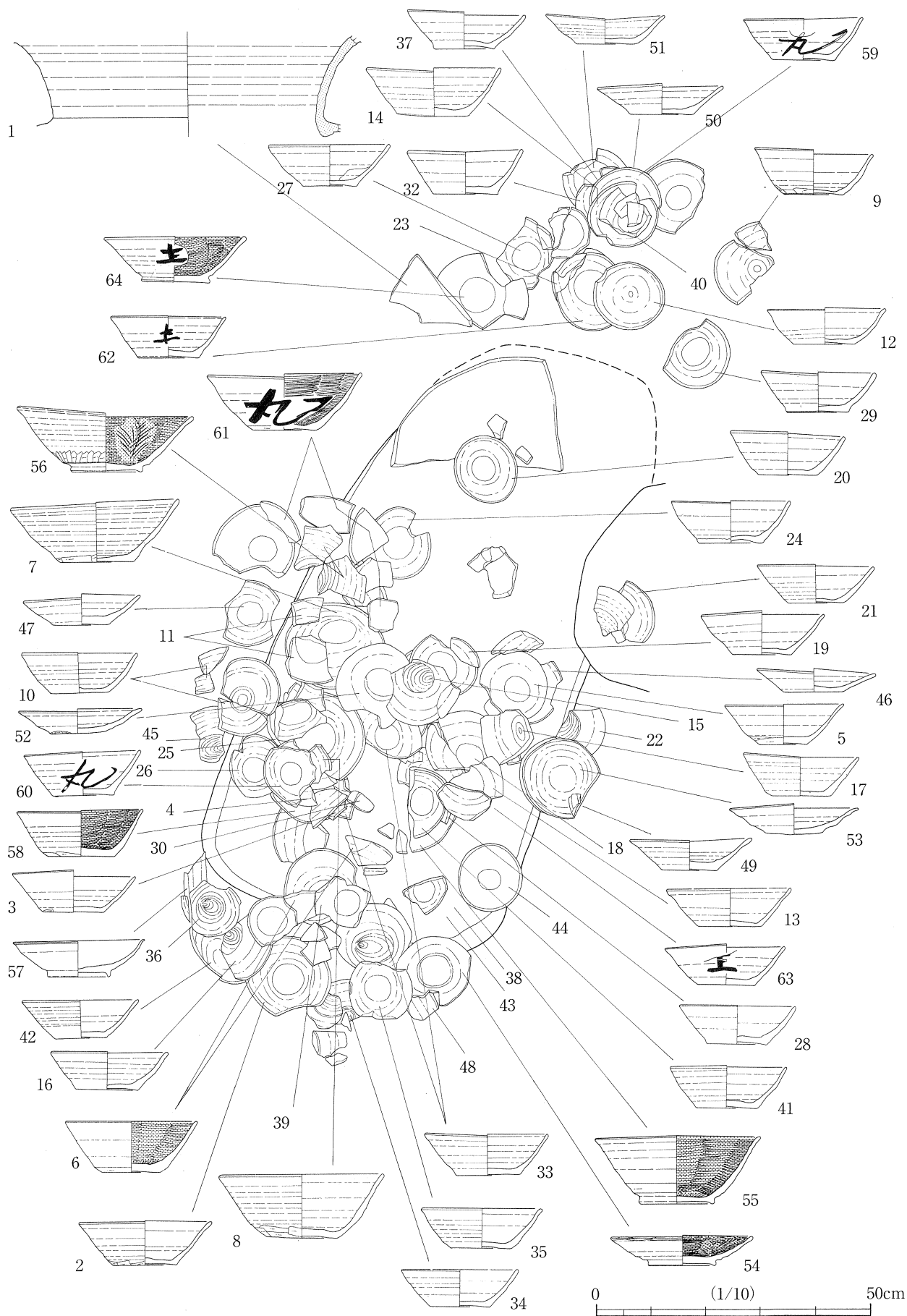
第228図 2号土器廃棄遺構出土遺物(1)



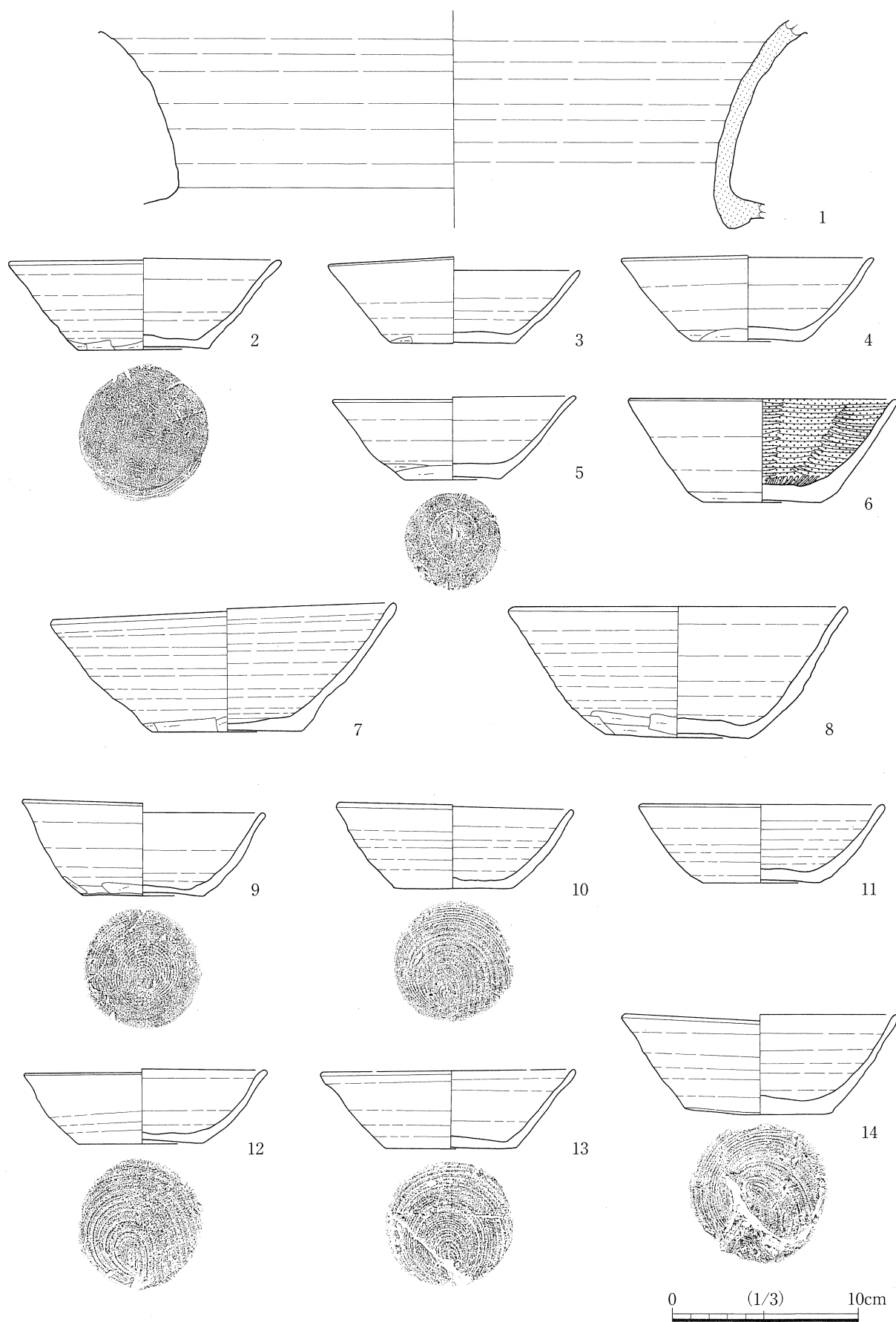
第229図 2号土器廃棄遺構出土遺物(2)



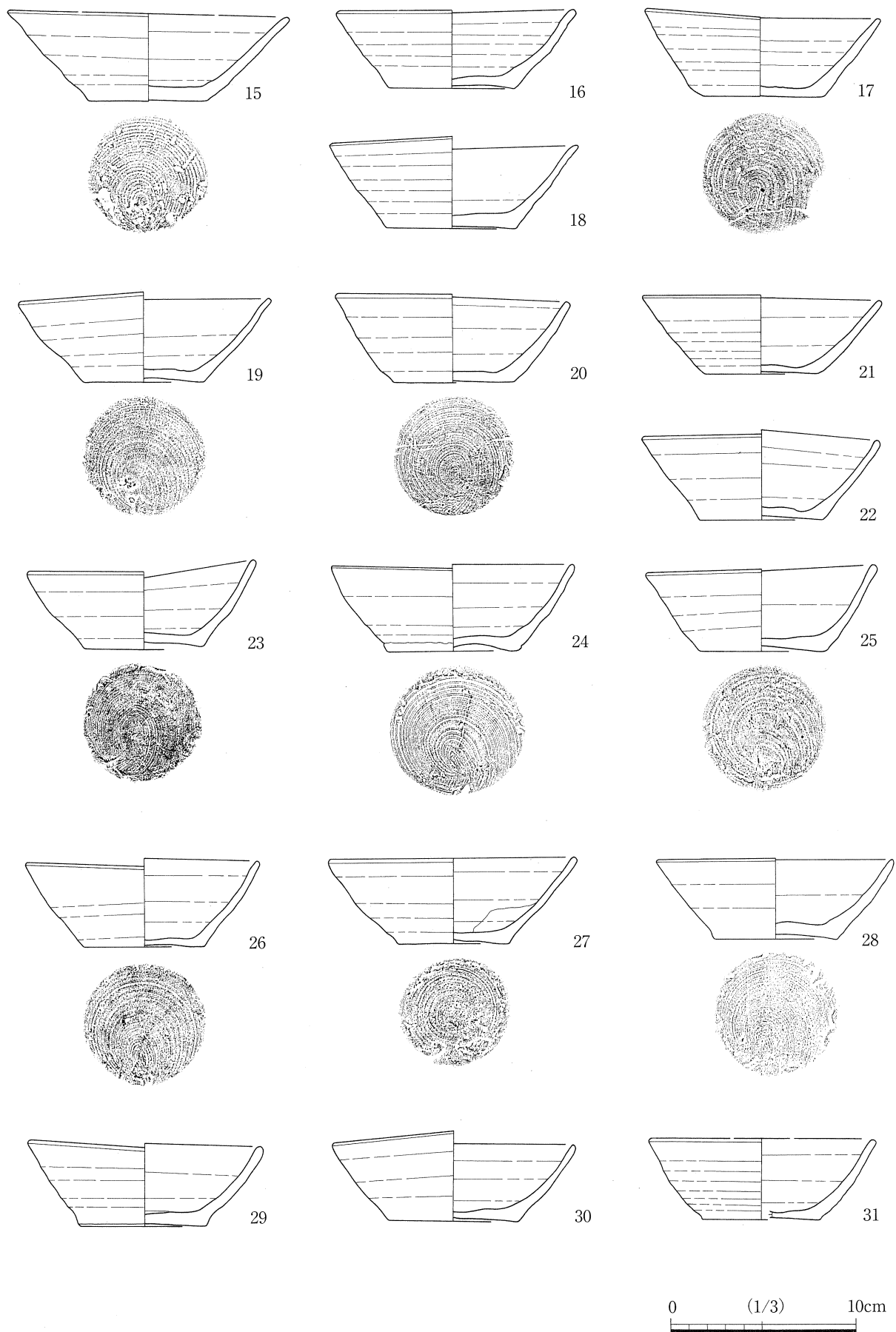
第230図 3号土器廃棄遺構(1)



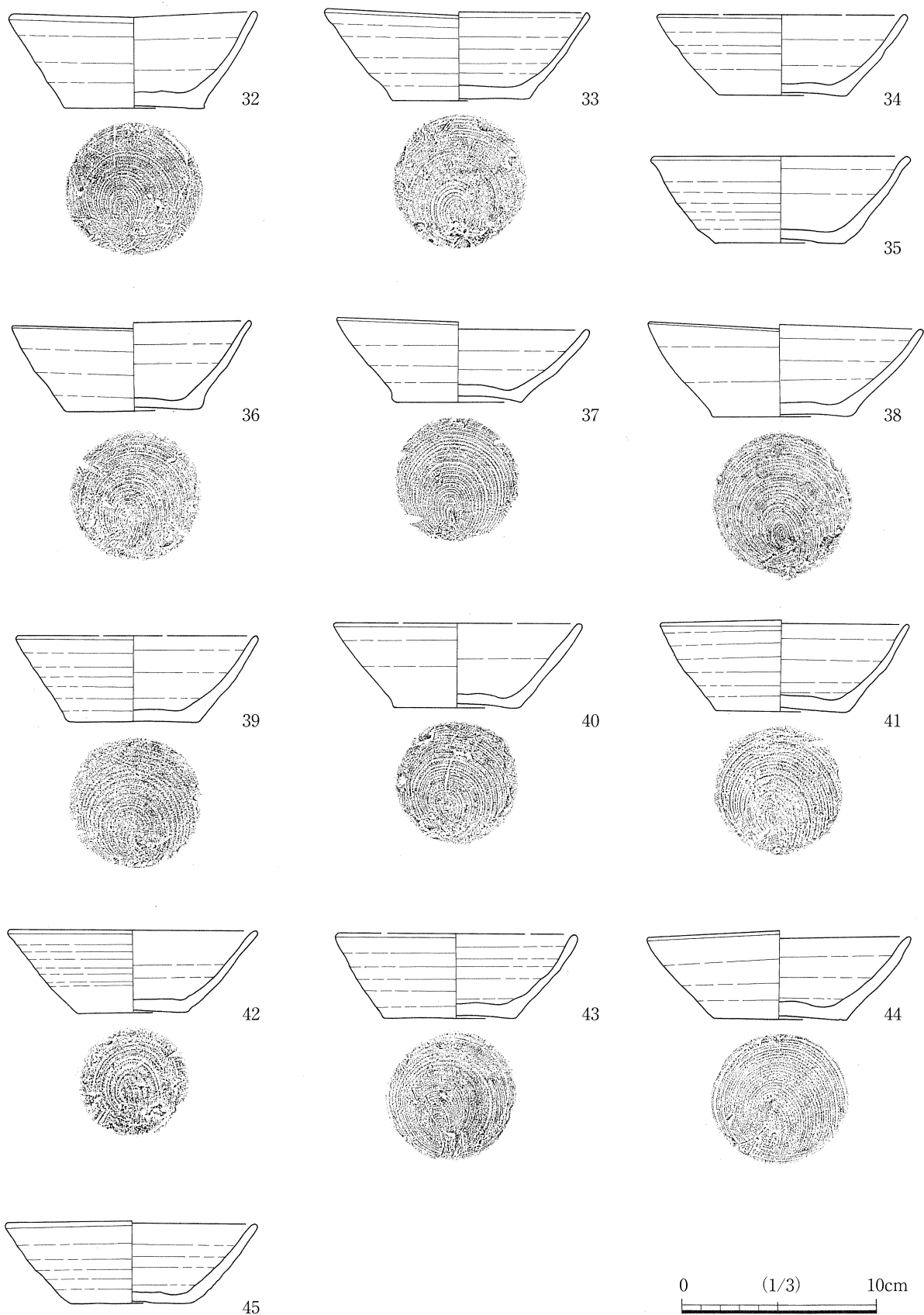
第231図 3号土器廃棄遺構遺物出土状況(2)



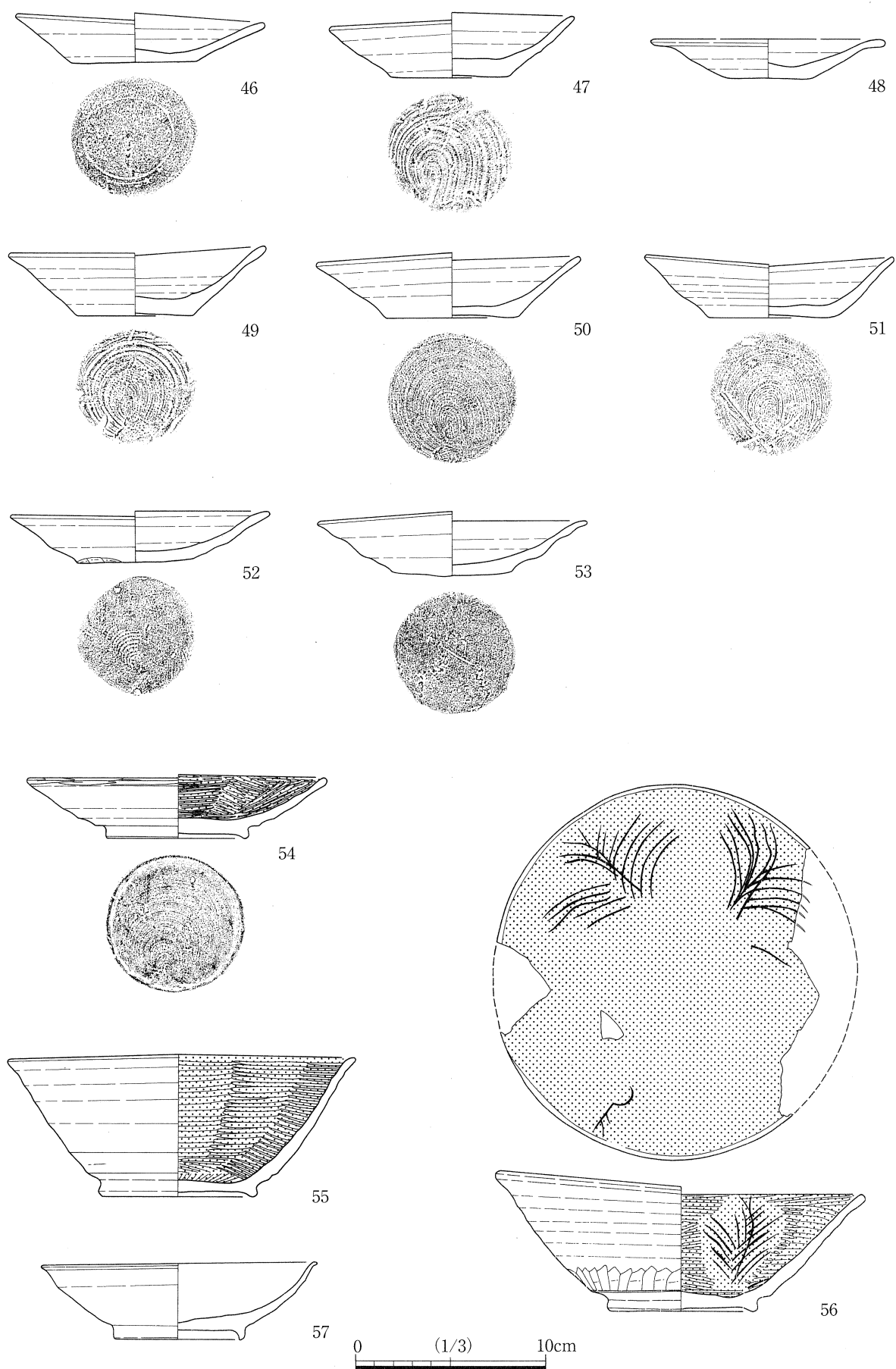
第232図 3号土器廃棄遺構出土遺物(1)



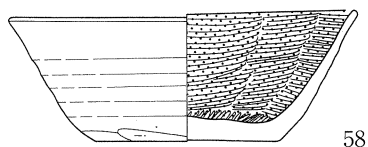
第233図 3号土器廃棄遺構出土遺物(2)



第234図 3号土器廃棄遺構出土遺物(3)



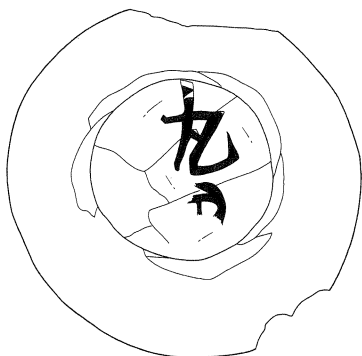
第235図 3号土器廃棄遺構出土遺物(4)



58



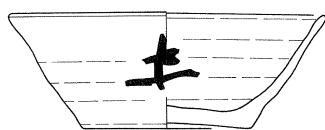
59



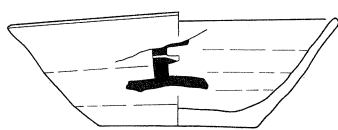
60



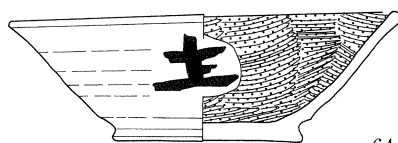
61



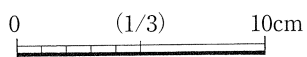
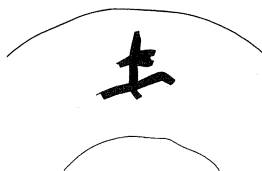
62



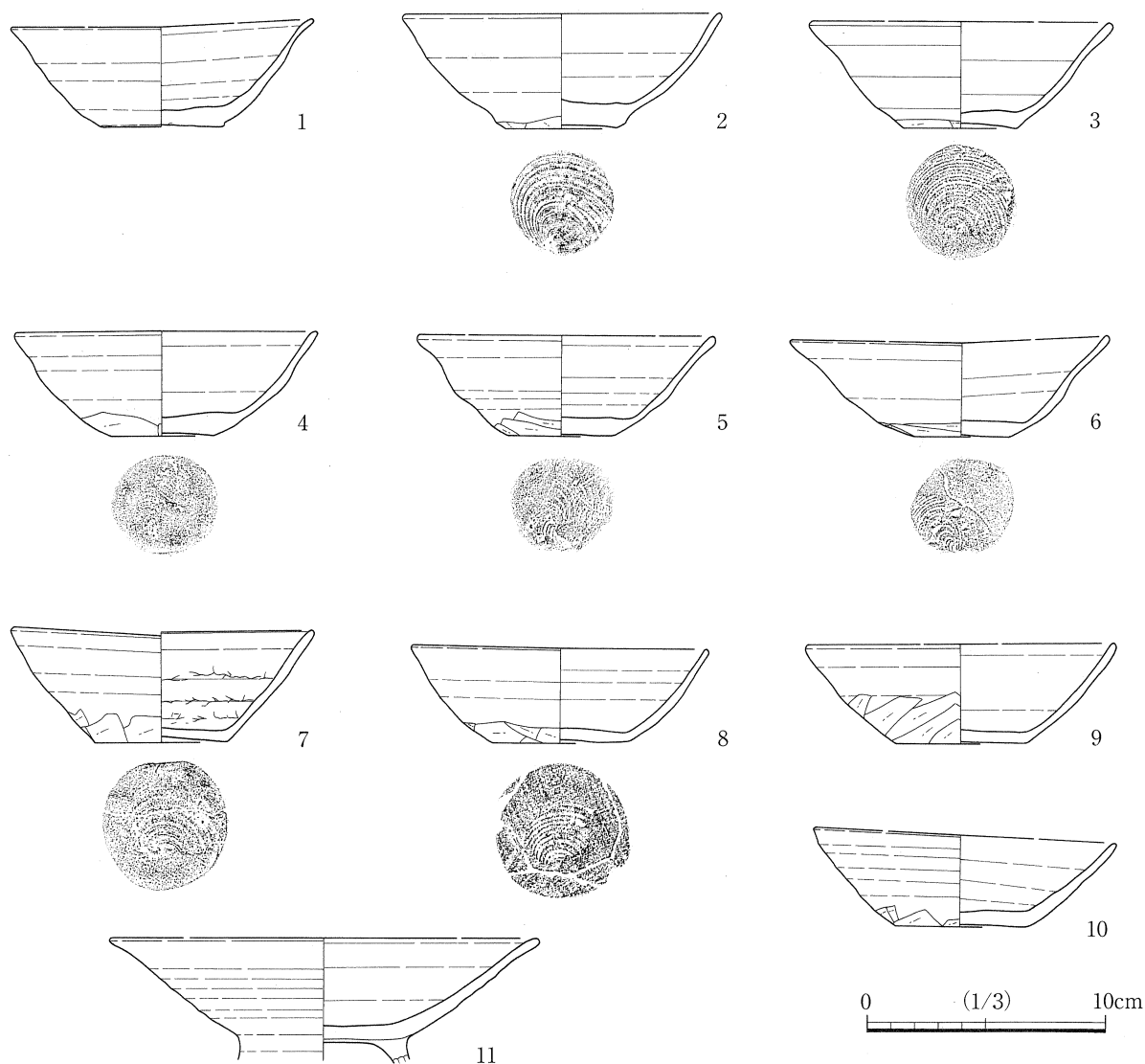
63



64



第236図 3号土器廃棄遺構出土遺物(5)



第237図 4号土器廃棄遺構出土遺物

の筆跡と思われる。62～64の体部には「土」1字が墨書される。62・63は回転糸切り無調整のロクロ土師器坏である。64は削り出し状の輪高台を有する内黒である。57は灰釉碗で、内面中央に指圧痕による窪みが見受けられ、重ね焼痕跡を留めている。施釉は薄く刷毛塗りしている。釉色は淡灰黄色を呈する。坂野Ⅳ期古相に比定され、10世紀第1半期を中心とする時期を当てている。57の灰釉碗の年代感を本遺構の年代感とすることは、その出土状況から疑う余地のないことである。しかし、本遺構の土器を概観すると法量・整形にばらつきがみられる。14・32・37・50・51・59は北側の一群から重なり合って出土し、古相の回転篋削りを施す5・6・46の一群も混在し検出されている。新相と古相が混在する場合は新相をその年代観とするが、本遺構の土器群には明らかに年代観の相違を示す遺物があり、これが同時期の製品か、また伝製品なのか問題があることを指摘して置きたい。

4号土器廃棄遺構（第237図）

E地点東側の北のJ15区から出土するが出土状況は不明である。J15区は四面廂付建物の31号建物跡の北、28・29建物の北東に当たる地域である。廃棄された土器は総重量2.5kg程で単純に1個当たり150gとすると16個ほどに過ぎない土器廃棄である。図示した土器、1は回転糸切り無調整、2・3は体部下端のみ手持ち篋削りで調整を施す。4～10は底体部手持ち篋削りである。11は高台付坏である。当遺物の時期は、2号土器埋納や3号土器廃棄遺構より新相を呈し、Ⅳ期－bからⅤ期に比定されるものと看取される。

第4節 溝と古道

今回の調査で検出した溝は、古代～近世まで十数条を数え、ここでは1から6号溝までの古代から中世と時期がある程度判明した溝を記載する。但し、記載しない古代の溝も存在する可能性がある。

1号溝

1号溝は、B・D地区を南北に貫きE地区西側に設定したJトレンチでも確認され、全長190mを計測する。北側の限界は未調査のため不明であるが、南側は西から入る小谷に制約され台地縁辺をとりC区に至る。C区では東西方向に走る2号・3号溝と繋がるものと想定される。1号溝の方向はN－8°－Wを指向する。

B区北側では、幅2.0m～2.9m・深さ0.4mを測る。溝底面は幅1.2m～1.8mを測り、西側法面下がやや深くなる。また、溝底面には道として機能した状況を示す明確な硬化面があり、溝覆土上層に宝永の火山灰が認められると同時に道による硬化面を確認することができる。

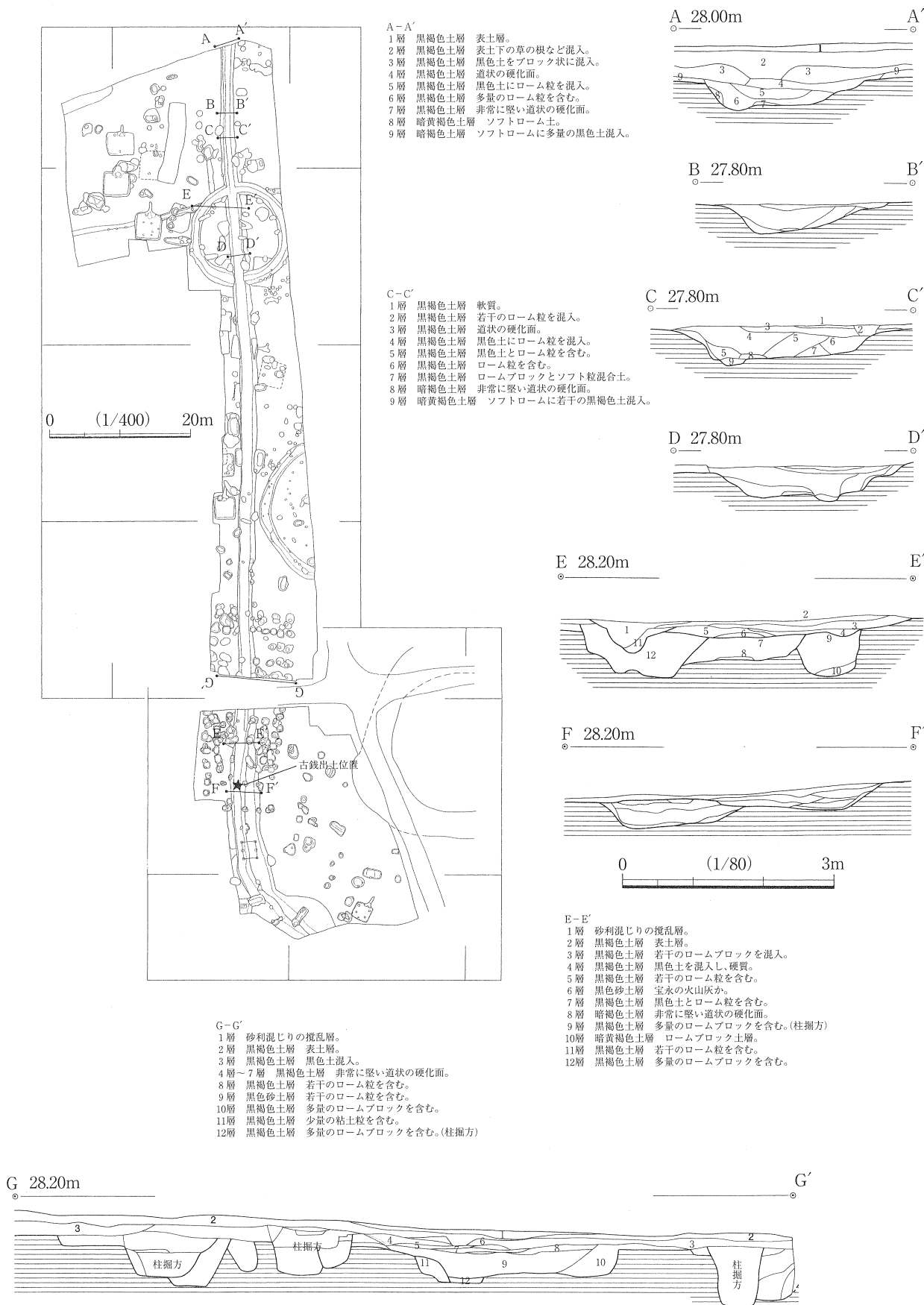
B区南端では43・44号掘立柱建物跡を掘り込み、腐植土中から溝の掘り込みが確認され、幅3.3m・深さ0.55m・底面幅1.5mを計測する。北側と同様に溝底面には硬化面が認められ、覆土上層に宝永の火山灰と道の硬化面が幾重にも認められる。

D区での1号溝は、45号掘立柱建物跡を掘り込み検出し、掘り直しにより東側に道状の溝として移る状況が確認できる。溝幅は2.1m・深さ0.4m測り、溝底面は幅1.3m～1.5mで西側法面下がやや深くなる。溝底面や覆土上層での状況は他の個所と同様である。掘り直しの溝は1号溝の覆土上層に底面と硬化面を有する溝状の道である。この掘り直しされた溝状の道の硬化面からは、所々に宝永の火山灰が確認でき宝永年間以降の道であるものと思われる。

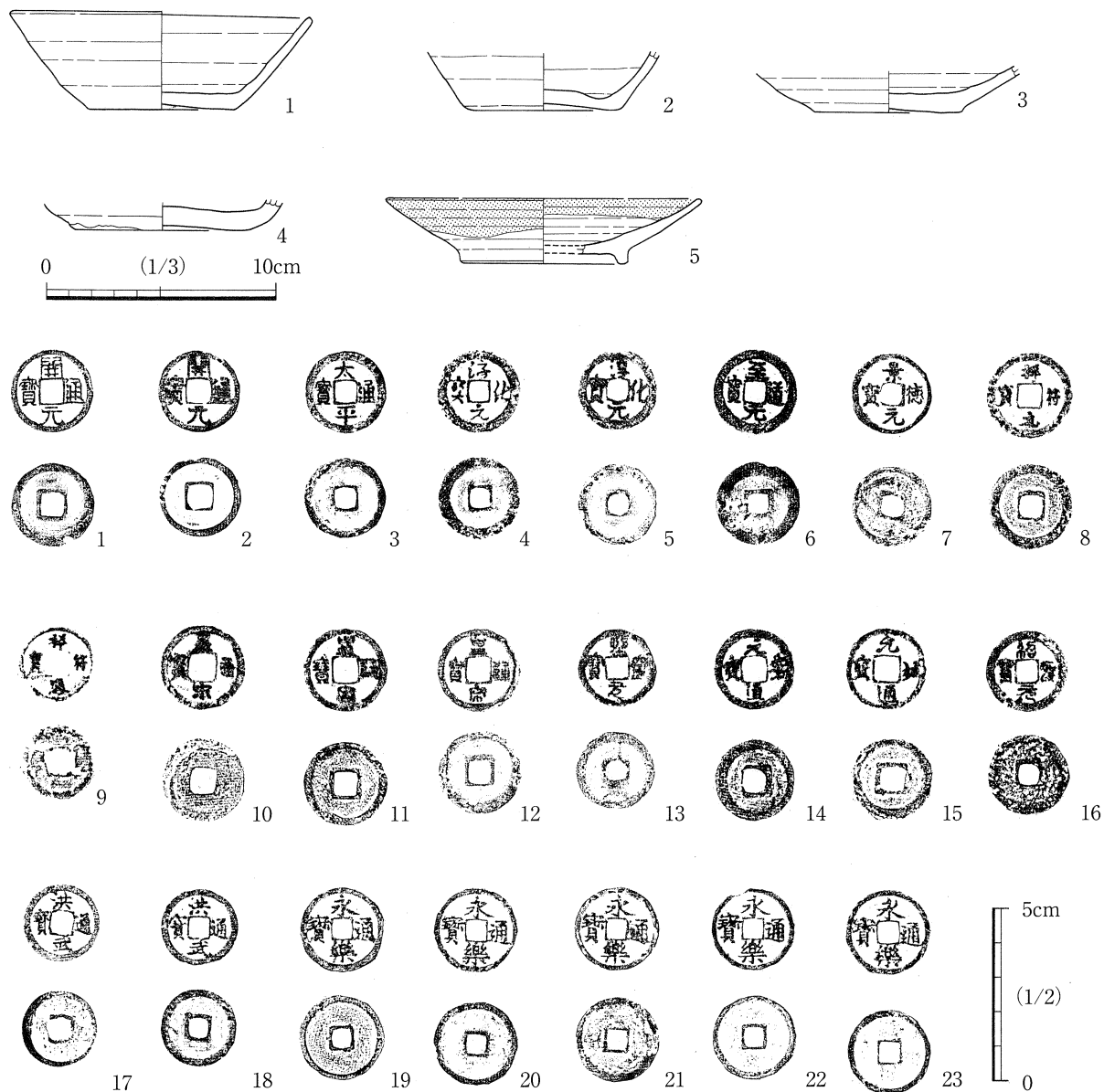
1号溝の南側のD地区から1号溝の道硬化面に伴う鳥居の柱据付礎石を検出する。鳥居の礎石は、6個の五輪塔の石材を転用して礎石としたものと思われるが石材の行方が不明で断定はできない。礎石据付の平面形は南北2間・東西1間を呈し、西柱列長2.4m・東柱列長2.35m・南柱列長1.87m・北柱列長1.9mを計測する。鳥居遺構は、宝永の火山灰に埋もれた道の硬化面を下から検出され、一見、宝永年間以前の所産と看取されるが断定はできない。

1号溝からの出土遺物には、ロクロ土師器坏等が検出されるものの、溝の時期を特定できる遺物が見られない。1～5は溝内一括遺物として取り上げられたものである。1～4はロクロ土師器坏、4は他の坏より底径が大きく古相である。何れも回転糸切り無調整である。5は灰釉皿である。

また、鳥居遺構の北5mに1号溝底面の硬化面層中から、古銭23枚検出する。開元通寶2枚・太平通寶1枚・淳化元寶2枚・至道元寶1枚・景德元寶1枚・祥符元寶2枚・皇宋通寶3枚・□寧元寶1



第238図 1号溝と土層断面



第239図 1号溝出土土器と古銭

枚・元豊通寶1枚・元祐通寶1枚・紹聖元寶1枚・洪武通寶2枚・永樂通寶5枚を出土した。

1号溝の最下層から検出された道の硬化面は、硬化面覆土から出土した古銭の中に寛永通寶が見られないことや、火山灰上層に、硬化面が見られないことから、宝永年間まで使用されたものと言える。上限は、B・D地区で検出された、竪穴住居跡や43～45掘立柱建物跡を掘りこんでいることから、それ以降の所産であることが言える。しかし、この1号溝は、後記する2・3号溝や古代官道と密接に関わり、稻荷台遺跡をある時期に区画した外郭溝と思われる。

2号溝

2号溝はC区を東西に貫き、検出長49m・幅2.4～2.7m・深さ0.6～0.8m・底面幅1.45m前後を計測し検出する。溝底面は凹凸があるものの比較的平坦で断面形は逆台形を呈し、国分二寺等で検出した寺域外郭溝と酷似する形状を呈している。溝の方向はN-90°-Eを指向する。溝中には道状の硬

第3表 古銭一覧表

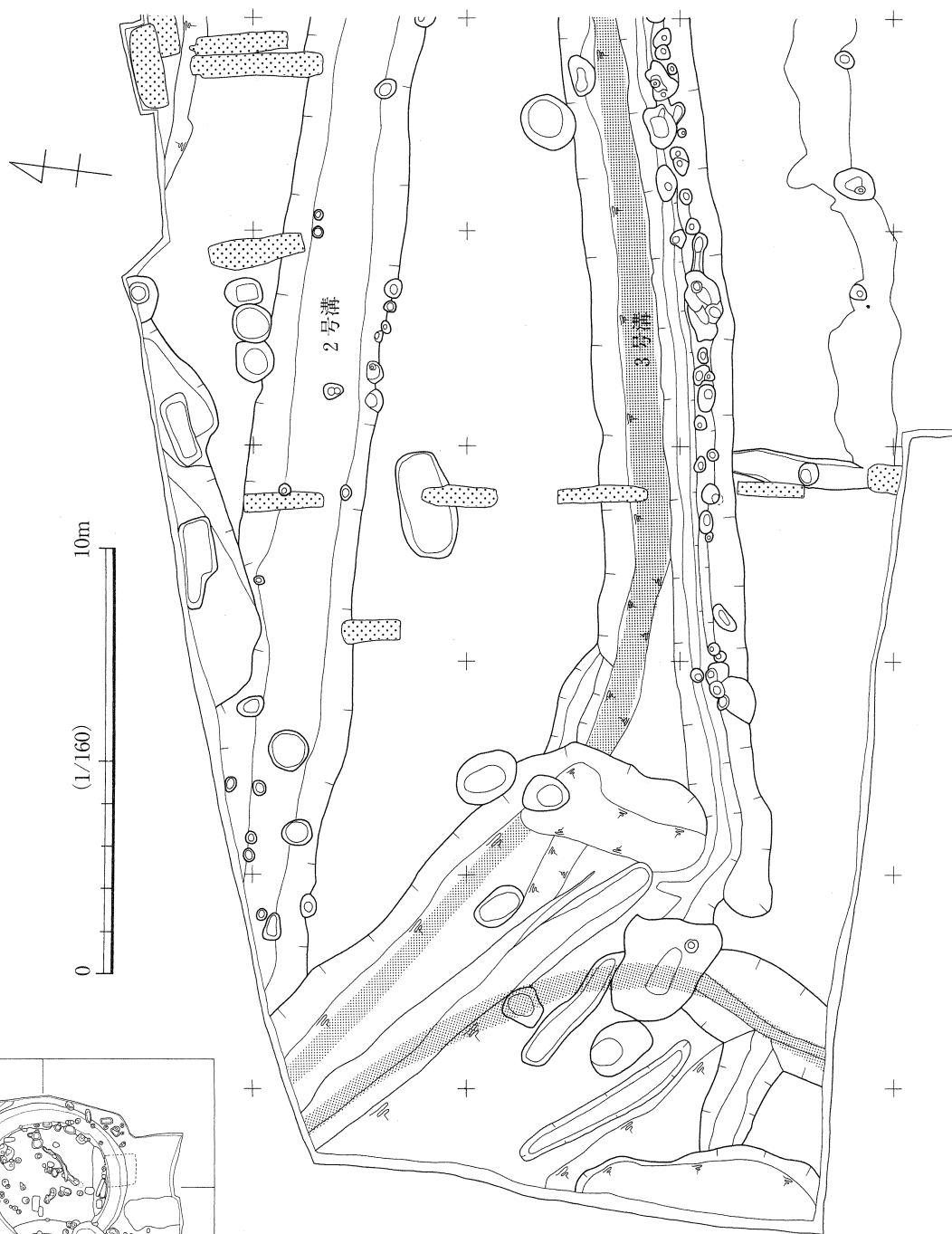
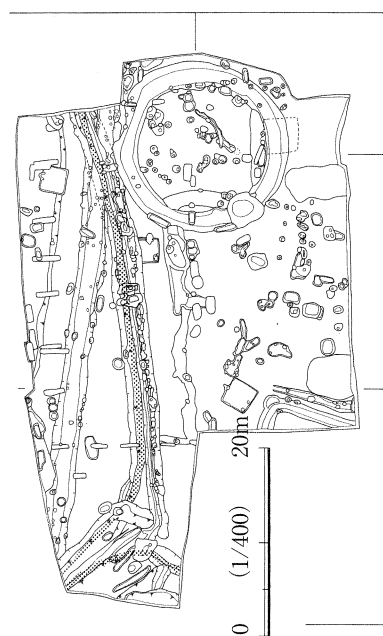
番号	出土位置	銭 名	製造初年度	法 量		備 考
				径	重 さ	
1	1号溝	開元通寶	621	2.5	3.2	
2	1号溝	開元通寶	621	2.4	3.2	
3	1号溝	太平通寶	976	2.4	2.5	
4	1号溝	淳化元寶	990	2.4	2.4	
5	1号溝	淳化元寶	990	2.4	2.9	
6	1号溝	至道元寶	995	2.5	3.1	
7	1号溝	景德元寶	1004	2.4	2.8	
8	1号溝	祥符元寶	1009	2.5	3.3	
9	1号溝	祥符元寶	1009	2.25/2.23	1.2	
10	1号溝	皇宋通寶	1038	2.5	3.1	
11	1号溝	皇宋通寶	1038	2.5	2.8	
12	1号溝	皇宋通寶	1038	2.5	2.5	
13	1号溝	熙寧元寶	1068	2.3	3.4	
14	1号溝	元豐通寶	1079	2.4	3.1	
15	1号溝	元祐通寶	1086	2.4	3.2	
16	1号溝	紹聖元寶	1094	2.4	2.7	
17	1号溝	洪武通寶	1368	2.3	2.8	
18	1号溝	洪武通寶	1368	2.3	3.4	
19	1号溝	永樂通寶	1408	2.5	3.5	
20	1号溝	永樂通寶	1408	2.5	3.6	
21	1号溝	永樂通寶	1408	2.5	2.9	
22	1号溝	永樂通寶	1408	2.5	3.2	
23	1号溝	永樂通寶	1408	2.5	2.5	
24	5住覆	土承和昌寶	835	2.1	1.3	皇朝十二銭
25	C区	熙寧元寶	1068	2.5	2.7	
26	E区	□□□			0.9	
27	E区	寛永通寶		2.8	5.0	
28	E区	□永通□			1.2	

化面は認められず、1号溝と状況を異にしている。また、北側2.5mに2号溝とほぼ平行に東西に走る2b溝を検出する。2号溝は、東側で柵列状に掘り込まれる3号溝に掘り込まれている。

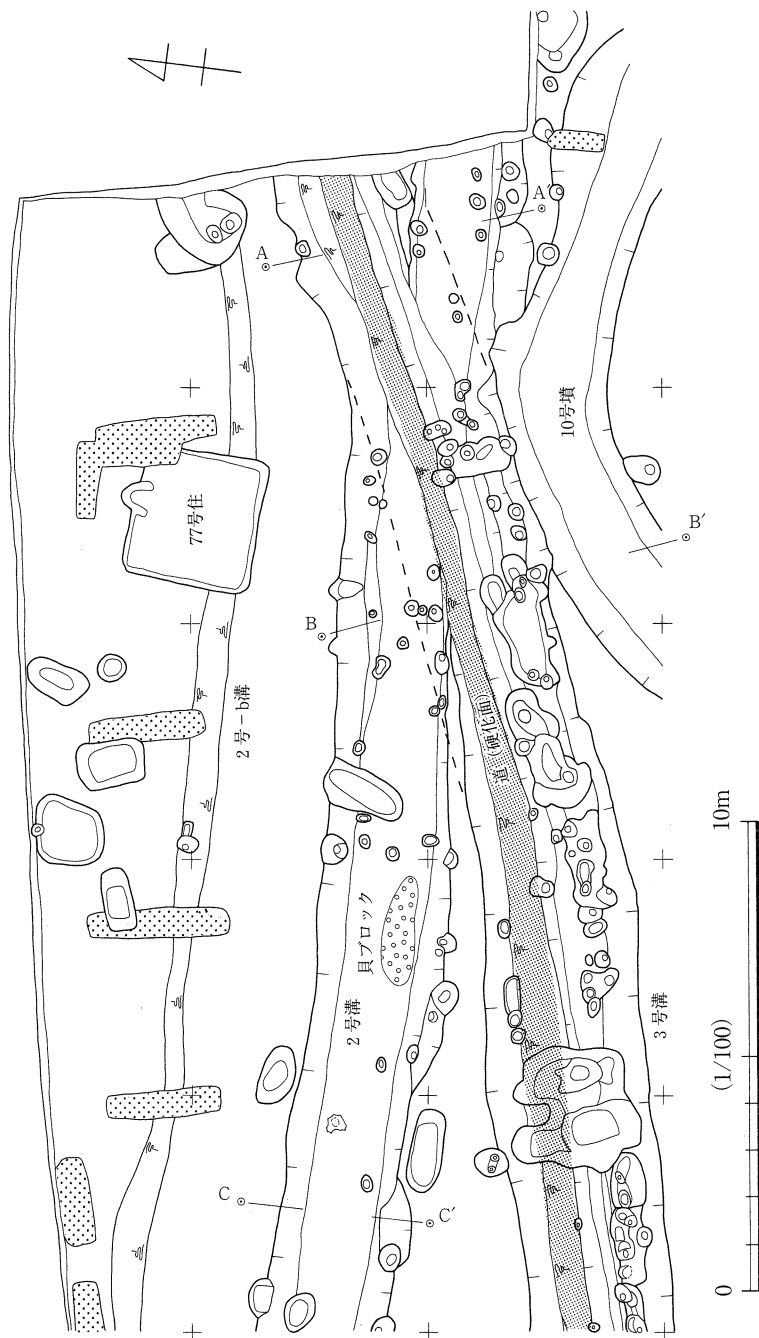
出土遺物は比較的豊富で、1は3段構成の須恵器長頸瓶で外面に厚い降灰が認められる。2・3は土師器甕、4～8は回転篋削り調整のロクロ土師器坏、9～13は回転糸切り無調整のロクロ土師器坏、14・15は手持ち篋削り調整のロクロ土師器坏、18は回転糸切りロクロ土師器皿である。5には底部外面に「有」、11には底部内外面に「奉カ」が墨書される。16・17は焼成後の線刻で、16底部外面には「×」、17内面に線刻が認められる。19は覆土上層から検出した常滑の大甕であるが、溝中覆土から検出されるが、溝に共伴するか否かの判断は明確にできない。ロクロ土師器坏は9世紀第2四半期から14の10世紀前葉で、1の須恵器長頸壺は8世紀末葉の所産である。このことから溝の時期は、8世紀末葉から9世紀代と看取される。

3号溝

2号溝同様C区を東西に貫き2号溝を掘り込んで、全長57mを検出する。溝は、底面の形状や断面から3a溝→3b溝→3c溝と3回の掘り直しが確認できる。2号溝と同様な断面を呈する3a溝は、底面に道の硬化面を有し深さ0.6mを計測し、断面逆台形を呈する。3b溝は、柱痕跡と思われる無数のピットが不規則に並ぶ柵列を伴う溝である。3c溝は、3a溝・3b溝を掘り込み船底形で深さ0.8m前後を計測する溝である。各溝の幅は、3c溝が3a・3b溝の法面を削平するため不明であるが3条で3～3.5mを計測する。東端は未調査の為不明であるが、2号溝同様、40m東にほぼ直行する古代道まで延びるものと思われる。西端は鈍角に北方向にやや向きを変え、西から入り込む小



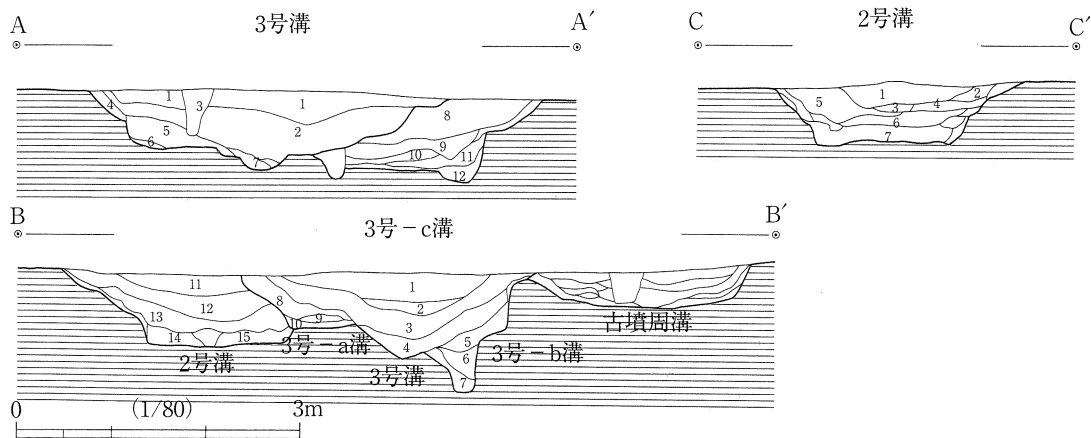
第240图 2·3号溝(1)



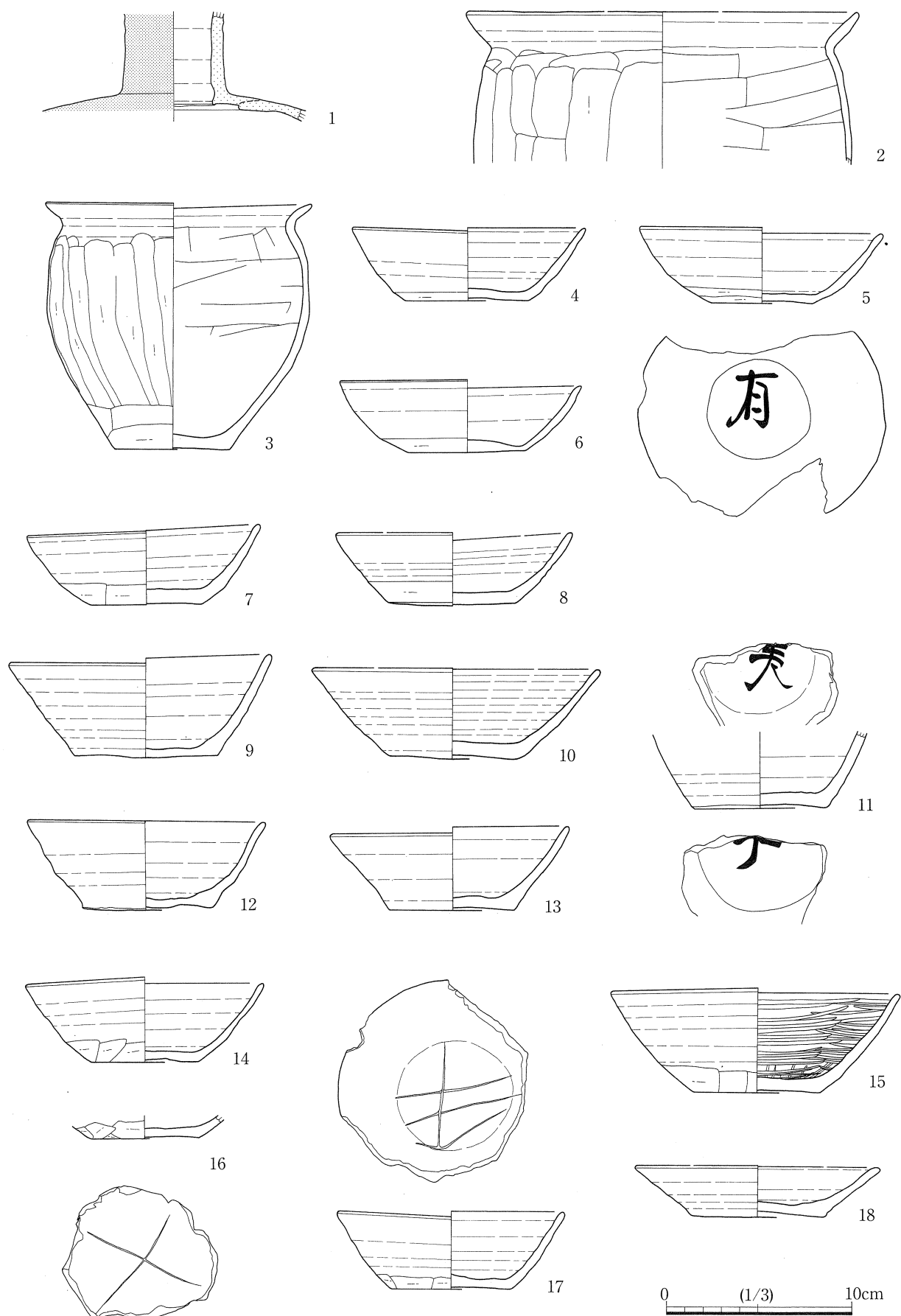
- 2・3号溝土層
A-A'
- 1層 暗褐色土層。
 - 2層 暗黒褐色土層。
 - 3層 暗褐色土層。
 - 4層 暗褐色土層。
 - 5層 褐色土層。
 - 6層 褐色土層。
 - 7層 暗黄褐色土層。
 - 8層 黒褐色土層。
 - 9層 黒褐色土層。
 - 10層 褐色土層。
 - 11層 褐色土層。
 - 12層 褐色土層。
- 攪乱層。
ローム混入土層。
多量のローム粒を含む。
硬質な道路面。
ロームブロック土層。
小ロームブロックとローム粒を多量に含む。
ローム粒を多量に含む。
小ロームブロックとローム粒を多量に含む。
軟質で小ロームブロックとローム粒を多量に含む。
多量のロームブロックを含む。

- B-B'
- 1層 褐色土層。
 - 2層 褐色土層。
 - 3層 褐色土層。
 - 4層 明褐色土層。
 - 5層 褐色土層。
 - 6層 褐色土層。
 - 7層 暗黄褐色土層。
 - 8層 黒褐色土層。
 - 9層 黒褐色土層。
 - 10層 褐色土層。
 - 11層 褐色土層。
 - 12層 褐色土層。
 - 13層 暗黄褐色土層。
 - 14層 暗黄褐色土層。
- 攪乱層。
ロームを多量に含む。
多量のローム粒を含む。
多量のローム粒を含む。
ロームブロック土層。
小ロームブロックとローム粒を含む。
硬質路面でローム粒を多量に含む。
ブロック土層。
多量のローム粒を含む。
ロームブロック土層。

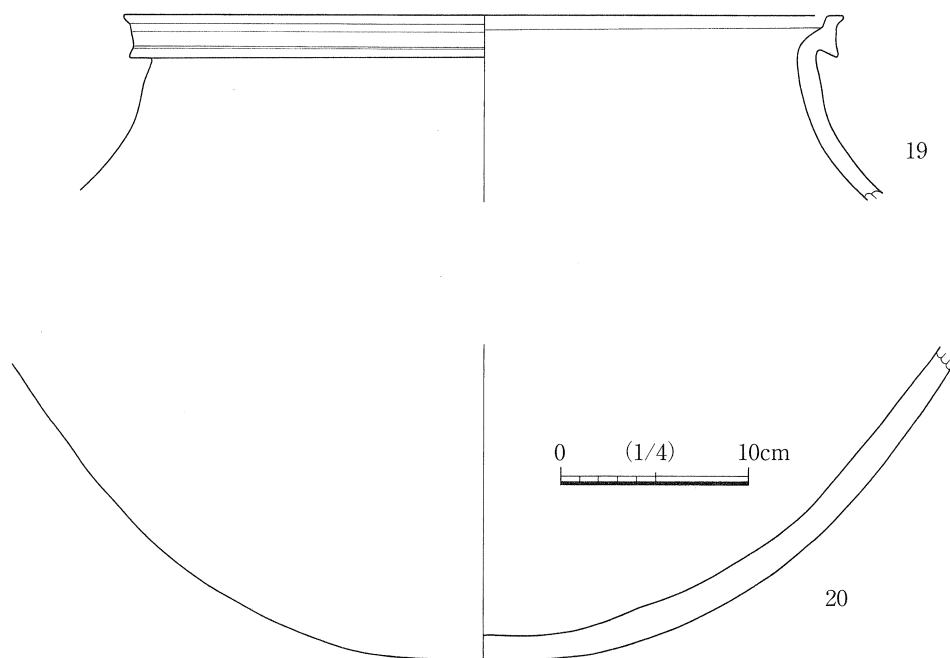
- C-C'
- 1層 黒褐色土層。
 - 2層 黒褐色土層。
 - 3層 黒褐色土層。
 - 4層 黒色土層。
 - 5層 黒褐色土層。
 - 6層 黒色土層。
 - 7層 暗黄褐色土層。
- ローム粒を混入。
小ロームブロックを含む。
ローム粒を含む。
ローム粒を含む。
ロームブロックを含む。
多量のロームブロックを含む。



第241図 2・3号溝(2)



第242図 2号溝出土遺物(1)



第243図 2号溝出土遺物(2)

谷を避ける様に台地縁辺を通り1号溝と連続するものであろう。谷から延びる溝中の道は3a溝に繋がるものと、更に南に延びる溝状の道がある。

時期を示す出土遺物が無く時期明確にできないが、2号溝を掘り込んでいることから2号溝以降の10世紀代の所産と考えられ、1号溝底面硬化面の道と3a溝硬化面の道が同一のものであるとするならば、1号溝の所属時期も3号溝と同時期となろう。

4号溝

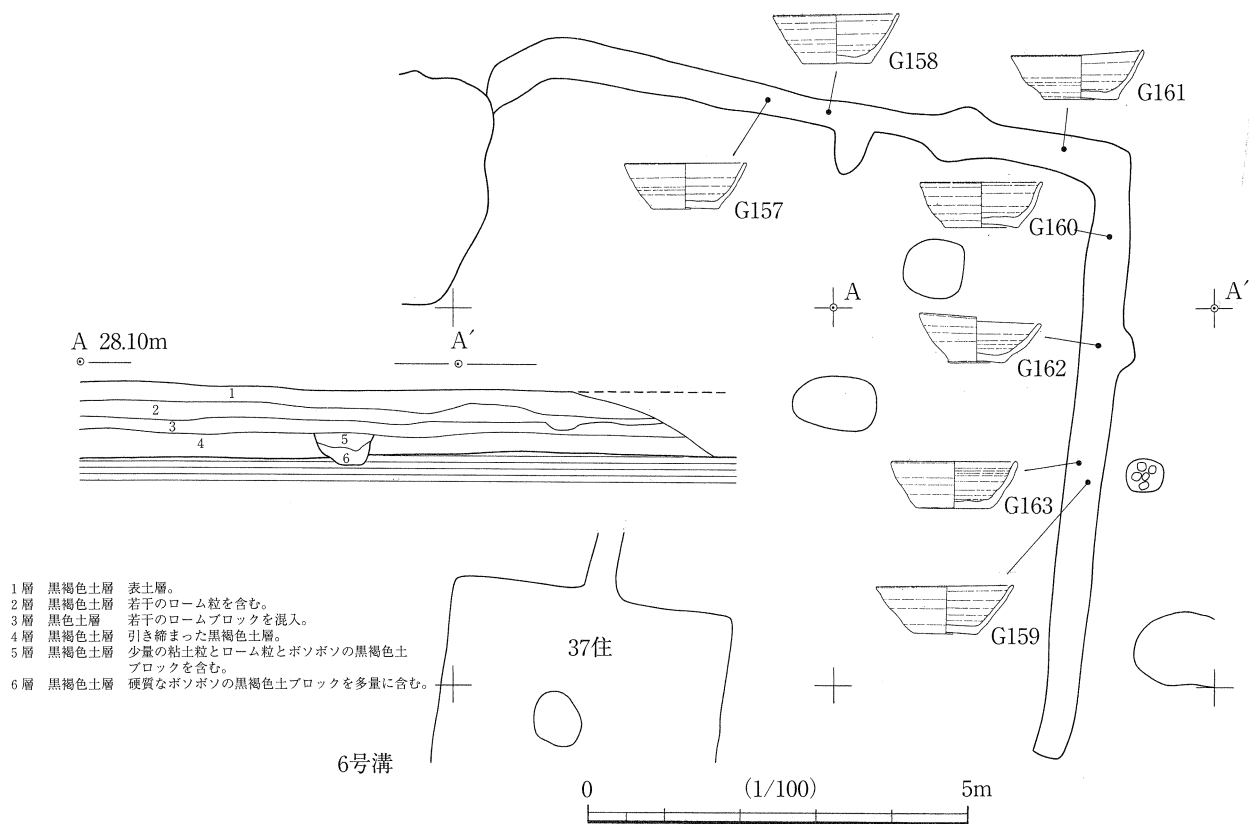
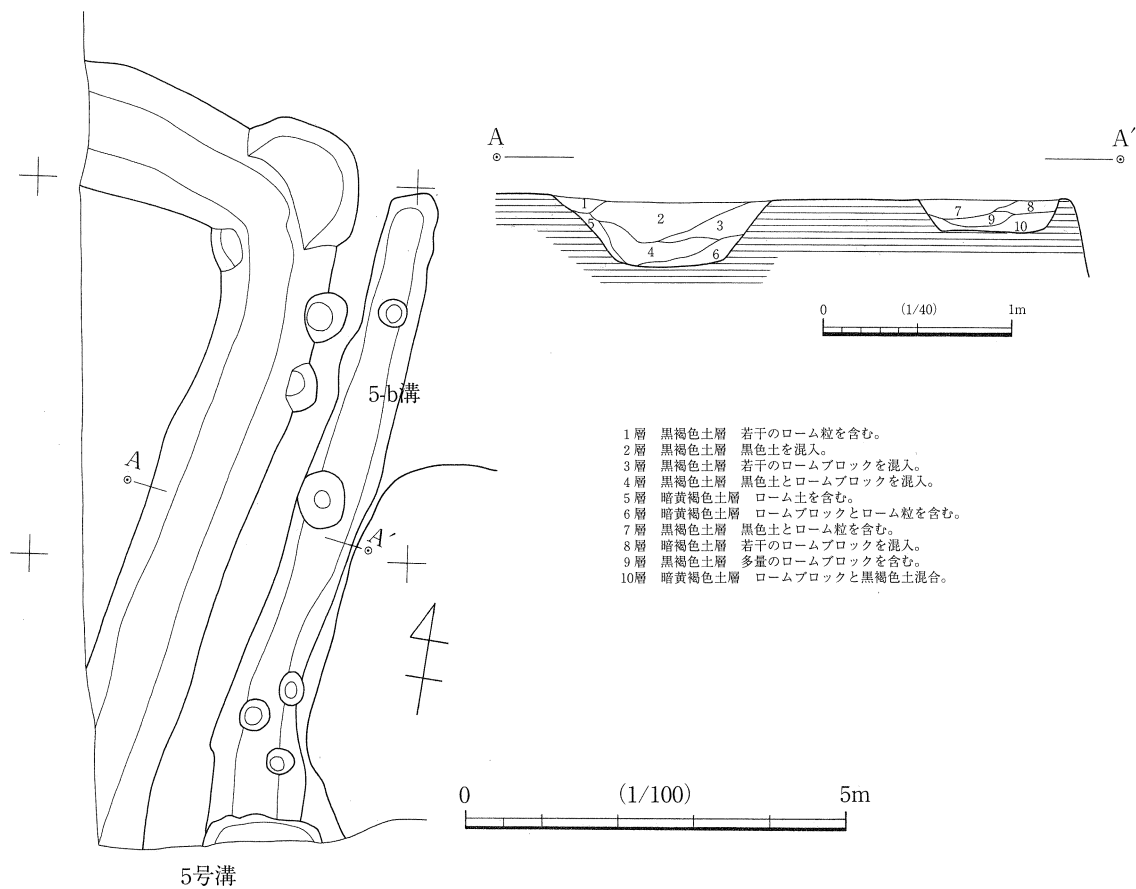
4号溝は、E地区南端・B区北側・F区で検出され、トレンチ調査で台地を東西に貫く溝であることが確認された。総延長で169mを測る。西端のF区では台地からさらに西に延び谷に下る状況を示している。時期はB区で1号溝の覆土上層や竪穴住居跡では最も新しいVI期の70号住居跡カマドを掘り込むことから11世紀以降の所産であろう。

5号溝

C区西南端にL字状に回る溝を検出する。溝は方形に回る北東隅と考えられるが大半が調査区域外にあるため不明である。東側の溝は二重に設けられている。5号溝は南北長9.5m・東西長3.5m・深さ0.35m 測り、東に二重に設けられる5-b溝は南北長9m・深さ0.2m 程を測る。出土遺物が無く、時期は不明である。これと同形態の溝が、昭和60年度に調査された東側300mの千草山遺跡でも検出され、時期は出土遺物から10世紀前半～中葉とされている。

6号溝

E地区西側のH8・H9・I9・J9区から北と東を区画するL字状に回る溝を検出する。北溝は長さ8.5m・東溝は長さ8.1mを検出する。出土遺物はグリット出土の157～163(第185図)のロクロ土師器坏がある。溝の内側は遺構密度が希薄な範囲となり、同時期の祭祀遺構である37号住居跡覆土が



第244図 5・6号溝

やや離れて包括されることは興味深い。出土遺物からⅢ期-aの9世紀後葉であろう。

古代道

G地区とHトレンチで確認する。G地区は当初調査区域外であったが、市原市役所から国道297号線に接続する道の工事中に偶然に発見し調査が可能になったものである。この古代道の発見を機会に、北側延長を確認すべく昭和55年当時の「市原を知る会」代表谷島一馬氏が中心となり、本遺跡の調査員でもある鋸南町在住の対馬郁夫氏等が、国分寺台区画整理事業とは別に、地権者の同意を得てHトレンチ調査を実施したものである。

G地区の調査は、既にロームを深く削平され路面覆土を僅かに残すだけであった。掘り込みはソフトローム上層の腐植土から確認でき、路面と側溝からなる。掘り込み上面幅8.5m・路面幅4.0m前後・確認面からの深さ0.75mを計測する。側溝は東側では、幅1.0m・深さ0.25m～0.3m程を計測し逆台形を呈するのに対し、西側では幅1.2m・深さ0.1m程を計測するだけで僅かに窪む程度である。側溝には、掘り直しの状況が顕著に見られず、早くからその機能を失ったものと看取される。側溝が埋もれその機能が失われた後は、側溝上面も路面となり、路面幅は6.5mの道となることが確認できる。時期を明確にできる遺物は検出されないが、磨耗した土師器小片や緑釉平瓶把手(72)が出土し、出土遺物からは、9世紀代第2四半期の様相が窺われる。

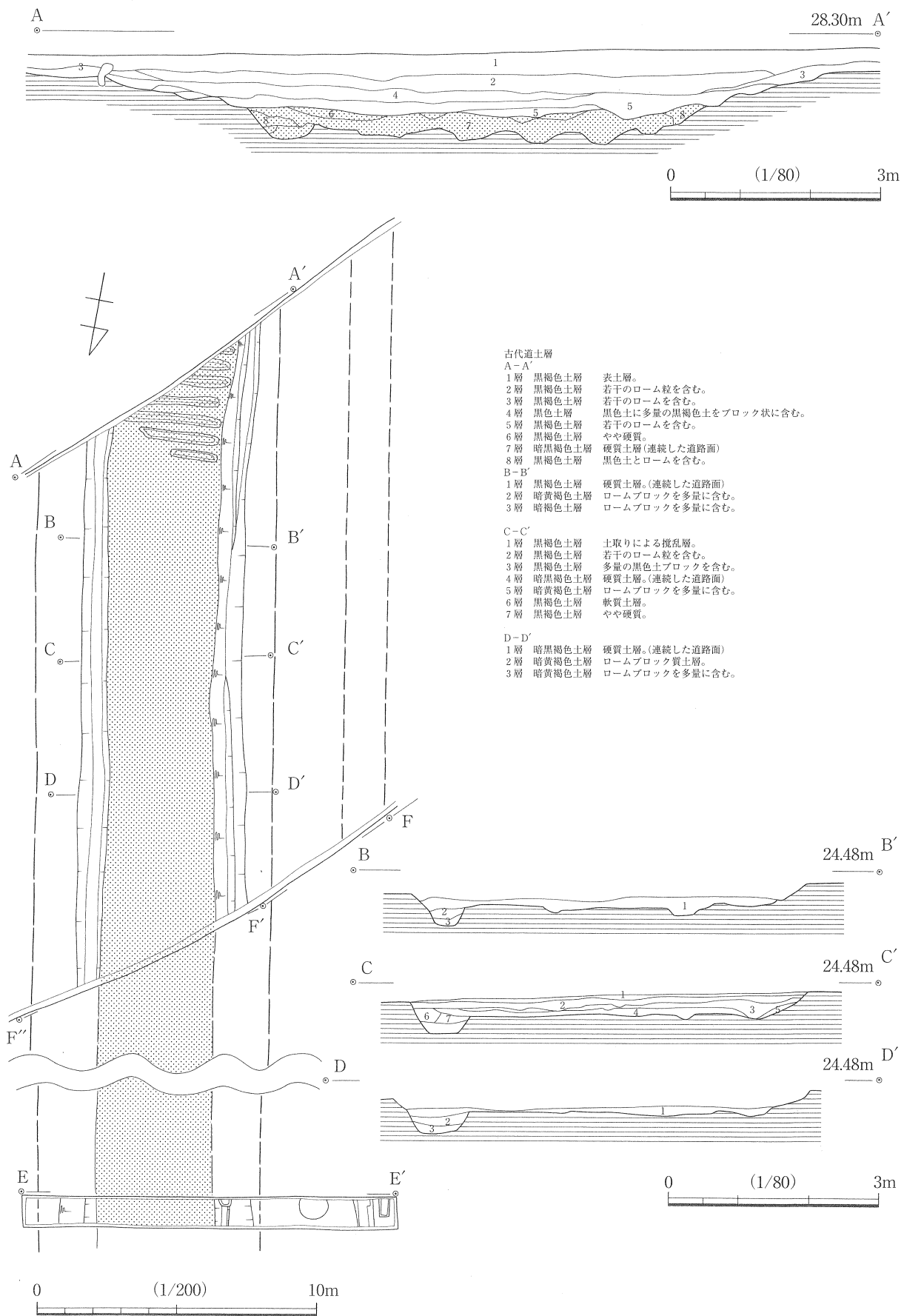
Hトレンチの調査では、路面上面の掘り込みがG地区の調査同様に腐植土から確認でき、確認面上面幅8.0m・路面幅4.0m・確認面からの深さ1.0m程を計測する。側溝はG区とは逆に稲荷台E地区寄りの西側に顕著に確認され東側は僅かに窪む程度であった。

出土遺物は土師器小片がほとんどで、時期を明確に示すものはなく、土師器小片等から9世紀代の遺物と看取されるだけである。

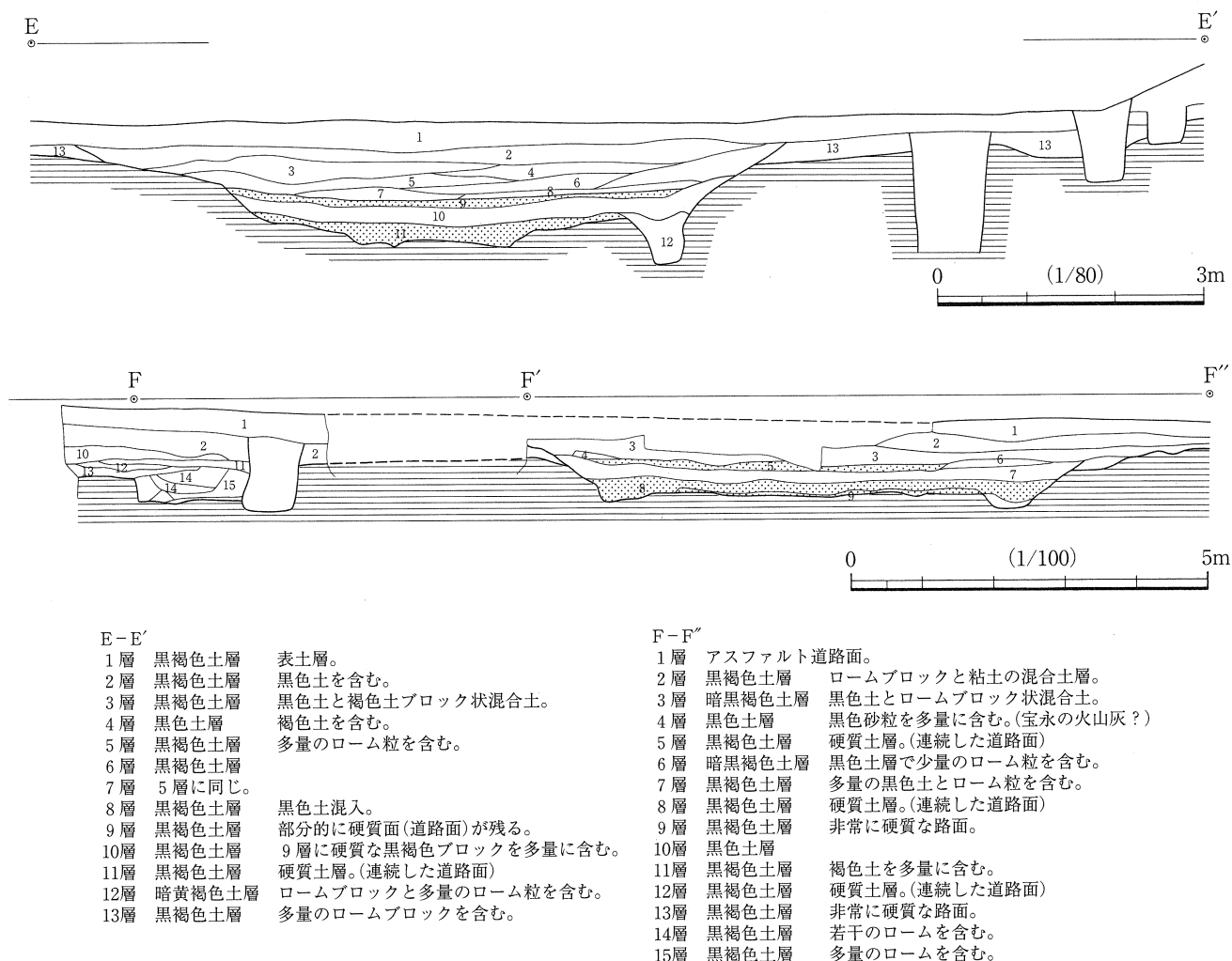
この古代道の南延長は、その後、昭和62年度の東千草山遺跡、平成2年度山田橋表通遺跡・平成5年度山田橋大塚台遺跡・平成8年度大山台遺跡・平成8年度山田橋亥の海道遺跡で調査が実施され、当初確認された稲荷台G地区から南東方向700mまで古代道の存在が確認されている。亥の海道遺跡では、路面幅が2.3～4.2mと不規則な路面幅が検出され、造り替えによる幅の差なのか今後の整理作業に期待するところである。

稲荷台遺跡の北側の調査は、平成2年度に稲荷台遺跡から2～2.7km北の台地から降りた低地部で調査の行なわれた市原条里制遺跡と五所四反田遺跡でもこの古代道の延長と思われる道が検出されている。市原条里制遺跡の調査では長さ55mに渡って検出され、路面幅5.5mで両側に側溝を設けている。側溝は、平均幅2mで側溝底面から路面までの高さ1.3mで整然とし古代道の感がある。これより700m東京湾よりの五所四反田遺跡でも同様な古代道が検出されている。また、今年度にはHトレンチの北100m地点で道の延長が調査された。調査では長さ約25mに渡り検出し、路面上面掘り込み幅14m、路面までの最大高低差3.5mと大規模な土木工事の跡が確認された。路面底面には側溝が無く、路面幅3.0～5.0mを計測し、南と北端の比高差0.3mと僅かに北に向かってやや傾斜している。この調査で注目することは、調査区中央に路面に直行する溝が横断し、完全に路面を切断していることにある。調査担当者によれば、この横断する溝は、古代道が機能した時期に伴う遺構で、溝を塞ぐ機能を有していたものと考えられるとしている。

この古代道の稲荷台遺跡より北側のルートには、市原郡衙推定地や国府推定地の郡本遺跡群や古甲



第245図 古代官道(1)



第246図 古代官道 (2)

遺跡が知られ、この古代道は正に古代官道と呼ぶに相応しいものである。

第5節 古墳

本報告書で報告する稲荷台7号～10号墳は、墳丘の残存する古墳の本格的な古墳調査が終了した後、散布地として調査を実施した範囲で、周溝のみ検出した古墳である。従って、前者で調査を行った「王賜」銘鉄剣を出土した稲荷台1号古墳～6号墳までと、占地状況を異にして南方170mの宮ノ前地区で調査した11号墳の古墳調査報告書は別途報告されるものである。宮ノ前地区で調査した12号墳は既に報告書が刊行されている。

7号墳

B地区の調査時に調査区北側で検出された円墳で、東側溝が現道で調査対象外である。調査時はB地区2号墳で記録されている。中央を南北に貫通する1号溝や円台部や周溝を後世の土坑や攪乱穴に掘り込まれ、遺存状態は不良である。周溝南側では、VI期の10世紀末葉以降の69号住に円台部を大きく掘り込まれ、10世紀末葉には墳丘が失われていた可能性を示唆するものであろう。周溝規模は、南北外径長14.75m・南北外径下底間長13.60m・南北内径長10.90m・南北内径下底間長11.90m、東西外

径長(14.35)m・東西外径下底間長12.65m・東西内径長11.0m・東西内径下底間長11.65mを計測する。周溝上面幅は、北側1.75m、南側2.15m、西側1.5m程で東側は不明である。周溝の深さは0.5m前後を計測する。埋葬施設は確認されない。また、出土遺物が無く時期を明確にできない。

8号墳

A地区北側調査区の稲荷台1号墳の西北側7.5mに近接して、稲荷台古墳群中最も1号墳の近距離に検出された円墳である。墳丘は既に削平され、周溝のみの検出である。円台部南側に松根油を採取したと思われる不整形の大きな攪乱がある。調査時はA地区1号墳で記録されている。周溝規模は、南北外径長12.40m・南北外径下底間長11.20m・南北内径長9.55m・南北内径下底間長10.05m、東西外径長12.15m・東西外径下底間長11.35m・東西内径長9.75m・東西内径下底間長10.30mを計測する。周溝上面幅は、北側1.5m、南側1.4m、東側1.3m～1.65m、西側0.8m～1.3mで、周溝の深さは0.25～0.45m前後を計測する。周溝東南側に周溝底面と上面幅が角状に広がる個所があり、木棺痕跡を推測させる掘り込みが観察されるが、詳細な記録がないため不明である。埋葬施設は確認されない。出土遺物が無く、時期を明確にできない。

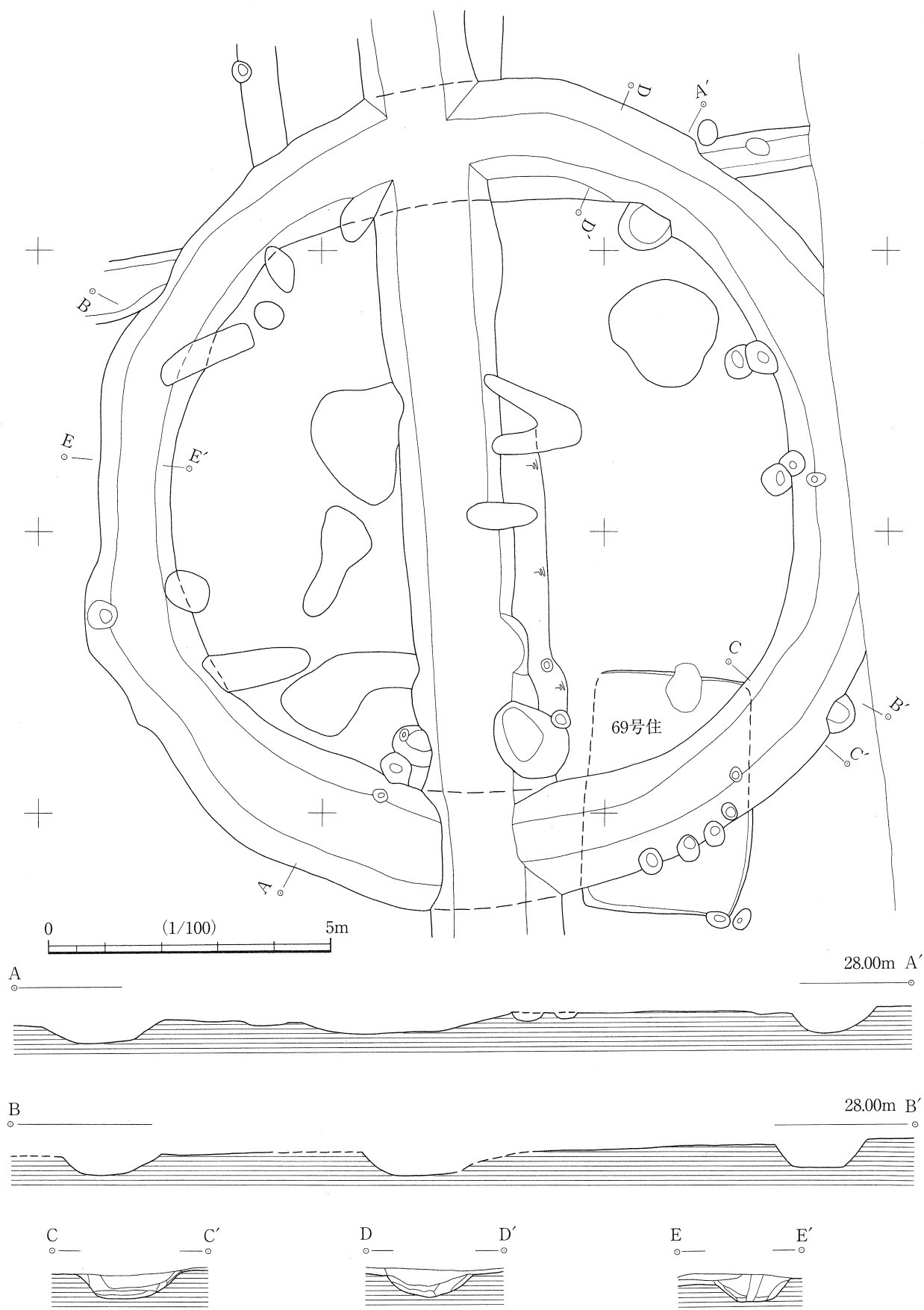
9号墳

A・B地区調査区に跨り中央と南側に大きく調査対象外の現道を挟んで検出する円墳である。調査時はA地区2号墳で記録されている。墳丘は既に削平され、周溝のみの検出である。周溝規模は、南北推定外径長20.8m・南北推定内径長17.5m、東西外径長21.2m・東西外径下底間長20.5m・東西内径長18.0m・東西内径下底間長18.5mを計測する。周溝上面幅は、北側1.2m、東側1.5m、西側1.5mで、深さは0.3～0.55mを計測する。出土遺物が無く、時期を明確にできない。

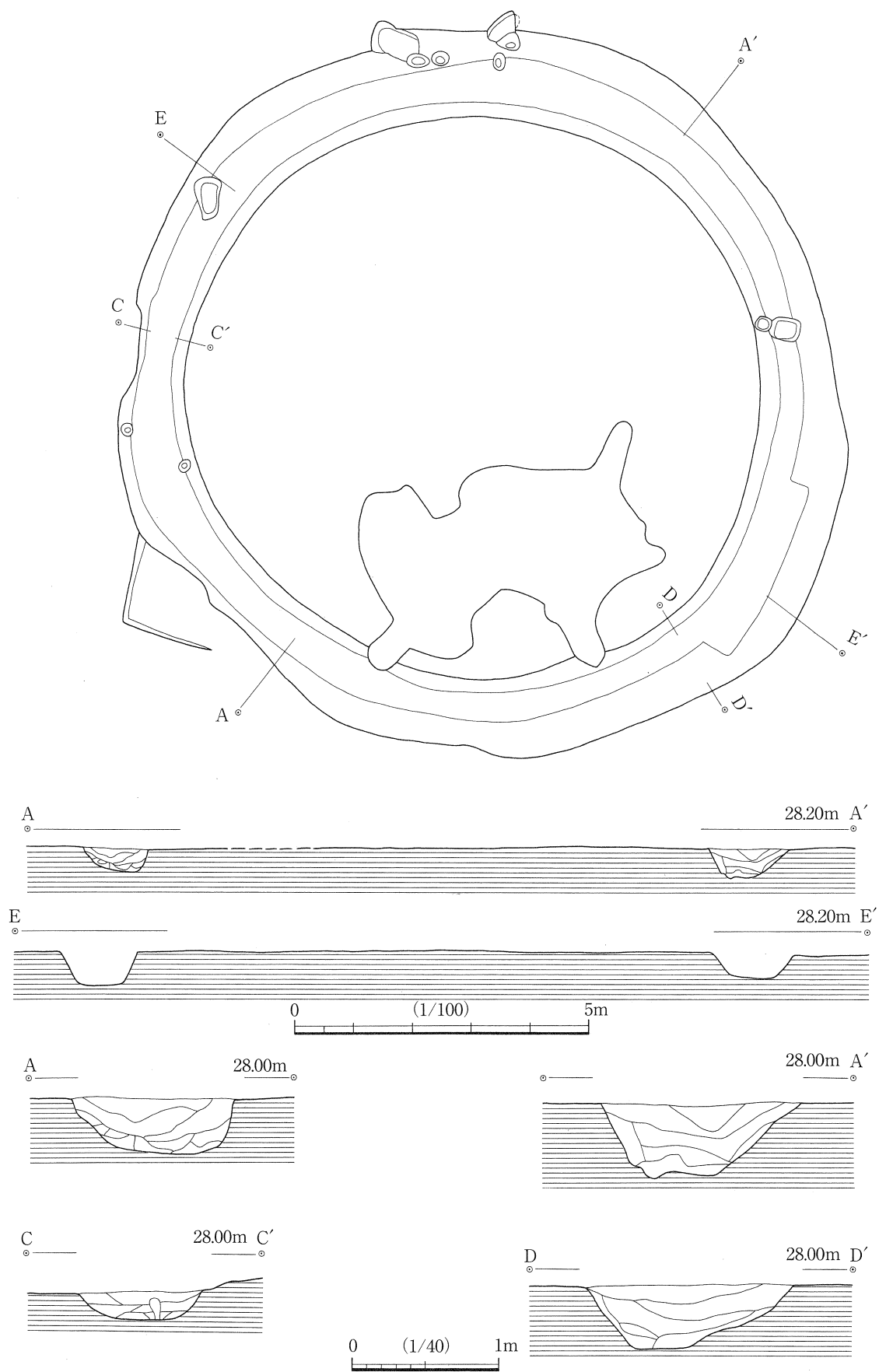
10号墳

C地区東端に検出する円墳である。墳丘は既に削平され、周溝のみの検出である。円台部や周溝には多数のピットや土坑状の遺構が掘り込んでいる。円台部南西側に人骨を検出した、57～59号土坑が存在する。この土坑の存在は、土坑が掘り込まれたときに、本墳の墳丘の存在を暗に示唆している様に感じ取れる。土坑の時期は明確でないが、中世もしくは近世初頭の17世紀と看取される。本古墳は、調査時はC地区古墳で記録されている。周溝規模は、南北外径長18.5m・南北外径下底間長17.0m・南北内径長13.5m・南北内径下底間長14.2m、東西外径長18.9m・東西外径下底間長17.0m・東西内径長13.2m・東西内径下底間長14.2mを計測する。周溝上面幅は、北側2.6m、南側2.4m、東側2.8m、西側2.1mで、深さは0.3～0.5mを計測する。周溝幅が7～9号墳に比べ幅広くなる。

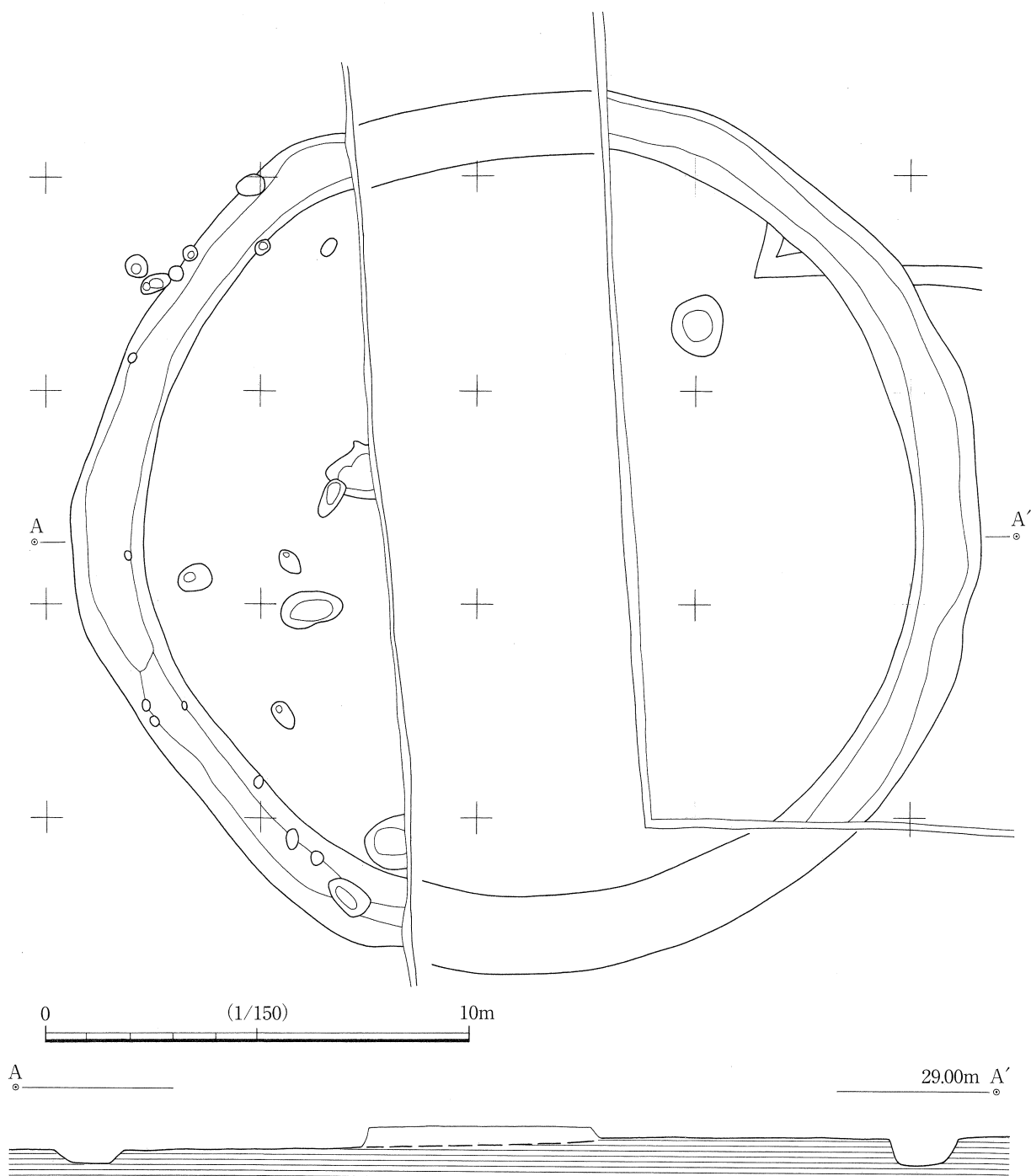
出土遺物には、実測可能な1～7がある。1～4は、一括遺物で出土位置が明確で時期を示す資料とはならない。1・2は後世の混入遺物で9世紀代のロクロ土師器坏で、南側周溝上に複合する75住の時期を示す遺物の可能性がある。3は、土師器坏で内面雑なミガキ、外面削り状の匏ナデを施し、稜線は鈍いが須恵器模倣坏であろう。4は、高坏脚の一部で外面に丹彩を施し、外面は縦位の匏ナデである。5～7は、南側周溝外壁に接して検出された土師器甕である。5の口縁径18.2cm、6は推定口縁径27.0cmを計測する。外面は共に丁寧な削り状の匏ナデを施している。7は胴下半で削り状の匏ナデを施している。3～7の遺物にはやや時期差があり古墳の所属時期を明確にできないが、5～7の胴球系の甕を本古墳の時期とすると、6世紀代の古墳であろう。



第247図 稲荷台7号墳



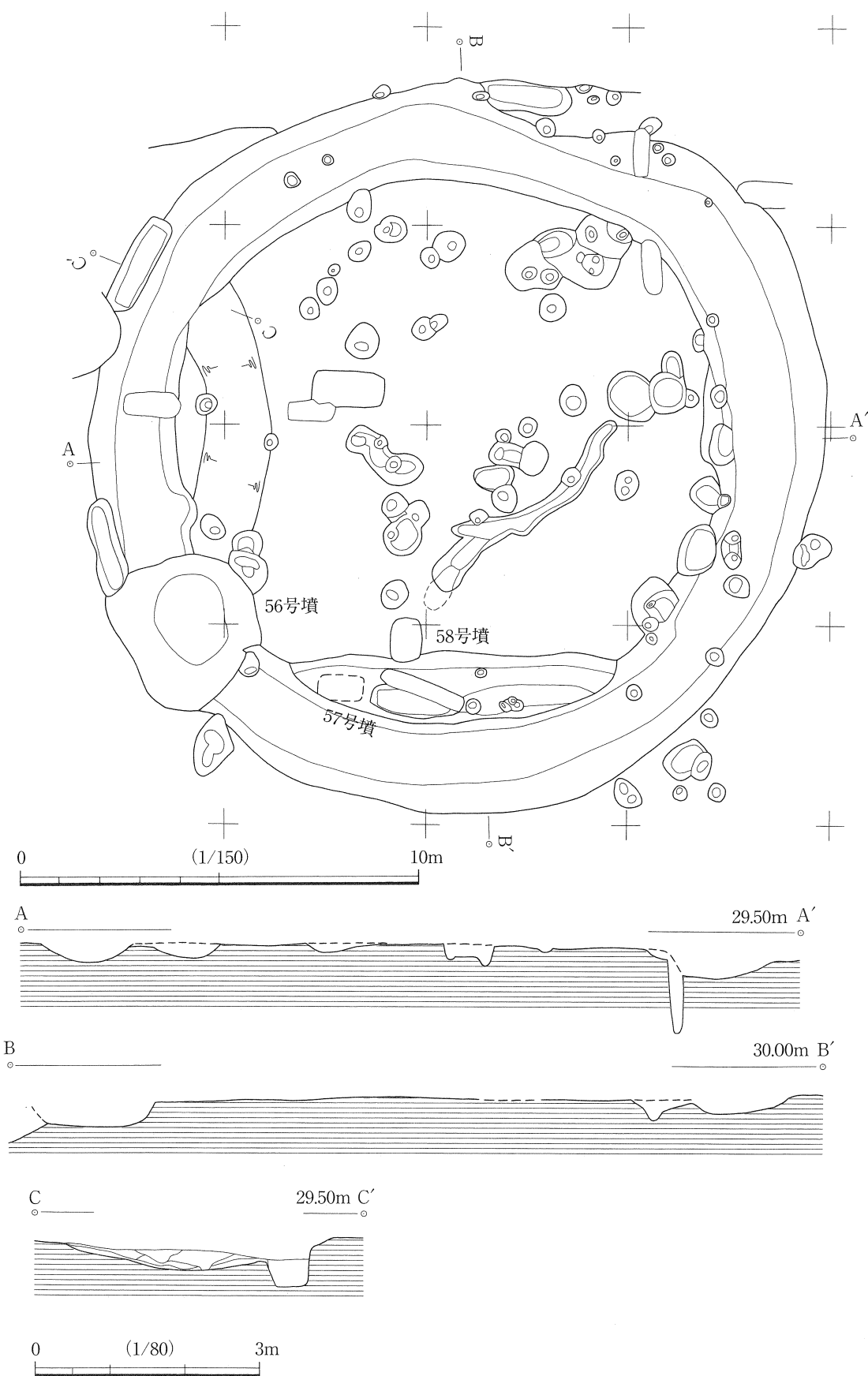
第248図 稻荷台 8号墳



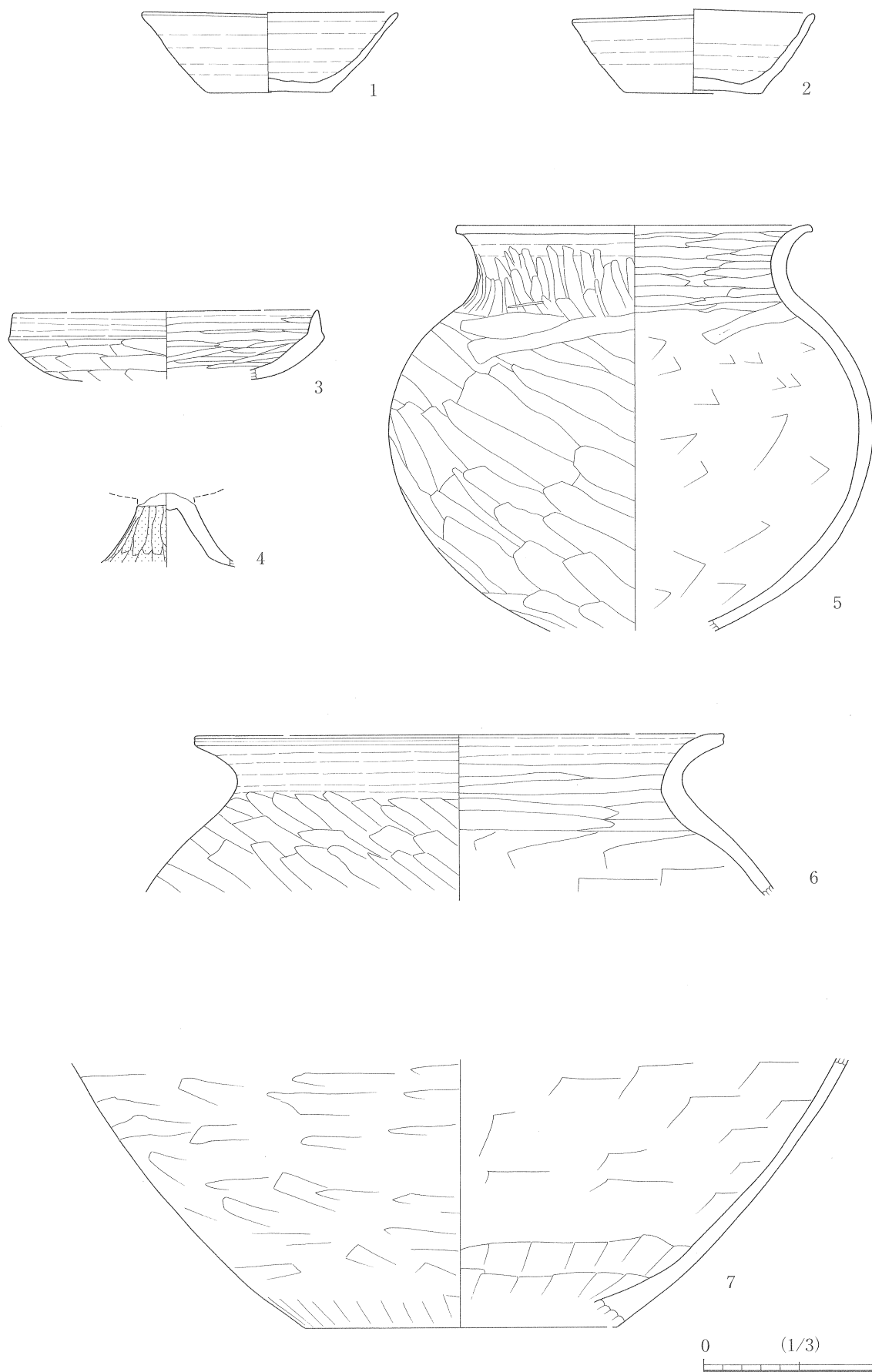
第249図 稲荷台 9号墳

第4表 古墳計測表

古墳番号	墳形	規模		周溝 (m)	備考
		南北外径長・南北外径下底間長 南北内径長・南内外径下底間長	東西外径長・東西外径下底間長 東西内径長・東西内径下底間長	幅 深さ	
7号墳	円墳	14.75m ・ 13.60m 10.90m ・ 11.90m	(14.35m) ・ 12.65m 11.00m ・ 11.65m	1.5~2.15 0.5前後	
8号墳	円墳	12.40m ・ 11.20m 9.55m ・ 10.05m	12.15m ・ 11.35m 9.75m ・ 10.35m	0.8~1.65 0.25~0.4	周溝南東に木棺痕跡有り
9号墳	円墳	(20.8m) ・ (17.5m)	21.20m ・ 20.05m 18.00m ・ 18.50m	1.2~1.5 0.3~0.55	
10号墳	円墳	18.50m ・ 17.0m 13.50m ・ 14.2m	18.90m ・ 17.00m 13.20m ・ 14.20m	2.1~2.8 0.3~0.5	出土遺物有り



第250図 稲荷台10号墳



第251図 稲荷台10号墳出土遺物

第6節 土坑と出土遺物

1号土坑（第252・253・254図）

F区調査区に西端のN13-W20から検出する。長径0.84m・短径0.53mの楕円形のプランを呈し、深さは0.15mと浅いが遺物が表土層中にも検出され0.25mを計測する。中央に楕円形の磨り石状の川原石を置き周辺に鉢片を並べている炉跡状の遺構である。

出土遺物には、1～11の縄文土器があり、中央の石は所在不明となってしまった。縄文土器1・2・5・9は、口縁部文様帯に隆帯あるいは沈線による渦巻文・楕円区画文が巡り、胴部に磨消懸垂帯が垂下する深鉢である。3・4は、口縁部に沈線による渦巻文と楕円区画文が交互に巡り、頸部無文帯が残る深鉢で、胴部には沈線による多段の窓枠状区画文が見える。同一個体と思われる。6～8・10・11は、櫛歯状工具による条線を地文に持つものである。6～8は無文の口縁部下に巡らせた凹線以下に縦位の条線を施したもので、同一個体である。10は整形痕の残る器面に斜位の条線を施した胴部片である。11は縦位の条線に加えて棒状工具による縦位の沈線が施されている。ほとんどの破片が2次焼成により被熱しており、器面の劣化が著しい。出土状況とあわせ、土器片囲炉として利用されていたものと判断できる。すべて中期・加曽利EⅡ式である。

2～7号土坑は、陥し穴やそれと同じ形状を示すものである。2・3・5・7号土坑はF地区、4号はB地区・6号はE地区からそれぞれ検出する。2～4号土坑は縦長で床面幅が非常に狭く、断面が鋭角なV字状を呈するものである。出土遺物は検出されないが縄文早期から前期の所産であろう。5～7号土坑は長楕円形で床面と開口部が同形を呈し平坦な床面と床から掘られたピットを有するものである。5号土坑は床面に2穴、7は3穴を有する。6号土坑は床面に浅い1穴を有する。出土遺物は検出されないが縄文時代前期から中期の所産であろうか。

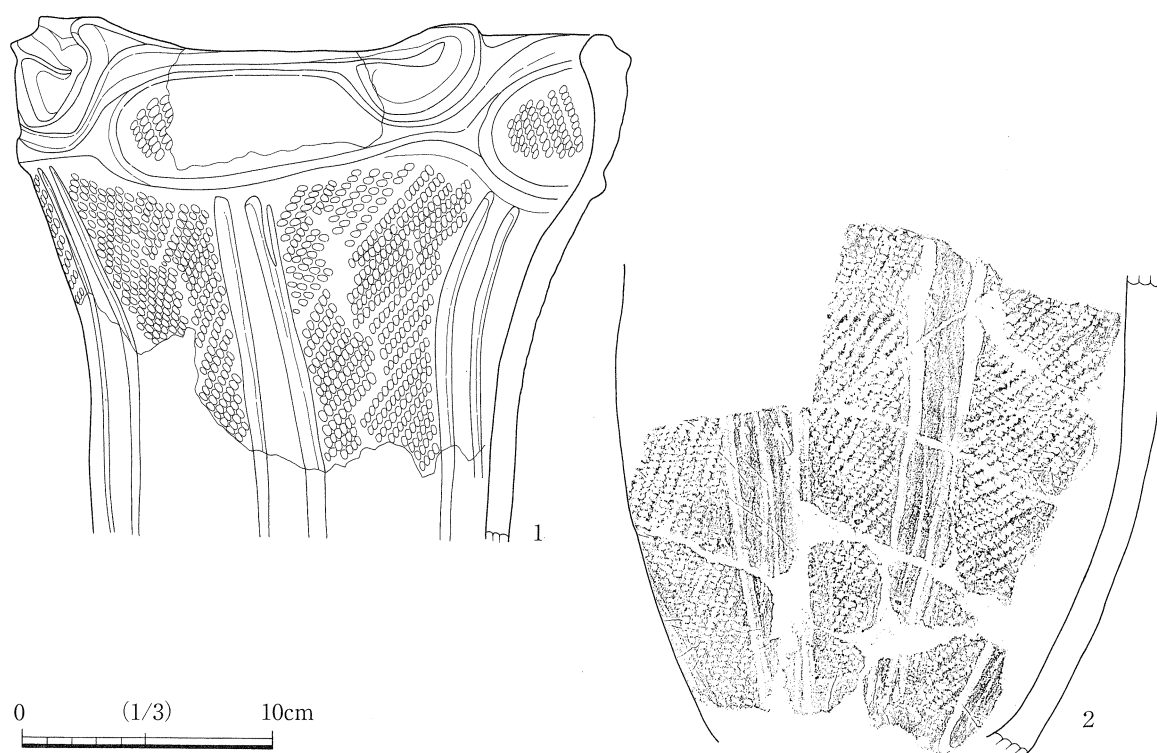
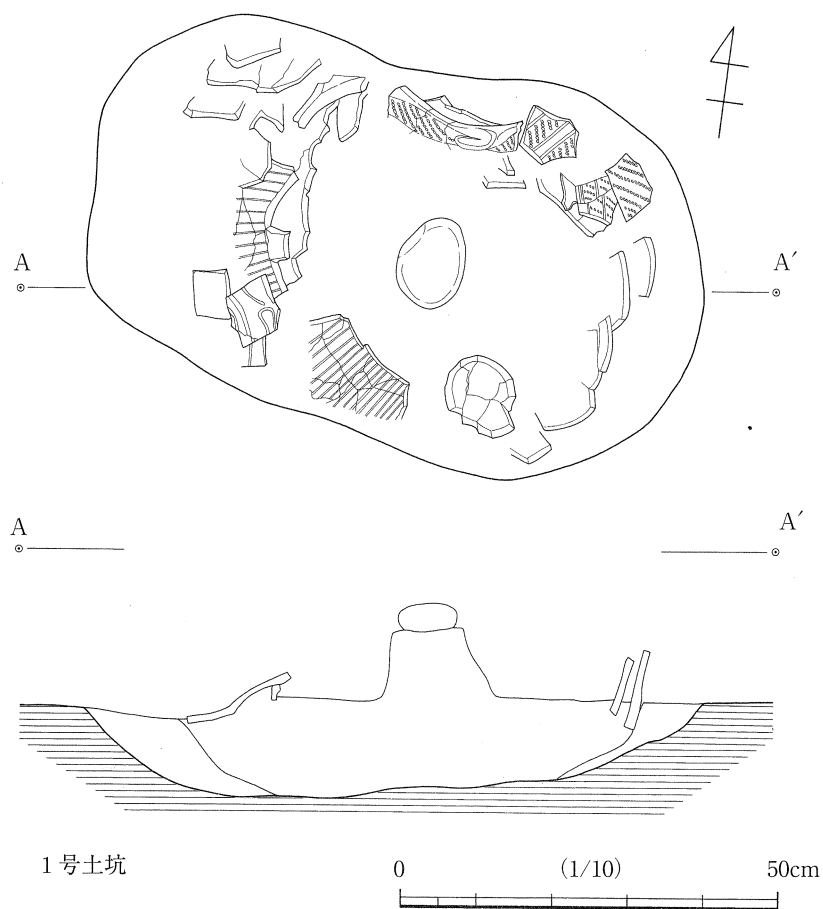
8～20号土坑は所謂有天井土坑である。8・9・10・11号土坑はA地区、12・16・18号土坑はF地区、13・14・17・19・20号土坑はB地区、15号はD地区からそれぞれ検出する。8・9・10・11・13・14・17号土坑は床面が竪穴部から漸次深さを増し緩やかに床面側に傾斜する。15・18・19・20号土坑は床面に明瞭な段を有して、玄室部が一段低くなる。16号土坑は竪穴と玄室の間に仕切り溝を有し、仕切り板の存在を思わせるものである。

21～24号土坑は、木棺墓痕跡を有する土坑である。21号土坑はF区に検出され、短軸方向の土層断面にはU字型の木棺痕跡を確認する。22号土坑はD区に検出される。短・長軸それぞれに木棺痕跡が観察され、両側は板状を呈するが木口側は不明瞭である。23号土坑には底面からやや浮いた土層に硬化面があり壁際が軟弱な土で、掘方の壁に側板を据付け床面を突き固めた状況を示すものである。24号土坑はF区に検出される。短軸側だけの観察であるが床面に硬化面とU字型の土層堆積を示し、割り竹型の木棺痕跡を思わせるものである。

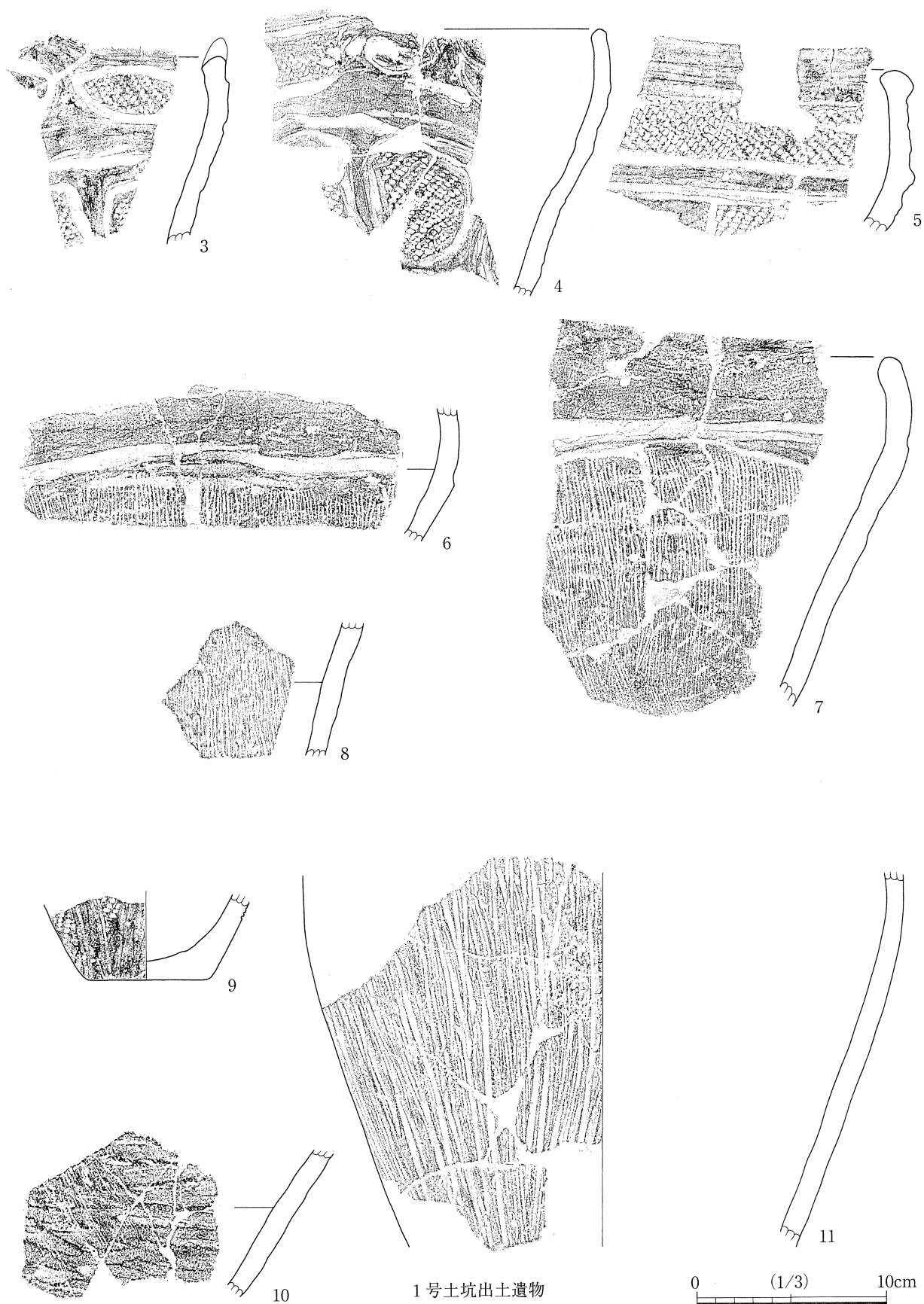
25～27号土坑は土坑墓と思われるもので、いずれもB地区からで3基並んで検出される。25号土坑は63号住居跡床面下に検出され、西側が調査対象外にあるため西壁が確認できない。東壁がやや袋状になることや床面が西から東に漸次深さを僅かに増していることから有天井土坑の可能性もある。26号土坑は、25号土坑の東1.1mの至近距離にあり、東側壁面を1号溝に大きく掘り込まれて遺存する。東壁中央に壁面から突き出た掘り残したような壁や床面が東から西に緩やかに漸次傾斜することから25号土坑同様な有天井土坑の可能性もある。27号土坑は、26号土坑の東1.7mに1号溝を挟んで

第5表 土抗一覧表

番号	位 置	性 格	平 面 形	主軸方向 (長軸方向)	規模 (m) 主軸長×副軸長×深さ (長軸)×(短軸)×深さ	備 考	時 期	旧 住居番号
1	F区 N13-W20	炉跡遺構	楕円形	(N -82°-W)	0.84×0.53×0.25		縄文中期	
2	F区 N12-W15	陥し穴	長楕円形	(N -47°-W)	3.18×0.65×1.29		縄文	F区12号
3	F区 N11-W15	陥し穴	長楕円形	(N -21°-W)	2.60×0.78×1.15		縄文	F区11号
4	B区 N13-W4	陥し穴	長楕円形	(N -70°-W)	1.50×0.50×0.9		縄文	B区49号
5	F区 N12-W19	陥し穴	長楕円形	(N -73°-E)	1.47×0.70×0.55	底面に2個ビットを有す	縄文	F区27号
6	E区 N24-E10	陥し穴	長楕円形	(N -32°-E)	2.46×1.0×0.98	底面に1個ビットを有す	縄文	
7	F区 N15-W18	陥し穴	長方形	(N -33°-E)	2.62×0.92×0.9	底面に3個ビットを有す ビット深さ0.46~0.52m	縄文	F区36号
8	A区 BL-E8	有天井土壇	長楕円形	N -33°-W	2.30×0.91×0.6	天井部僅かに残る 入口南東→	古墳	A区7号
9	A区 N2-E4	有天井土壇	長楕円形	N -57°-E	2.10×0.94×0.72	天井部残存・入口西→	古墳	A区4号
10	A区 N4-E4	有天井土壇	楕円形	N -53°-E	2.27×1.71×0.55	天井部陥没・入口西→	古墳	A区8号
11	A区 N5-E4	有天井土壇	長楕円形	N -18°-E	2.15×0.83×0.71	天井部陥没・入口南→ 床に明瞭な段をゆうする	古墳	A区31号
12	F区 N11-W20	有天井土壇	長楕円形	N -3°-E	2.47×1.51×0.64	天井部陥没・入口南→	古墳	F区24号
13	B区 N3-W2	有天井土壇	長楕円形	N -84°-E	2.57×1.57×0.93	天井部陥没・入口西→	古墳	B区4号
14	B区 S1-W1	有天井土壇	長楕円形	N -94°-E	2.03×1.15×0.52	天井部陥没・入口西→	古墳	B区11号
15	D区 S8-E1	有天井土壇	長方形	N -27°-E	2.39×1.19×0.56	天井部残存・入口南→ 床に明瞭な段をゆうする	古墳	D区20号
16	F区 N11-W14	有天井土壇	楕円形	N -10°-E	2.98×1.45×0.82	天井部残存・入口南→ 床面に仕切り溝を有する 覆土上層に貝を含む	古墳	F区10号
17	B区 N6-W1	有天井土壇	楕円形	N -64°-W	1.14×1.08×0.55	天井部残存・入口東→	古墳	B区19号
18	F区 N11-W14	有天井土壇	楕円形	N -121°-E	1.68×1.30×0.83	天井部陥没・入口西→ 床に明瞭な段をゆうする	古墳	F区8号
19	B区 N13-W4	有天井土壇	楕円形	N -50°-E	1.33×0.89×0.62	天井部残存・入口西→ 床に明瞭な段をゆうする	古墳	B区48号
20	B区 S1-W2	有天井土壇	楕円形	N -32°-E	1.14×0.96×0.67	天井部残存・入口南→ 床に明瞭な段をゆうする	古墳	B区10号
21	F区 N13-W20	木棺墓	楕円形	(N -16°-W)	2.15×1.65×0.55 内寸00×0.7	木棺痕跡明瞭		F区25号
22	D区 S9-E2	木棺墓	長楕円形	(N -88°-E)	2.62×1.23×0.29 内寸1.65×0.65	木棺痕跡明瞭		D区1号
23	A区 N9-E7	木棺墓	長楕円形	(N -61°-E)	2.64×1.23×0.48 内寸00×0.75	木棺痕跡不明瞭		A区21号
24	F区 N11-W20	木棺墓	長楕円形	(N -48°-W)	2.65×0.74×0.48 内寸00×0.4	木棺痕跡不明瞭		F区23号
25	B区 N2-W2	土壇墓	長楕円形	(N -7°-W)	2.38×00×0.82			B区3号
26	B区 N2-W2	土壇墓	長楕円形	(N -8°-E)	2.55×1.03×0.32			B区2号
27	B区 N2-W1	土壇墓	長楕円形	(N -1°-E)	2.32×1.15×0.41			B区1号
28	B区 N9-W6	地下式改葬墓		N -13°-E	縦坑2.45×2.32×1.3 玄室0.93×1.12×1.3	玄室にコ字状の段を有り 覆土上層に純貝層有り	奈良時代	B区52号
29	F区 N10-W20	地下式土壇		N -2°-W	縦坑2.3×2.4×2.43 玄室2.3×2.3×2.4	玄室にコ字状の段を有り	平安時代 10世紀代	
30	F区 N10-W17	地下式土壇		N-48°-E	縦坑2.2×1.97×1.6 玄室0.8×1.64×1.3	玄室形態不明瞭	平安時代?	
31	A区 N7-E1	土坑	円形	(N -83°-W)	0.96×0.85×0.18	ロクロ甕出土	平安時代	A区17号
32	A区 N5-E5	土坑	隅丸方形	(N -51°-E)	1.47×1.12×0.43	ロクロ土師器出土	平安時代	A区12号
33	A区 N5-E5	土坑	楕円形	(N -34°-E)	1.37×0.98×0.55	ロクロ土師器・灰釉坏出 土	平安時代	A区13号
34	B区 N5-W1	土坑	円形	(N -89°-W)	1.2×1.07×0.47	底面平坦		B区17号
35	F区 N9-W13	土坑	楕円形	(N -36°-W)	1.34×1.1×0.42	底面平坦		F区3号
36	F区 N10-W14	土坑	楕円形	(N -42°-E)	1.23×0.8×0.55	底面平坦		F区7号
37	F区 N13-W18	土坑	隅丸長方形	(N -2°-W)	2.06×1.88×0.68			F区28号
38	F区 N11-W14	土坑	楕円形	(N -57°-E)	1.68×0.98×0.32			F区9号
39	F区 N10-W14	土坑	不整楕円形	(N -12°-W)	2.14×1.8×0.47			F区6号
40	F区 N12-W15	土坑	楕円形	(N -9°-E)	1.94×1.58×0.45			F区15号
41	F区 N15-W16	土坑	楕円形	(N -57°-E)	1.08×0.64×0.52			F区39号
42	D区 S10-E1	土坑	楕円形	(N -24°-E)	1.28×1.07×0.93			D区24号
43	C区 S22-E11	土坑	隅丸長方形	(N -7°-W)	1.9×1.44×0.72			C区16号
44	C区 S21-E12	土坑	不整楕円形	(N -4°-E)	2.18×1.92×0.65			C区20号
45	C区 S22-E10	土坑	隅丸長方形	(N -83°-E)	1.79×1.2×0.84			C区15号
46	A区 N9-E6	土坑	不整形	(N -83°-W)	1.6×1.38×0.59	底面ビット有り		A区20号
47	A区 N8-E6	土坑	不整形	(N -36°-E)	1.82×1.12×0.33	底面多数のビット有り		A区22号
48	A区 N3-E3	土坑	不整楕円形	(N -52°-W)	1.5×1.28×0.62	底面ビット有り		A区32号
49	B区 N11-W5	土坑	不整楕円形		2.23×1.97×0.78	底面に2個ビット有り		B区45号
50	D区 S11-E1	土坑	不整形		1.68×1.1×0.58 1.35×1.2×0.92	2土坑の複合		D区2号
51	A区 N3-E3	落ち込み	不整形		3.9×1.9×0.37~0.57	底面凹凸		A区3号
52	A区 N2-E3	落ち込み	不整形		3.6×1.5×0.3~0.62	底面凹凸		A区2号
53	A区 N8-E2	落ち込み	不整形		3.18×1.88×0.39	底面多数のビット有り		
54	B区 N11-W5	落ち込み	不整形		3.6×1.7×1.2	底面凹凸でビット有り		B区43・44号
55	A区 N2-E5	落ち込み	不整形	(N -11°-W)	3. 36×2. 9×0. 15	底面平坦でビット有り		A区5号
56	A区 N2-E6	落ち込み	不整形	(N -82°-E)	4. 6×1. 66×0. 25			A区6号
57	C区 S21-E13	土壇	楕円形?	N -19°-W	1. 16×0. 72×0. 2	人骨1体	中世	C区1号人骨
58	C区 S21-E14	土壇	楕円形?	N -96°-W	0. 94×0. 5×0. 2	人骨1体	中世	C区2号人骨
59	C区 S21-E14	土壇	隅丸方形	N -6°-E	1. 02×0. 7×0. 26	人骨2体?	中世	C区3号人骨

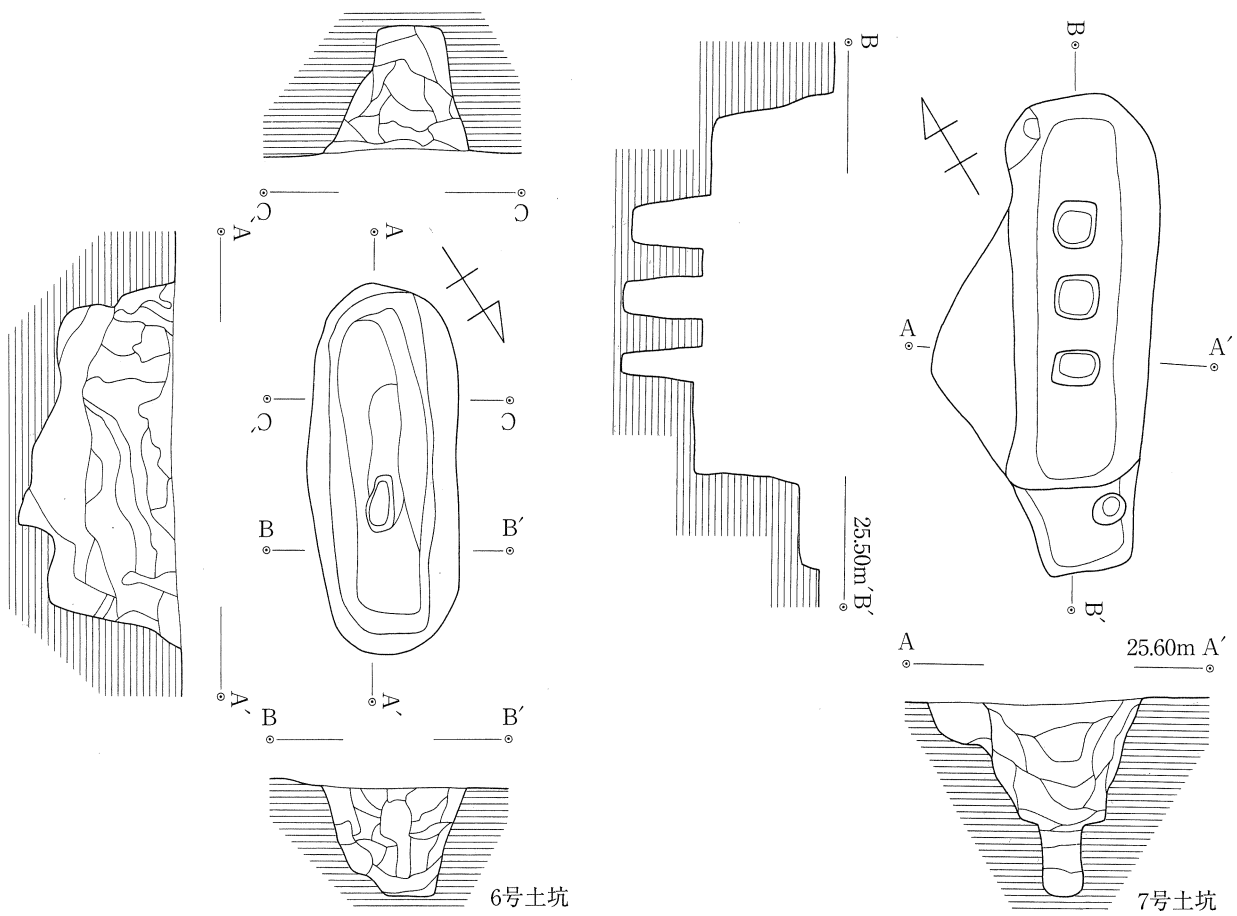
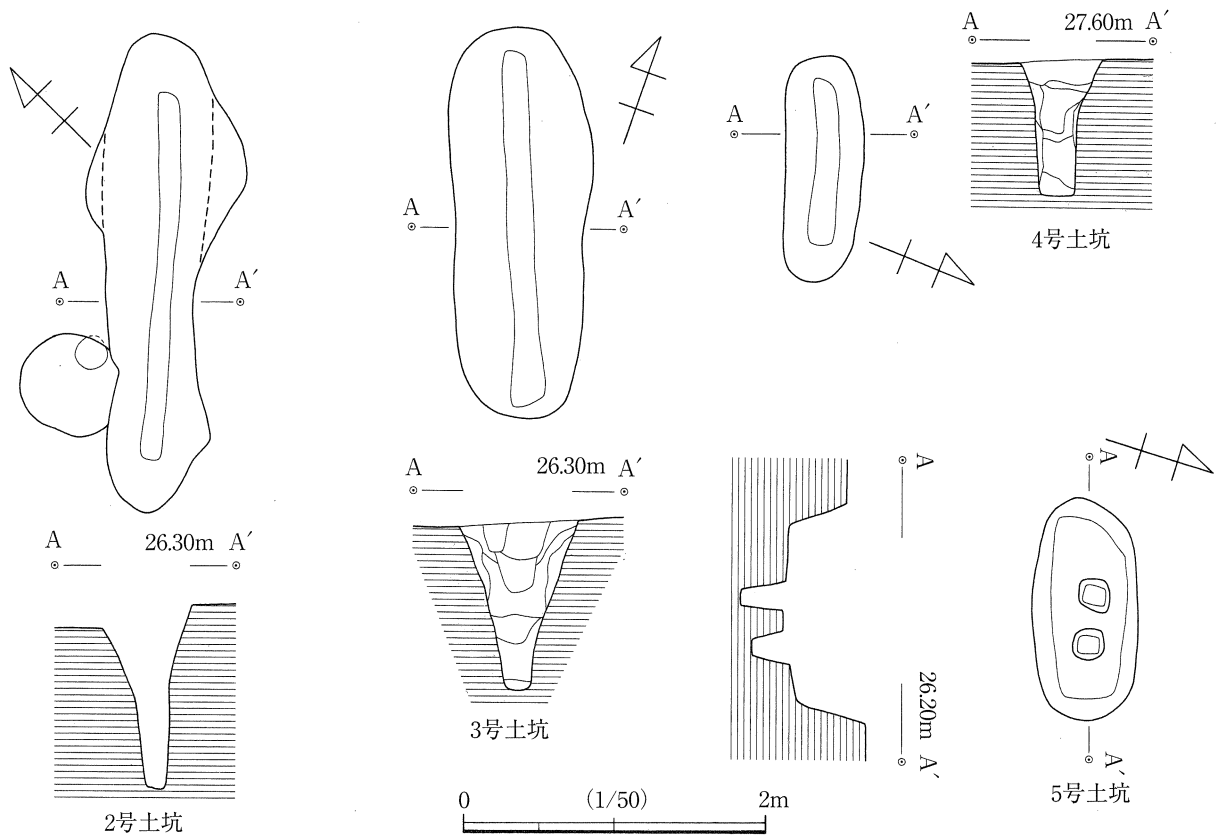


第252图 土坑(1)

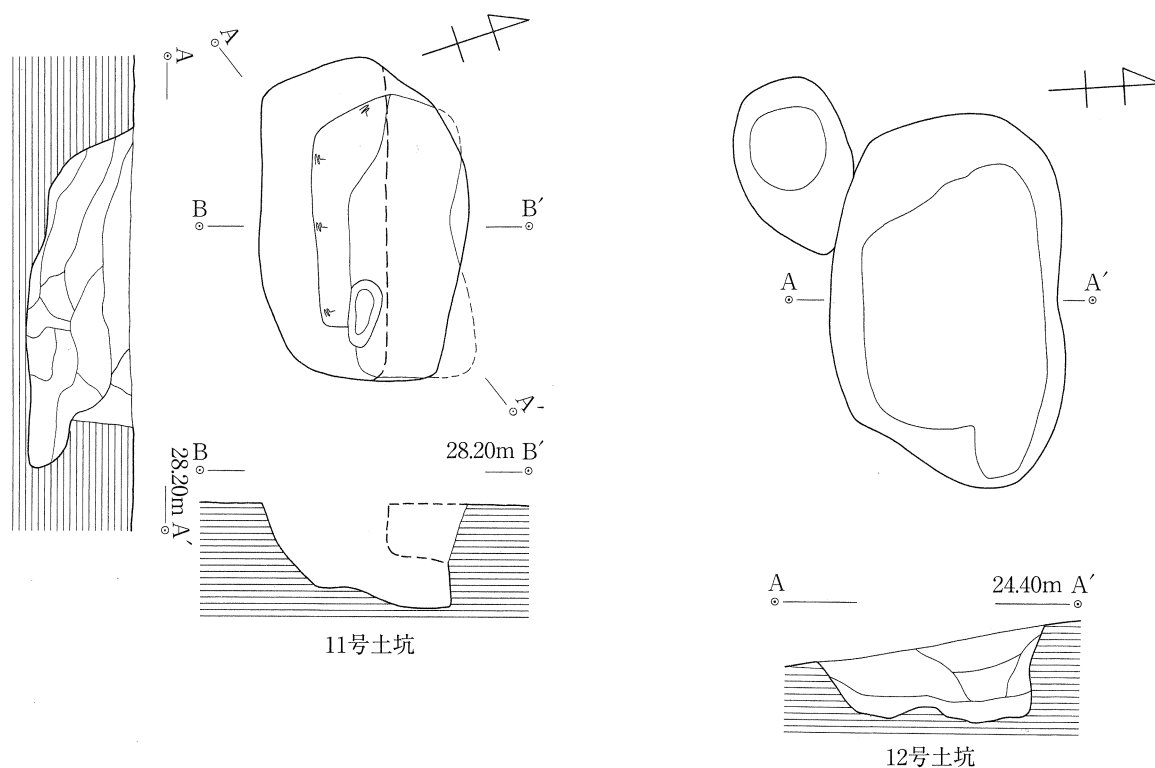
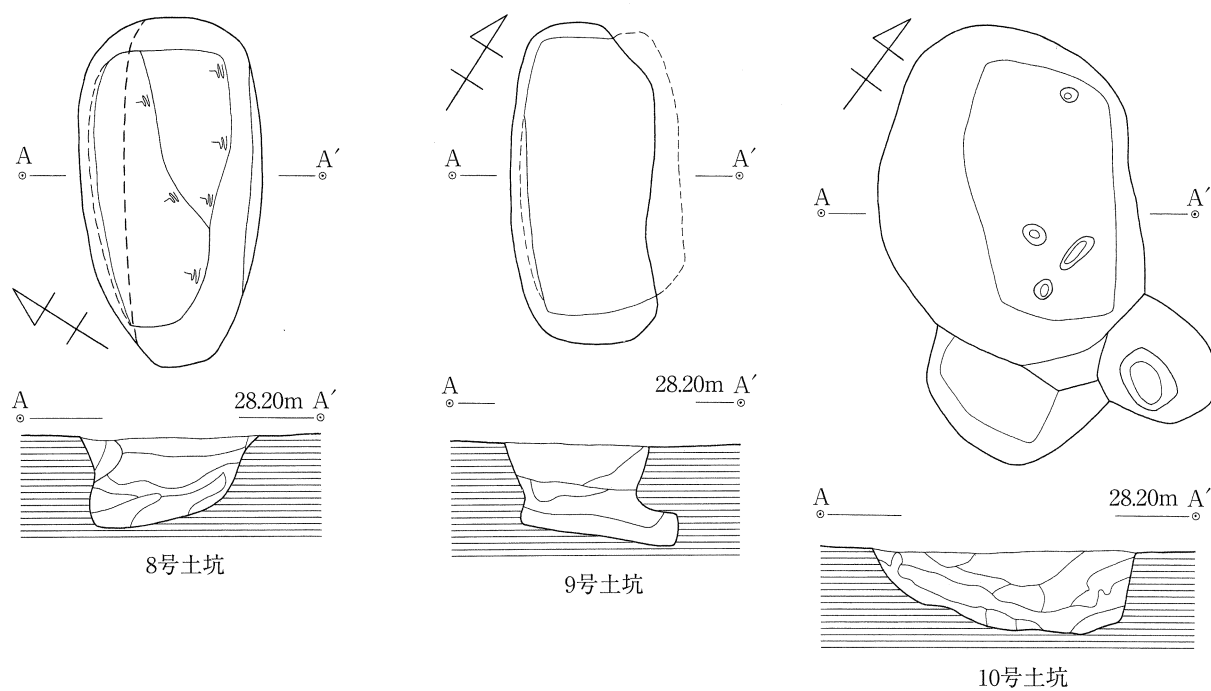


1号土坑出土遺物

第253図 土坑(2)



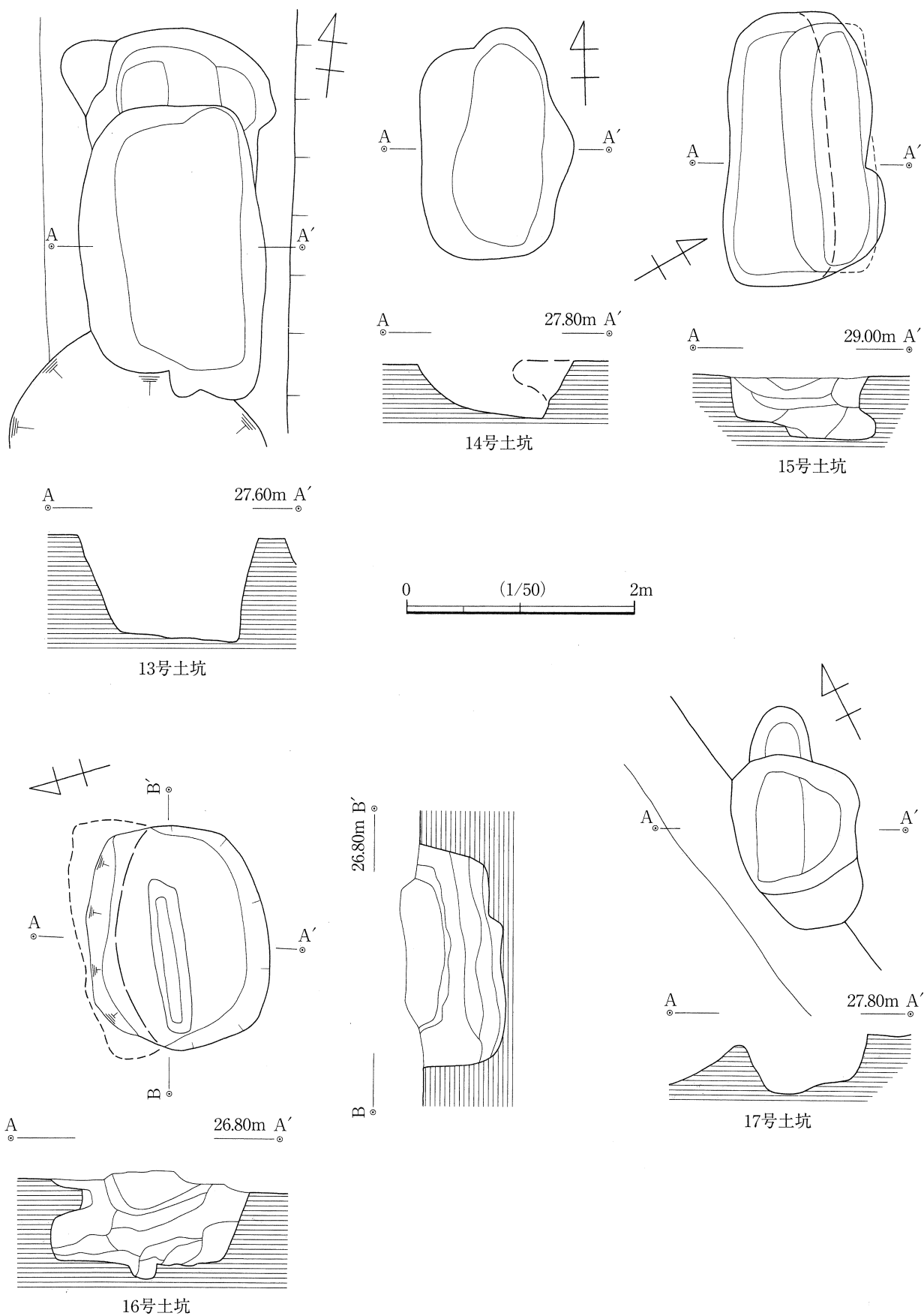
第254图 土坑(3)



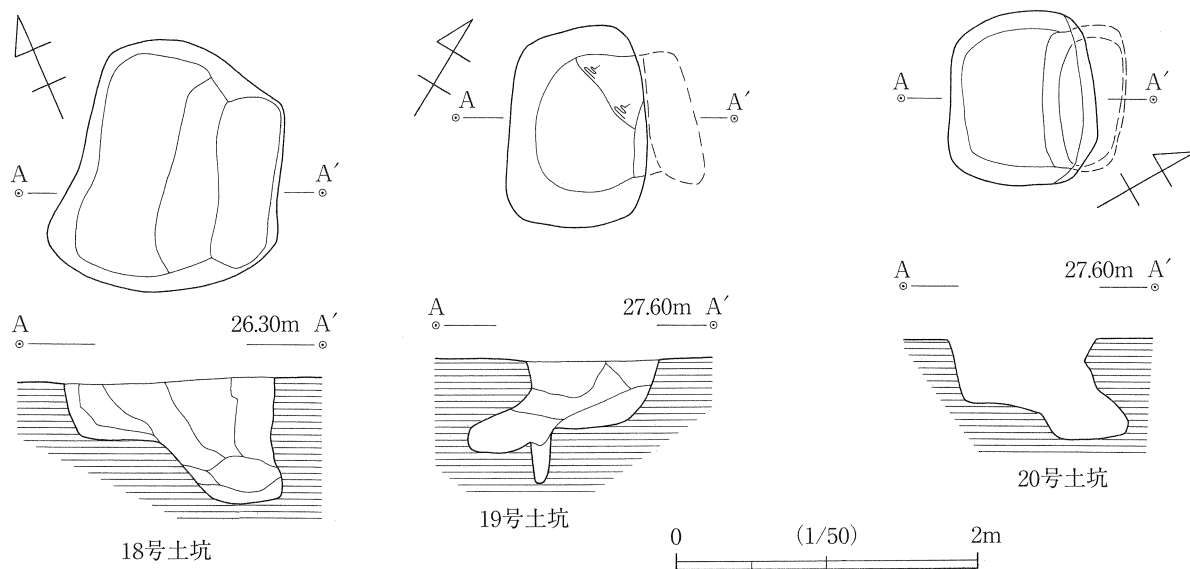
第255図 土坑(4)

検出される。壁面が緩やかで床面は平坦で硬化している。堀方が2重である。土坑内からの出土遺物は無いが、南側のピット群から内外面にタール状の煤を付着したロクロ土師器坏を出土している。

28号土坑は、B地区北側で検出した地下式改葬墓である。入口部の縦坑は確認面2.5m×2.3mで、中段に段を有し2.45m×1.8m程で横長の長方形を呈するものである。深さは確認面から最深部で1.0m、覆土貝層上面からは1.15mをそれぞれ計測する。玄室は縦坑の北壁から穿たれ、入口の高さ



第256图 土坑 (5)

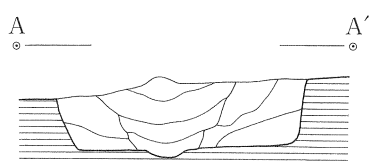
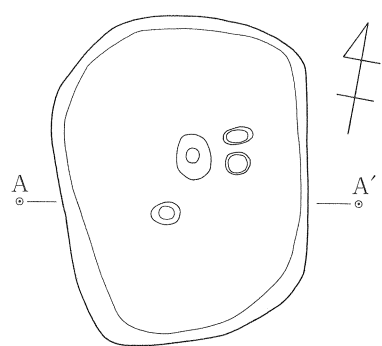


第257図 土坑 (6)

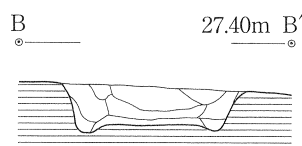
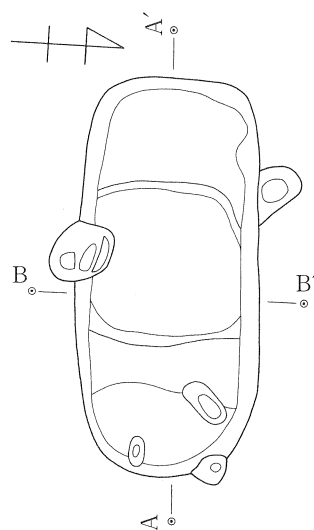
0.45m・幅0.58m、玄室長0.95m・幅1.1m・天井高0.35mを計測する。縦坑から玄室までの長さは0.45mで入口から玄室奥壁までは1.4mを計測する。玄室の床には奥と左右の壁にコの字状に10cm程の段を有する。天井の崩落は無く良好で、入口から各壁にアーチ状の弧を呈する。玄室からの出土遺物は無い。縦坑覆土上層に純貝層が観察され、貝層中から須恵器甕が出土している。この甕から本遺構の所属時期は8世紀の後半代の所産であろう。

29・30号土坑は地下式土塋でF地区に検出する。29号土坑は台地南側縁辺部から入口である縦坑が掘り込まれている。縦坑の南端が一部未調査であるが、長さ2.2m、幅2.6m程を計測し、南から玄室の入口に向かい漸次深さを増し、最深部で2.4mを計測する。玄室は天井部がほとんど崩落し、奥壁に僅かに一部を留めている。玄室は長さ2.3m・幅2.3mの正方形を呈し、奥と左右の壁にコの字状に20cm程の段を有する。玄室床面の奥壁には天井部を支え補強を目的としたと看取される柱を据えたピットが規則的に検出される。天井部は崩落が激しいがアーチ型を呈するものと看取される。出土遺物は、縦坑最深部の玄室入口から出土したと思われるロクロ土師器坏6点がある。これらのロクロ土師器坏は口径の縮小化や器高の減少が進んでいることから10世紀代でも後半の所産と看取される。30号土坑は29号土坑の東側14mにF地区南斜面の人工的な台地整形された地域に検出する。崩落と獣穴（ムジナの巣穴？）等の攪乱が激しくプランは不明確である。縦坑は径2m程の不整円形を呈する。玄室は特に獣穴の攪乱が激しく幅1.7m・奥行き0.8m程で形状は不明である。遺物は無いものの29号土坑と同時期の所産であろう。

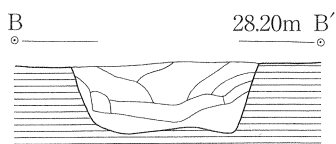
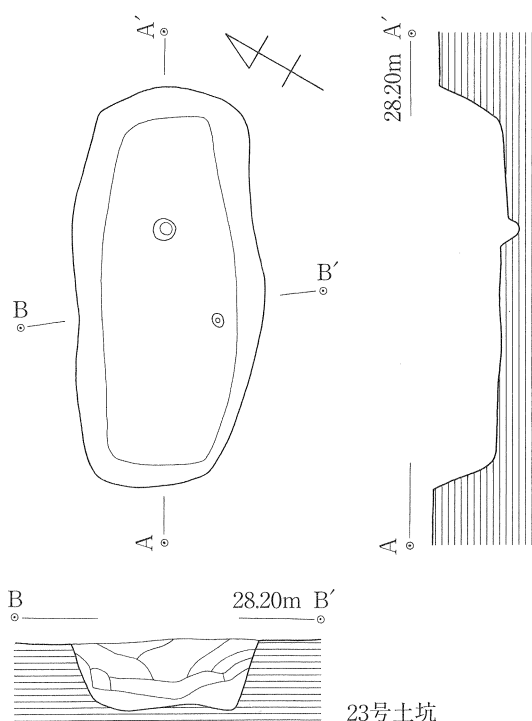
31～45号土坑は平面形、円形・楕円形・隅丸方形を基調とする。31号土坑はA区の北西から検出する。径0.9m程の浅い円形の土坑である。土坑内からロクロ土師器甕の底部破片が出土している。32号土坑は、A地区から検出する。覆土上層に粘土や焼土の堆積が確認された。出土には口径と器高の減少した回転糸切り無調整のロクロ土師器坏が出土している。この遺物から10世紀中葉に看取される。33号土坑はA地区中央の東側から検出される。西側1.5mに32号土坑が、東2mには稲荷台1号墳の周溝が近接している。1.4m×1.0m程の不整な楕円形を呈する土坑内から、1～4の無調整ロクロ土師器坏、5の回転篋削り調整のロクロ土師器碗形坏、6の内黒土師器高台付碗、7の灰釉陶器碗



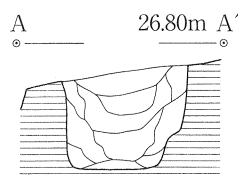
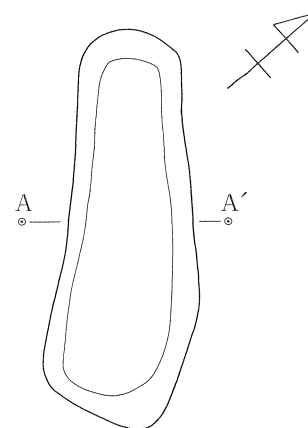
21号土坑



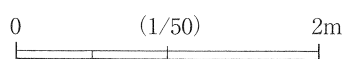
22号土坑



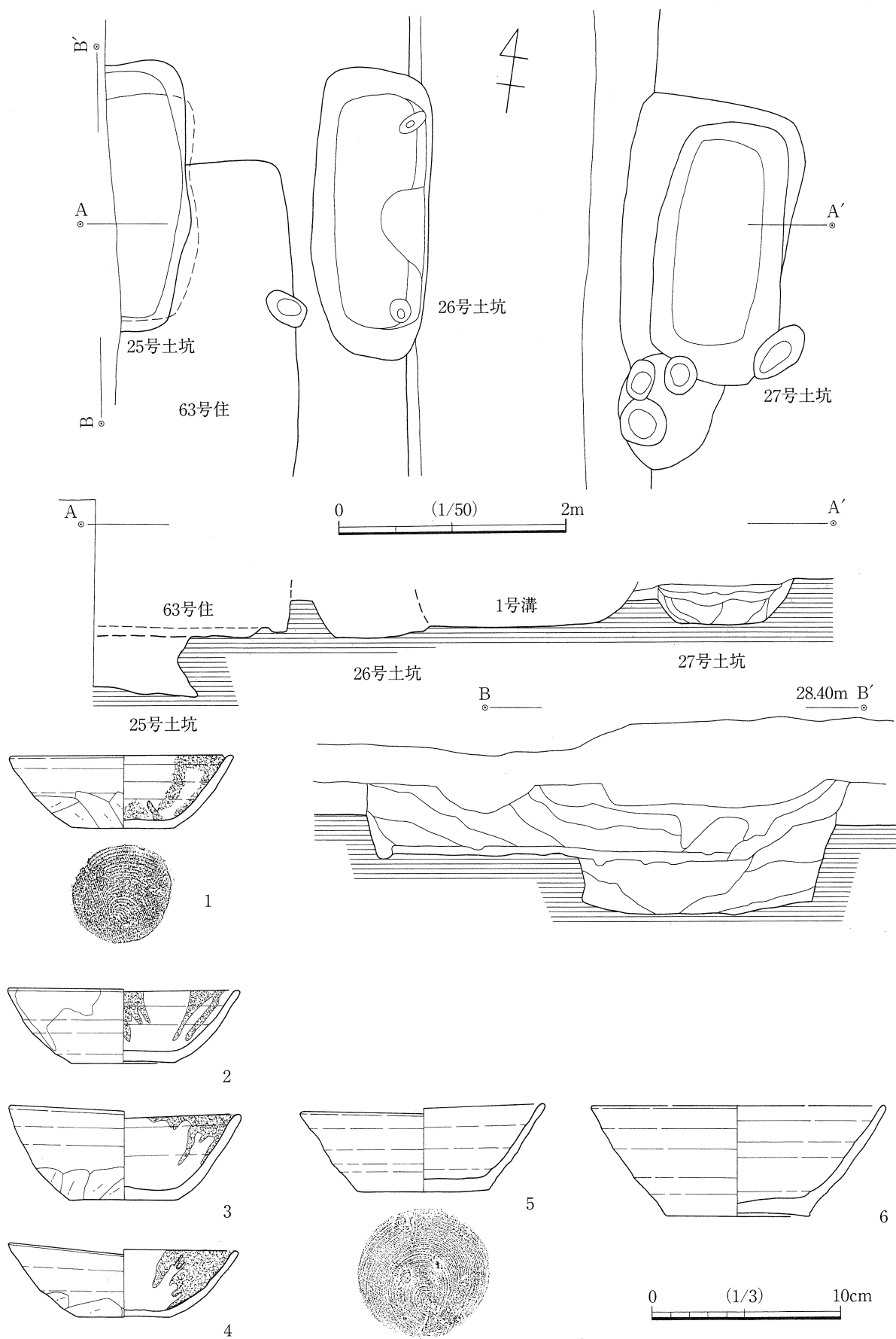
23号土坑



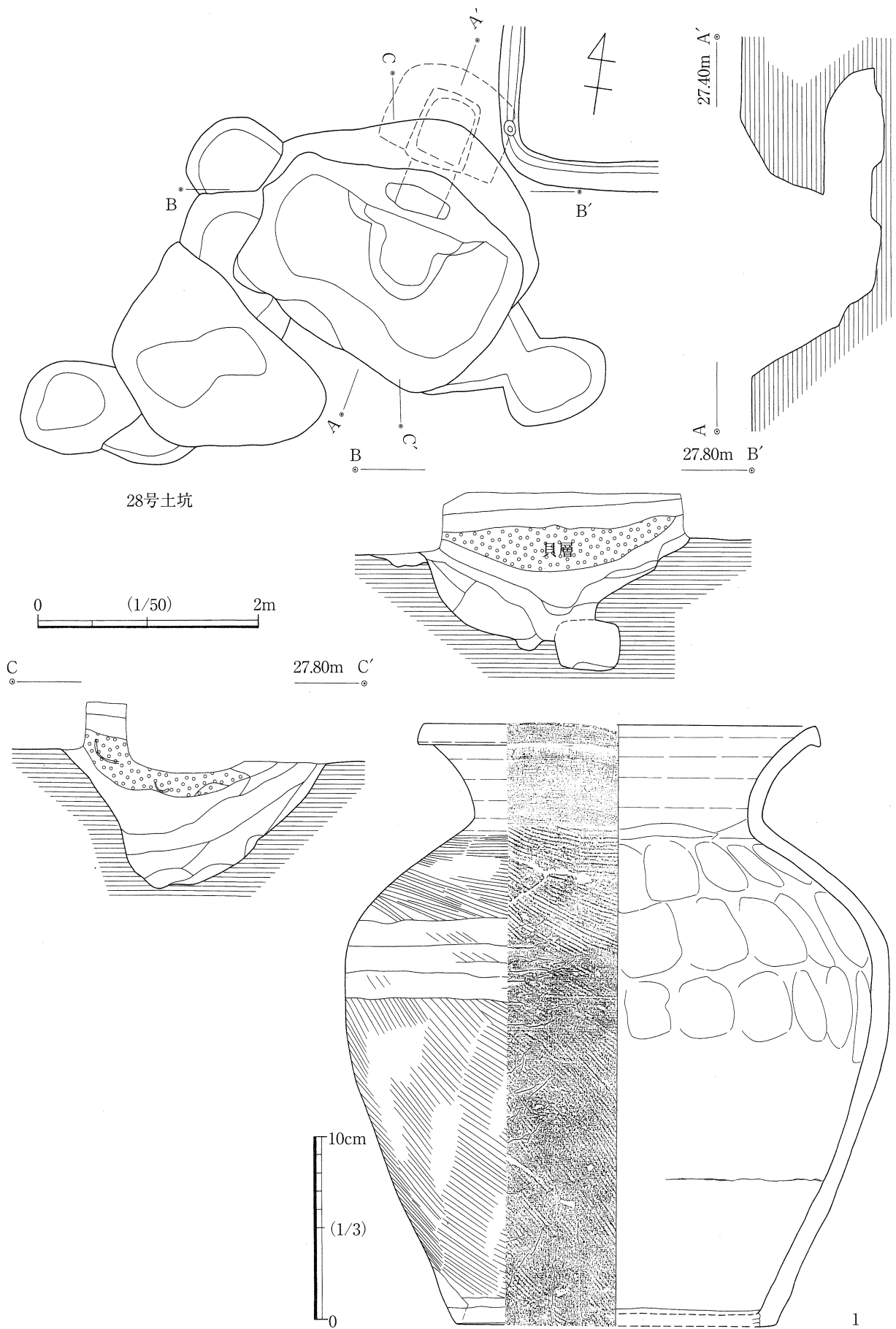
24号土坑



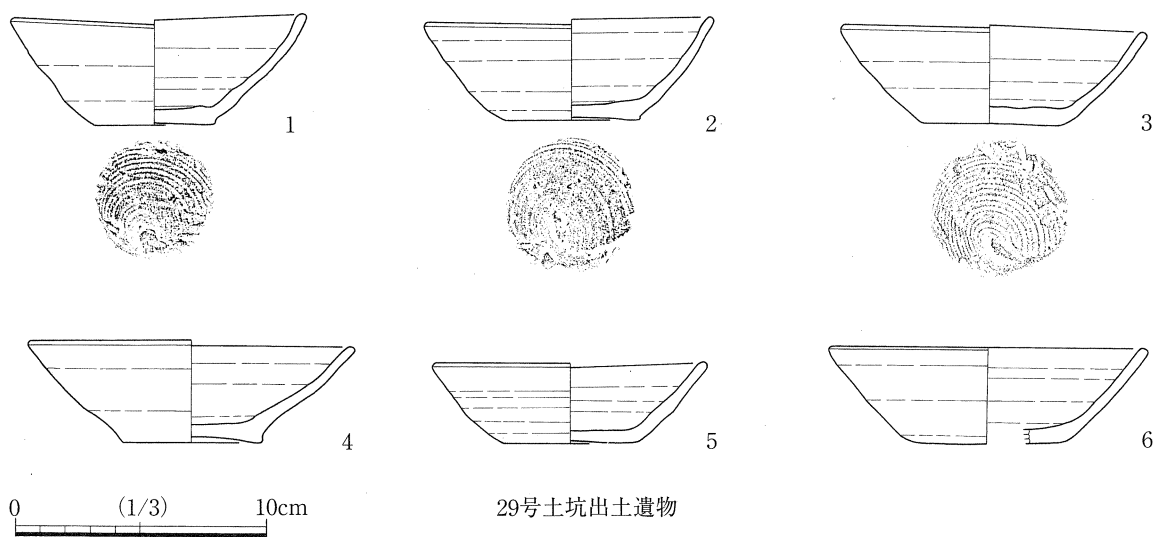
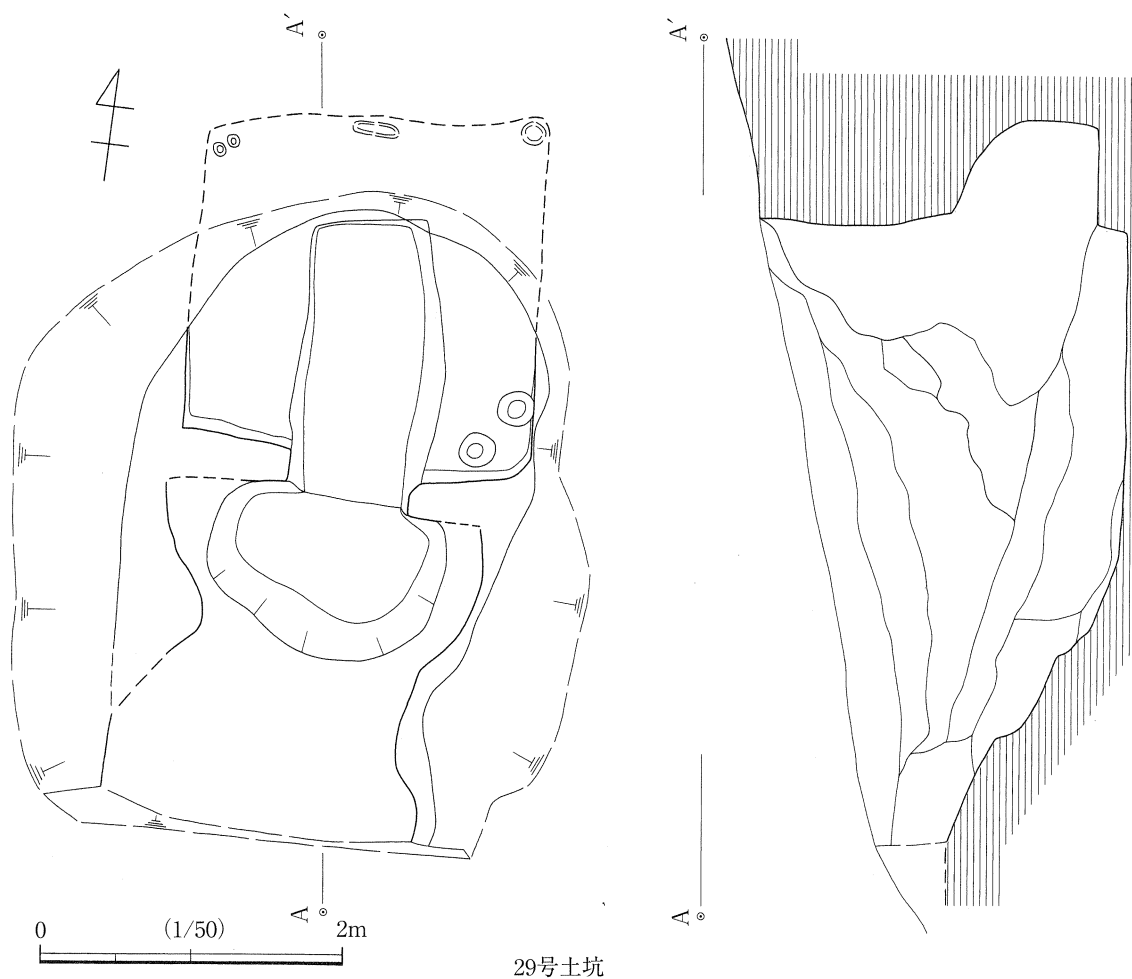
第258图 土坑 (7)



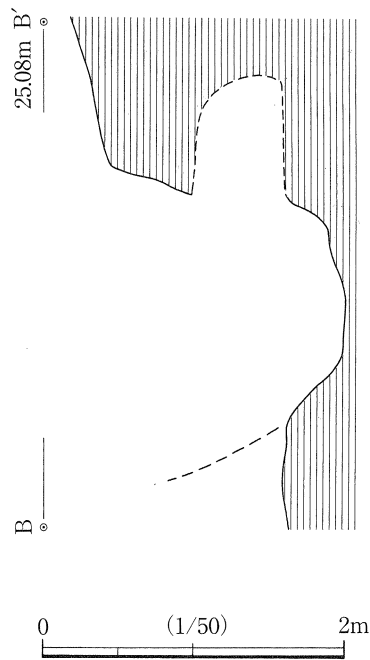
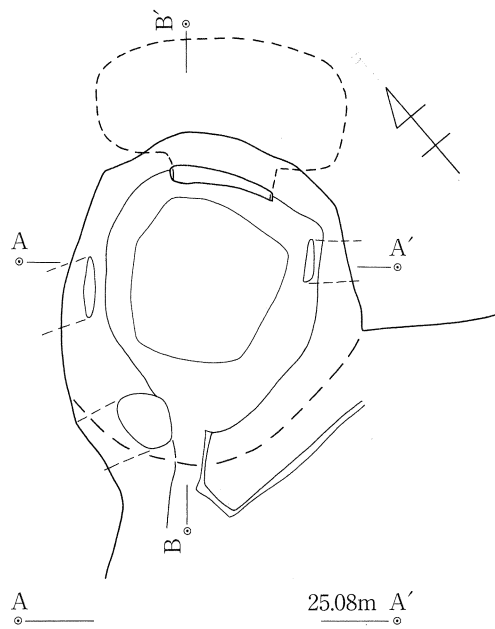
第259图 土坑 (8)



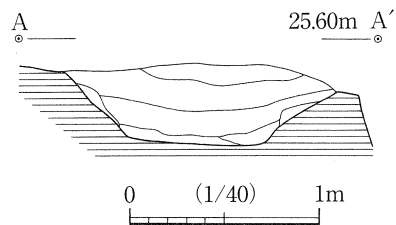
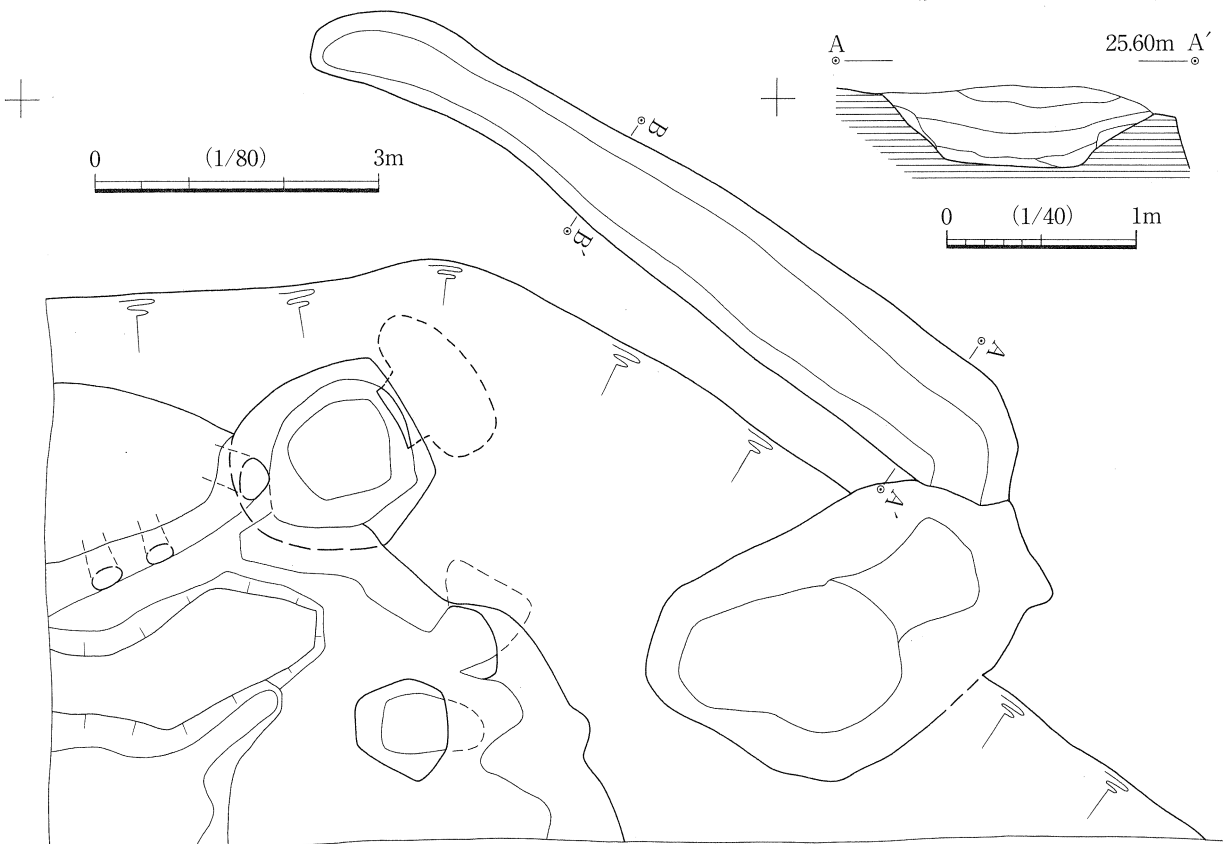
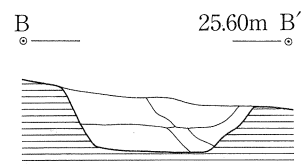
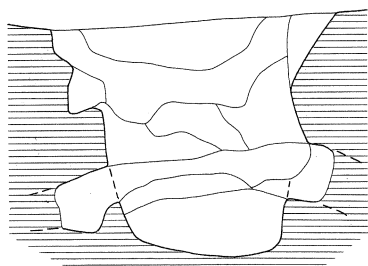
第260图 土坑(9)



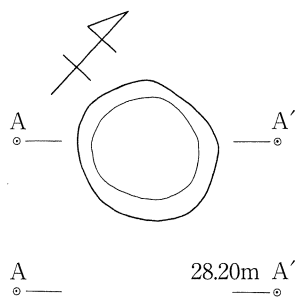
第261图 土坑 (10)



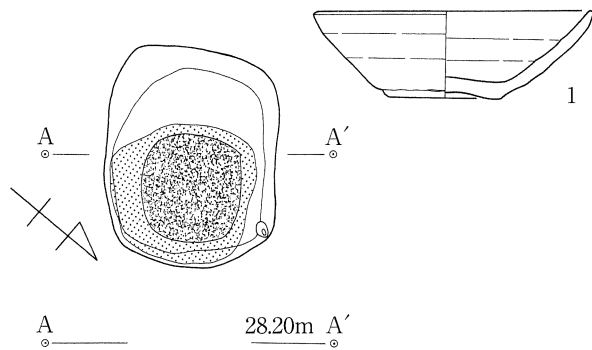
30号土坑



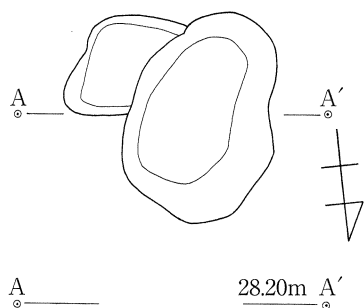
第262图 土坑 (11)



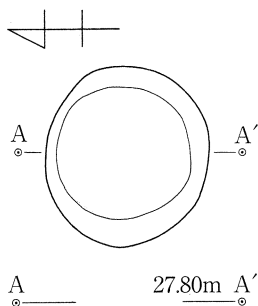
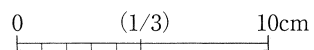
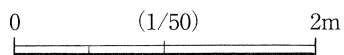
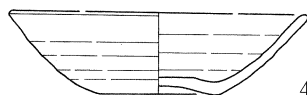
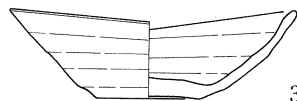
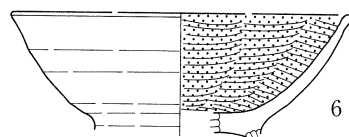
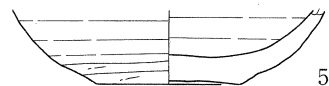
31号土坑



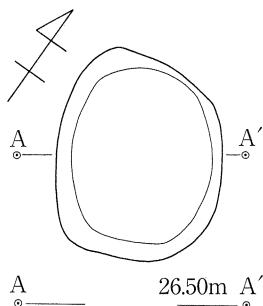
32号土坑



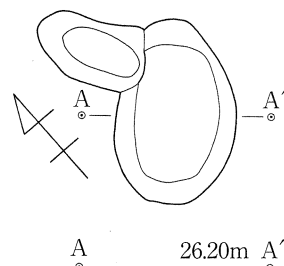
33号土坑



34号土坑

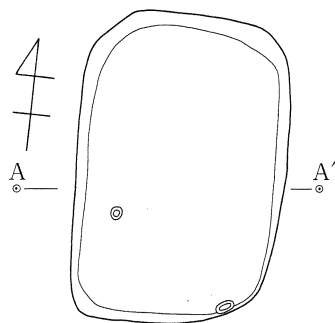


35号土坑



36号土坑

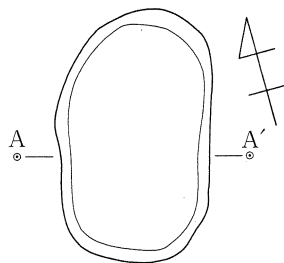
第263图 土坑 (12)



A ————— 25.60m A'



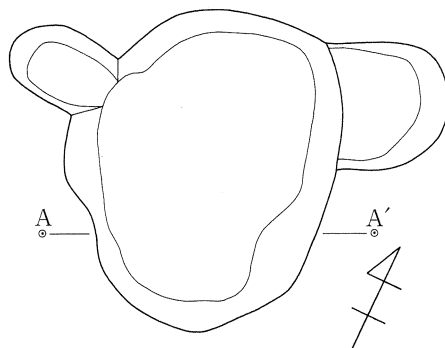
37号土坑



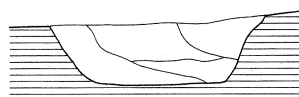
A ————— 26.40m A'



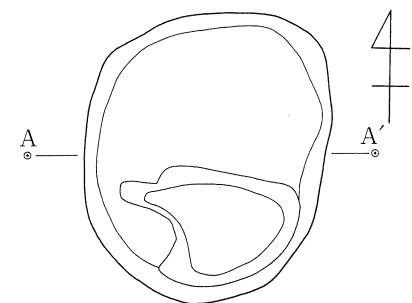
38号土坑



A ————— 26.20m A'



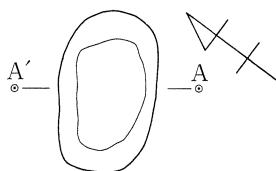
39号土坑



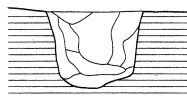
A ————— 26.30m A'



40号土坑

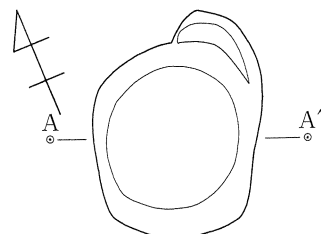


A ————— 26.10m A'

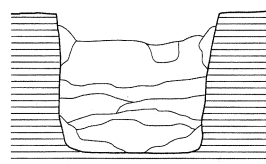


41号土坑

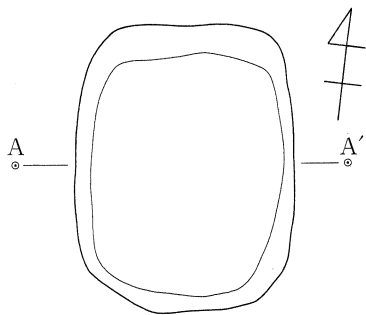
0 (1/50) 2m



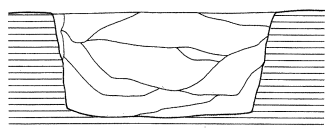
A ————— 28.40m A'



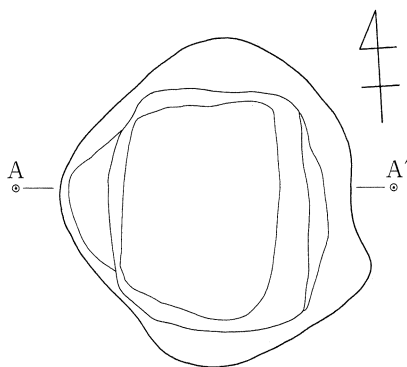
42号土坑



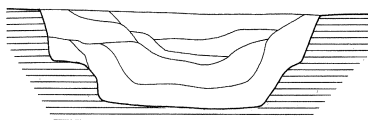
A ————— 29.60m A'



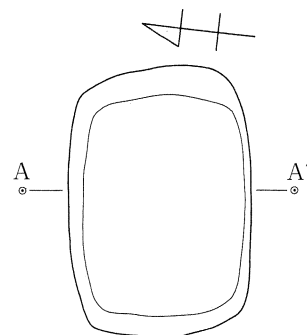
43号土坑



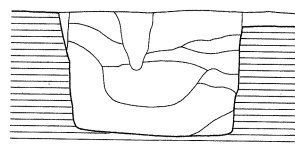
A ————— 29.40m A'



44号土坑

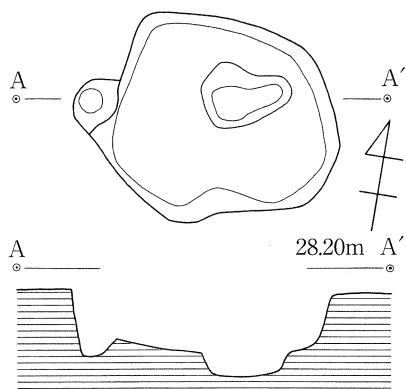


A ————— 29.50m A'

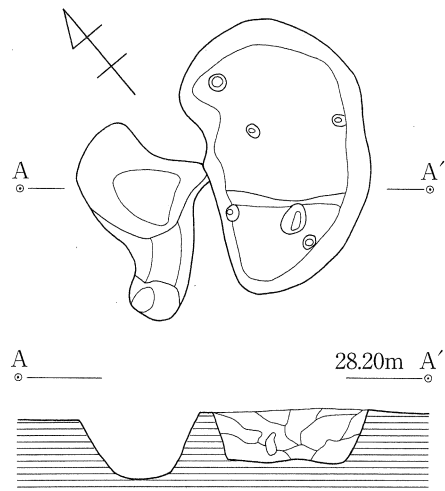


45号土坑

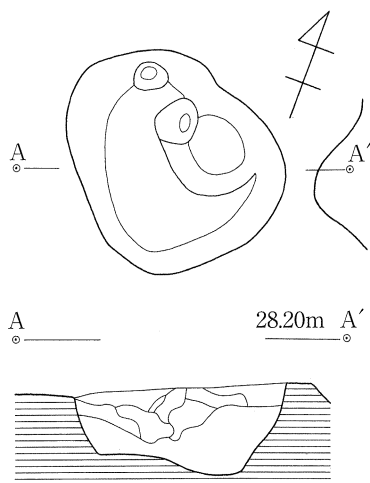
第264图 土坑 (13)



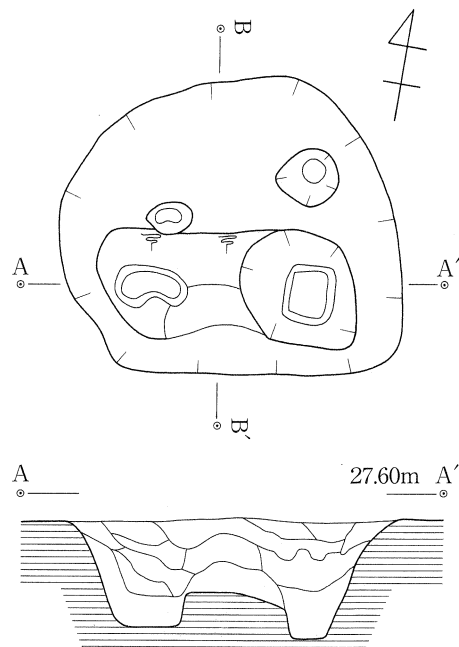
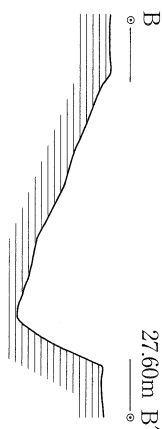
46号土坑



47号土坑

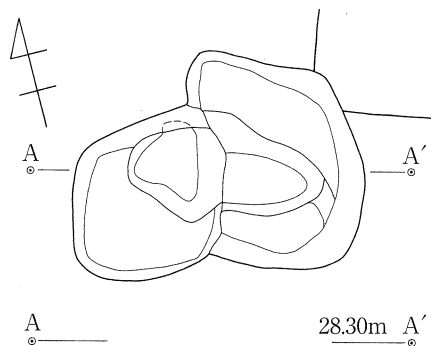


48号土坑



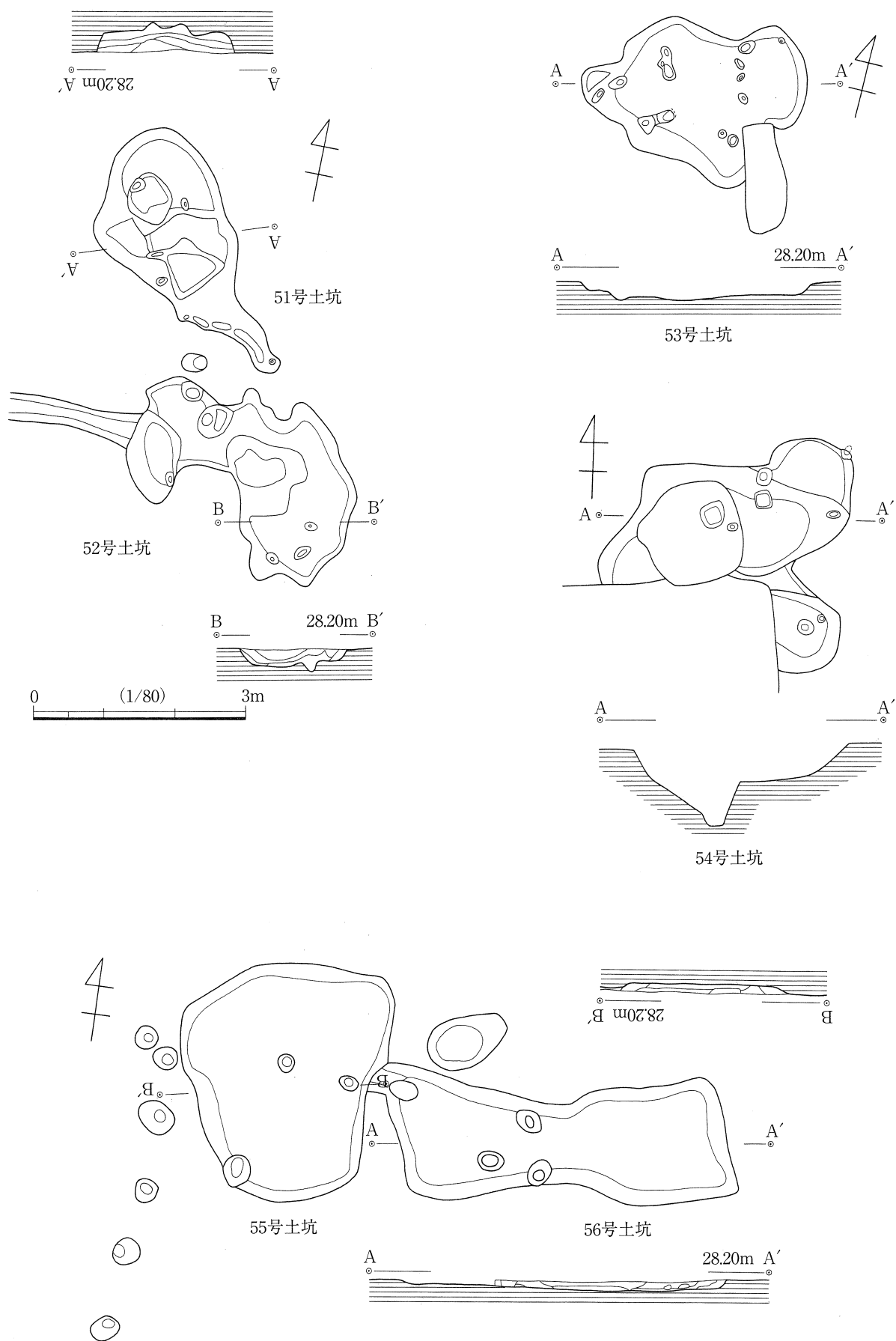
49号土坑

0 (1/50) 2m



50号土坑

第265图 土坑 (14)



第266图 土坑 (15)

が出土している。灰釉碗は坂野のⅣ期新相を示し、10世紀第2四半期の所産である。

34～45号土坑は土坑一覧表を参照されたい。

46～56号土坑は不整な平面形を呈するものである。詳細は土坑一覧表を参照されたい。

57～59号土坑はC地区の10号墳プラン内の南西周溝部を主に後世に掘り込まれた土坑内から人骨を伴い検出する。

57号土坑は、10号墳南西側周溝に大きく掘り込まれた土壌状の覆土中に検出した。平面プランは不明瞭であるが長軸長1.16m・短軸長0.72mの楕円形と思われる。人骨は1体を検出するが遺物等の出土は無く、詳細な時期は不明である。

人骨所見・・・男性。熟年期。残りは悪く、鑑定は困難である。腐食が激しく、手を触れると骨質が崩れてしまう。確認できた部位は、頭蓋骨では右側頭骨、左側頭骨岩様部、右上顎骨歯槽部および口蓋突起、下顎骨右半、下顎骨左半の一部、頭蓋底の蝶後頭軟骨結合部周辺、前頭骨グラベラ付近、左右不明側頭鱗などである。残存する歯式を以下に示す。

8 7 6 5 4 ○ × ① | ① × ③ ④ ⑤ 6 7 8

8 7 6 5 ○ 3 2 × | 1 2 3 ○ 5 × 7 8

丸数字（①、②など）は遊離歯で、アラビア数字（1，2など）は植立歯を表す。○は歯槽開放、×は破損・欠損により不明なものを表す。以降も同様である。

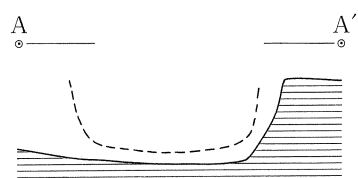
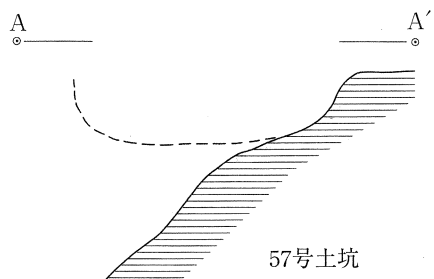
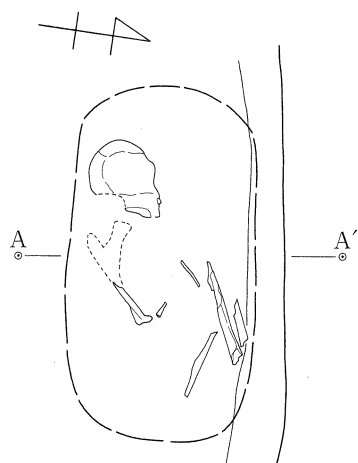
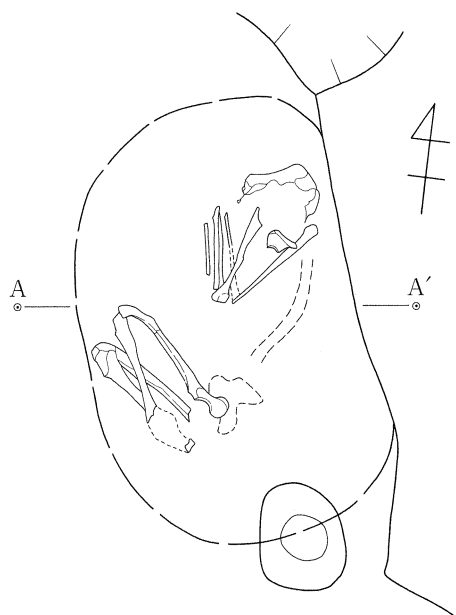
歯槽の退縮は全体に軽度で歯根長の1/3程度にとどまる。咬耗は第一大臼歯でもっとも強く3度で、下顎中切歯も3度に相当することが確認できる。その他の歯で2度、第三大臼歯においては一度にとどまる。第三大臼歯において咬耗が弱いことはあるが、全体的にみて熟年期に属すると推定される。齶歯はない。蝶後頭軟骨結合部は閉鎖する。側頭骨の乳様突起はやや大きい。頭蓋骨に比べて体幹および四肢骨の保存状態はさらに悪く、ほとんどが細片化している。もっとも残りのよいものは左大腿骨で大腿骨頸部から骨幹の半ばあたりまでの部位が確認できる。粗線の発達はやや強い。他残存する部位は、右大腿骨骨幹、右脛骨骨幹、左脛骨骨幹、左右不明脛骨骨幹片、圧縮変形した左右不明の大腿骨頭、右上腕骨骨幹、左右鎖骨、細片化した部位不明の長骨片である。骨盤、脊柱、肋骨などは認められない。大腿骨頭と推定される骨片は大きく、総合的に判断して男性である可能性が強い。

58号土坑は、10号墳円台部内南画側に東西に掘り込まれた溝内に長軸を東西に置き、57号土坑の西南西2mに検出した。平面プランは不明瞭であるが長軸長0.95m・短軸長0.5mの楕円形のプランを呈するものと思われる。人骨は1体を検出するが遺物等の出土は無く、詳細な時期は不明である。

人骨所見・・・性別不明。熟年期。残りは悪く、鑑定は困難である。腐食が激しく、手を触れると骨質が崩れてしまう。57号土坑人骨よりも保存状態はさらに悪い。頭蓋骨では、側頭骨錐体片1点、部位不明の頭蓋冠片数点、遊離歯などが残る。遊離歯6本の歯式を示す。

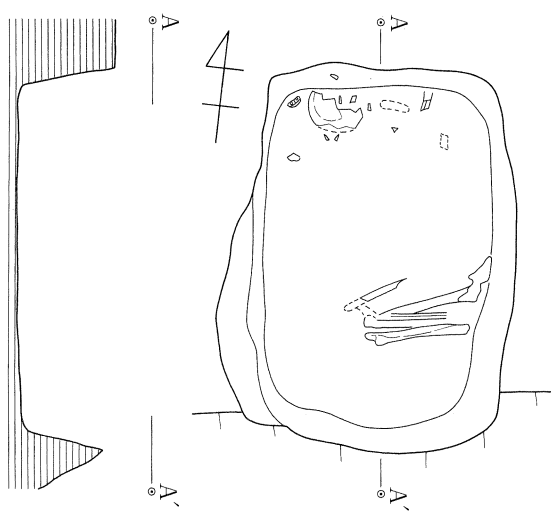
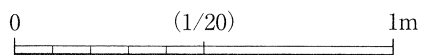
④③ | ②③ ⑤⑥

咬耗度は1～2度。もっとも咬耗の強い第一大臼歯では2度をやや超えようかという程度。熟年期に属すると推定する。左下顎第一大臼歯の遠心歯頸部に3度に達する齶蝕が認められる。体幹および四肢骨の保存状態も、頭蓋と同様に不良である。もっとも保存状態のよいものは、左右不明の大腿骨骨幹片である。粗線の発達はやや弱いと思われるが、保存状態が悪いためにはっきりとはわからない。



58号土坑

57号土坑



59号土坑

第267图 土坑 (16)

59号土壙は、10号墳円台部内南面側に長軸を南北に置き、58号土壙の東北東1mに検出した。平面形は長軸長1.02m・短軸長0.7m・深さ0.26mで隅丸長方形のプランを呈する。人骨は出土状況から当初1体と思われていたが、鑑定の結果2体であることが判明した。詳細な時期は不明である。

人骨所見・・・59号土坑1号人骨。性別不明。壮年期。保存状態は不良である。57, 58号土坑人骨と同様に骨質はもろく、触れると崩れてしまう。ただし歯の保存状態は良好で、それぞれの遊離歯は歯冠から歯根まで完形で残る。頭蓋骨では左右側頭骨錐体、いくつかの頭蓋冠片、左右上顎骨、下顎骨右半から左側歯槽突起までが残る。側頭骨は錐体部のみ残り、乳様突起などは確認できない。

歯式を示す。歯式中の●は歯槽閉鎖を表す。その他の書式は1号人骨に準じる。

$\times 7 \ 6 \ 5 \ 4 \ 3 \times \times \mid \times \textcircled{2} \textcircled{0} \textcircled{0} \ 5 \ 0 \ 7 \ 0$
 $\textcircled{0} \bullet \ 6 \ 5 \ 0 \ 3 \ 2 \ 0 \mid \textcircled{0} \ 2 \ 0 \ 4 \ 5 \ 0 \ 7 \times$

咬耕度は1度で、壮年期に属すると推定される。歯根部のセメント質もなめらかで、壮年期であることを示唆する。齲歯はない。右下顎枝において、下顎角が強く鈍角化していることが確認できる。壮年期固体にしては珍しい。体幹および四肢骨では、頭蓋骨以上に残りが悪いため、詳細は不明である。いくつかの頸椎片、長骨（上腕骨、大腿骨などと推定される）骨幹部の細片多数、指骨片などが残る。全体的に細片化が激しい。

59号土坑2号人骨。性別不明。 壮年期。頭蓋冠片および遊離歯、ほかに少量の頭蓋骨片が残る。

頭蓋冠片の保存状態は非常に良好である。骨質は堅く、重量感にあふれる。左右不明の頭頂骨、前頭鱗の一部などと推定される骨片が残っているが縫合など特徴的な部位は残っていない。その中で冠状縫合と推定される部位がわずかに認められるが、骨性結合はまだ起きていないことがわかる。遊離歯が多数残るが、それらの多くは保存状態が不良で、歯根を破損により失っている。いくつかの歯は歯冠部も破損している。歯式を以下に示す。

$\textcircled{8} \textcircled{7} \textcircled{6} \textcircled{5} \textcircled{4} \textcircled{3} \textcircled{2} \times \mid \textcircled{1} \textcircled{2} \textcircled{3} \textcircled{4} \textcircled{5} \textcircled{6} \textcircled{7} \textcircled{8}$
 $\textcircled{8} \textcircled{7} \textcircled{6} \textcircled{5} \textcircled{4} \textcircled{3} \textcircled{2} \textcircled{1} \mid \textcircled{1} \textcircled{2} \times \textcircled{4} \textcircled{5} \textcircled{6} \textcircled{7} \textcircled{8}$

咬耕度は1～2度。ほとんどの歯は1度で、もっとも咬耕の進んだ第一大臼歯および下顎中切歯にほんのわずかに象牙質の露出を認めることができる。壮年期個体と推定する。齲歯はない。

まとめ

成人4体は、男性と推定される1体と、性別不明な個体3体とに分けられる。

この男性骨は熟年期に属すると考えられる。残りの3体は熟年期個体が1体、壮年期個体が2体と推定される。58号土坑人骨（性別不明熟年期）に齲歯が1本認められた。

第7節 その他の出土遺物

本稿では、遺構外や一括遺物を取り上げたが、遺構内出土であっても同種類でまとめた遺物もある。一括出土遺物については、E地区の表土剥ぎ後に電動フルイをおこなって検出した遺物が多数であるが、遺物観察表のIN-AはA地区、IN-BはB地区、IN-EEはE地区東側、IN-EWはE地区西側を示すものである。

縄文土器（第268図）

稲荷台遺跡の各調査区から出土した縄文時代の土器を掲載した。早期～後期までの土器が認められた。1～3は早期・撚糸文系土器で、1は肥厚して外反する口縁部片である。口唇上に矢羽根状に縄文を回転施文する。井草Ⅱ式である。2はわずかに外反する口縁部片である。斜行する縄文がやや間隔をあけて施文される。3は細かい撚糸文が施文された胴部片である。2・3は稲荷台式である。4～8は早期・沈線文系土器で、三戸式および田戸下層式である。4は平行する沈線とハ字状の短沈線が見える胴部片である。5は平行する斜沈線が見える胴部片である。6は平行する沈線間に短沈線を充填させた胴部片である。7は角張った平坦な口唇部の外側の稜に間隔をあけた連続押捺を加えた口縁部片で、平行する3条の条線が見える。8は半截竹管による4段の横位の平行沈線が見える尖底部片である。各段は4分割で一巡するものと思われる。

9・10は前期の土器で、諸磯b式および浮島式と思われる。9は間隔をあけた平行する貝殻腹縁文の胴部片である。10は平行沈線間に半截竹管の連続押捺による爪形文を充填したものである。

11～19は中期の土器で、すべて加曽利EⅡ式である。11は隆帯とそれに沿った沈線とで口縁部文様帯を構成し、胴部には磨消懸垂帯が垂下する。12は沈線による区画内に竹管状工具による刺突を充填する。13～17は磨消懸垂帯の垂下する胴部片である。18は3本一組の垂下する沈線が、19は地文の縄文のみが見える胴部片である。

20～32は後期の土器で、堀之内式・加曽利B式・曾谷式が含まれる。20は沈線による意匠文・s字文および刺突の見える胴部片である。21は沈線により多条化した細縄文帯が横位に巡る口縁部片である。22・23は地文の縄文のみが見える口縁部片である。23は内面に沈線が巡る。24・25は横位に巡る沈線と斜条線が見える口縁部片である。26～29は紐線文系の粗製深鉢片で、27～29は同一個体と思われる。30は地文上に沈線による弧線、31は地文のみが見える胴部片である。32は沈線による弧状区画内に縄文を充填した胴下半部～底部片である。

A地区出土遺物（第269図）

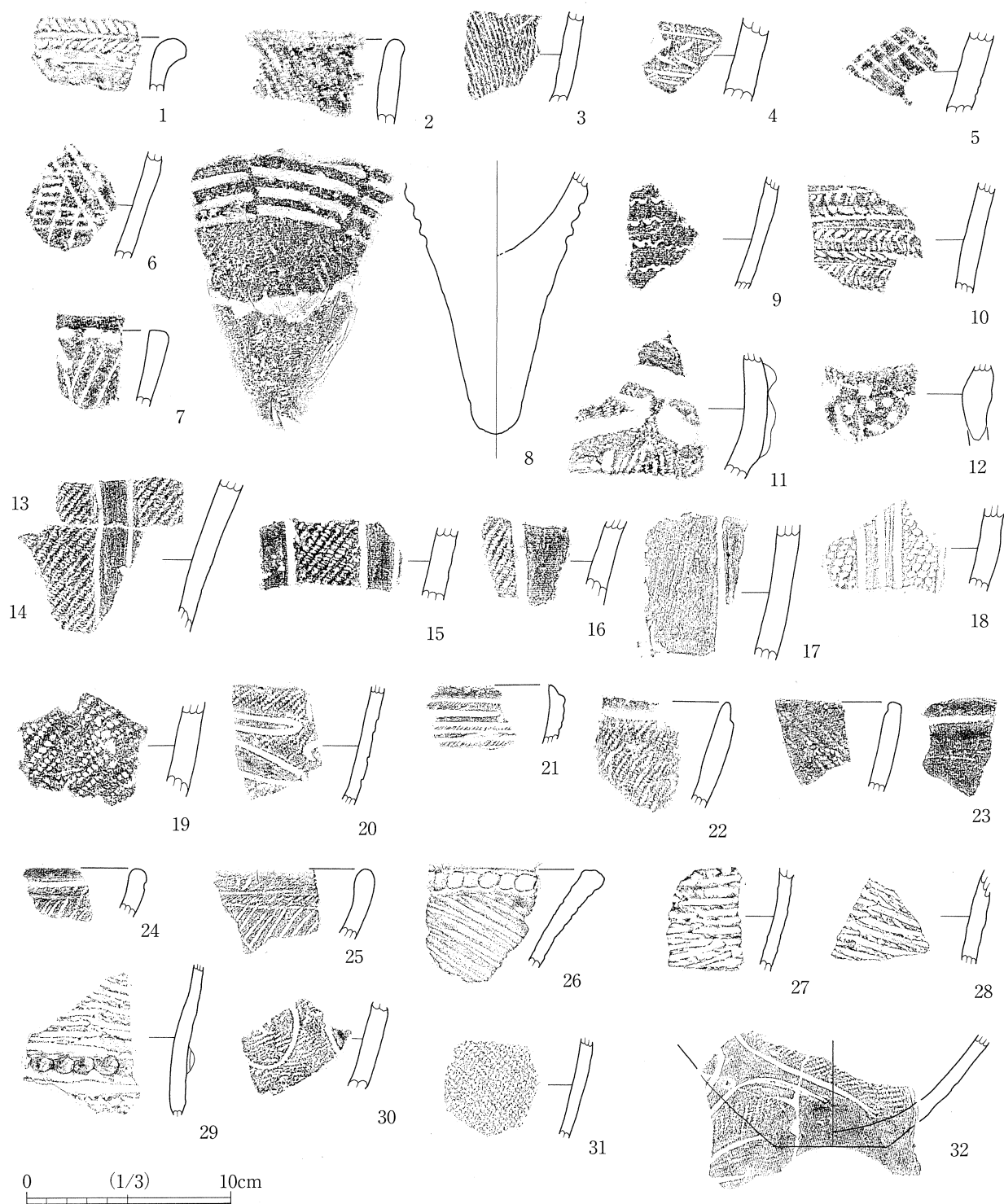
1～10は、A地区遺構外の出土遺物である。1～4は回転糸きりロクロ土師器坏。5は手持ち篋削りの極小化したロクロ土師器坏である。6は脚高の高台を有したロクロ土師器皿である。7・8は脚高気味の高台付坏。9・10は内黒ロクロ土師器高台付椀である。

古銭（第269図24～29）

稲荷台遺跡出土の古銭で、1～24は第239図D地区の1号溝から一括して出土している。25は承和昌寶で835年鑄造の王朝十二銭に挙げられるもので、出土状況が明らかでなく問題も残るがA地区55号住居跡覆土から出土している。55住は床面から出土した遺物から9世紀第4四半期で遡っても第3四半期でおさまることから住居跡共伴遺物でないと判断する。25は熙寧元寶、27は寛永通寶、28は寛永通寶で、26は不明銭である。

E 地区出土土器（第270図～290図）

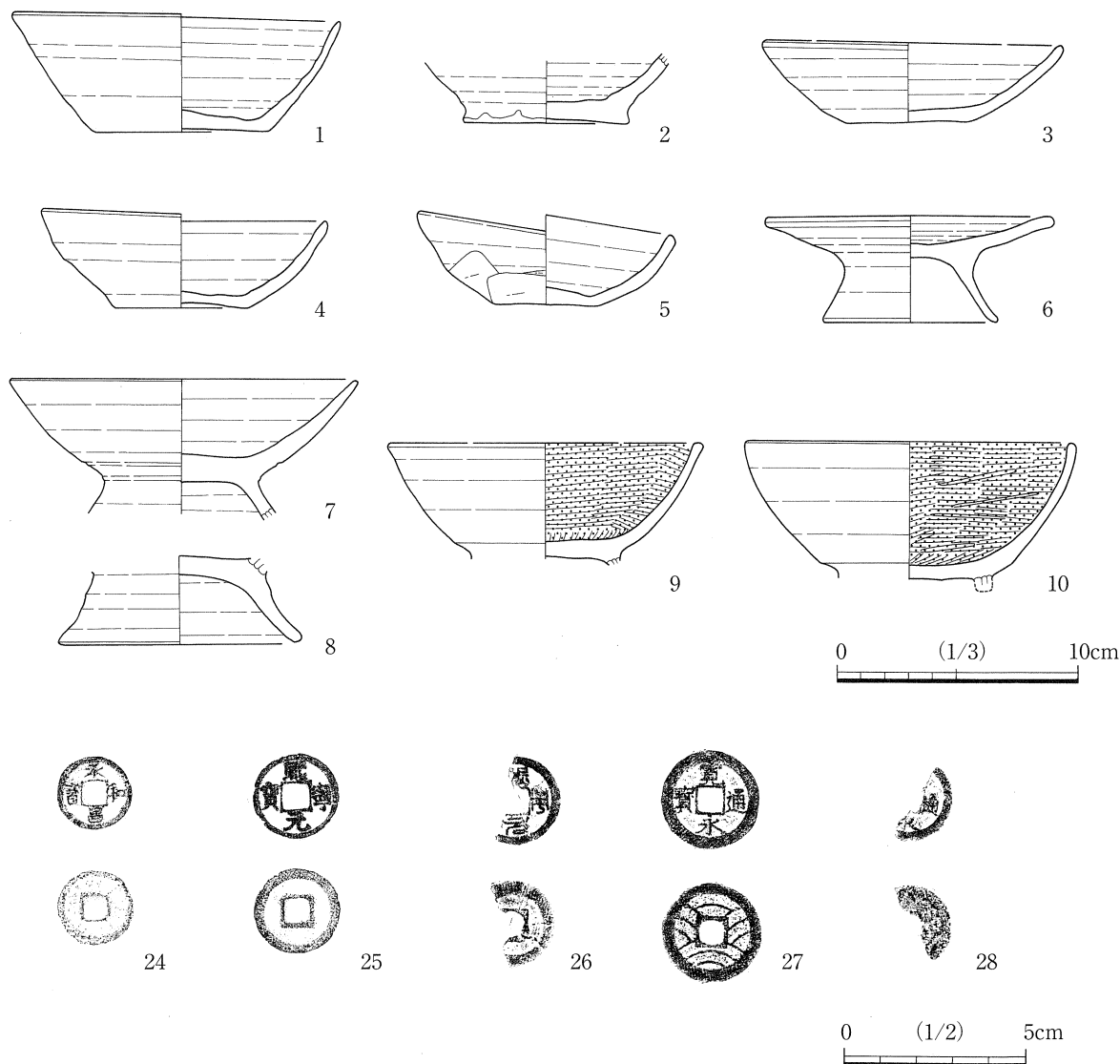
第270図 1・2 は土師器甕口縁片で、口縁内外面に刷毛目がある。3 は土師器甕口縁片で口縁ナデ、胴部内外面に篋削りを施している。4 は折返し口縁の土師器壺口縁片である。5 は埴形土器口縁破片で、内外面に丹を施している。6～9 は高坏脚片で、7 の外面には丹を施している。6 は古墳前期、



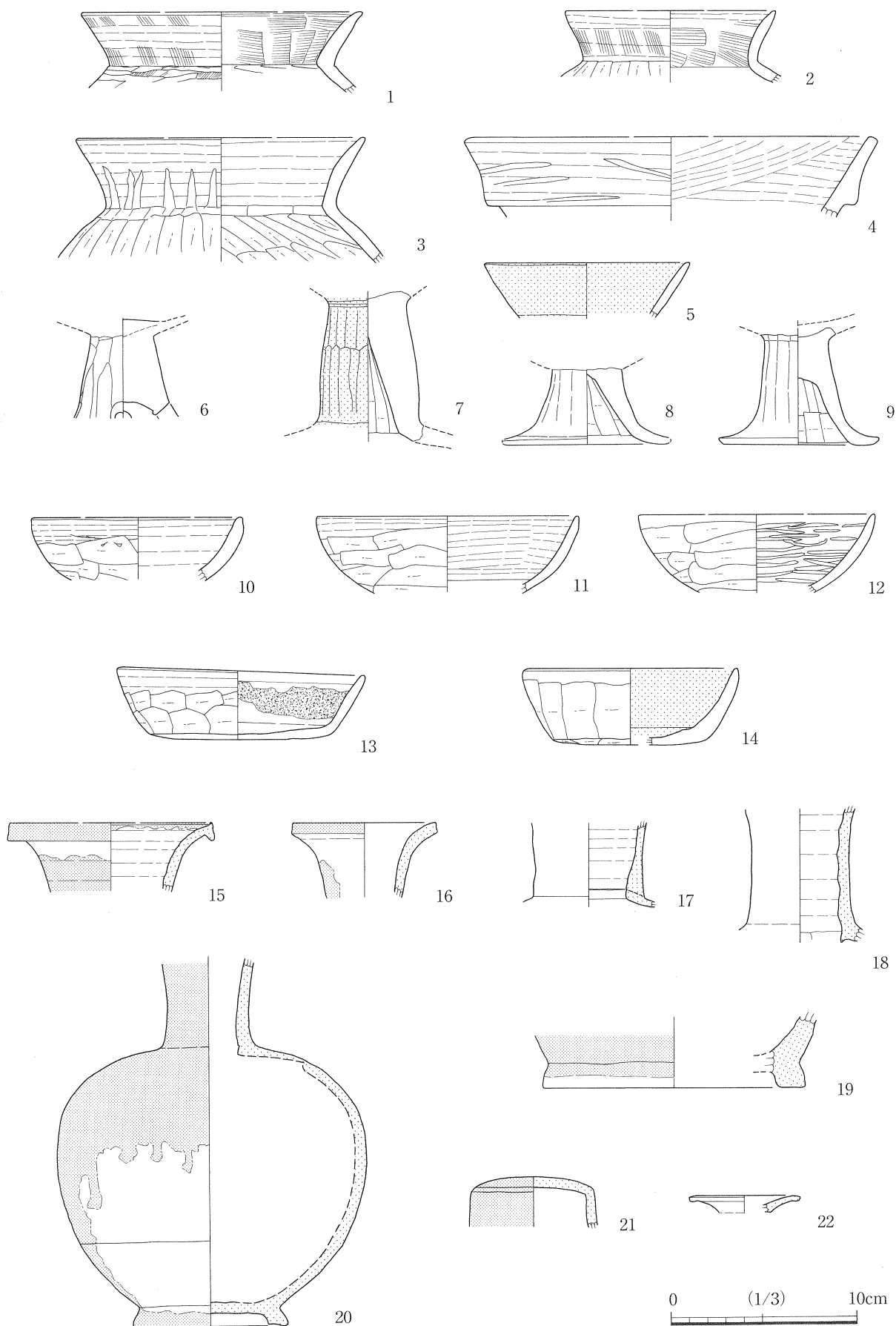
第268図 稲荷台遺跡出土の縄文土器

7は古墳中期、8・9は古墳後期の所産であろう。10～12は半円球状の底体部の土師器坏で7世紀後半代の所産であろう。13・14は非ロクロ坏で、13内面には厚くタール状のカーボンが付着し灯明用に転用されたもので、14内面には丹を施している。8世紀中葉の所産であろう。15～19は須恵器長頸壺と思われるものである。15の内外面には降灰による釉が付着している。20は3段構成で頸部から胴部にかけて濃緑色の降灰による釉が厚く付着している。21は須恵器蓋で外面に厚く濃緑色の降灰による釉が認められる。8世紀末葉と看取される。22は小型壺の口縁小片であるが、須恵器より焼きしめた硬質土器である。

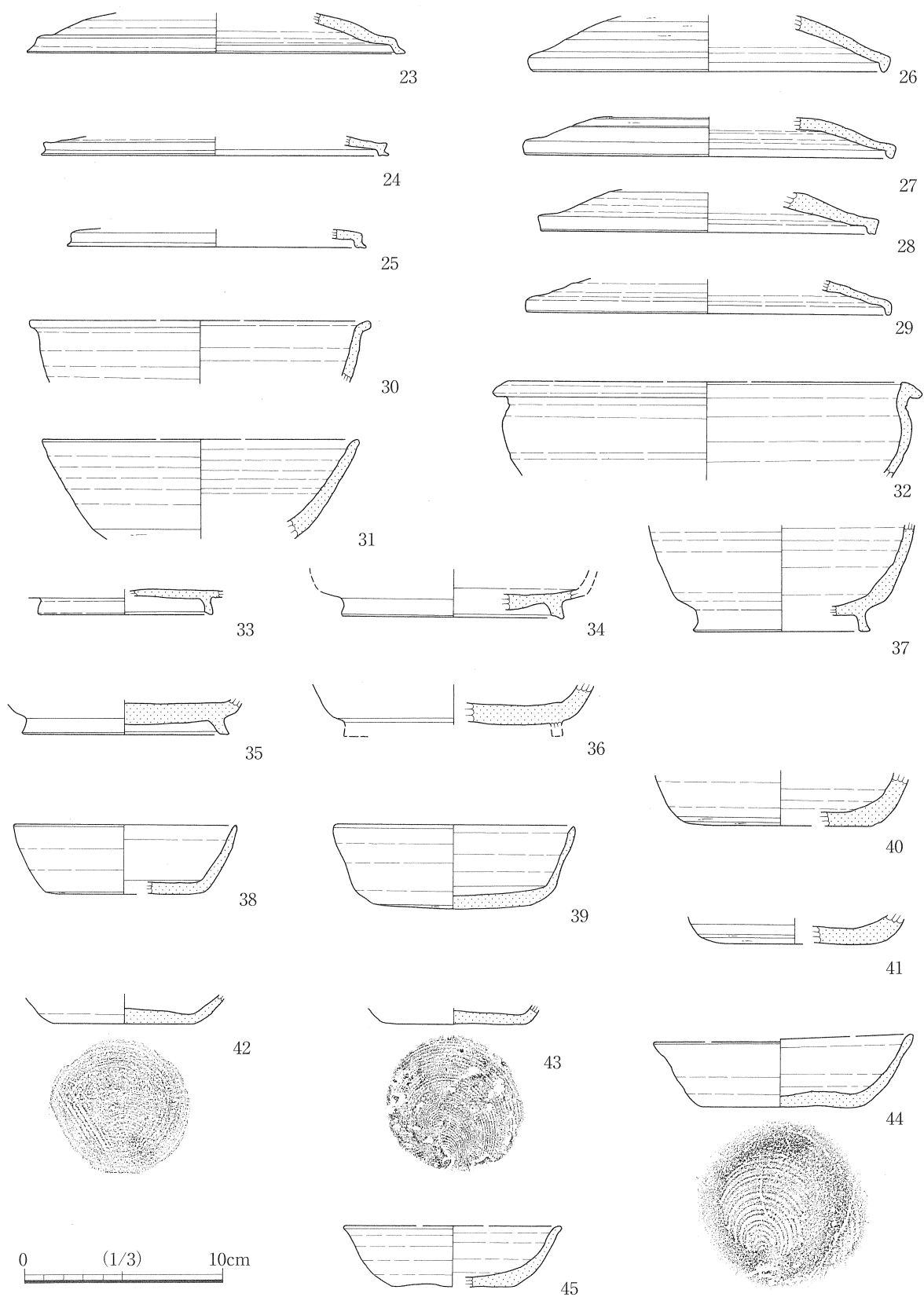
第271図23～29は須恵器蓋である。30～36は須恵器高台付坏である。38～41は底部回転篋削りの須恵器坏、42～44は回転糸切りの須恵器坏である。45は胎土暗灰色を呈し微密・堅緻で他の須恵器と器形とも異質な感がある。第272図46～54は、回転篋削りのロクロ土師器篋で、48は内面内黒、53・54は内面ミガキで、54は口径23cm程を計り、この種では最大口径である。56～67・69は回転糸切りロクロ土師器坏。68は回転糸切りロクロ土師器皿。第273図70は極小化した回転糸切りロクロ土師器で



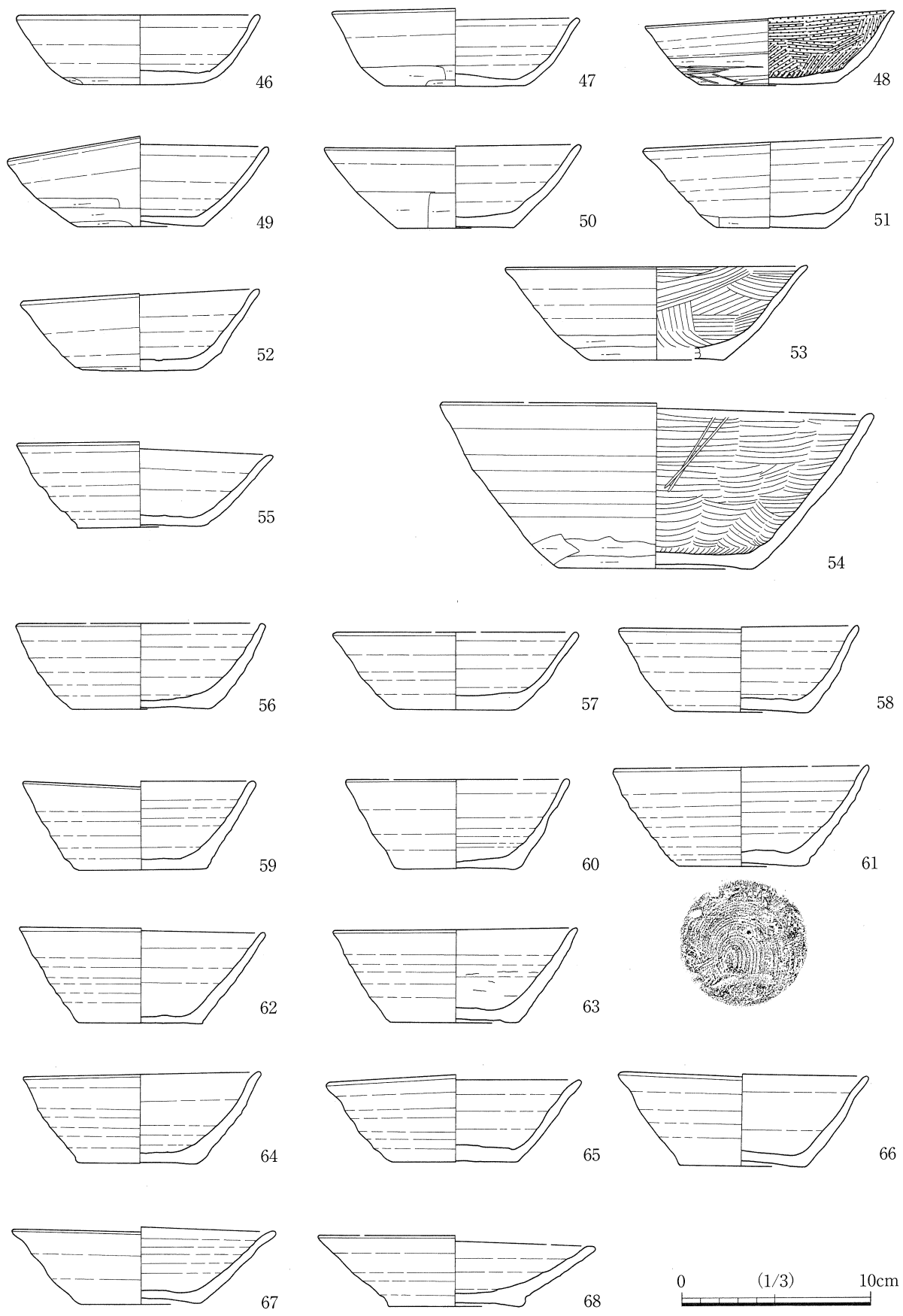
第269図 A地区出土遺物と各地区の出土古銭



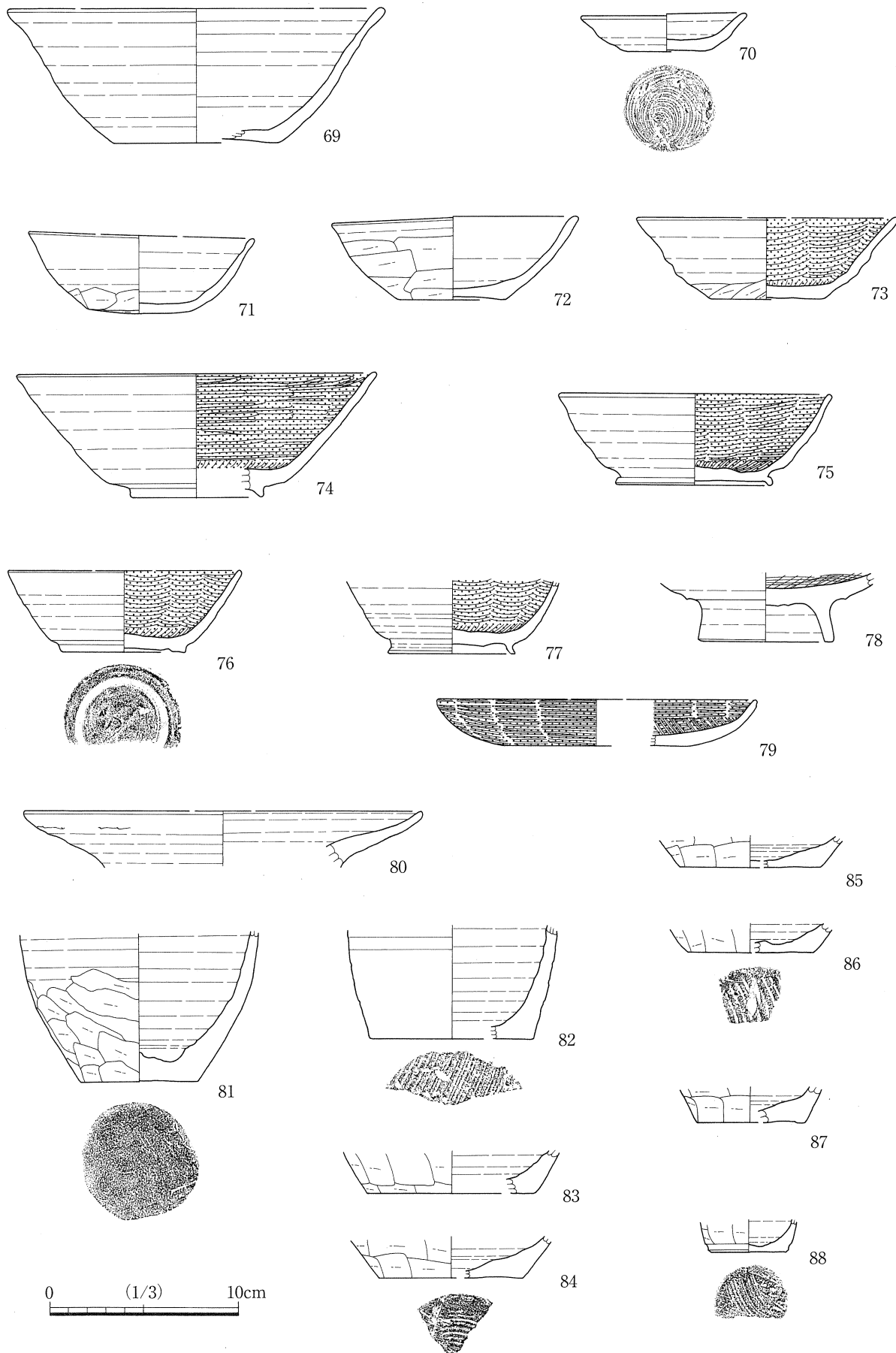
第270图 E地区出土遗物(1)



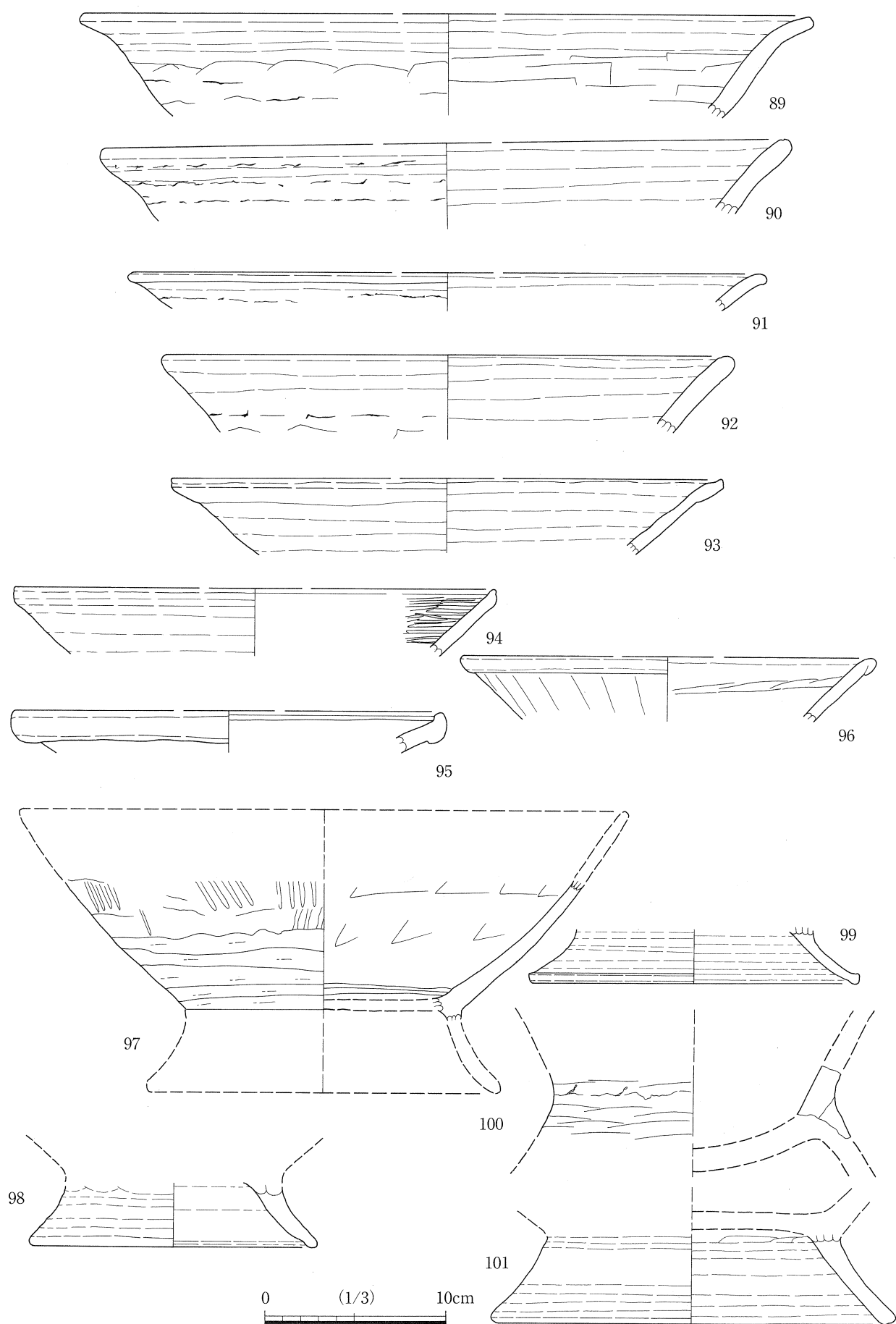
第271图 E地区出土遗物(2)



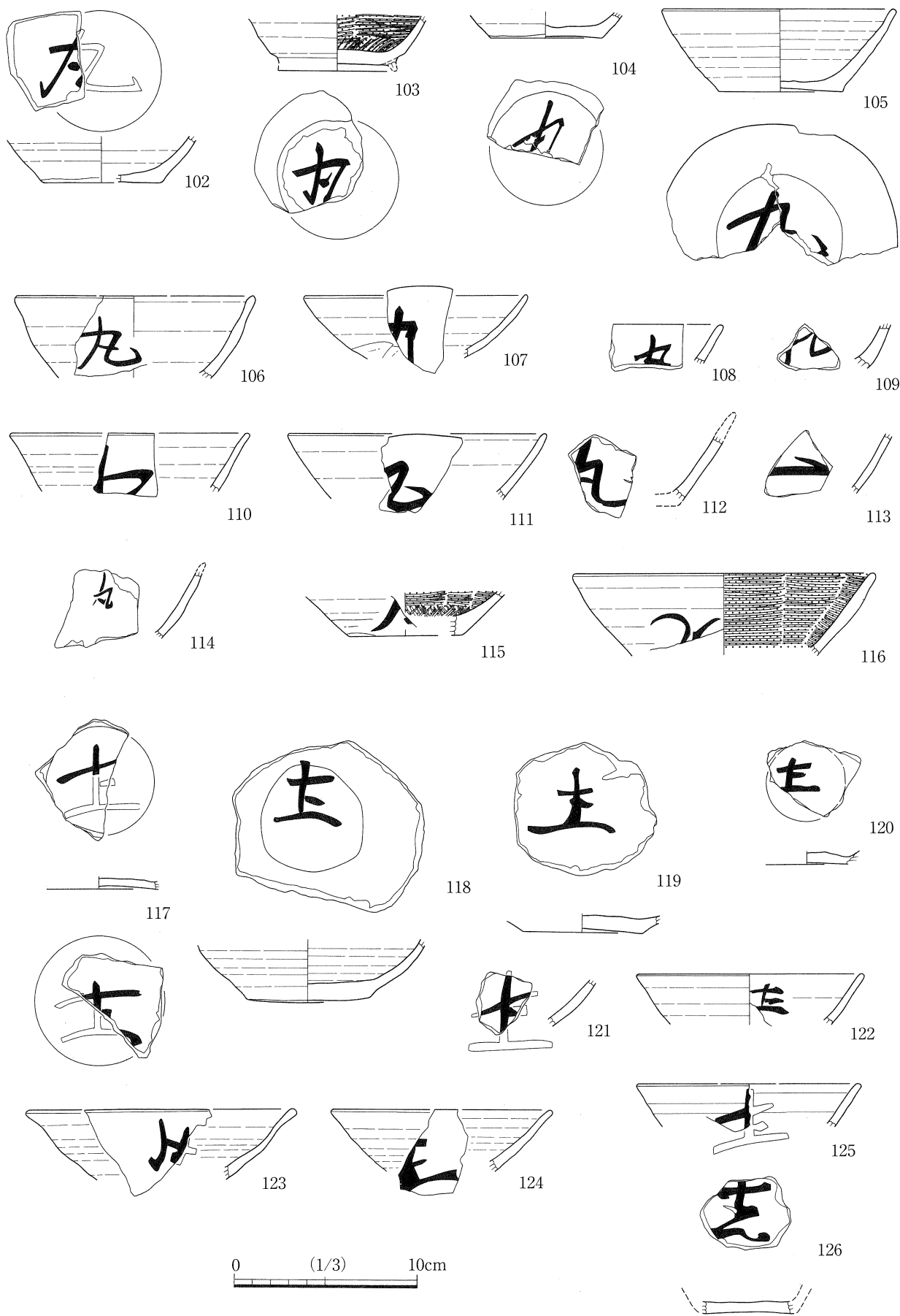
第272図 E地区出土遺物(3)



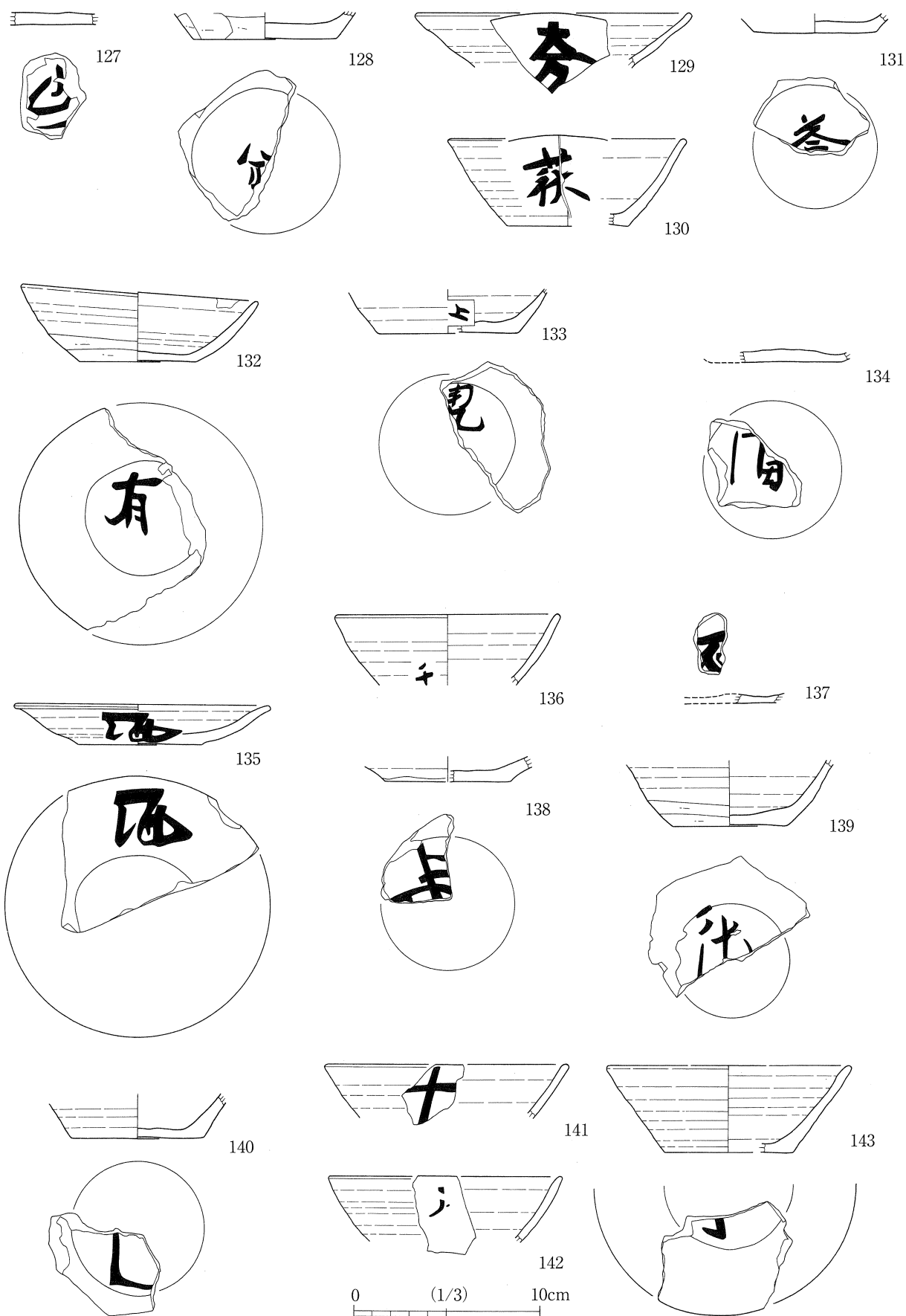
第273图 E地区出土遗物(4)



第274图 E地区出土遗物(5)



第275図 E地区出土遺物(6) 墨書



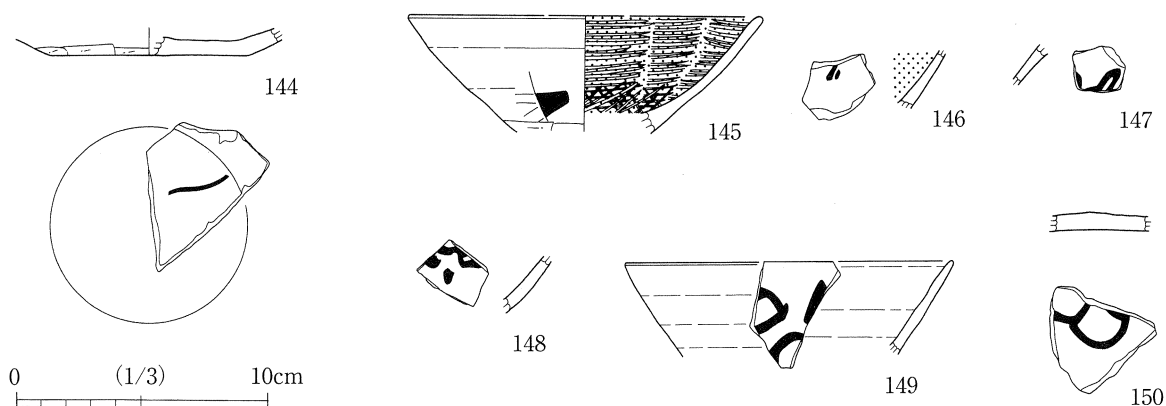
第276图 E地区出土遗物(7) 墨書

カワラケとも言える。71～73は体部と底部に手持ち篋削りを施すロクロ土師器坏で、73は内面内黒である。74～78は内面内黒ミガキを施す、高台付坏である。75の高台は明らかに灰釉陶器碗を模倣したもののと思われ、体部が直線的に開くものと区別し、高台付碗と呼びたい。79は小片であるが、器表面全面にわたり黒色で光沢のあるミガキを施している。80はロクロ土師器であるが器形は不明である。81～88は、ロクロ土師器甕でいずれも小片である。底部はナデ状の削りを施す81が基本と思われるが、82・86の静止糸切り、また84の回転糸切りも確認できる。88は底径4cmほどの極小の製品である。ロクロ土師器甕は、共伴遺物から時期が明確な12住の9世紀第2四半期や37住覆土焼土中の9世紀第3～4四半期、また10世紀第2～3四半期の6号集石遺構例から見ても、胴長から胴球形への変化が確認できる。

第274図は、本遺跡内から出土する特徴的な土師器大型台付鉢である。完全に復元できた資料はないが、37住や43住がある。89は最大級の口径40cm以上に復元可能である。口縁部内外面はナデで整えられ、鉢部内面はナデか篋ナデによるものの、体部外面には粘土紐巻き上げの輪積み痕跡を明瞭に残す物や、粗く削るものなどさまざまな手法が見られる。また、口縁端部と台端部の見分けが付かないものも存在する。何れも小片が多く打ち砕かれた様相を呈している。出土状況では、37住の床面に接して出土する例はまれで、住居覆土や表土除去後のフルイ作業によって検出されるものが大半である。23～25住の覆土の「丸」の墨書土器と共に廃棄土器と思われる一群に多く含まれることは、この遺物が祭祀に使用される特異な遺物であることを示しているかのようである。

E地区出土墨書土器（第275～277図）

102～150は、E地区のフルイ作業によって検出されるものが大半である。102～116は「丸」もしくはそれと読める字である。103は内黒高台付碗、115・116は内黒坏でそれ以外はロクロ土師器坏である。102は内面底部、103～105は底部外面、106～116は体部外面に墨書する。119～126は、「土」もしくはそれと判断できる字であるが、123は「土」、121・125は他の字の可能性もある。119は底部内外面、118～120・126は底部内面、124は体部内面、121・123～125は体部外面に墨書する。276図127～143はロクロ土師器である。127は底部外面「山万カ」。128は底径7.6cmの手持ち篋削りの底部外面に「八万」。129は体部外面「大万」。130は体部外面「萩」。131は底部外面「益カ」。132は回転篋削りの底部外面「有」。133は体部下端に「上」と底部外面に「鬼カ」。134は底部外面「□」。135は体部外面「□」。136は体部下端に「千」。138～146は不明墨書がある。227図147～150は字以外の抽象的な文様



第277図 E地区出土遺物 (8) 墨書

であろうか。

E 地区出土土製品 (第278図)

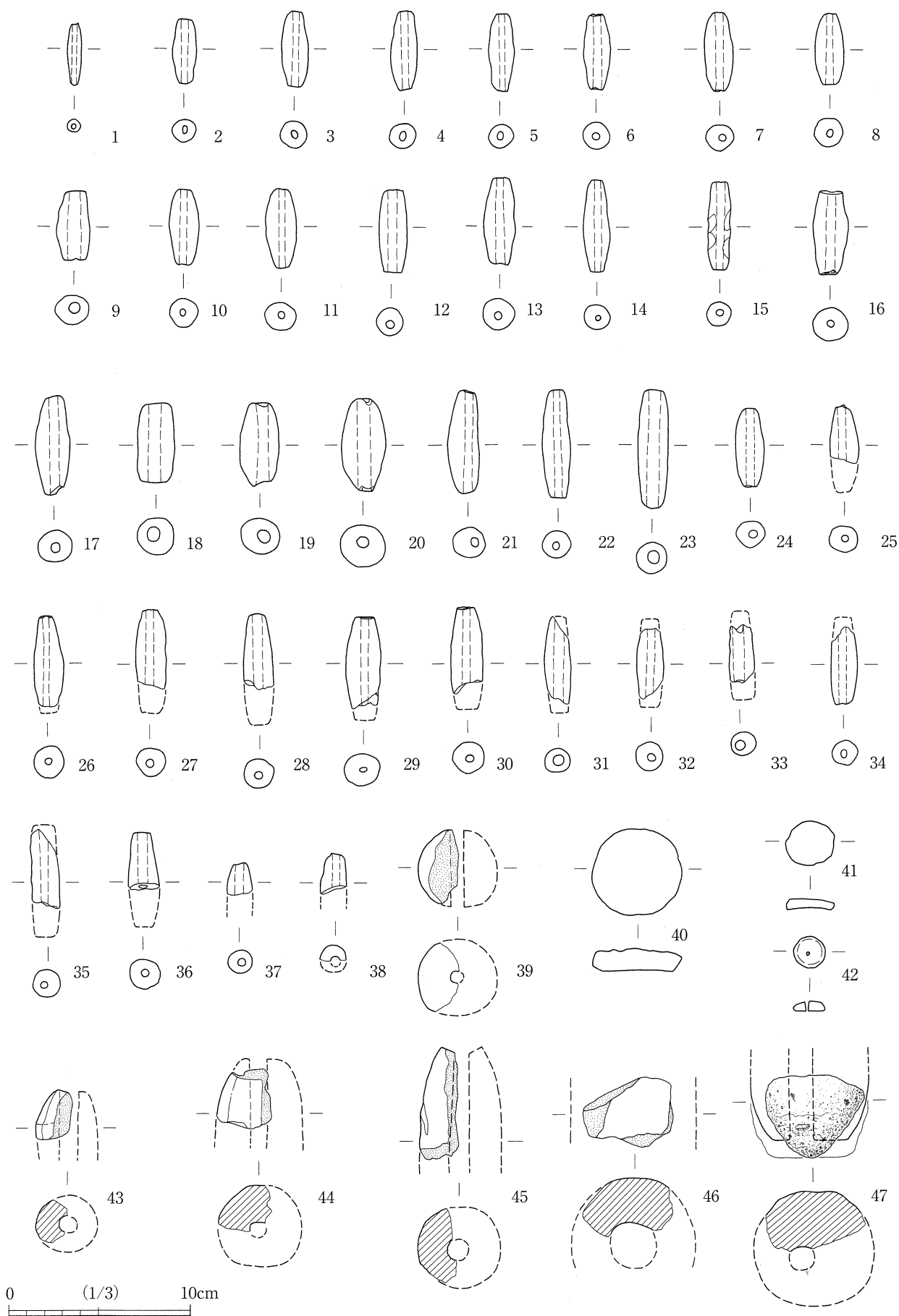
E 地区出土の土錘および土製品である。1～38は、細身の棒状を呈し孔が貫通している。両端には、紐による磨耗痕跡が認められる。39は球状を呈し、中央に孔が貫通している。所謂土玉である。40・41は土器片の周囲を磨り円盤に加工している。42は、ほぼ中央に小孔を有する有孔円盤である。43～45は、破片であるが、径が3.5～4.5cm とやや太い棒状の中央に孔が貫通するものがある。46・47は、羽口の小片で、推定径6.5cm 程を計測する。47は羽口先端部で外面には、溶解した気泡状のスラッグが付着している。遺跡内から小鍛冶遺構の検出はないが、遺構の存在を示す資料である。

砥石 (第279図)

1～18は、E 地区出土の一括遺物の砥石および砥石と思われる遺物である。1～11は板状、12～16は角状を呈するものである。17は断面円形で側面には多角的な磨り面を残している。18は自然石の周

第6表 土製品観察表

通し 番号	出土位置	種 別	遺 存 度	計測値 (cm)・(g)			備 考
				長さ	径	重さ	
1	1 住Po1	土錘	両端欠損	3.4	0.8×0.65	1.6	1号住居跡覆土出土
2	IN-E	土錘	完形	3.5	1.3×1.3	5.5	
3	IN-E	土錘	完形	4.2	1.5×1.5	9.0	
4	IN-E E	土錘	完形	4.4	1.45×1.4	9.0	
5	IN-E	土錘	完形	4.3	1.4×1.3	8.4	
6	J-1 6	土錘	完形	4.2	1.5×1.5	8.8	
7	IN-E	土錘	完形	5.0	1.5×1.4	9.1	
8	IN-E	土錘	完形	3.9	1.6×1.6	9.3	
9	IN-E	土錘	完形	3.7	1.9×1.65	10.0	
10	IN-E	土錘	完形	4.1	1.6×1.6	9.5	
11	IN-E	土錘	両端僅かに欠損	4.3	1.75×1.6	10.2	
12	IN-E	土錘	完形	4.5	1.55×1.55	11.2	
13	IN-E	土錘	完形	4.8	1.8×1.8	13.1	
14	IN-E	土錘	完形	5.0	1.5×1.4	9.1	
15	IN-E	土錘	完形	4.8	1.4×1.35	8.4	
16	I-8	土錘	両端僅かに欠損	4.6	1.4×1.8	14.5	
17	IN-E	土錘	両端僅かに欠損	6.4	1.9×1.8	14.6	
18	IN-E	土錘	両端僅かに欠損	4.85	2.1×2.1	16.8	
19	IN-E	土錘	両端僅かに欠損	4.6	2.2×2.0	15.6	
20	IN-E	土錘	両端僅かに欠損	5.1	2.45×2.3	21.4	
21	IN-E	土錘	両端僅かに欠損	5.7	1.85×1.65	13.8	
22	IN-E E	土錘	完形	6.9	1.6×1.5	15.3	
23	H-8	土錘	完形	6.5	1.7×1.8	16.7	
24	IN-E	土錘	完形	4.3	1.6×1.5	9.1	
25	IN-E	土錘	片端欠損3／5	3.2+	1.6×1.45	7.3	
26	1 2 住+	土錘	両端僅かに欠損	4.9	1.7×1.8	11.6	12号住居跡覆土出土
27	IN-E	土錘	片端欠損3／4	4.3+	1.65×1.55	10.3+	
28	K-1 6 P14	土錘	片端欠損3／5	4.15+	1.65×1.65	9.7+	
29	IN-E	土錘	両端僅かに欠損	5.0+	2.0×1.8	16.8+	
30	IN-E	土錘	両端欠損3／4	4.8+	1.75×1.7	14.1+	
31	3 7 住+J-8	土錘	両端欠損4／5	4.8+	1.45×1.35	4.8+	
32	IN-E	土錘	両端欠損2／3	4.2+	1.5×1.6	7.7+	
33	L-1 1	土錘	両端欠損3／5	3.2+	1.4×1.3	4.5+	
34	N-1 8	土錘	両端僅かに欠損	4.3+	1.45×1.3	7.4+	
35	N-1 5 P7	土錘	両端欠損3／5	4.3+	1.6×1.55	9.8+	
36	M 1 6 -4	土錘	両端欠損1／2	3.2+	1.65×1.65	7.3+	
37	IN-E	土錘	一部	1.8+	1.35×1.3	2.4+	
38	IN-E	土錘	一部	2.3+	1.45×(1.5)	2.2+	
39	E-1 1	土錘	一部		4.3	24.1+	
40	IN-E 2-003	土錘	完形		5.0×4.7	32.9+	
41	IN-E	円盤	完形		3.75	4.0+	
42	IN-E	土錘	完形		1.8	1.6	
43	H 6	土錘	一部	2.7+	3.45×3.1	10.0+	
44	IN-E	土錘	一部	3.25+	(4.5×5.0)	15.7+	
45	I 9	土錘	一部	6.2+	4.5	39.3+	
46	B10	ファイゴ	一部			41.7+	
47	B10	ファイゴ	一部	4.5+	6.65×6.3	50.4+	溶解した気泡状の鉄滓付



第278図 E地区出土遺物(9) 土錘

囲に磨り痕が認められるものである。

石製紡錘車（第280図1～4）

E地区出土の一括遺物として取り上げられた石製紡錘車である。何れも蛇文岩製で、断面台形の円錐台形の中央に1孔を有している。1の底面には、僅かに線刻が有る。3の側面周囲には、沈線が線刻されている。4の底面には、「×」の線刻が深く刻まれている。

第280図5は、磨かれた四角の板状の製品である。両面および各辺も面取りし丁寧に研磨される。孔は無く用途不明である。

石器（第280図6～12）

縄文時代の石器と思われるものである。6は蛤刃の両刃の石斧で、基部を古い割れで欠損している。7は自然石に片面に使用痕が残る石斧である。8は平らな両面が僅かに凹面となり、周縁には敲打痕を残している。9は自然石に使用痕跡が残る石斧状の製品である。10は石棒の破片と思われ、部分的に打痕を残している。11は、石皿を2次利用した窪み石である。12は、全面に僅かに打痕を残す、叩き石である。

金属製品（第281図）

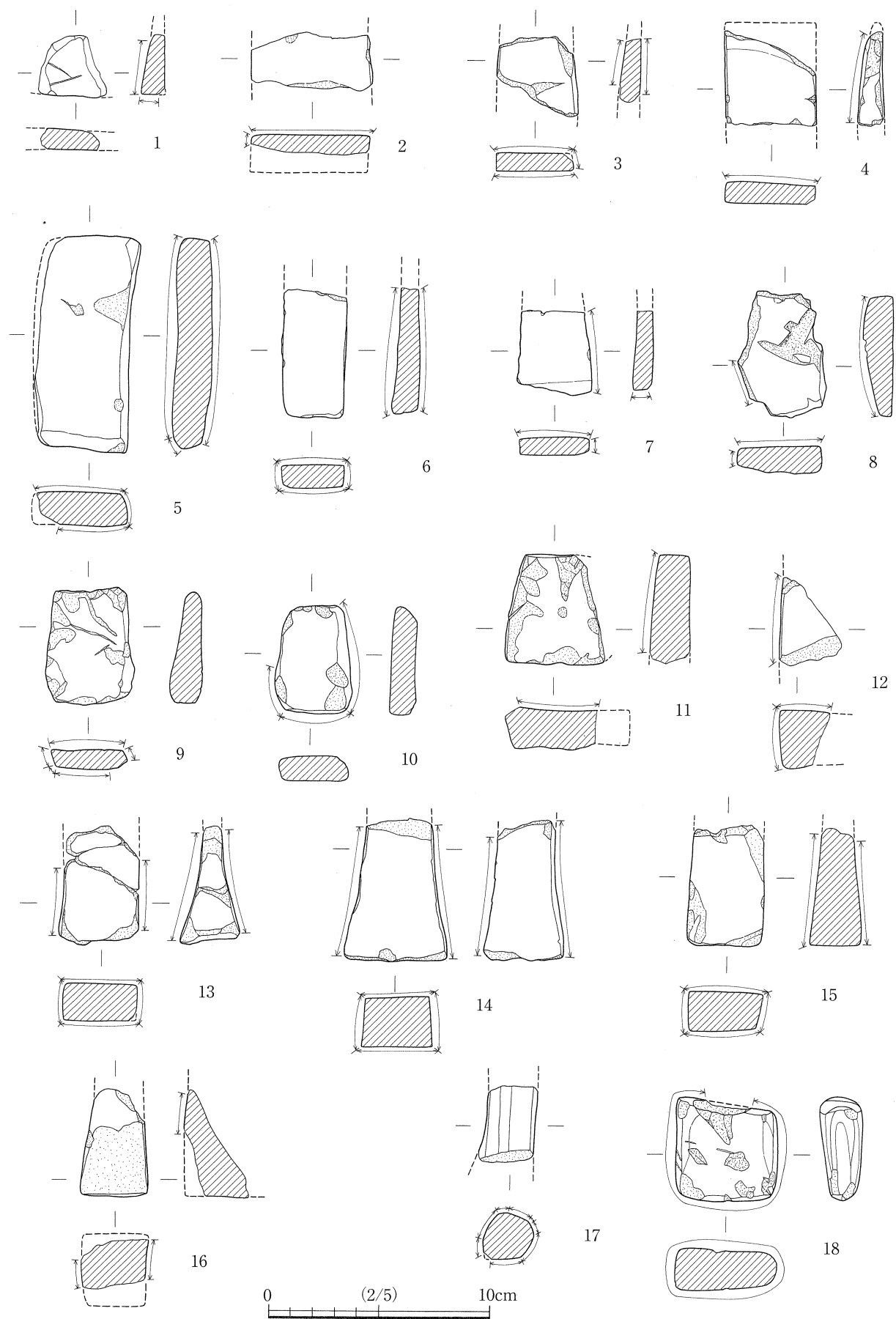
第7表 石器等観察表

砥石

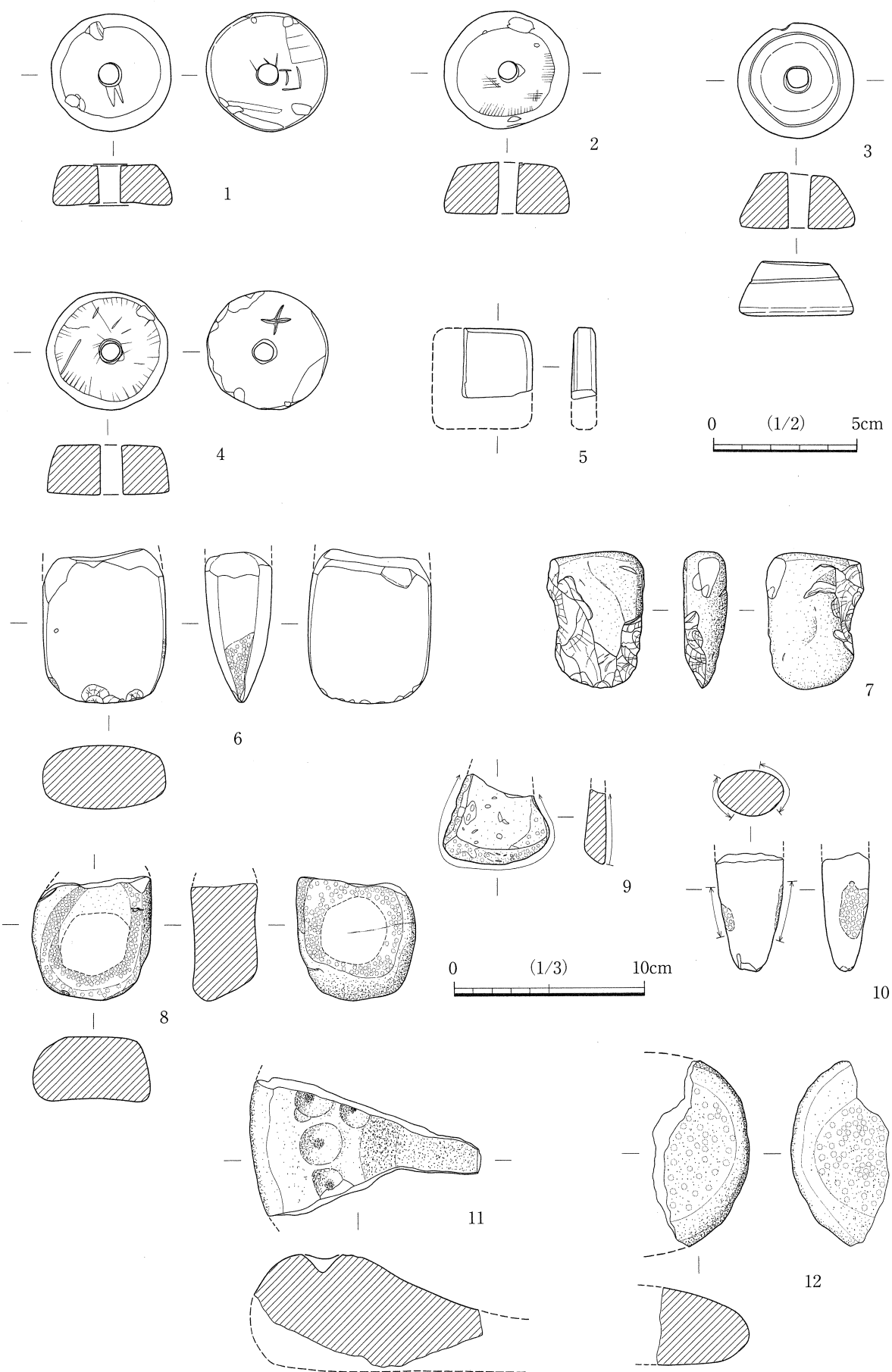
通し 番号	名 称	出土位置等	遺存度	計測値(cm)			重量(g)	備 考
				全長	最大幅	最大厚		
1	砥石	I8	一部	2.8+	3.1+	1.1	11	端部1面有り、板状
2	砥石	N-E	一部	2.65+	5.5	1.0+	16	両端大きく欠損、板状
3	砥石	L11	一部	3.7+	3.7	1.0	16	両端欠損、板状
4	砥石	IN-E	部分	4.3+	4.2	1.2	28	端部有り、板状
5	砥石	IN-B・1号溝	ほぼ完存	9.8	4.6	1.7	123	側面僅かに欠損、板状
6	砥石	IN-E	1/2以	5.8+	3.0	1.3	35	端部僅かに欠損、板状
7	砥石	Q11	部分	3.9+	3.4	0.9	18	一方端部欠損、板状
8	砥石	IN-E	部分	5.7	4.0	1.4	40	周囲を欠損、板状
9	砥石	J10	ほぼ完存	5.35	4.1	1.5	39	表面欠損、板状
10	砥石	B10	ほぼ完存	4.9	3.5	1.2	26	表面欠損、板状
11	砥石	IN-E	部分	5.0	4.5+	1.9	58	片面凹面を呈する
12	砥石	Q11	一部	4.0+	2.8+	2.3	27	柱状砥石
13	砥石	H20	1/2以	5.4+	3.7	2.7	43	両側面凹面を呈し、柱状
14	砥石	I7	1/2以	6.35+	4.7	3.6	120	4側面凹面を呈し、柱状
15	砥石	M11	1/2以	5.5	3.4	2.3	65	一方端部欠損、柱状
16	砥石	IN-E	一部	4.9+	3.1	3.0+	26	柱状
17	砥石	N13	部分	3.5+	2.7	2.65	24	断面円の柱状
18	砥石	D10	ほぼ完存	4.7	4.7	2.0	58	自然石の砥石

紡錘車および石器

通し 番号	名 称	出土位置等	遺存度	計測値(cm)			重量(g)	備 考
				全長	最大幅	最大厚		
1	紡錘車	IN-E	完形	4.1～4.15		1.4	41	底面線刻有り
2	紡錘車	IN-E・W	完形	4.1～4.4		1.8	41	
3	紡錘車	K10	完形	4.0～4.1		2.0	44	側面沈線周る
4	紡錘車	IN-E・E	完形	4.1～4.2		1.75	52	底面線刻有り
5	石帯?	IN-E	1/4	2.4	2.4	0.9	11	各面研磨
6	磨製石斧	33住	基部欠損	8.0	6.45	3.4	288	大型蛤刃
7	打製石斧	IN-B	完形	7.1	5.1	2.35	113	
8	磨石	10住	一部欠損	6.5+	6.25	3.5	239	
9	打製石斧	B10	部分	4.75+	5.6	1.1	40	
10	パンチ	IN-E	端部有り	6.2+	3.5	3.4	81	
11	磨臼	IN-E	部分	12.1+	7.2	5.9+	397	
12	叩き石	N13	1/3	9.7+	5.1+	4.1	248	



第279图 E地区出土遗物(10) 砾石



第280图 E地区出土遗物(11) 石器

1～15は、帯金具類およびそれと類似すると思われる製品である。1は、金銅製帯金具の鉸具で、輪の表面に僅かに鍍金の痕を残している。鉸も銅製で3個を残している。2・3は鉄製の鉸具である。4は、鉄製の鉸具状の製品であるが、中央に止め金具が無いものである。板部の中央に鉸1個を残している。5は欠損が著しいが鉄製の鉸具であろうか。鉸は銅製で2個を残すが、本来は3個となろう。6は分銅型の板状の鉄製品で、2箇所にも鉸を残している。7は銅製の板状の鉈具で、端部4個所に鉸の孔が認められ、肉眼では鍍金の存在は確認できない。8は銅製のやや厚身のある板状の鉈具で、端部縁を面取りし、2個所に鉸の孔が認められる。9は銅製の板状の鉈具で、1個所に鉸の孔が認められる。10は鉄製の板状の鉈具と思われ、2箇所にも鉸の孔が認められる。11は鉄製の板状の鉈具と思われるが段を有し、1箇所にも鉸の孔が認められる。12は銅製の鉸具の輪と思われるものであるが小型品で表面が剥離し遺存状態は良くない。13は銅製の鉸具の止め金具とおもわれ、表面が剥離し遺存状態は良くない。14は銅製袋状の鉈具で、1箇所にも鉸の孔が貫通している。15は2枚の銅板が2次的な加熱をうけ圧せられた様な製品で目釘孔などは存在しない。1～15の帯金具類のうち肉眼観察によって鍍金を確認でき、金銅製品と判断したものは1だけである。

16は、鉄の棒に銅を巻きつけ、金張りした棒状の製品で両端を欠損する。遺存状態は表面が剥離し不良であるが、表面の残存部分には厚く鍍金が残っている。また、残りの良い表面には、径0.5mmほどの円形の輪が刻印され、2条の平行沈線が確認できる。この金銅製品は、一方の欠損部には段を有している。このことから言及はできないが、鍵の可能性が指摘できる。若し、鍵とするならば、錠前もこれと同種の牝金具筒部断面が六角ないし八角の金銅製のものであろう。金銅製の錠前の存在は、合田芳正氏の「古代の鍵」（考古学ライブラリー66 ニューサイエンス社 平成10年）によれば、長岡京跡 SD17020例と正倉院伝世例があるにすぎず、金銅製や銀製の錠前は、「中央・地方政治的・文化的中心地であり、・・・現状では国府級以上の官衙遺跡、あるいは有力寺院などに限定されており、所有層・機関が限られ制限されるものと考えられる」と指摘している。このことから、本遺物は、稻荷台遺跡の性格を考える上で貴重な遺物の一つとなろう。

17は、2 cm 程の板状の金銅製品で、沈線で花卉状の文様が表現された飾り金具の一部であろう。沈線内には、部分的に鍍金が認められる。目釘孔は残っていない。

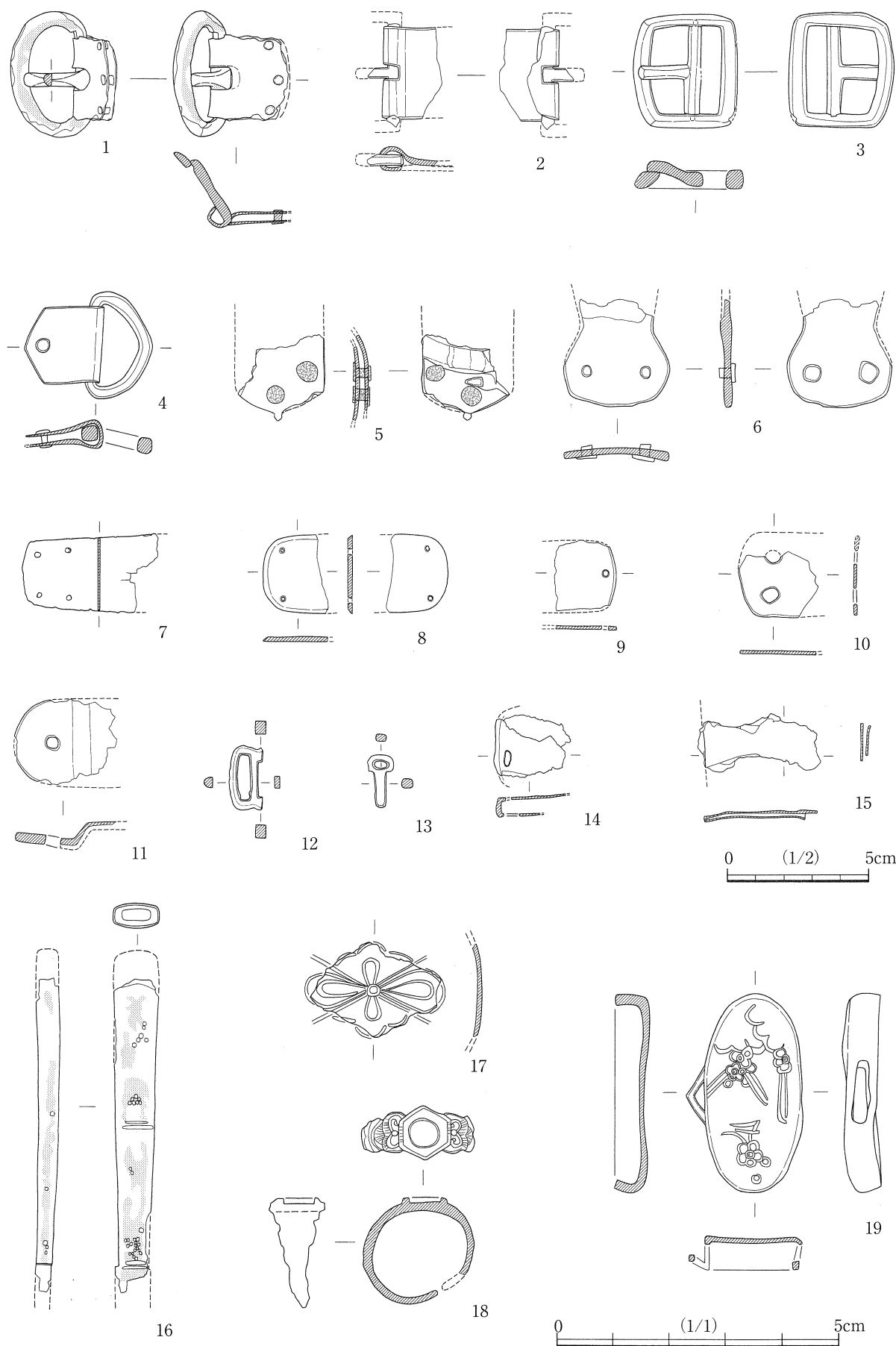
18は、銅製の指輪でほぼ完存するものの表面が剥離する。頭部が六角形で中央に石を入れる為の円の凹が有る。また、リングには、左右対称の毛彫りの文様が表現されている。肉眼では鍍金の存在は確認できない。時期不明な遺物である。

19は、銅製品で木口金具であろうか。正面には、梅花を模したと思われる文様が印刻されている。両側面には、長方形の細長い孔が開き、肉眼では鍍金の存在は確認できない。

胡銅器（第282図20～24）

胡銅器の小片である。20は口縁内面に折り返し気味の段を有し、体部より厚い。21は口縁内面に折り返し、玉状の口縁を呈している。口縁外面には、口縁と平行に2本1対の沈線が巡る。22～23は、僅かに口縁内側に折り返し気味となり口縁端部が厚くなる。

第282図25～33は、不明な銅製品である。25は、肉厚で弧状の縁を有し、端部は角状に面取りされる。一方の面には、数珠の浅い沈線が不規則に観察される。27は、肉厚で半円形の突出部を有し、突出部中央に孔が穿たれている。割れ口には鉄錆が浮き、銅と鉄が溶解し結合した様相を呈している。



第281図 E地区出土遺物(12) 金属製品 1

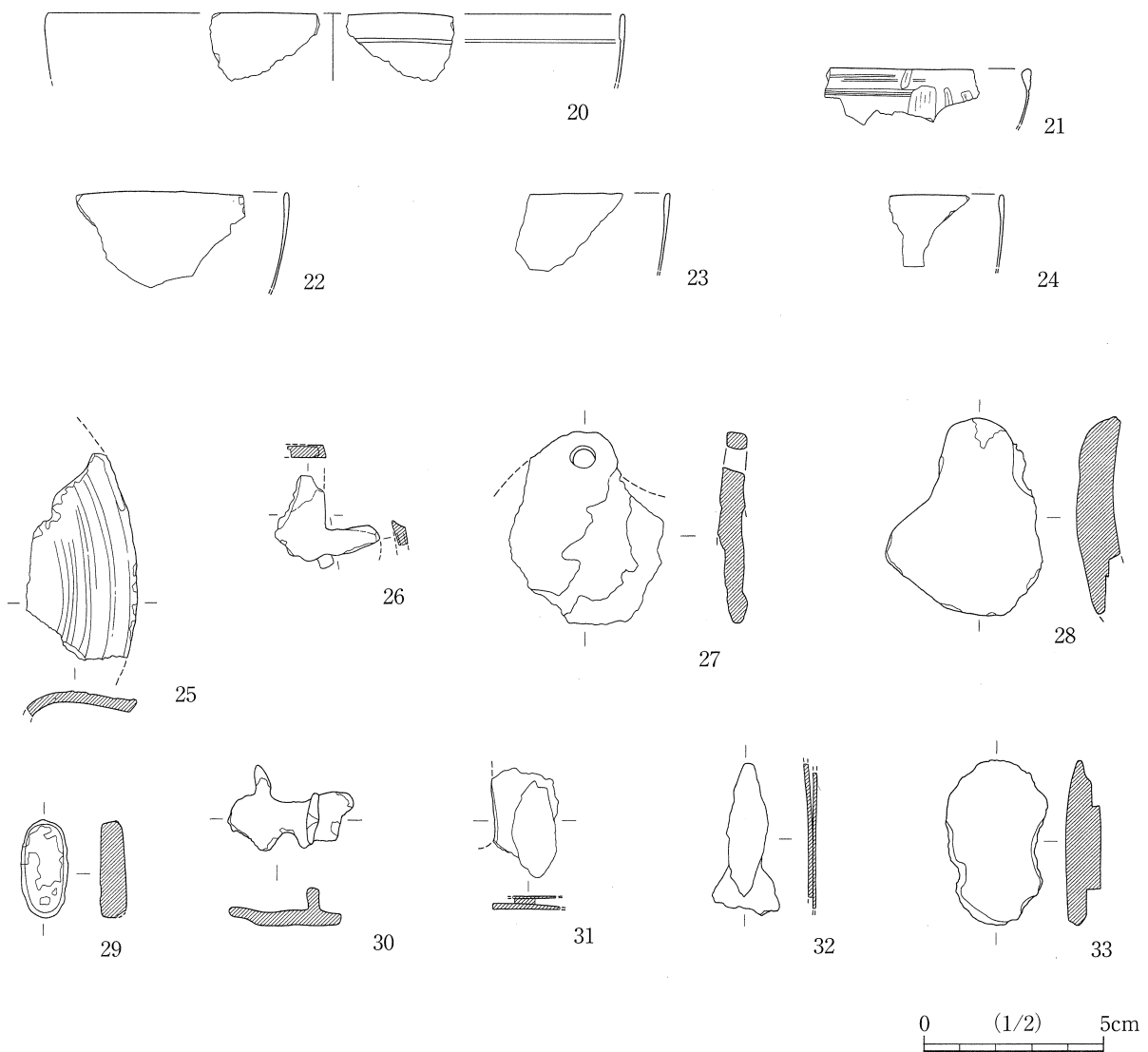
26・28～30は緑青を帯びた銅の鋳物片と看取される。

刀子（第283図34～52）

刀子で、E地区のグリッドや表土剥ぎ後のフルイ作業によって検出されたものである。34・35は切っ先断片。36～38は刃身断片である。39～51は刃身から茎部の断片である。方関や両関などがある。49は近世のものであろうか。51は、関部刃側には目釘状の花文を装飾したものがある。52は、E地区K13ピットから検出され、ほぼ完存する。全長18.3cmを計測する。53は、太刀の茎部金具であろう。

鉄鏃（第283図54～64）

56は刃部が尖鋭で、菱形を呈する。57は刃部が尖鋭で、鋭い三角形の刃部を有する。58は57と同形であるが、鋭い逆刺を有する。59は広根系で切っ先を欠損し、有機質の木質と紐痕が良く残っている。60は刃部が三角形の逆刺を有する。61は60とほぼ同形であるが、鋭い逆刺を有する。62は刃部が二又に分かれる。63は長い刃部を特徴とする。64は細根系の両刃で古墳時代後期の所産である。本遺跡内出土の鉄鏃には、古墳時代のものも多数存在するが、本来は集落と占地を同一にする稲荷台古墳群からの混入遺物である。



第282図 E地区出土遺物 (13) 金属製品 2

第8表 金属製品観察表—①

番号	出土位置等	種別	器 種	遺存度	計 測 値	備 考
1	K13	金銅	帯金具 鉸具	完存	輪部径2.75cm・重量19.3g	3孔鉾残る
2	モリ土	鉄	帯金具 鉸具	一部	現存長3.75cm・幅3.2cm・重量8.5g	
3	I16	鉄	帯金具 鉸具	完存	現存長4.2cm・幅3.9cm・重量18.0g	
4	J14	鉄	帯金具?	完存	現存長4.55cm 板部長2.7cm・幅2.7cm・厚0.44cm 輪部長2.4cm・幅3.85cm・断面0.45cm×0.5cm 重量14.5g	1孔鉾残る
5	モリ土	鉄	帯金具?	一部	現存長3.0cm・幅3.0cm・重量4.4g	3孔か。2孔銅製の鉾残る
6	モリ土	鉄	帯金具?	一部	現存長3.8cm・厚3.7cm・幅0.5cm・重量11.2g	2孔鉾残る
7	IN-E	銅	帯金具 鈍尾	一方欠損	現存長4.8cm・幅2.6cm・厚0.08cm・重量4.4g	4孔
8	モリ土	銅	帯金具 鈍尾	一方欠損	現存長2.8cm・幅2.8cm・厚0.15cm・重量3.1g	2孔
9	M17	銅	帯金具 鈍尾	一方欠損	現存長2.5cm・幅2.5cm・厚0.14cm・重量3.4g	1孔
10	I16	鉄	帯金具 鈍尾	一部	現存長2.8cm・厚0.13cm・重量1.9g	2孔
11	モリ土	鉄	帯金具?	一部	現存長3.6cm・幅3.0cm・厚0.3cm・重量5.0g	1孔
12	K-12	銅	帯金具 鉸具	完存	全長1.0cm・幅2.3cm・厚0.2cm～0.4cm・重量3.4g	
13	モリ土	銅	不明	完存	全長1.9cm・断面径尾。3cm×0.4cm・重量1.3g	
14	IN-E	銅	帯金具 鈍尾	一部	現存長2.65cm・厚0.07cm～0.22cm・重量8.1g	袋状。1孔貫通
15	IN-E	銅	帯金具	一部	現存長4.35cm・厚0.09cm～0.36cm・重量8.6g	袋状
16	IN-E	金銅	鍵	両端欠損	現存長5.6cm・厚0.1cm～0.15cm・断面「径0.4cm×0.75cm・重量1.0g	円形印刻文と平行沈線
17	モリ土	金銅	飾り金具	一部	現存長1.7cm×2.5cm・厚0.11cm・重量6.9g	花文?
18	モリ土	銅	指輪	ほぼ完存	内寸幅0.83cm・高5.6cm 外径幅0.93cm・高0.9cm・頭部径0.95cm・重量2.7g	
19	IN-E	銅	鞘尻	完存	全長3.6cm・幅1.7cm・厚0.1cm～0.16cm・重量6.2g	印刻で梅花文を表現
20	IN-E	銅	胡銅器境	口縁破片	口縁部厚0.18cm・体部厚0.09cm・重量2.7g	内面段
21	IN-E	銅	胡銅器境	口縁破片	口縁部厚0.27cm・体部厚0.07cm・重量3.5g	内面段・口縁外面沈線巡る
22	IN-E	銅	胡銅器境	口縁破片	口縁部厚0.16cm・体部厚0.05cm・重量3.7g	
23	IN-E	銅	胡銅器境	口縁破片	口縁部厚0.16cm・体部厚0.07cm・重量1.8g	
24	IN-E	銅	胡銅器境	口縁破片	口縁部厚0.16cm・体部厚0.07cm・重量1.4g	
25	IN-E	銅	不明	一部	厚0.24cm～0.33cm・重量18.9g	
26	IN-E	銅	金具?	一部	厚0.35cm・重量6.0g	鋳物?
27	IN-E	銅	不明	一部	厚0.5cm～0.66cm・重量47.7g	
28	O11～12	銅	不明	一部	厚0.46cm～1.05cm・重量67.6g	
29	IN-E	銅	不明	一部	全長2.7cm・幅1.3cm・厚0.58cm～0.65cm・重量12.7g	
30	IN-E	銅	金具?	一部	現存長3.5cm・厚0.27cm・0.43cm・重量8.6g	鋳物?
31	IN-E	銅	不明	一部	厚0.06cm～0.19cm・重量5.5g	
32	IN-E	銅	不明	一部	現存長4.25cm・厚0.23cm～0.33cm・重量5.5g	
33	IN-E	銅	不明	一部	厚0.27cm～0.95cm・重量27.9g	
34	J-12	鉄	刀子	切っ先	現存長5.15cm・幅0.79cm・棟厚0.4cm・重量2.5g	
35	IN-E	鉄	刀子	切っ先	現存長5.8cm・幅0.87cm・棟厚0.2cm・重量5.8g	
36	モリ土	鉄	刀子		現存長3.5cm・幅0.86cm・棟厚0.3cm・重量2.2g	
37	A10-Po20	鉄	刀子		現存長4.9cm・幅0.97cm・棟0.3厚cm・重量3.8g	
38	M11	鉄	刀子		現存長3.8cm・幅0.85cm・棟厚0.4cm・重量3.9g	
39	D10-Po12	鉄	刀子	関部	現存長4.6cm・幅1.0cm・棟厚0.5cm・重量3.3g	
40	M11	鉄	刀子	関部	現存長5.2cm・幅0.37cm×0.61cm・棟厚0.2cm・重量1.8g	
41	モリ土	鉄	刀子	関部	現存長4.8cm・幅0.93cm×1.2cm・棟厚0.6cm・重量6.1g	
42	モリ土	鉄	刀子	関部	現存長7.0cm・幅0.87cm×1.0cm・棟厚0.5cm・重量6.6g	
43	J-12	鉄	刀子	関部	現存長5.5cm・幅0.63cm～1.1cm・棟厚0.5cm・重量5.3g	
44	N12	鉄	刀子	関部	現存長6.6cm・幅0.59cm×1.0cm・棟厚0.4cm・重量3.8g	
45	モリ土	鉄	刀子	関部	現存長7.6cm・幅0.72cm×0.91cm・棟厚0.4cm・重量7.6g	
46	IN-E	鉄	刀子	関部	現存長2.7cm・幅0.56cm×1.1cm・棟厚0.25cm・重量1.8g	
47	モリ土	鉄	刀子	関部	現存長7.6cm・幅0.75cm×1.3cm・棟厚0.4cm・重量10.4g	
48	J15-P16	鉄	刀子	関部	現存長9.5cm・幅0.57cm×0.82cm・棟厚0.5cm・重量8.0g	
49	H10Po1	鉄	刀子	関部	現存長6.1cm・幅1.2cm×2.1cm・棟厚0.55cm・重量13.9g	
50	IN-E	鉄	刀子	関部から茎	現存長12.6cm・幅0.7cm×1.3cm・棟厚0.45cm・重量13.8g	
51	a11-Po1	鉄	刀子	関部から茎	現存長6.8cm・幅1.2cm・棟厚0.45cm・重量9.2g	
52	K13-P2	鉄	刀子	ほぼ完存	全長18.3cm・幅0.53cm×0.94cm・棟厚0.4cm・重量15.3g	
53	IN-E	鉄	鋸	完存	現存長3.4cm・径1.4cm×3.4cm・厚0.14cm・重量6.9g	
54	モリ土	鉄	鋸	関部	現存長3.6cm・重量2.8g	

第8表 金属製品観察表—②

番号	出土位置等	種別	器 種	遺存度	計 測 値	備 考
55	F11Po6	鉄	鍬	茎部	現存長6.35cm・重量2.1g	
56	モリ土	鉄	鍬	切っ先	現存長6.6cm・重量6.9g	
57	モリ土	鉄	鍬	切っ先	現存長4.5cm・重量2.6g	
58	J13	鉄	鍬	切っ先	現存長4.0cm・重量4.0g	
59	モリ土	鉄	鍬	切っ先欠損	現存長4.7cm・重量4.7g	木質残存
60	K10-Po9	鉄	鍬	切っ先	現存長6.9cm・重量14.9g	
61	M11西側拵	鉄	鍬	ほぼ完存	現存長10.5cm・重量18.5g	
62	H10-Po3	鉄	鍬	切っ先	現存長5.1cm・重量16.4g	
63	モリ土	鉄	鍬	両端欠損	現存長8.7cm・重量8.5g	
64	モリ土	鉄	鍬	茎部欠損	現存長12.3cm・重量10.1g	
65	N15	鉄	金具か?	ほぼ完存	現存長2.9cm・断面径0.44cm・頭部1.1cm・重量3.7g	
66	モリ土	鉄	円形金具	ほぼ完存	現存長2.8cm・径2.7cm・厚0.2cm・幅1.0cm・重量4.8g	
67	F10	鉄	金具か?	ほぼ完存	内径2.7cm・外径4.5cm・断面0.3cm～1.0cm・重量18.8g	
68	モリ土	鉄	金具か	部分	現存長3.6cm・厚0.6cm～0.9cm・重量4.8g	
69	J11	鉄	釘状金具	ほぼ完存	現存長3.55cm・幅0.49cm・重量4.0g	
70	N15	鉄	金具	ほぼ完存	現存長5.3cm・幅1.3cm・重量5.3g	
71	モリ土	鉄	工具か?	一部	現存長4.9cm・断面径0.49cm×0.5cm・重量6.4g	
72	モリ土	鉄	金具か	部分	現存長3.4cm・頭部輪径2.8cm×3.9cm厚0.62cm	
73	J16	鉄	金具	部分	現存長4.2cm・重量1.8g	
74	J14	鉄	金具	一部	現存長3.0cm・厚0.14cm・幅2.6cm・重量8.4g	
75	モリ土	鉄	金具	部分	現存長6.2cm・重量1.8g	
76	L11ビット	鉄	金具	部分	現存長4.9cm・幅0.45cm～0.76cm・重量8.4g	
77	IN-E	鉄	金具	ほぼ完存	現存長4.9cm・断面0.69cm×0.72cm・重量12.2g	
78	H-16	鉄	金具	ほぼ完存	全長9.2cm・厚0.35cm・幅2.2cm・重量38.8g	
79	モリ土	鉄	紡輪	ほぼ完存	紡輪径4.3cm・厚0.37cm・重量13.3g	
80	A9-Po2	鉄	鎌	一部	現存長7.3cm・幅2.5cm・棟厚0.25cm・重量8.6g	
81	N11	鉄	鎌	一部	現存長8.3cm・幅3.0cm・棟厚0.45cm・重量32.3g	
82	M11	鉄	鎌	一部	現存長3.1cm・厚1.7cm・重量3.9g	
83	モリ土	鉄	鋸	一部	現存長3.7cm・幅1.5cm・棟厚0.2cm・重量1.9g	
84	モリ土	鉄	斧	ほぼ完存	刃部全長9.5cm・刃幅2.1cm 刃部全長13.4cm・刃幅2.25 重量515g	
85	IN-E	鉄	不明	ほぼ完存	現存長3.7cm・断面1.8cm×1.7cm・重量42.2g	
86	I15-P23	鉄	工具	一部	現存長2.6cm・断面0.4cm×0.62cm・重量3.4g	
87	モリ土	鉄	工具	ほぼ完存	現存長6.8cm・断面1.0cm×0.33cm・重量11.4g	
88	モリ土	鉄	楔	両端欠損	現存長7.2cm・幅1.4cm・断面0.57cm×1.4cm・重量17.9g	
89	M11	鉄	楔	両端欠損	現存長7.0cm・幅1.2cm・断面0.66cm×1.2cm・重量17.2g	
90	モリ土	鉄	錠前(牝)	弦部分	現存長6.6cm・断面1.3cm×1.6cm・重量59.3g	
91	E10	鉄	鍵(牝)	弦部一部	現存長5.45cm・断面0.7cm×0.9cm・重量11.8g	
92	モリ土	鉄	錠前(牝)	弦部分	現存長5.0cm・厚1.2cm・重量27.8g	
93	J13-P9	鉄	クルル	部分	現存長8.05cm・断面0.8cm×0.85cm・重量20.1g	
94	モリ土	鉄	錠	前(牝)	筒部と弦部 現存長5.0cm・厚1.2cm・重量27.8g	
95	モリ土	鉄	錠前(牡・牝)	ほぼ完存	現存長13.3cm・厚1.65cm・重量113.0g	
96	M11	鉄	釘	先端欠損	現存長4.4cm・断面0.45cm×0.61cm・重量3.1g	
97	L14	鉄	釘	先端欠損	現存長3.1cm・断面0.57cm×0.58cm・重量3.5g	
98	A10-Po20	鉄	釘	両端欠損	現存長3.7cm・断面0.4cm×0.4cm・重量2.6g	
99	P11	鉄	釘	両端欠損	現存長4.2cm・断面0.52cm×0.65cm・重量3.7g	
100	モリ土	鉄	釘	先端欠損	現存長3.9cm・断面0.37cm×0.62cm・重量4.3g	
101	M11	鉄	釘	先端欠損	現存長3.0cm・断面0.28cm×0.35cm・重量2.7g	頭部断面半円状
102	モリ土	鉄	釘	頭部	現存長3.4cm・断面0.64cm×0.77cm・重量26.3g	
103	H11-Po1	鉄	釘	先端欠損	現存長11.5cm・断面0.66cm×0.69cm・重量26.3g	
104	E11	鉄	釘	先端欠損	現存長6.4cm・断面0.63cm×0.76cm・重量7.3g	
105	モリ土	鉄	釘	ほぼ完存	現存長6.9cm・断面0.42cm×0.54cm・重量4.0g	
106	A10-Po15	鉄	釘	先端欠損	現存長5.4cm・断面0.47cm×0.49cm・重量4.0g	
107	M11	鉄	釘	先端欠損	現存長6.8cm・断面0.64cm×0.78cm・重量12.3g	
108	I13-P12	鉄	釘	先端欠損	現存長7.6cm・断面0.59cm×0.76cm・重量12.7g	
109	Q11	鉄	釘	両端欠損	現存長5.2cm・断面0.76cm×0.83cm・重量7.3g	
110	J13-P15	鉄	釘	両端欠損	現存長7.1cm・断面0.35cm・重量3.7g	
111	モリ土	鉄	釘	先端欠損	現存長5.5cm・断面0.44cm×0.54cm・重量6.1g	
112	F10-Po8	鉄	釘	両端欠損	現存長5.25cm・断面0.55cm×0.64cm・重量5.6g	
113	L16	鉄	釘	先端欠損	現存長2.5cm・断面0.36×0.47cm・重量1.9g	
114	N15	鉄	釘	両端欠損	現存長3.1cm・断面0.43cm×0.46cm・重量3.3g	
115	モリ土	鉄	釘	先端欠損	現存長2.5cm・断面0.3cm×0.36cm・重量1.2g	
116	モリ土	鉄	釘	先端欠損	現存長3.5cm・断面0.49cm×0.61cm・重量3.2g	
117	L17-2	鉄	釘	先端欠損	現存長5.2cm・断面0.8cm×0.81cm・重量6.2g	
118	J13	鉄	釘	先端欠損	現存長5.4cm・断面0.6×0.66cm・重量11.1g	
119	IN-E	鉄	釘	先端欠損	現存長9.5cm・断面0.67cm×0.77cm・重量16.2g	

第 8 表 金属製品観察表—③

番号	出土位置等	種別	器 種	遺存度	計 測 値	備 考
120	モリ土	鉄	釘	ほぼ完存	現存長9.45cm・断面0.62cm×0.63cm・重量7.9g	
121	O11	鉄	釘	先端欠損	現存長6.6cm・断面0.52cm×0.58cm・重量7.9g	
122	モリ土	鉄	釘	先端欠損	現存長6.0cm・断面0.55cm×0.64cm・重量6.9g	
123	モリ土	鉄	釘	先端欠損	現存長5.2cm・断面0.56cm×0.65cm・重量6.9g	
124	J13-P1	鉄	釘	頭部欠損	現存長6.3cm・断面0.36cm×0.42cm・重量3.7g	
125	Q11	鉄	釘	頭部欠損	現存長5.8cm・断面0.42cm×0.57cm・重量3.8g	
126	I12	鉄	釘	頭部欠損	現存長5.3cm・断面0.29cm×0.4cm・重量3.3g	
127	K13-P2	鉄	釘	頭部欠損	現存長4.8cm・断面0.42cm×0.48cm・重量3.6g	
128	J13-P15	鉄	釘	頭部欠損	現存長6.4cm・断面0.5cm×0.54cm・重量3.4g	
129	J13-P1	鉄	釘	頭部欠損	現存長7.0cm・断面0.47cm×0.57cm・重量7.3g	
130	I7-P19	鉄	釘	両端欠損	現存長6.1cm・断面0.8cm×0.82cm・重量10.0g	
131	モリ土	鉄	釘	頭部欠損	現存長5.9cm・断面0.91cm×1.1cm・重量14.5g	
132	J12	鉄	釘	両端欠損	現存長5.3cm・断面0.71cm×0.83cm・重量9.5g	
133	L10-Po1	鉄	釘	両端欠損	現存長5.6cm・断面0.51cm×0.66cm・重量5.6g	
134	モリ土	鉄	釘	両端欠損	現存長4.6cm・断面0.57cm×0.6cm・重量4.1g	
135	E11	鉄	釘	両端欠損	現存長5.4cm・断面0.51cm×0.54cm・重量3.8g	
136	J9-Po2	鉄	釘	両端欠損	現存長4.1cm・断面0.61cm×0.65cm・重量4.5g	
137	モリ土	鉄	釘	両端欠損	現存長3.3cm・断面0.47cm×0.53cm・重量1.7g	
138	A10-Po20	鉄	釘	両端欠損	現存長3.6cm・断面0.25cm×0.57cm・重量3.6g	
139	L11	鉄	釘	頭部欠損	現存長4.1cm・断面0.79cm×0.85cm・重量5.1g	
140	K10-Po6	鉄	釘	両端欠損	現存長3.6cm・断面0.4cm・重量0.4g	
141	J12	鉄	釘	両端欠損	現存長3.3cm・断面0.5cm×0.5cm・重量2.7g	
142	R11	鉄	釘	両端欠損	現存長4.2cm・断面0.39cm×0.43cm・重量3.7g	
143	モリ土	鉄	釘	両端欠損	現存長5.4cm・断面0.61cm×0.74cm・重量8.4g	
144	モリ土	鉄	釘	先端欠損	現存長5.8cm・断面0.7cm×0.95cm・重量2.1g	
145	F10	鉄	釘	両端欠損	現存長4.5cm・断面0.37cm×0.45cm・重量2.0g	
146	J13	鉄	釘	頭部欠損	現存長4.0cm・断面0.39×0.51cm・重量3.1g	
147	F10-Po3	鉄	釘	両端欠損	現存長5.45cm・断面0.51cm×0.63cm・重量4.5g	
148	モリ土	鉄	釘	両端欠損	現存長6.0cm・断面0.29cm×0.31cm・重量2.8g	
149	M17	鉄	釘	両端欠損	現存長2.0cm・断面0.25cm×0.3cm・重量0.5g	
150	L11	鉄	釘	両端欠損	現存長5.2cm・断面0.69cm×0.58cm・重量0.73g	Lの字状に屈曲
151	J14	鉄	釘	両端欠損	現存長3.8cm・断面0.38cm×0.40cm・重量2.5g	Lの字状に屈曲
152	モリ土	鉄	釘	両端欠損	現存長4.1cm・断面0.39cm×0.47cm・重量3.6g	
153	モリ土	鉄	釘	両端欠損	現存長5.2cm・断面0.46cm×0.48cm・重量4.2g	
154	モリ土	鉄	釘	両端欠損	現存長4.1cm・断面0.42cm×0.78cm・重量6.2g	Lの字状に屈曲
155	L10-Po9	鉄	釘	両端欠損	現存長3.8cm・断面0.36cm×0.42cm・重量5.6g	コの字状に屈曲
156	モリ土	鉄	釘	頭部欠損	現存長2.8cm・断面0.34cm×0.37cm・重量1.4g	
157	a-10	鉄	釘	先端欠損	現存長5.2cm・断面0.63cm×0.72cm・重量4.2g	
158	a10-Po4	鉄	釘(頭部)	頭部のみ	重量8.5g	
159	A10-Po20	鉄	釘	両端欠損	現存長2.65cm・断面0.25cm×0.28cm・重量0.9g	
160	K13-Po9	鉄	釘	完存	現存長7.2cm・断面0.65cm×0.66cm・重量12.6g	Lの字状に屈曲

金具類 (第284図65～79)

金具類で、時代の見分けが困難な物が多数存在する。75や78は明らかに近代のものである。古代のものでは、79の紡錘車の紡輪がある。

鎌 (第285図80～82)

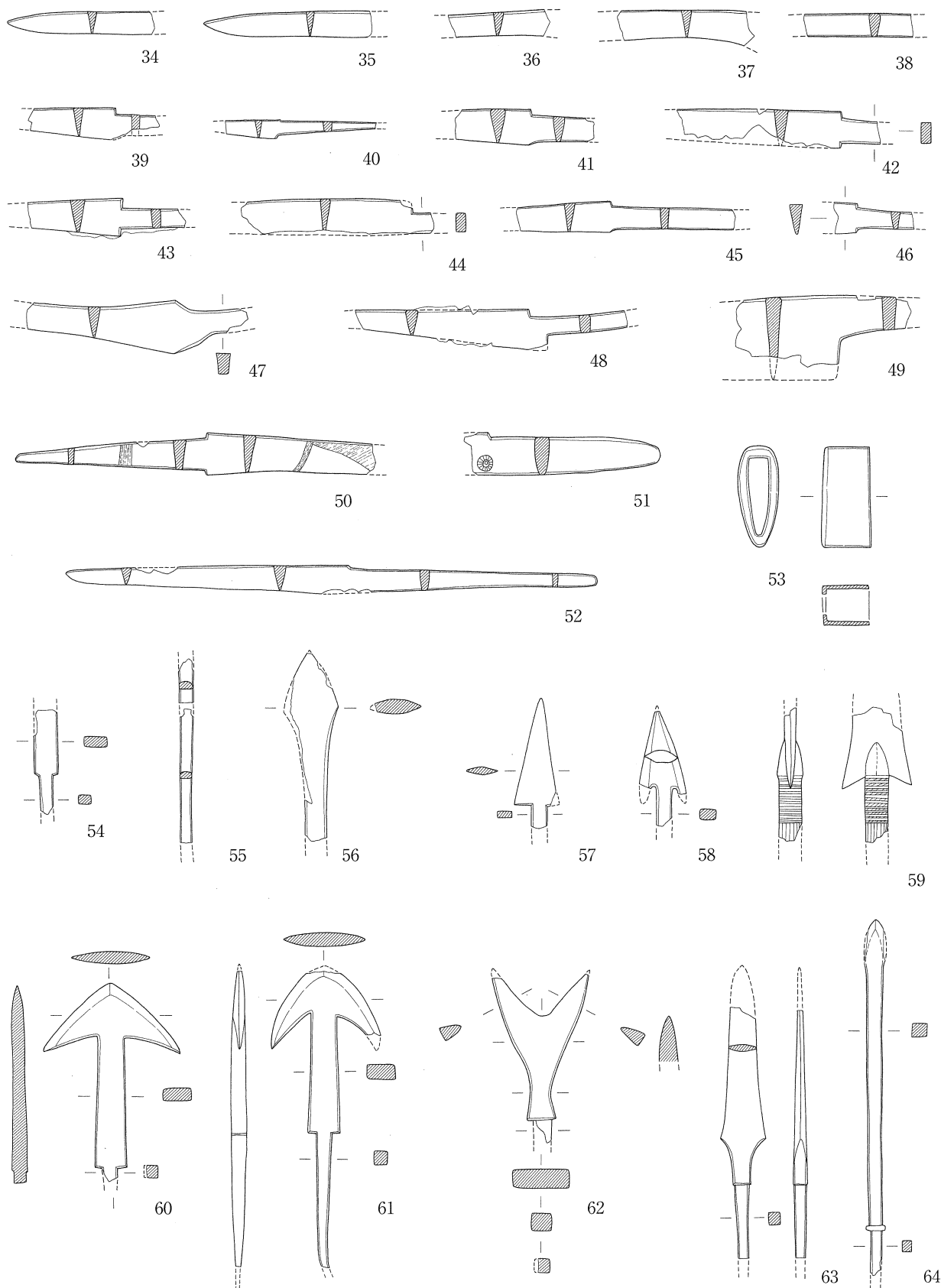
鎌の基部断片でE地区から検出されたものである。遺跡内では、2・4・29・57号住居跡から良好な状態で検出されている。

鋸 (第285図83)

鋸の断片でE地区の表土剥ぎ後のフルイ作業によって検出されたものであるが、時期は不明である。現存長3.7cm・幅1.5cm・厚さ0.2cmを計測する。

鉄斧 (第285図84)

大小の鉄斧が入れこで検出されたものである。大形のもの、全長13.4cm・刃部幅2.25cm、小型は9.5cm・刃部幅2.1cmを計る。遺跡内では他に、33住から検出されている。この2点の鉄斧は入れこであることから、当初から柄の装着がない。



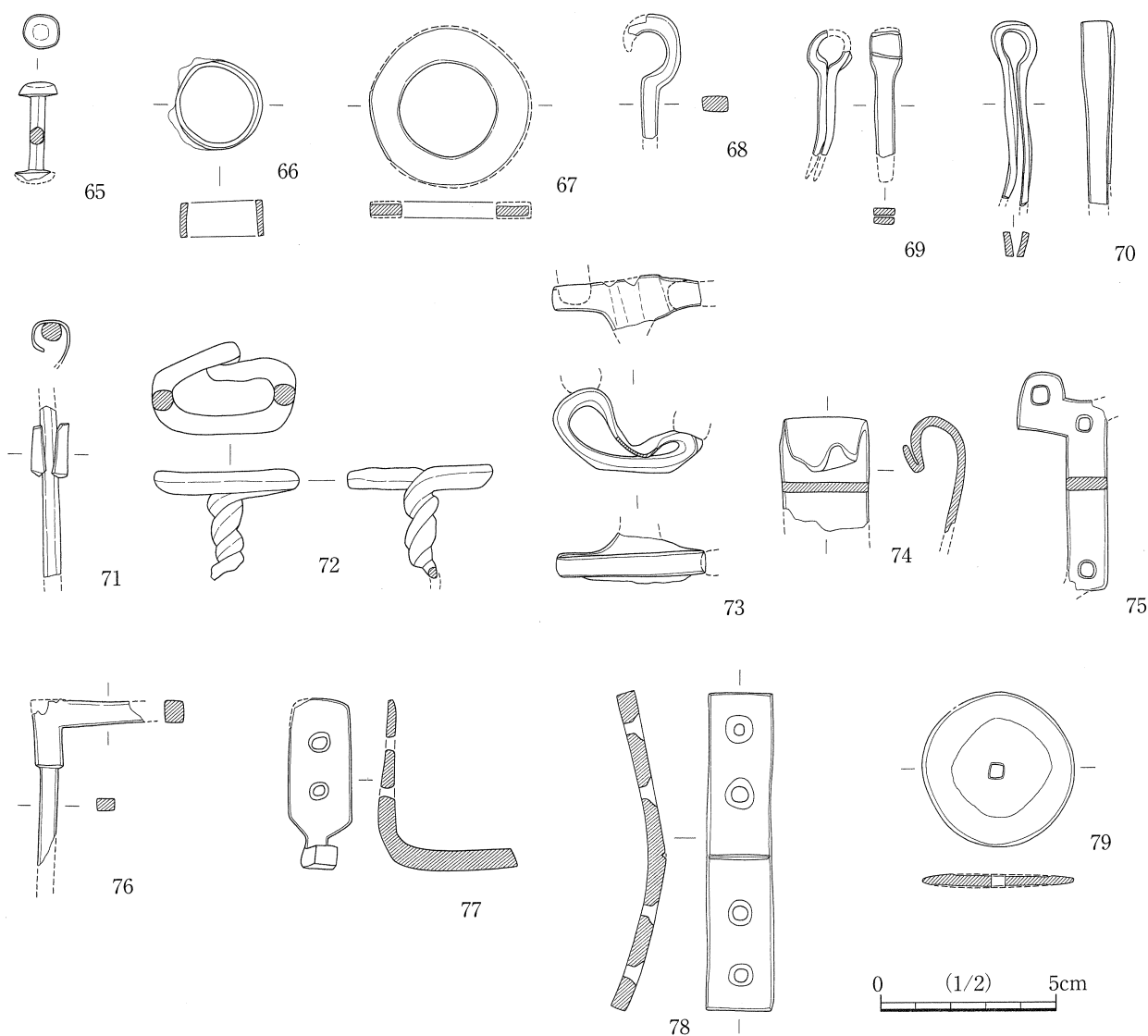
第283図 E地区出土遺物 (14) 金属製品 3

工具類 (第285図85～89)

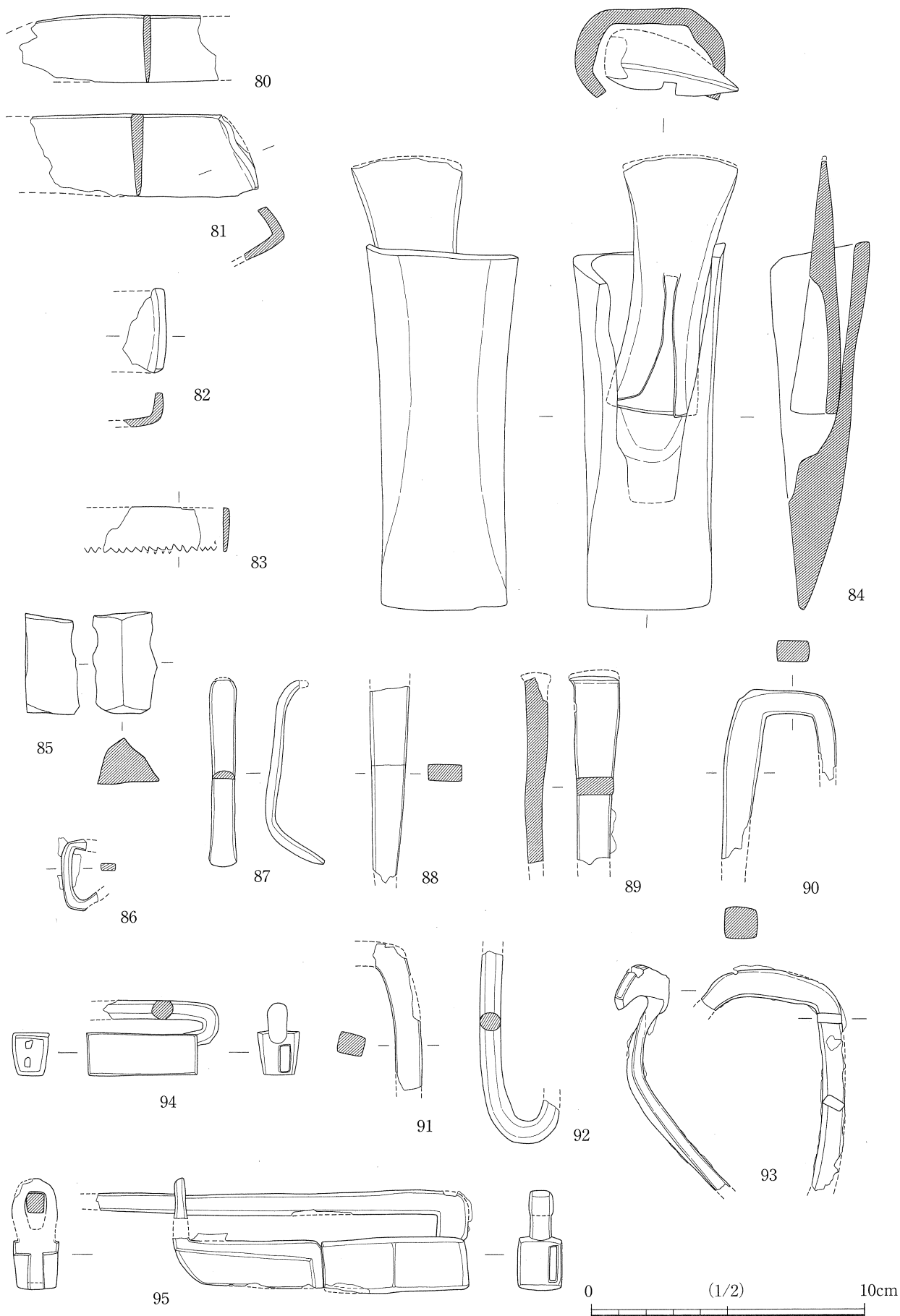
工具と思われる製品である。80は断面三角形の鉄片。87は断面半円弧状の両端が丸身を有し薄くなっている。88・89は断面長方形の肉厚の釘状を呈し、89の頭部には僅かに打たれ痕跡が感じ取れ、クサビと思われる。

錠前およびクルル (第285図90～92)

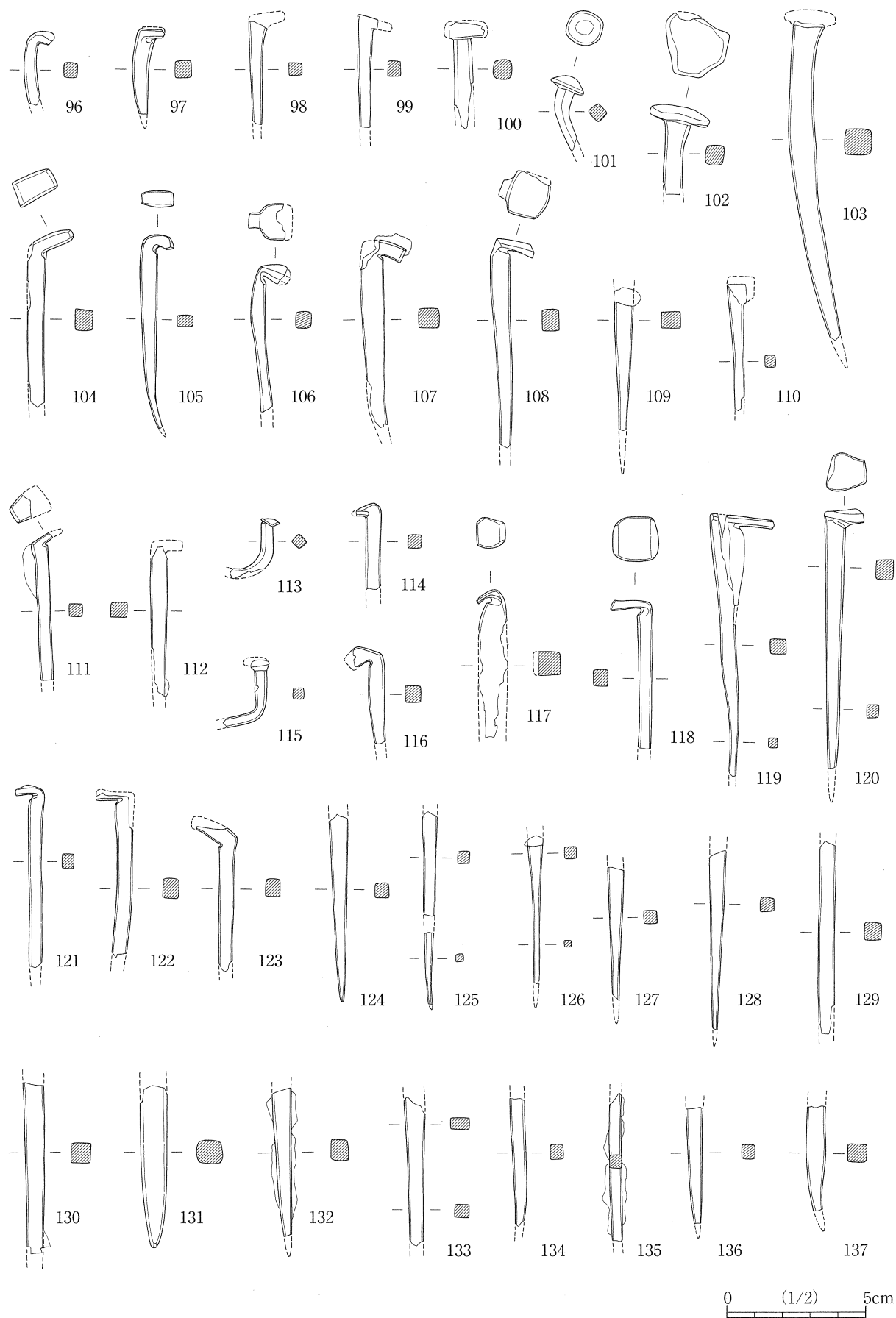
90は錠前牝金具弦部の一部で、断面 1.3×1.6 cm の肉厚の長方形、91はやや細身の断面 0.7×0.9 cm 長方形、92は断面径0.8cm 円形を呈する。94は、錠前牝金具弦部と筒部とからなる、筒部は4.1cm・断面1.6cm の角状で僅かに弦部側が広い逆台形を呈する。バネ受板には2孔が開き、鍵穴は縦長の長方形である。95は錠前牡牝の装着されたものである。弦部端を欠損するがほぼ完存する。弦部現存長13.1cm・筒部長6.6cm、牡金具弦受け部長5.3cm を計測し、鍵穴は縦長の長方形を呈している。



第284図 E地区出土遺物 (15) 金属製品 4



第285図 E地区出土遺物 (16) 金属製品 5



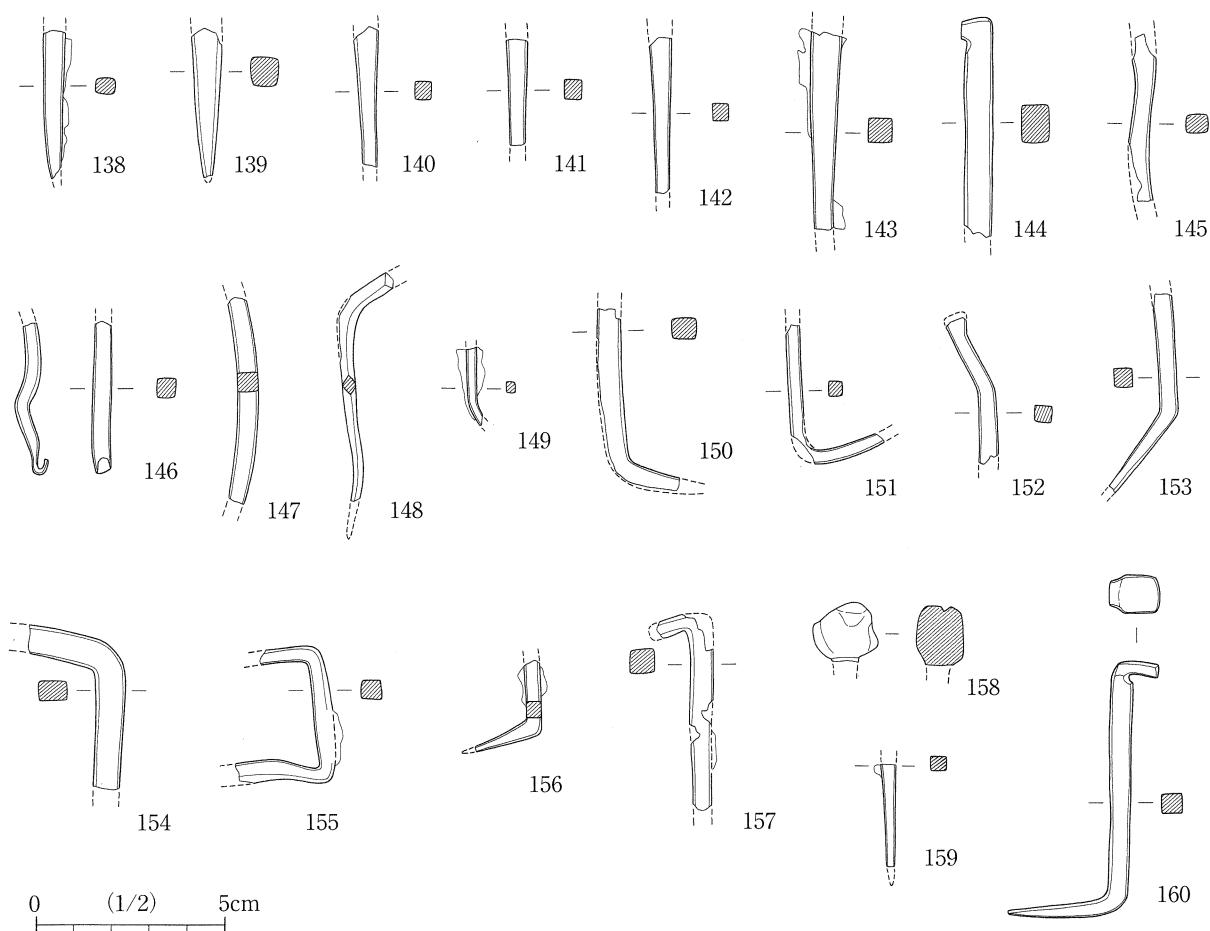
第286図 E地区出土遺物 (17) 金属製品 6

釘 (第286・287図)

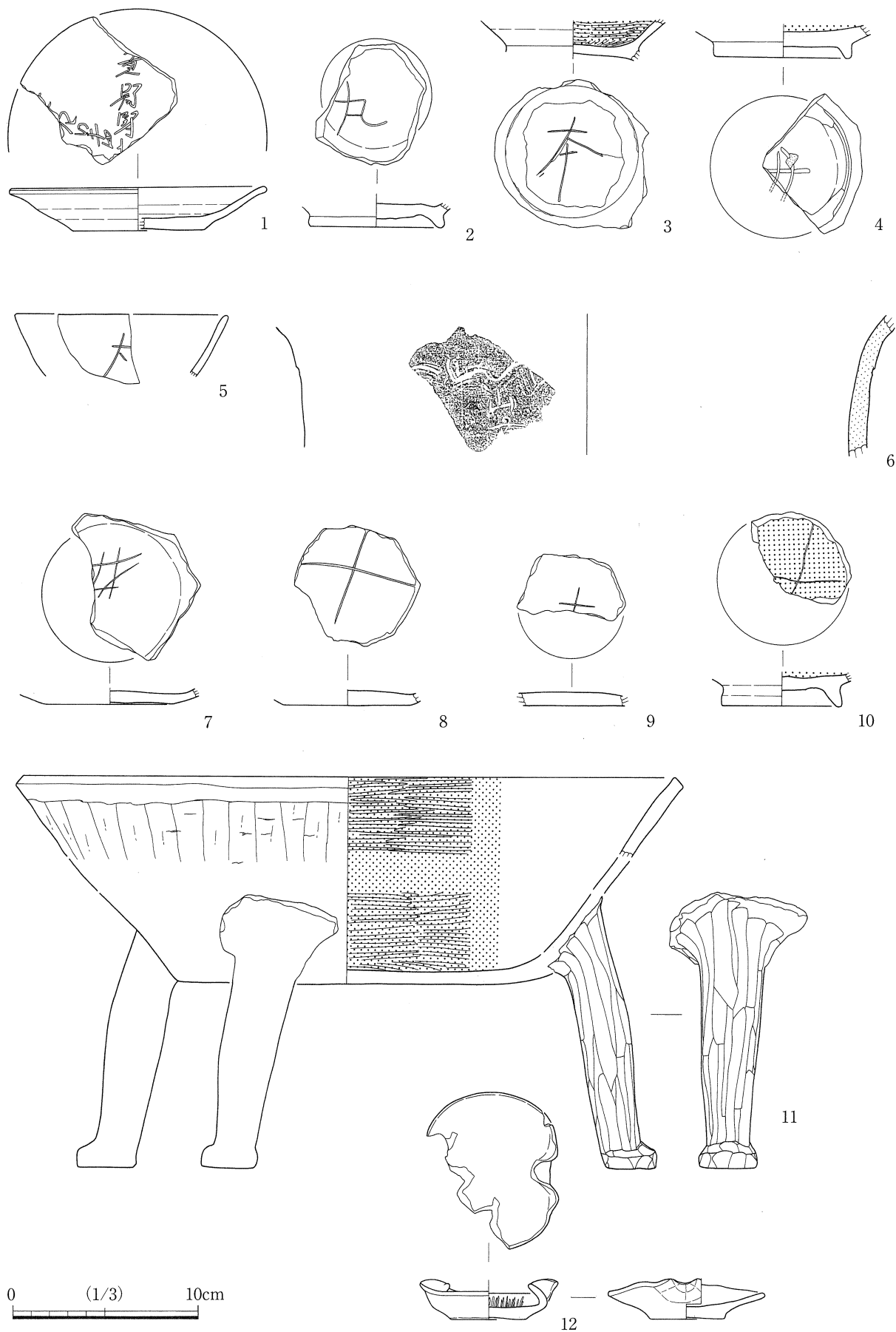
釘で、E地区のグリッドや表土剥ぎ後のフルイ作業によって検出されたものである。原形をとどめるものは、119・120・160の3点にすぎない。101は頭部が盛り上がり半円球状を呈する。119は先端部を僅かに欠き、現存長9.5cm。120は現存長9.45cmを計測し、原形は10cm強の製品となろう。160は屈曲するが完存し、全長9.5cmを計測する。

線刻土器 (第288図1～10)

線刻土器である。1はロクロ土師器皿内面に焼成前の線刻がある。ロクロ土師器皿は、全体の5分の1程の遺存で、推定口径13.8cmで底部は回転糸切り無調整である。全体に肉薄で、9世紀後半代の同種の皿と質感が異なっている。線刻は、放射状に書かれた2列の字が読み取れる。冒頭の1字ないし2文字はそれぞれ欠損し不明で「□真カ□□」と「□部番カニカ」と見える。2はロクロ土師器高台付坏の底部内面に焼成後に「丸」を線刻する。3は内黒ロクロ土師器高台付坏で底部外面に焼成後に「本」を線刻する。4は内黒ロクロ土師器高台付坏で底部外面に焼成前に「□」を線刻する。4はロクロ土師器坏体部小片で外面に焼成前に「大」を線刻する。6は須恵器大甕で頸部外面に焼成前に「山□」の線刻がある。7は焼成前にロクロ土師器坏底部内面に「井カ」の線刻がある。8～9の底部内面には、焼成後の「×」がある。10は内黒ロクロ土師器高台付坏で焼成後の「×」がある。



第287図 E地区出土遺物 (18) 金属製品 7



第288図 E地区出土遺物 (19) 線刻土器と特殊な土器

獣脚盤形土器（第288図11）

接合しない獣脚と胎土焼成の酷似した土器口縁部で復元実測した土器である。獣脚は1本の検出で、脚外面の整形は鋭い刃物で削ぎ落とされ、面には光沢がある。内面は内黒で光沢のあるミガキである。口縁は、シャープなコの字を呈し、体部外面には縦位の篋削りを施している。獣脚盤はこの他に、古墳群調査時に稲荷台3号墳から出土する、301図-47が存在している。

土師器耳皿（第288図12）

土師器耳皿で、3分の1ほどの遺存である。口縁径8.4cm・器高2.1cmを計測し、内面にはミガキが施されている。

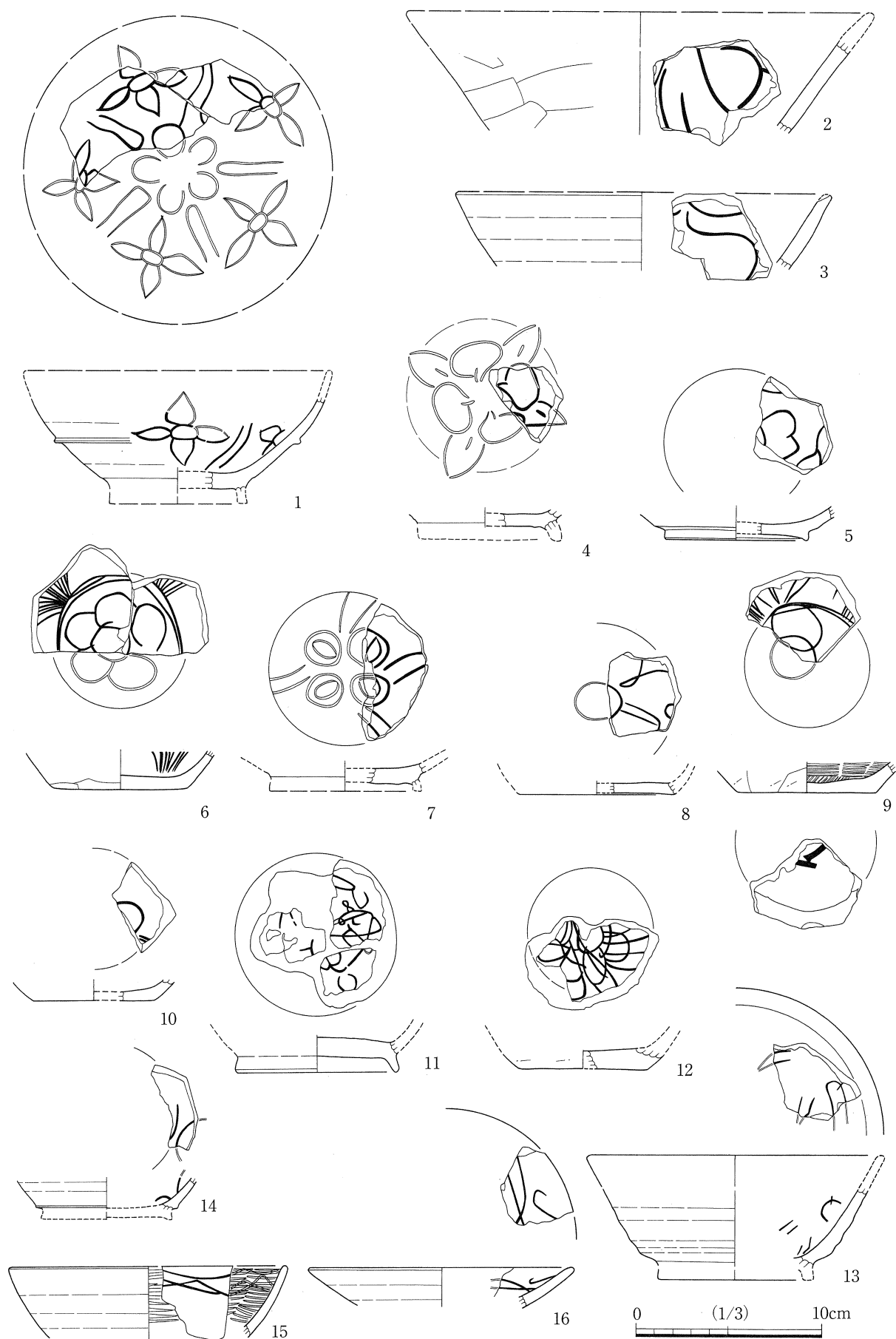
暗文土器（第289・290図）

本遺跡の出土土器で特徴的なものに灰釉・緑釉の施釉陶器が存在するが、この暗文土器も本遺跡の特徴的な土器の一つである。内面内黒で光沢の有るミガキを基本とするが、26・28・29はミガキを施すだけである。何れも小片でフルイ作業によって検出された遺物が大半であるが、17が3号土器廃棄遺構から検出され時期と全体を把握できる資料で祭祀に使用された器であることが分かる。

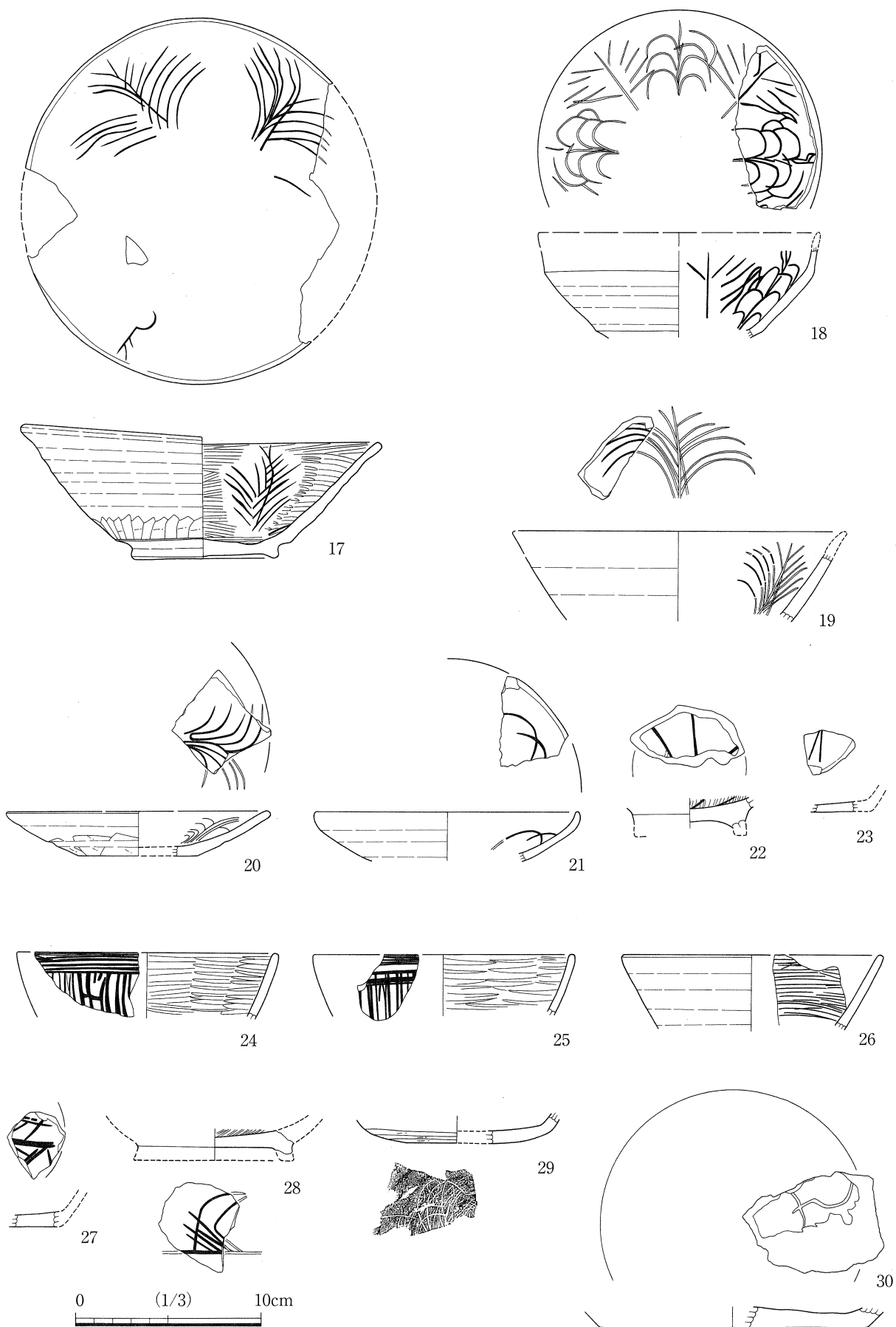
1は、ロクロ土師器高台付椀で体部中位に突帯が巡る特異な器形で、抽象化された花文が描かれている。2は体部小片で、体部外面が削り状の篋ナデが施されることと、肉厚の破片から大型台付鉢の様な器形と思われる。3はやや大型の高台付椀と思われる器形で、緑釉緑彩花文同様の宝相華文が描かれている。4・5は高台付椀底部破片で抽象化された花文が描かれている。5のロクロ土師器高台は削り出し状を呈している。6は無高台のロクロ土師器坏で底部中央に円形を配し周りに5個ないし6個の円形暗文を配し、体部には秋草文が表現されている。7は中央の暗文が不明であるが、二重の円形文が描かれている。9は6と同様な底部に円形と体部に秋草暗文が描かれ、底部外面に不明墨書がある。11・12は、不規則な円や弧状の線が表現される。17はほぼ完形の削り出し状の高台付坏で秋草文を2箇所に配し反対側には不明な線が描かれている。18は体部上半が屈曲する器形で直線的な秋草文と弧状の秋草文が描かれている。19・20も秋草文が表現されるものであろう。22・23は放射状の直線が描かれる。24・25は、外面の口縁に横位、体部に縦位の強い圧痕により暗文状に表現されるが、1～23とは区別されるものである。26も同様である。28は底部外面に暗文状に表現され、秋草文や花文とは明らかに違うものである。29は丸底気味の回転篋削り土師器坏で不規則な曲線が描かれる。30は大型の坏または鉢底部と思われ、内面はミガキである。このうち共伴遺物が有り時期が明らかなものは、17の3号土器廃棄遺構品で灰釉陶器椀の共伴によりⅣ期-a時期が想定されている。

これらの暗文花文土器の器種では、高台付椀・無高台坏・皿・鉢が有るが、高台付椀・無高台坏が多数を占めている。暗文は、1～5の緑釉陶器花文を模倣したものと思われ、抽象化された花文を描いている。6～9の円形文は、花文をより抽象化したものと看取され時期差が感じられ、抽象化された物には無高台坏が多数を占めている。出土状況が明らかな17は、3号土器廃棄遺構から実測可能なロクロ坏63固体と灰釉陶器椀1固体が検出されている。このロクロ坏の中には、当遺跡で特徴的な墨書土器の「丸」4固体と「土」3固体が出土し、土器廃棄は祭祀供膳具に伴うものと思われる。暗文土器は、このロクロ坏63固体の中の1固体で、灰釉陶器椀1固体と同様な器種構成となっている。このことは、この種の土器の使用法を強く示唆するもので、土器の性格付けとなろう。

瓦（第291～293図）



第289图 E地区出土遺物 (20) 暗文花文土器 1



第290图 E地区出土遗物 (21) 暗文花文土器 2

第9表 線刻・暗文土器観察表

線刻土器

通し 番号	出土位置等	種別	器種	遺存度	法 量			技 法			胎土	色 調	焼成	備考
					口径	底径	器高	頸径	胴径	内面	外面	底外面		
1	IN-EE	ロクロ土師	坏	部分	13.8	9.0	2.3			ロクロ		回転糸切り	良好	焼成前線刻坏内面
2	IN-E	ロクロ土師	高台付坏	底部 1/2	-	(7.0)	1.4+						良好	焼成後線刻底部内面「丸」
3	IN-EE	ロクロ土師	坏	底部のみ	-		2.1+			ミガキ	ロクロ		良好	焼成後線刻底部外面「本」
4	H7	ロクロ土師	内黒土器 高台付坏	底部 1/4	-	(7.4)	1.8+			ミガキ	ロクロ		良好	焼成前線刻底部外面「サ」?
5	37住+ J8	ロクロ土師	坏	口縁片	(11.4)	-	3.3+						良好	焼成前線刻底部外面「大」
6	IN-EE	須恵器	大甕	頸部破片									良	焼成前頸部外面「山□」
7	IN-E	ロクロ土師	皿	底部 1/2	-	(6.8)	0.9+				回転鋭削り		良	焼成前線刻底部内面
8	IN-E	ロクロ土師	坏	底部片	-	(6.8)	0.9+				回転鋭削り		良好	焼成後線刻底部内面
9	IN-E	ロクロ土師	坏	底部のみ 1/2	-	-	-						良好	焼成後線刻底部内面「×」
10	IN-EE	ロクロ土師	高台付坏 内黒土器	底部	-	(6.4)	1.8+						良好	焼成後線刻底部内面「×」
11	IN-EE	土師器	獸脚	脚と体部 一部						ミガキ				
12	IN-E	ロクロ土師	内黒土器 耳皿	2/3	8.9	4.0 4.1	2.2					回転糸切り	良好	

暗文土器

通し 番号	出土位置等	種別	器種	遺存度	法 量			技 法			胎土	色 調	焼成	備考
					口径	底径	器高	頸径	胴径	内面	外面	底外面		
1	N13	ロクロ土師	高台付坏 内黒土器	体部一部	(16.5)	(7.2)	-			光沢ある丁寧 なミガキ	ロクロ		良好	体部外面突帯回る 花文
2	IN-E	ロクロ土師	大型坏? 内黒土器	体部破片	(25.0)	-	-			光沢ある丁寧 なミガキ	ロクロ 手持ち鋭削り		良好	花文
3	IN-EE	ロクロ土師	大型坏 内黒土器	口縁破片	(20.0)	-	-			光沢ある丁寧 なミガキ	ロクロ		良好	花文
4	IN-E	ロクロ土師	高台付坏 内黒土器	底部破片	-	(7.5)	-			光沢ある丁寧 なミガキ			良好	花文
5	IN-E	ロクロ土師	高台付坏 内黒土器	底部破片	-	7.6	1.8+			光沢ある ミガキ			良好	削り出し状の輪高台 花文
6	IN-EW	ロクロ土師	坏	底部 1/2	-	(7.2)	2.1+			光沢ある丁寧 なミガキ	ロクロ 手持ち鋭削り	削り状の鋭ナ	良好	抽象化した花文と秋草文
7	IN-E	表採ロクロ土師	高台付坏 内黒土器	底部 1/3	-	(8.0)	-			光沢ある丁寧 なミガキ			良好	抽象化した花文
8	IN-E	ロクロ土師	坏	底部一部	-	(8.2)	-			光沢ある丁寧 なミガキ		丁寧な 手持ち鋭削り	良好	抽象化した花文
9	12住+	ロクロ土師	内黒土器 坏	底部一部	-	(7.4)	1.7+			光沢ある ミガキ	ロクロ 手持ち鋭削り		良好	「□」? 底部外面不明墨書 抽象化した花文と秋草文

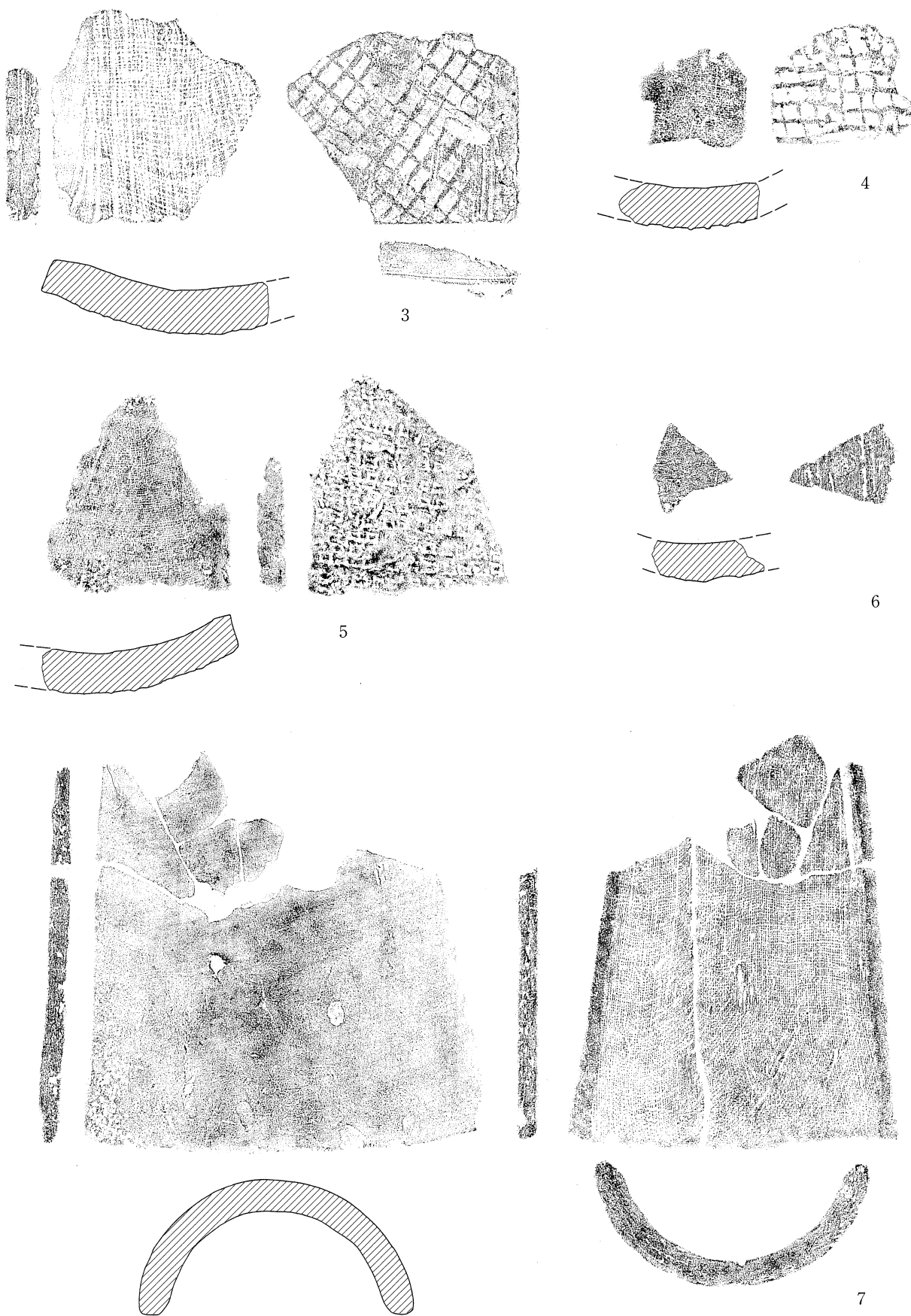
第9表 線刻・暗文土器観察表

暗文土器

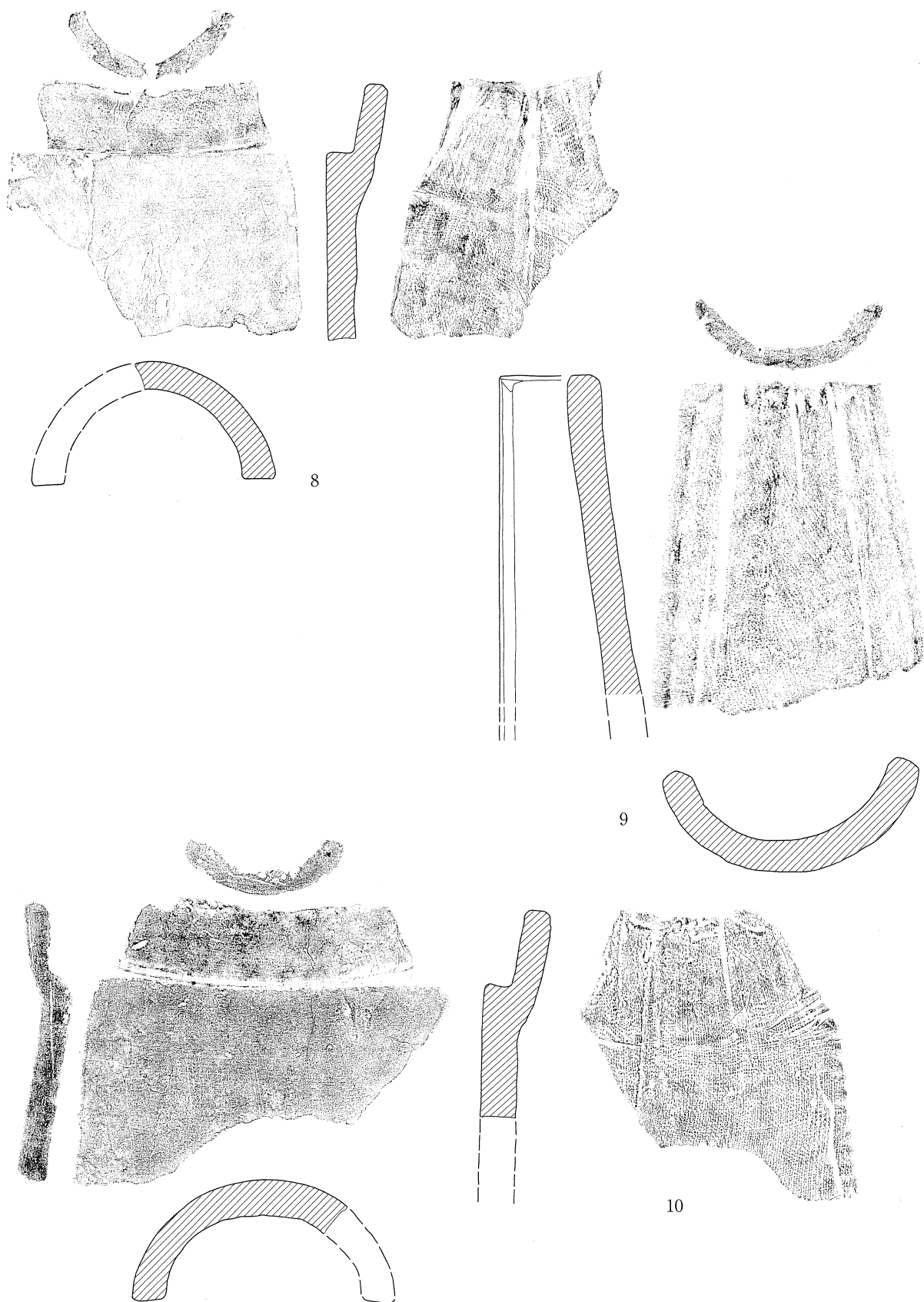
通し 番号	出土位置等	種別	器種	遺存度	法 量			技 法			胎土	色調	焼成	備考
					口径	底径	器高	頸径	胴径	内面	外面	底外面		
10	IN-E	ロクロ土師	坏 内黒土器	底部破片	-	(6.4)	-			光沢ある ミガキ			良好	茶褐色
11	K-17P1	ロクロ土師	高台付坏 内黒土器	底部 1/3	-	(8.8)	-			ミガキ		回転鑑割り	良好	茶褐色
12	IN-E	ロクロ土師	坏 内黒土器	底部一部 1/3	-	(6.8)	1.1			ミガキ	回転鑑割り	回転鑑割り	良好	橙色
13	IN-E	ロクロ土師	高台付坏 内黒土器	底部一部	-	-	4.0+			光沢ある丁寧 なミガキ	ロクロ		良好	明茶褐色
14	IN-E	ロクロ土師	高台付坏 内黒土器	底部破片	-	-	-			ミガキ	ロクロ		良好	明褐色
15	IN-E	ロクロ土師	坏 内黒土器	口縁一部	(15.0)	-	3.8+			ミガキ	ロクロ		良好	淡褐色
16	IN-E	ロクロ土師	皿 内黒土器	口縁破片	(13.0)	-	-			光沢ある丁寧 なミガキ	ロクロ		良好	暗褐色
17	N14VC-42	ロクロ土師	高台付坏 内黒土器	部分欠く	19.2 19.5	7.5 7.9	6.2 7.3			丁寧なミガキ	ロクロ		良好	褐色
18	IN-E	ロクロ土師	坏 内黒土器	底部一部	-	-	4.8+			光沢ある ミガキ	ロクロ		良	茶褐色
19	IN-E	ロクロ土師	坏 内黒土器	底部破片	-	-	-			光沢ある ミガキ	ロクロ		良	淡白褐色
20	IN-E	ロクロ土師	皿 内黒土器	破片	(14.2)	(6.4)	2.4			光沢ある ミガキ			良好	淡茶褐色
21	IN-EE	ロクロ土師	坏？ 内黒土器	口縁破片	(14.0)	-	-			光沢ある ミガキ	手持ち鑑割り？ ロクロ		良好	黒斑 明褐色
22	Q11	ロクロ土師	高台付坏 内黒土器	底部 1/3	-	(6.0)	1.7+			ミガキ			良好	淡白褐色
23	IN-E	ロクロ土師	坏 内黒土器	底部破片	-	-	-			ミガキ		回転鑑割り？	良好	暗茶
24	IN-EE	土師器	坏 内黒土器	口縁破片	(14.0)	-	3.5+			雑な光沢ある ミガキ			堅緻	茶褐色
25	IN-EE	土師器	坏 内黒土器	口縁破片	(14.0)	-	3.5+			雑な光沢ある ミガキ			堅緻	茶褐色
26	L11	ロクロ土師	坏 内黒土器	破片	(14.0)	-	4.0+			黒いミガキが 残る	ロクロ		良	明褐色
27	IN-E	ロクロ土師	坏 内黒土器	底部破片	-	-	-			ミガキ			良好	淡褐色
28	IN-E	ロクロ土師	高台付坏	底部一部	-	(8.6)	1.3+			ミガキ	ロクロ	鑑ナデ	良好	明褐色
29	IN-E	土師器	坏	底部一部	-	(10.0)	1.6+				ナデ 回転鑑ナデ 手持ち鑑割り	回転鑑ナデ	良好	赤褐色 黒斑
30	IN-E	ロクロ土師	鉢	破片	-	(14.4)	1.2+			ミガキ	手持ち鑑割り	手持ち鑑割り	良好	暗褐色



第291图 稻荷台出土瓦拓影图(1)



第292図 稲荷台出土瓦拓影図(2)



第293図 稲荷台出土瓦拓影図(3)

調査区内から出土した瓦総重量は、235kgである。遺跡内では瓦が集中して出土する範囲は無く、住居跡カマドの構築材として検出されるものがほとんどで、他には磨滅した瓦が表土剥き後採集されている。今回の調査区域内では、瓦を使用した建物跡の存在は無いものと看取される。

ここでは、遺跡内から出土した瓦の内、比較的形状を留めているものと、特徴的な瓦を図示した。1～6が平瓦で、7～10が丸瓦である。1・2の瓦は縄目、3・4は斜格子、5は斜格子状の叩き目が重複したものであろうか。6は凸面に布目を有する逆作りである。8・10は、筒先が有段を有し、9は無段である。6の逆作りの平瓦は、当遺跡の北2kmに所在する光善寺廃寺で見られ、他の瓦は国分寺からの搬入品であろう。

第8節 稲荷台1～6号墳出土の平安時代の土器（第294～305図）

この稿で取り上げる古墳出土の土器は、A～F地区の集落部分の調査に先行して、実施された稲荷台1号墳から6号墳の調査時に出土した奈良～平安時代土器の中の坏類である。出土状況は、今回の報告では示せないが、古墳調査時には墳丘周辺の周溝上や周溝外に複合する竪穴住居跡の存在が全体図からも読み取れ、土器の中には住居跡から出土するものや、墳丘や周溝内に混入して検出された遺物が多量に出土している。図示した遺物は、坏類のうち遺存状態の良いものだけを上げ、実測可能な土器のうち4分の1程である。

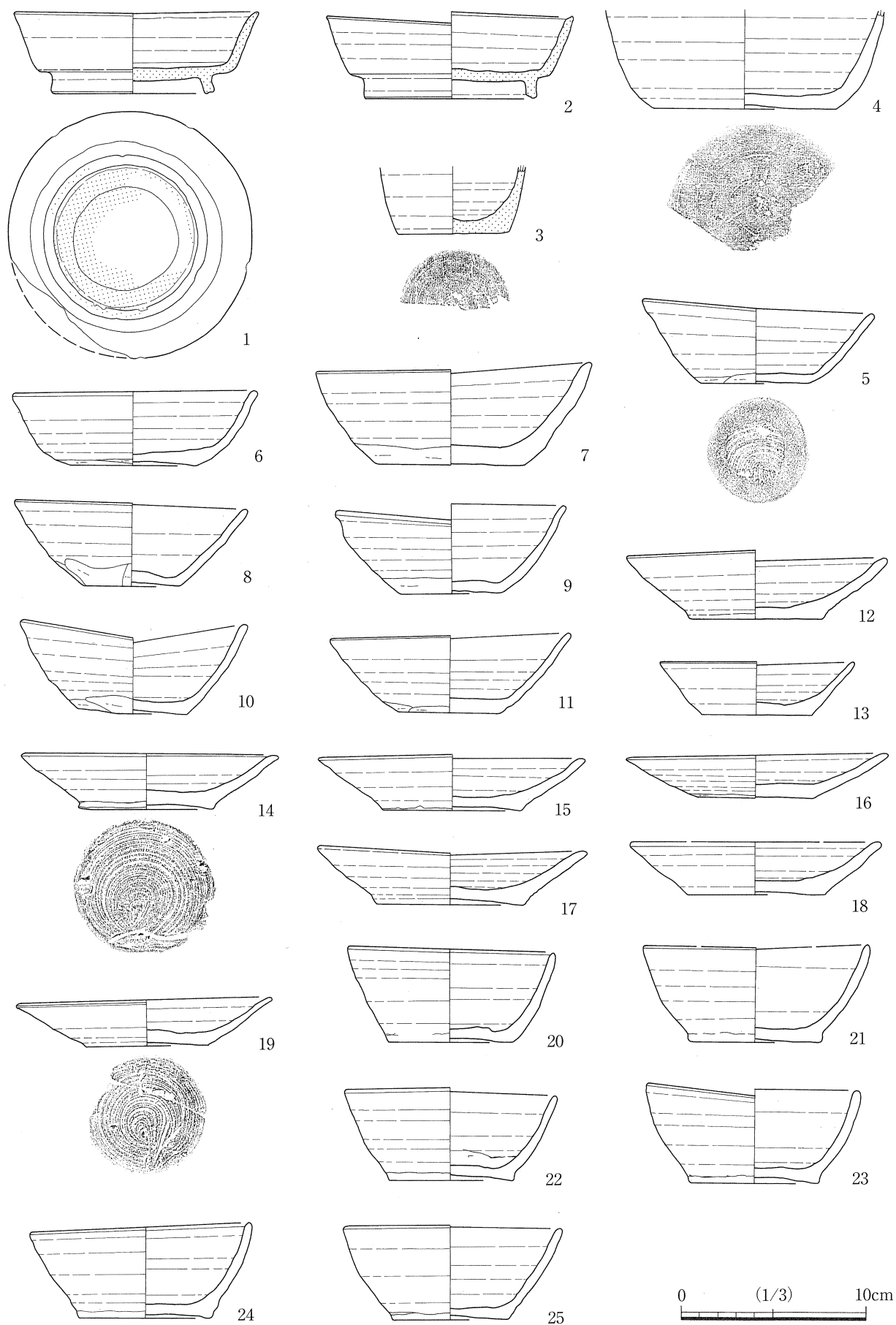
第18表古墳群出土土器観察表の出土位置に記載した番号の2070011002の場合は、207（古墳番号）001（遺構番号）1002（出土位置番号）を表す。2076026の場合は、207（古墳番号）6026（墳丘や周溝内の出土位置を番号）を表している。

稲荷台1号墳出土土器（第294～297図）

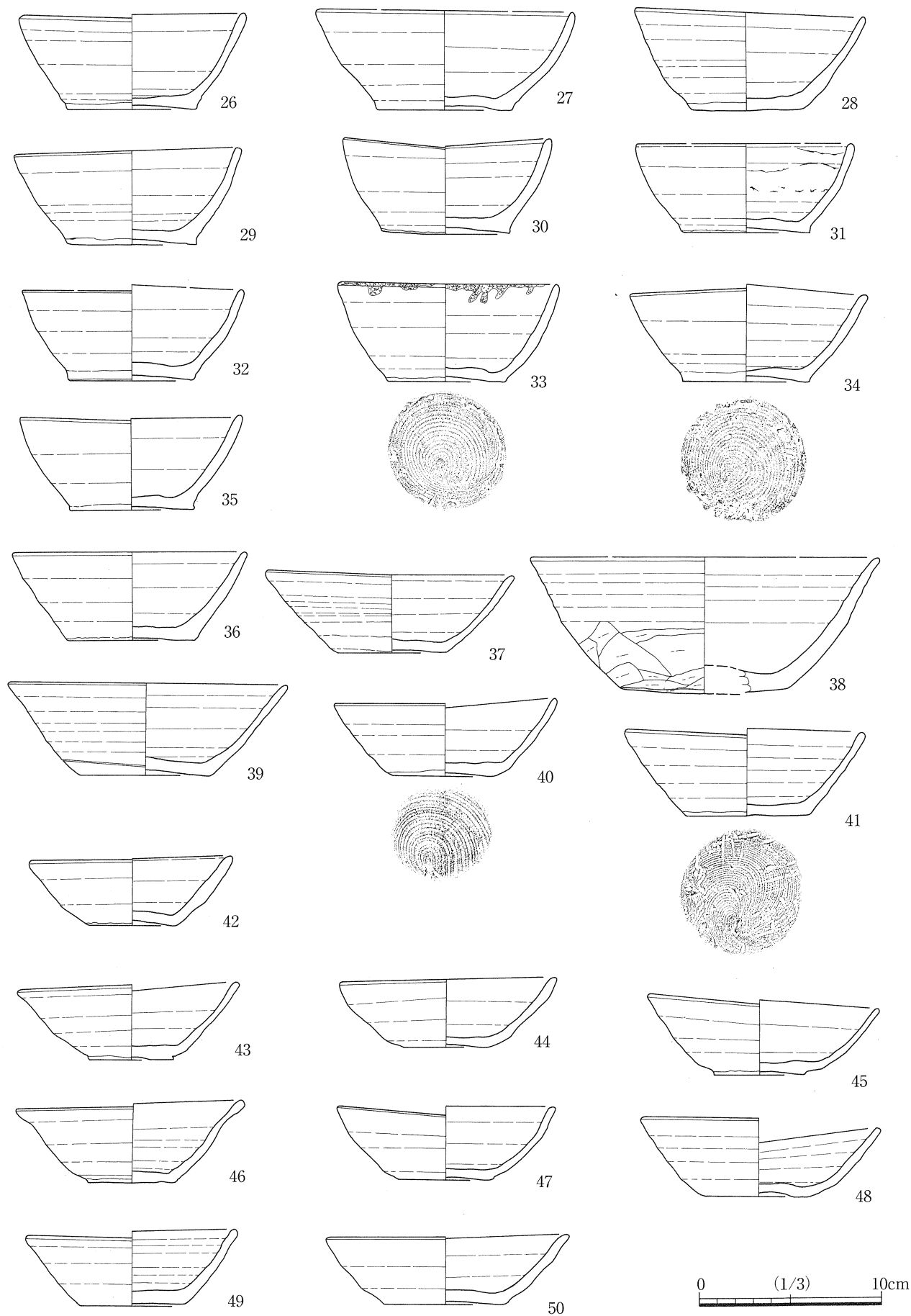
稲荷台1号墳は、「王賜」銘鉄剣の出土で知られる古墳で、昭和51年度の調査時には盛土径18m・墳丘高2.21mを測っていた。当然のことながら9世紀代の墳丘規模は調査前を遥かに上回っていたものである。そしてこの古墳は、9世紀代の祭祀遺構が検出された、E地区の四面廂付建物群から南方45m、最も近接する建物跡からは35mに位置している。また、A地区の稲荷台Ⅱ期の9世紀第2四半期に比定可能な42号掘立柱建物跡の西方10mの至近距離にある。

1・2は須恵器高台付坏で、1の底部外面には朱墨が僅かに付着し、底部外面の高台内が研磨されることから朱墨の転用硯である。1と2は、出土位置を示す番号が001で同じ遺構からの出土である。

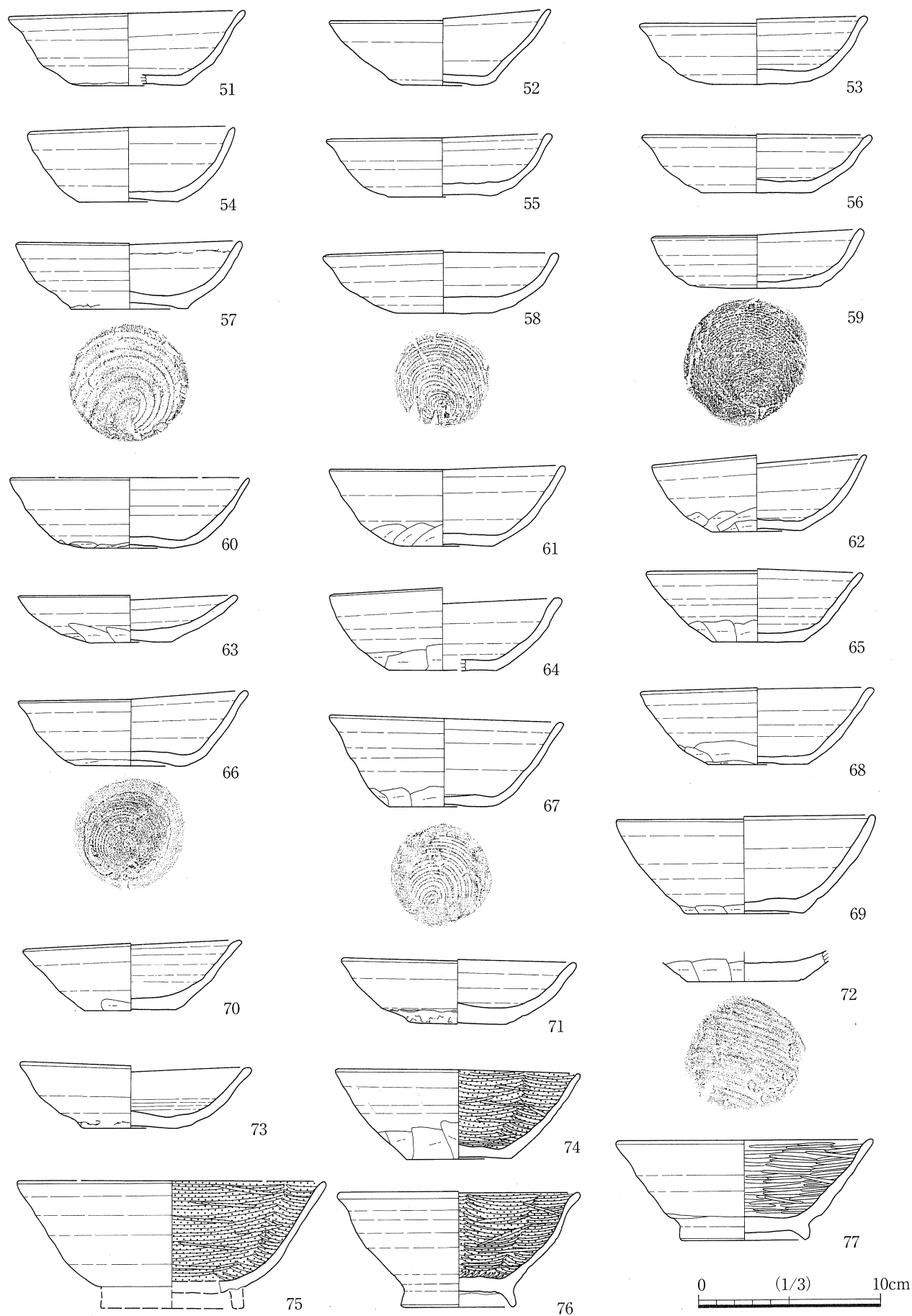
3は須恵器コップで市原産永田・不入窯産の製品であろうか。何れも8世紀中葉の所産であろう。4はやや大型の底部回転篋削りのロクロ土師器坏。5～11は、ロクロ土師器坏で体部下端および底部に回転篋削りを施している。6の器高が低く、器高の低い9世紀前半代のものや、8～11の10世紀前半代がある。12～19は底部回転糸切りのロクロ土師器皿である。13は口径10.6cm・底径6.1cm・器高2.8cmの小型のロクロ土師器皿で、口径に対する底径の占める割合は57%で古相を呈している。20～36は底部回転糸切りのロクロ土師器坏で、体部がやや張り内湾気味に立ち上がる体部を特徴としている。33の口縁内外面にはタール状のカーボンが付着し、灯明用坏である。20～36は出土位置番号から墳丘や周溝内から出土していると思われほぼ特徴を同じくする。これらの土器の平均計測値は、口径



第294図 古墳群出土の平安時代土器(1)

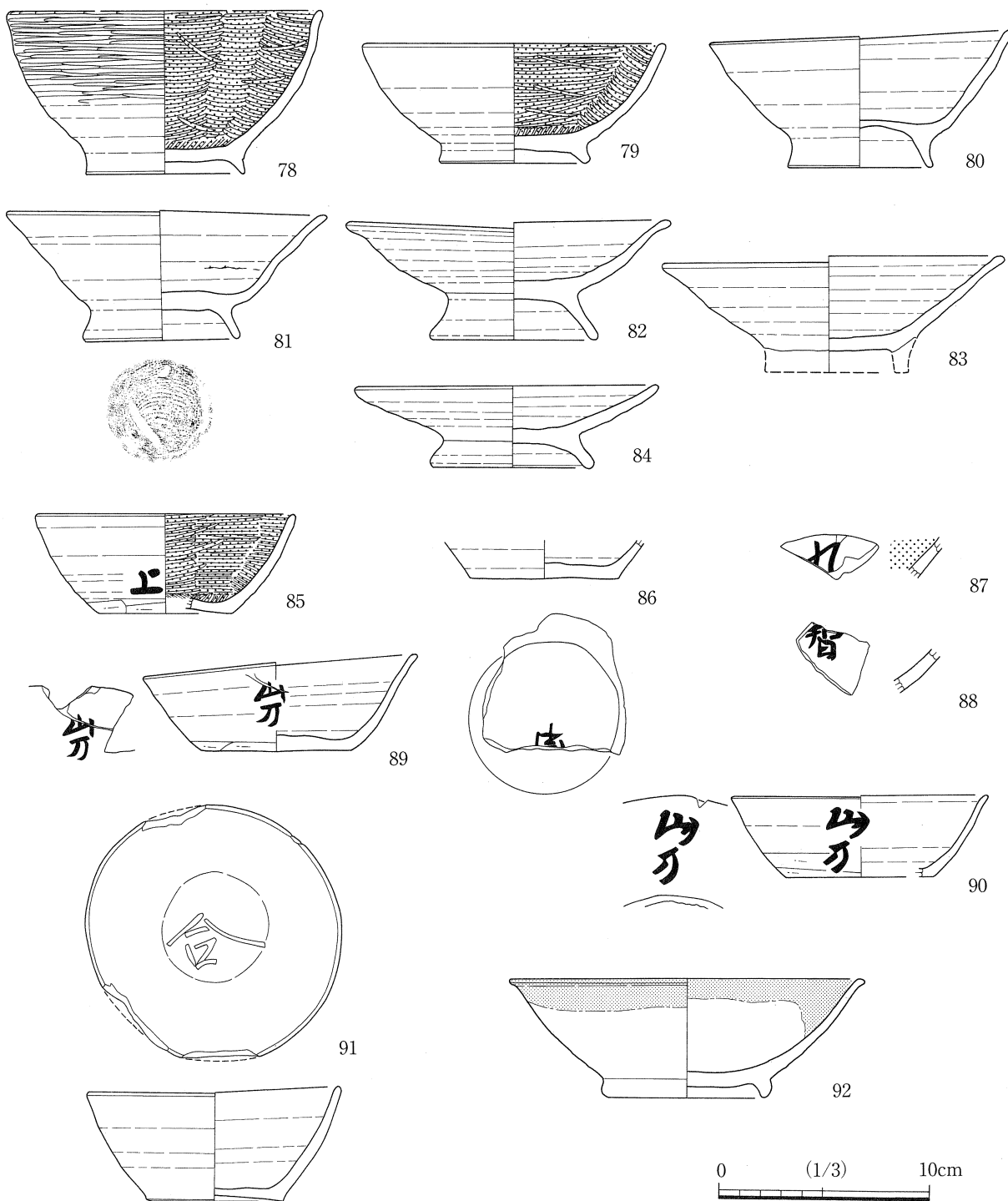


第295図 古墳群出土の平安時代土器(2)



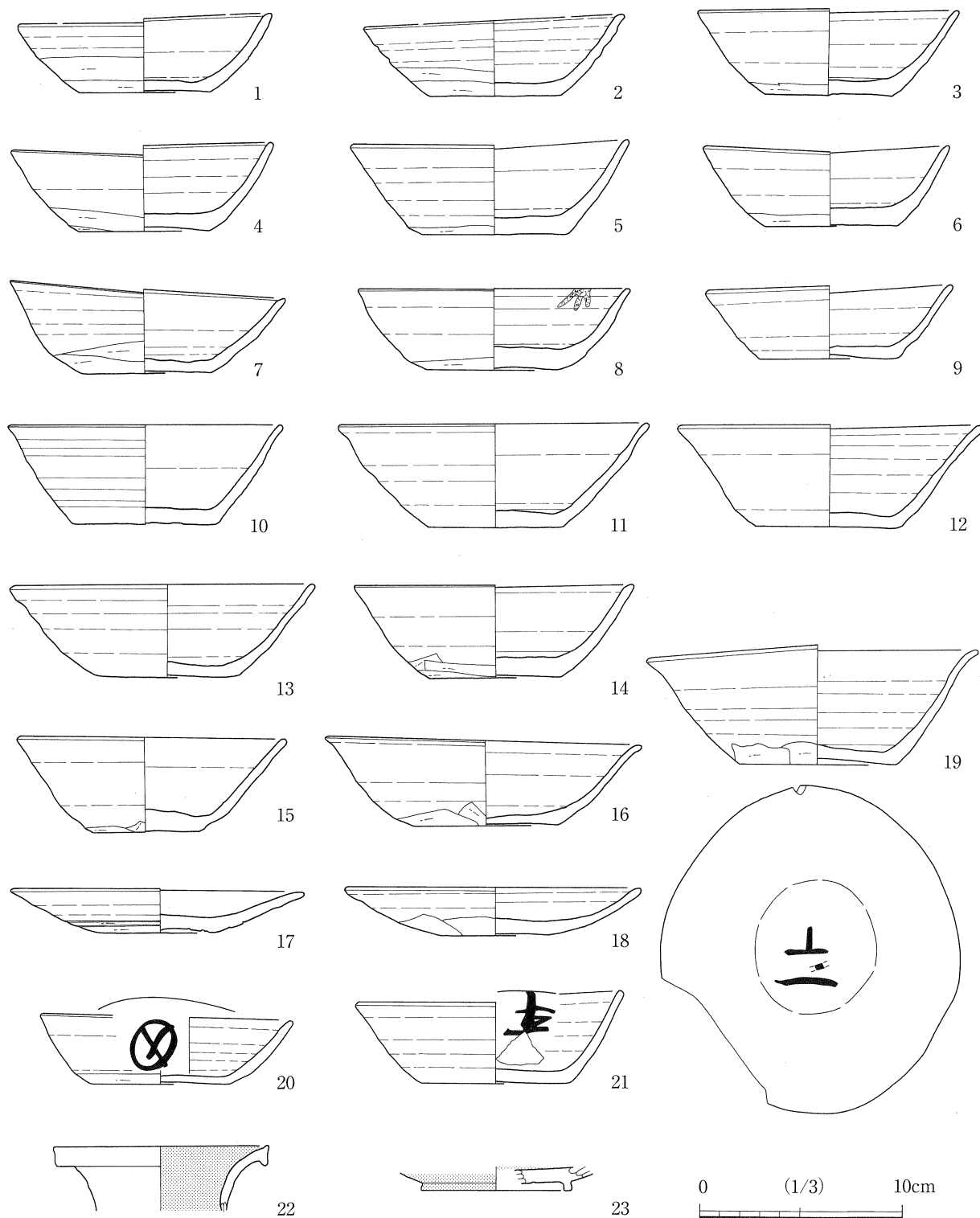
第296図 古墳群出土の平安時代土器 (3)

12.5cm・底径6.9cm・器高4.6cmで、口径に対する底径の占める割合は55%、口径に対する器高の割合は37%である。稻荷台Ⅱ期－bの9世紀第3四半期の所産と思われる。37・39～41は体部が直線的に立ち開く底部回転糸切りのロクロ土師器坏で、口径に対する底径の占める割合は48%、口径に対する器高の割合は35%である。42～59は底部回転糸切りである。60～71は手持ち篋削りである。72は底部に静止糸切り痕を残す。74～76・78・79は、内黒ミガキで、75・78は体部下端に張りをもつ腕形である。77は内面ミガキを施すロクロ土師器高台付坏で、体部が直線的に開き75とはタイプが異なる。

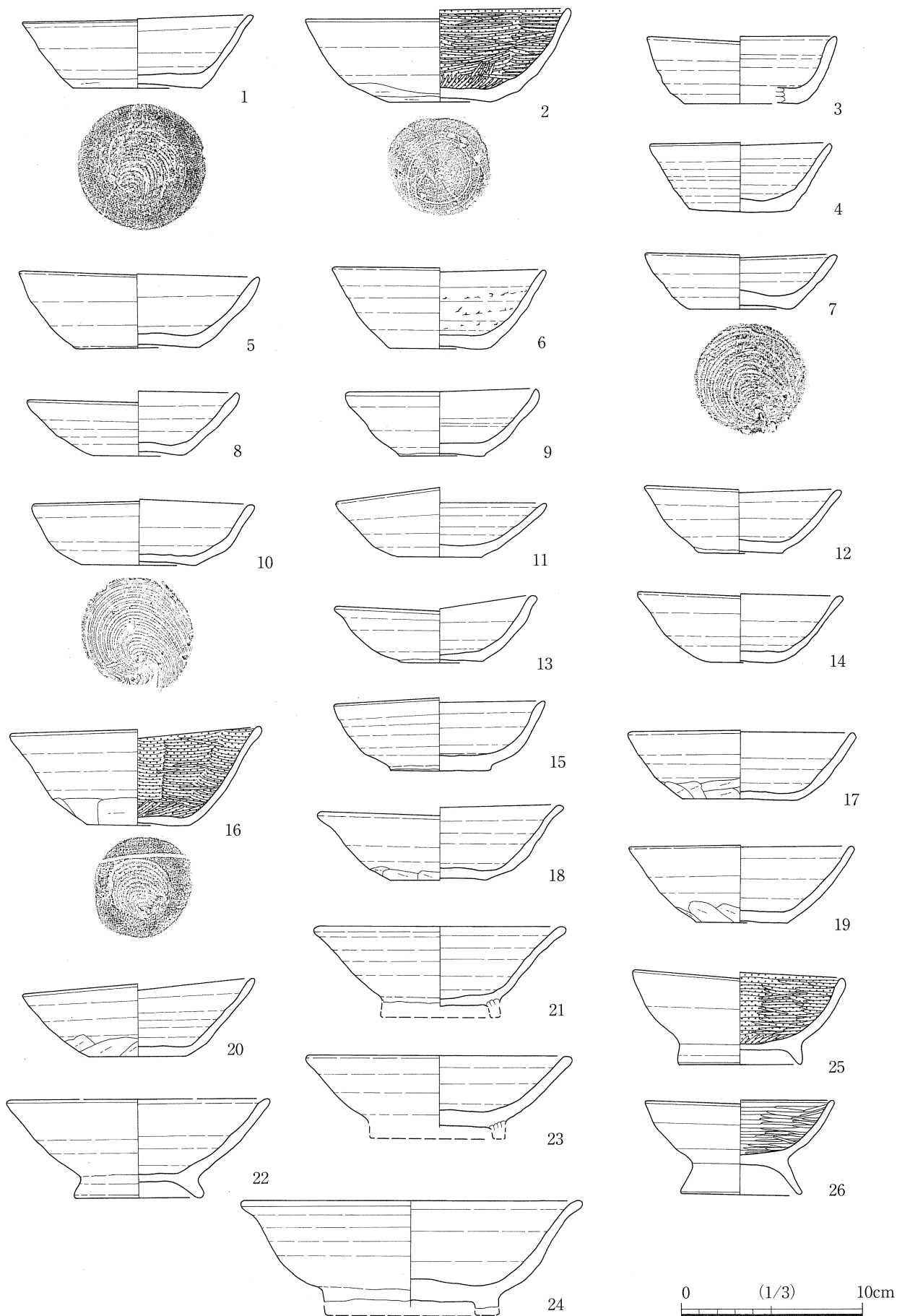


第297図 古墳群出土の平安時代土器(4)

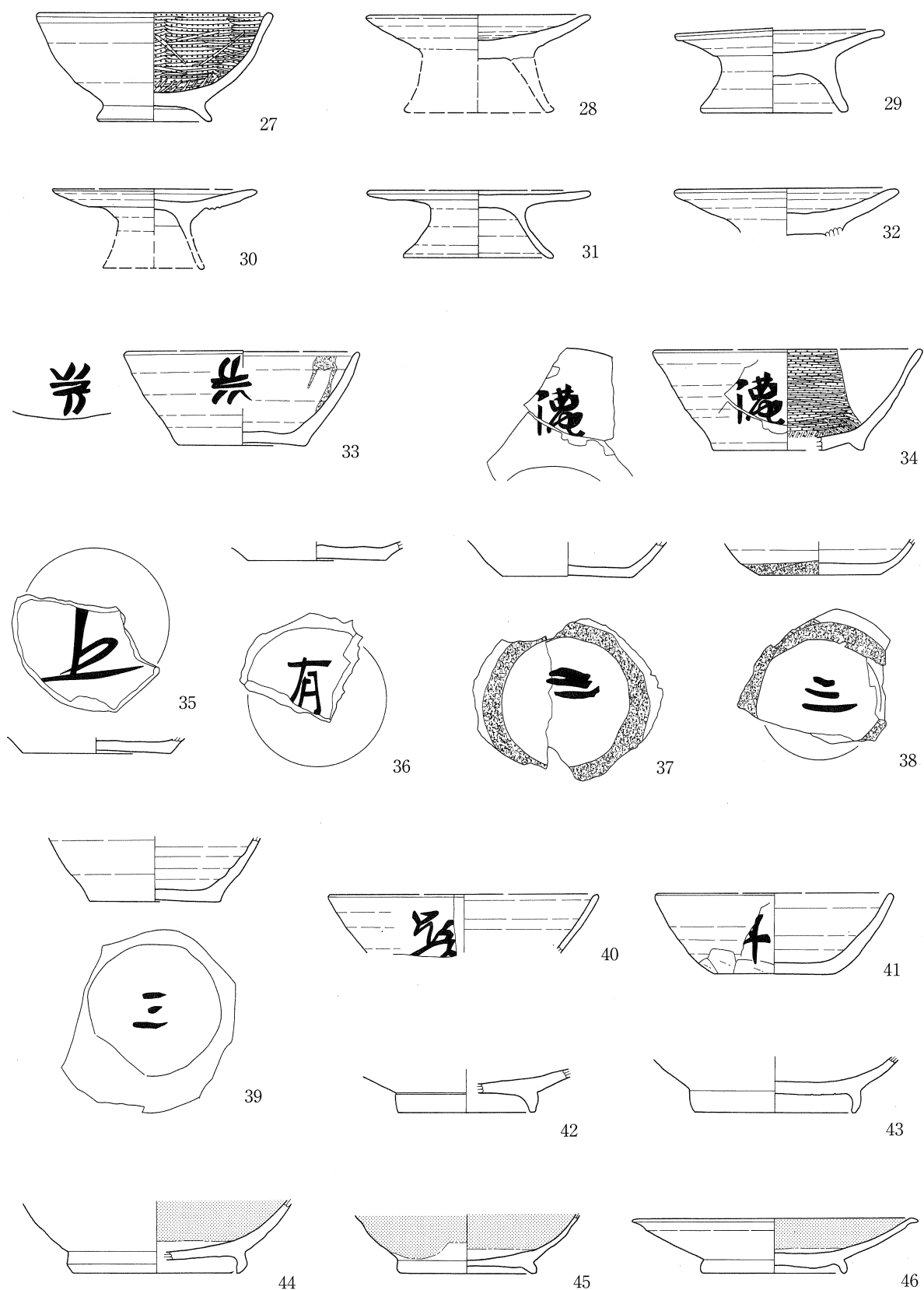
80～83はロクロ土師器高台付坏で、84はロクロ土師器高台付皿である。85～90は墨書土器である。85は内黒ミガキのロクロ土師器坏で体部下端に「上」。86はロクロ土師器坏で底部外面に不明墨書。87は内黒ミガキのロクロ土師器坏の体部破片で外面に「丸カ」、89は外面に「智」。89・90は、体部下端および底部回転篋削りのロクロ土師器坏で体部外面に「山万」がそれぞれ墨書される。91は焼成前の



第298図 古墳群出土の平安時代土器 (5)



第299図 古墳群出土の平安時代土器(6)



0 (1/3) 10cm

第300図 古墳群出土の平安時代土器(7)

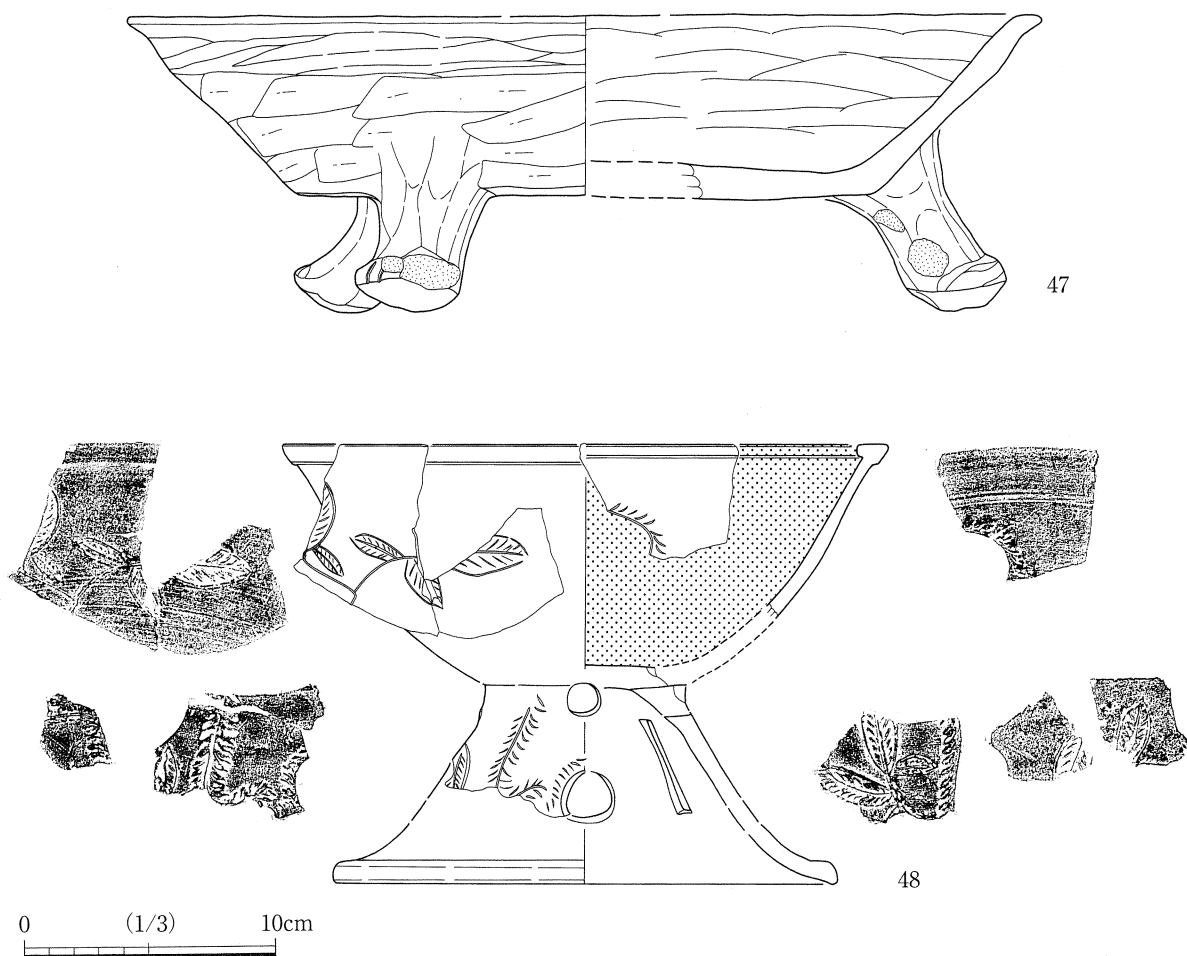
線刻で底部内面に「合」を刻む。92は灰釉陶器碗で坂野Ⅴ期古相に比定される。

稲荷台2号墳出土土器（第298図）

2号墳は、稲荷台遺跡の西をある一時期区画した1号溝の更に西側に所在し、E地区西側建物跡群から60mほど離れて位置する。調査前の古墳は、近世の塚に改変されていた。本古墳から図示した1～21の土器には、出土位置を示す番号に327（近世の塚番号）と006（遺構番号）が記され、22・23以外の灰釉陶器以外の土器が同一遺構から出土したことを示している。

1～8は体部下端および底部回転斲削りのロクロ土師器坏で、8の口縁内面には僅かにタール状のカーボンが付着し灯明用坏である。1～8の平均計測値は口径13.1cm・底径6.7cm・器高4.3cmで口径に対する底径の占める割合は51%、口径に対する器高の割合は32.6%である。10～13は、底部回転糸切りのロクロ土師器坏、14～16は、体部下端および底部手持ち斲削りを施すロクロ土師器坏。17・18はロクロ土師器皿で、17は回転斲削り、18は手持ち斲削りである。19は体部下端および底部手持ち斲削り口径14.6～16cmを計測するやや歪んだロクロ土師器坏で底部内面にかすかに「主」と読み取れる墨書がある。20～21は墨書土器である。20は体部下端および底部回転斲削りのロクロ土師器坏で体部外面に「⊗」。21は回転糸切りのロクロ土師器坏で体部内面に「主カ」の墨書があるものでは唯一となる。22・23は灰釉陶器で、22は皿であろうか、坂野Ⅱ期古相に比定される。

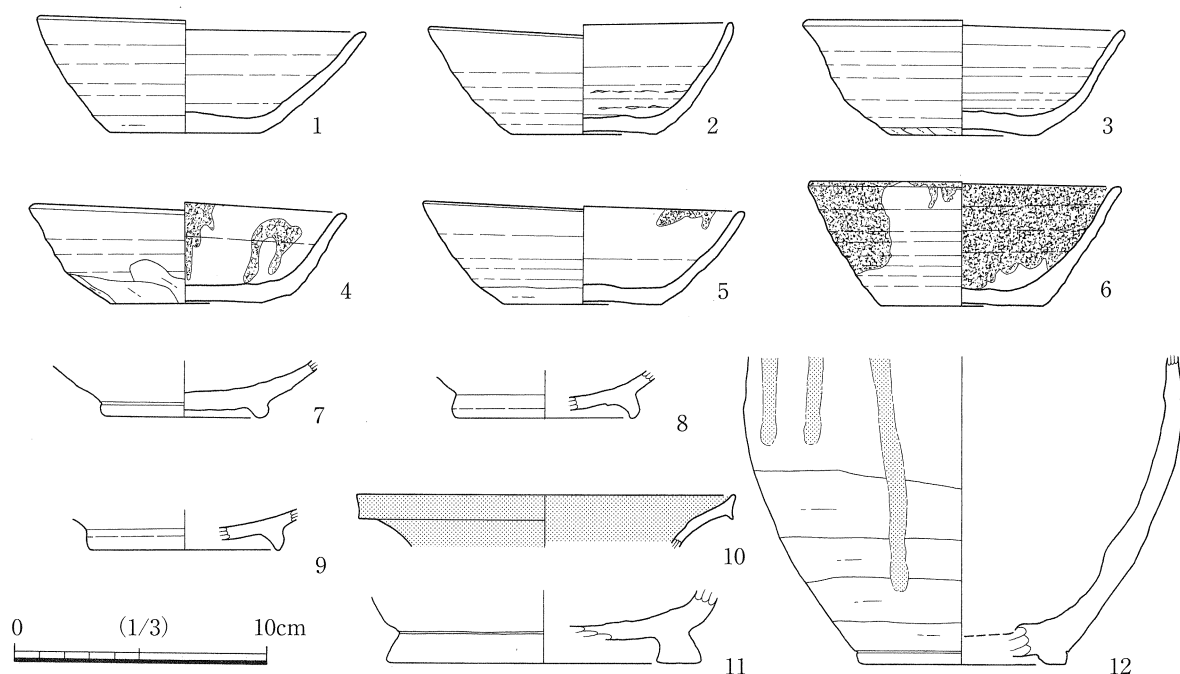
稲荷台3号墳出土土器（第299～301図）



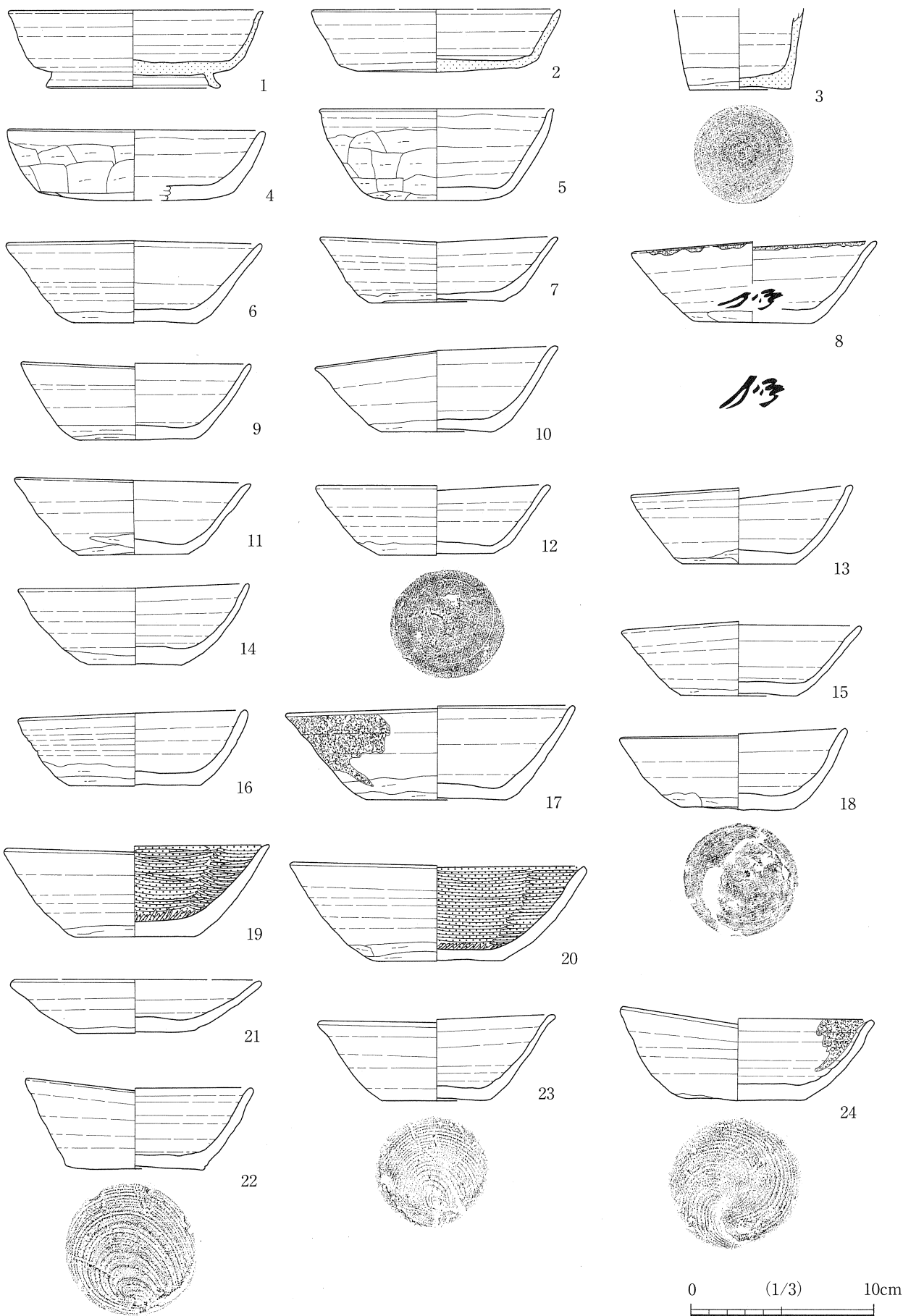
第301図 古墳群出土の平安時代土器（8）

3号墳は、B・D地区の東に接して位置し、9世紀第2～3四半期にかけて出現する43～45号掘立柱建物跡の東方10mに近接して所在する。本墳も1号墳同様に調査前には墳丘が残っていることから、9世紀代中葉には43～45号掘立柱建物跡の東に築山として遺存していた景観が復元できる。

1は体部下端および底部回転篋削りのロクロ土師器坏。2は体部下端に手持ち篋削り、底部回転篋削りの内黒ミガキを施すロクロ土師器坏で碗形を呈している。3～15は、回転糸切りのロクロ土師器坏で、3は9世紀前半代、11～15は10世紀中葉に比定可能と思われる。16～20は、体部下端および底部手持ち篋削りのロクロ土師器坏で、16は内黒ミガキを施している。21～27は、高台付坏や碗である。21～23は体部が直線的に開く、24は口径18.7cmの大型で体部下端に張りをもつ碗となる。25～27は、口径10.2～11.7cmの小型のロクロ土師器高台付碗で、内面ミガキで、25・27は内黒処理を施している。28～32は、平均口径11.5cmを計る小型のロクロ土師器高台付皿で脚高気味の高台である。33～41は墨書土器である。33は底部回転糸切りのロクロ土師器坏で、内面にタール状のカーボンが付着する灯明用坏で、体部外面に逆さに「山カ万」の墨書がある。34は内面内黒ミガキで低い三角形の高台を有し、体部外面に「濃カ」を書く。35は底部回転糸切りで底径7.0cmとやや古相のロクロ土師器坏で、底部内面に「上カ」の墨書がある。37～39には、底部外面に「三」が墨書される。37・38は体部下端および底部にやや雑な回転篋削りを施すロクロ土師器坏で、体部下端にのみタール状のカーボンが輪状に付着する灯明用坏である。39は底部回転糸切りのロクロ土師器坏である。この墨書は漢字の「三」とも思えるが、八卦を記号によって表したものと看取される。40はロクロ土師器坏の口縁小片で、体部外面に不明墨書がある。41は体部下端手持ち篋削り底部回転糸切りのロクロ土師器坏で体部外面不明墨書がある。42～46は灰釉陶器である。42・46は皿、43・44・45は碗である。43～46は、坂野Ⅲ期新相の9世紀末から10世紀初頭、42はV期新相の10世紀第4四半期を中心とする時期が与えられている。47は、推定口径36cmの獣脚盤である。獣脚3本と体部と口縁の一部分の遺存である。



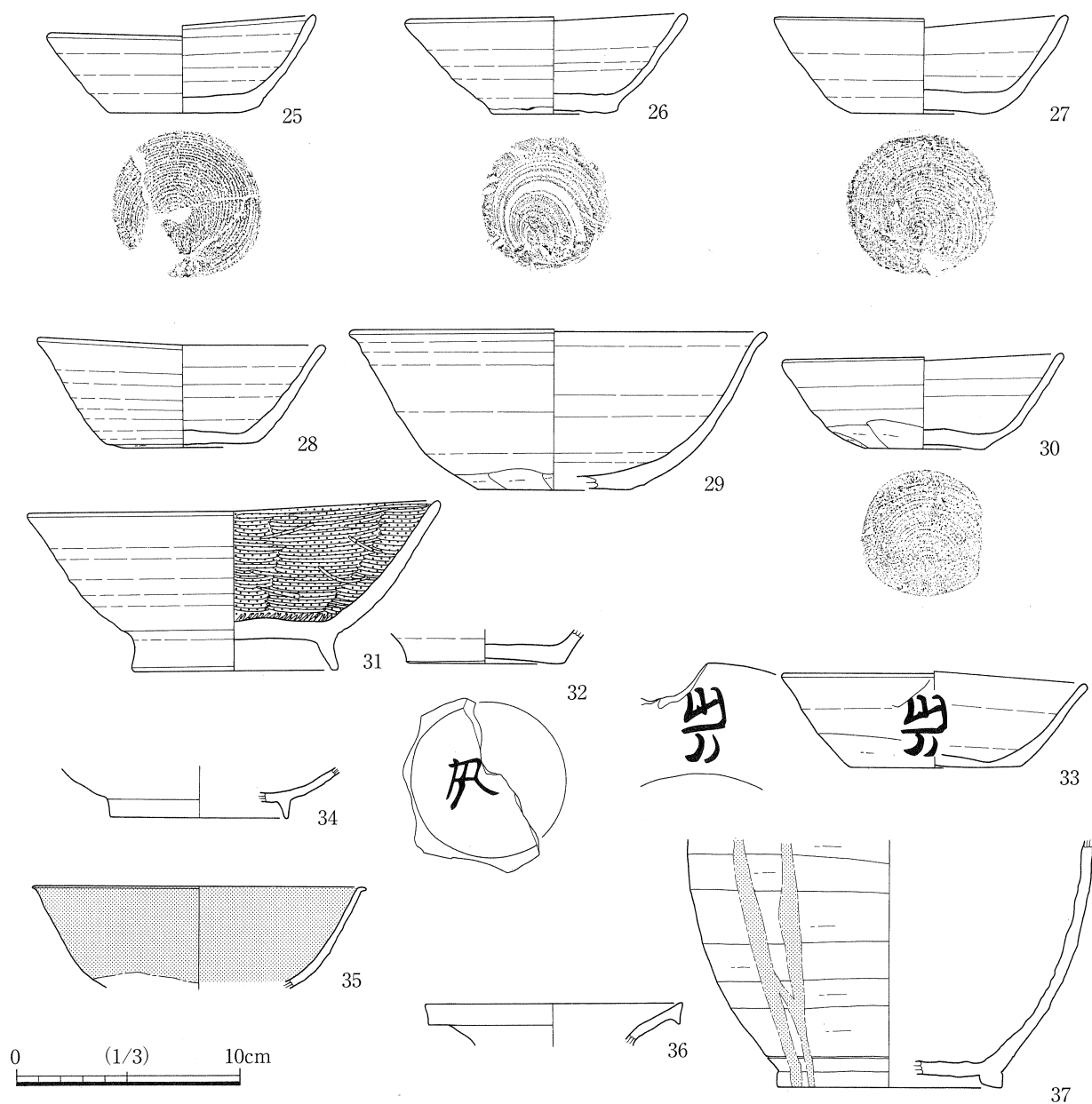
第302図 古墳群出土の平安時代土器(9)



第303図 古墳群出土の平安時代土器 (10)

獣脚はE地区検出の(第288図)と比べると作りがやや粗雑となり、時期差が感じ取れる。48は特徴的な高台付鉢で、脚と鉢部の部分的な遺存である。推定計測値は、鉢部口縁径24cm・基部径8cm・脚底径20cm・器高17.4cm・脚高7.9cm・鉢高9.5cmを計測する。口縁外面には、幅1cm程の帯状の突帯が巡る。口縁内面は、更に突出する突帯が巡り、口唇部は平におさめられている。脚端部は肉厚で大きく広がり先端で僅かに内湾気味で玉状となる。鉢部内面は黒色を呈するがミガキは施されない。鉢部と脚部には焼成前の線刻で蔓草文が描かれている。脚部には基部と中位に大小の円形透かしと幅が不明であるが縦長の方形の透かしが配されている。色調は、暗赤褐色、胎土に細砂粒を含み、焼成は堅く焼き締まっている。これと同種の遺物は、県内では高岡遺跡の290・389号住居跡の2例等が知られている。

稲荷台4号墳出土土器(第302図)



第304図 古墳群出土の平安時代土器(11)

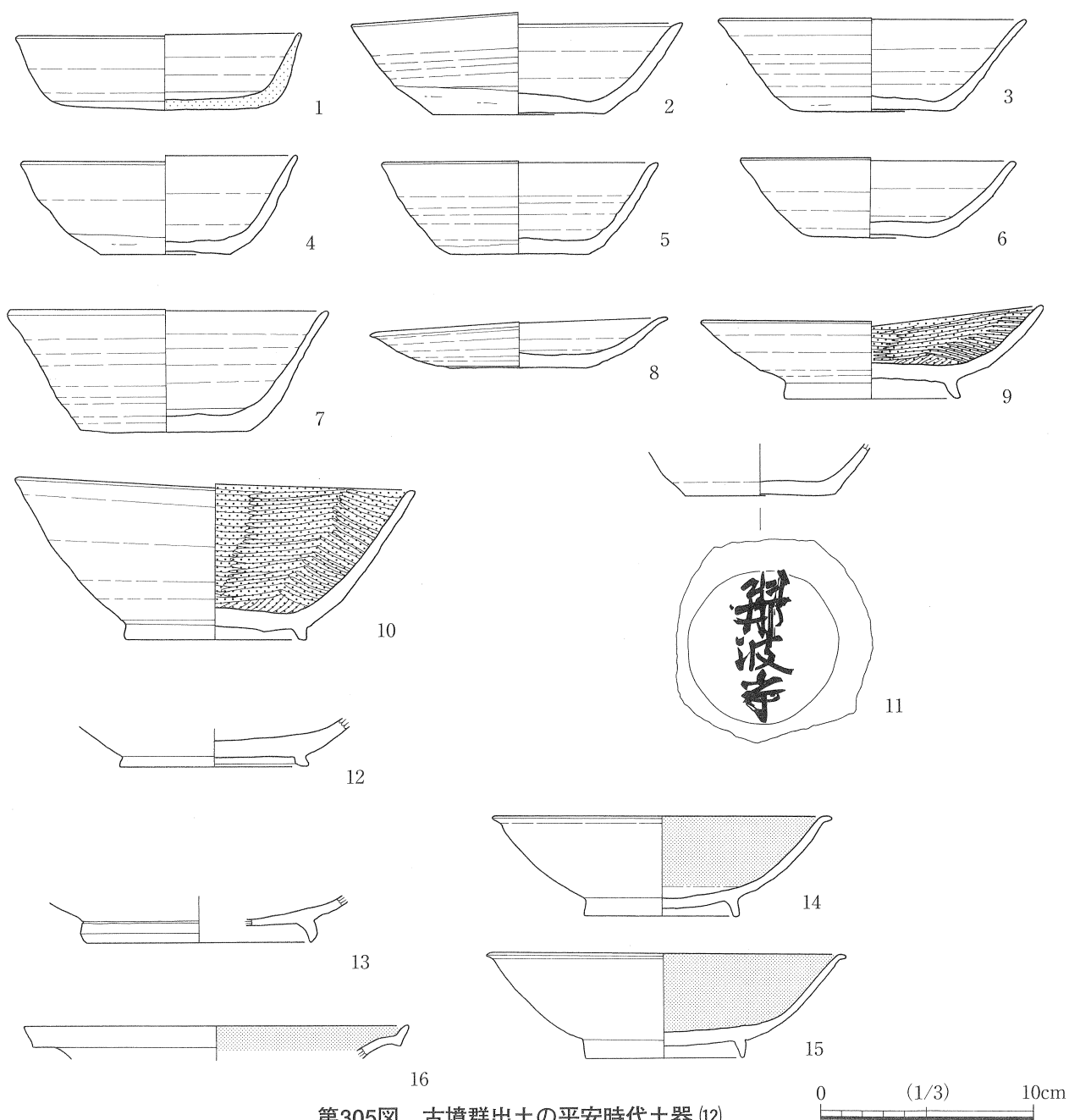
4号墳は、C地区に検出された稲荷台遺跡南側を区画する2・3号溝の北に接して所在し、1・3号墳同様調査前に墳丘が残されていた古墳である。E地区の中心域からは160m南に位置する。

1・5は回転篋削り、2・3・7は回転糸切り、4は手持ち篋削りのロクロ土師器坏である。4～6にはタール状カーボンが付着する灯明用坏である。7～12は灰釉陶器である。11がⅡ期古相、10がⅢ期古相、他の製品はⅤ期古相である。

稲荷台5号墳出土土器（第303～304図）

5号墳は、当台地の最西端に所在する。E地区の中心域からは110m西に位置し、調査前は墳丘が削平されていた古墳である。

1は須恵器高台付坏、2は須恵器坏、3は須恵器コップで何れも永田・不入窯産である。4・5は



第305図 古墳群出土の平安時代土器 (12)

非ロクロの土師器坏で、1～4は8世紀中葉に比定可能である。6～20は回転篋削りのロクロ土師器坏で、19は底部篋ナデである。21は底部回転糸切りのロクロ土師器皿。22～28は底部回転糸切りロクロ土師器坏。29・30は体部下端および底部手持ち篋削りのロクロ土師器坏である。8・17・24は、タール状カーボンが付着する灯明用坏である。8の体部下端には、不明墨書がある。31は内黒ミガキのロクロ土師器高台付椀。32は底部回転糸切りのロクロ土師器坏で、底部外面に則天文字を勾わせる不明墨書がある。33は回転篋削りのロクロ土師器坏で体部外面に「山万」の墨書がある。34～37は灰釉陶器で、34の椀は坂野Ⅲ期新相の9世紀末～10世紀初頭に、35の椀はⅡ期新相の9世紀第3四半期、36の長頸壺口縁はⅣ期新相10世紀第1四半期中心に、37の長頸壺はⅢ期古相で9世紀第4四半期中心とした時期にそれぞれ比定されている。

稲荷台6号墳出土土器（第305図）

6号墳は、5号墳の南10mに近接して所在し、E地区の中心域からは100m西に位置し、調査前は墳丘が削平されていた古墳である。

1は須恵器坏で、永田・不入窯産である。2～4は、回転篋削りロクロ土師器坏。5～7は、回転糸切りのロクロ土師器坏。8は回転篋削りのロクロ土師器皿。9は内黒ミガキのロクロ土師器高台付皿。10は内黒ミガキのロクロ土師器高台付椀である。11は、回転糸切りのロクロ土師器坏で底部外面には「羽那波寺」の墨書がある。12～16は灰釉陶器である。12の壺は、高台が低い角状を呈し端部外面が僅かに開きⅡ期古相を呈している。14・15は、高台が高い三角形を呈し、Ⅲ期古相。13は三日月型でⅣ期古相。16の長頸壺はⅤ期の様相をそれぞれ呈している。

11の墨書土器の時期が問題なるが、遺構番号では、7・9・13・14・15の土器が同一遺構から検出されているが遺物が混在する様相である。遺構の時期は14の灰釉椀から坂野Ⅲ期古相の9世紀第4四半期を中心とした時期が与えられる。墨書土器もこれに当てて良いものと看取される。

以上稲荷台1～6号墳の出土状況が明らかでない奈良・平安時代の土器を上げてきたが、総体的には各古墳の当該期の状況を示すものと判断することができよう。1号墳では、8世紀中葉の須恵器がわずかに見られ、9世紀中葉が最も豊富な土器量を有し、10世紀中葉に至っても量的には見劣りすることがない。2号墳では、9世紀第2四半期の土器が他の時期を大きく上回っている。E地区の初期の祭祀遺構と共伴する「土」の墨書が存在する。3号墳では、9世紀末葉の土器がわずかに見られるものの、10世紀代の土器が遥かに多い。4号墳では、土器量が格段に減少し時期がしぼり込めない。5・6号墳では、1号墳同様な状況がうかがえる。

1～6号墳の土器は、8世紀から10世紀代の古墳墳丘と祭祀遺構の関わりを示す資料として重要視される。古墳墳丘は当該期に、祭祀関連施設の掘立柱建物跡が建ち並ぶ範囲に築山のように存在していたものである。もし仮に、ここで取り上げた遺物が墳頂から検出されているとするなら、それは墳丘を使用した祭祀が行なわれたと判断され、稲荷台遺跡の祭祀を復元する為には、欠かせない資料である。

第9節 稲荷台遺跡出土の施釉陶器（第319～327図）

本稿では、稲荷台1～6号墳と調査区域内の稲荷台遺跡から出土した灰釉陶器と緑釉陶器の施釉陶器を時期別に並べた。観察表の灰釉陶器は、坂野和信氏の調査表を元に作成し、緑釉陶器は、平尾政幸氏グループの調査表を元にした。

灰釉陶器

1～28は、Ⅱ期古相の灰釉陶器碗・皿類である。1～4は高台型2-Aの内外面取りする碗、5～8は高台型2-Bの角型短い碗、9～11は高台型2-Dに分類される碗である。12～16は、碗口縁部片で、12～15は口縁短部が僅かに折れて開き、16は内湾しておさまる。17・18は高台型2-Bの皿で、19・20は高台型2-Fの皿、21～24は皿の口縁部片である。25は高台型2-Bの内面取りの段皿である。26～28は高台型2-Bの碗か皿か判断ができないものである。このうち、性格が明らかな遺構から検出したものは、16が42号掘立柱建物跡、19が1号土器廃棄遺構から検出され、また、14は34住覆土、24は37住覆土から出土している。

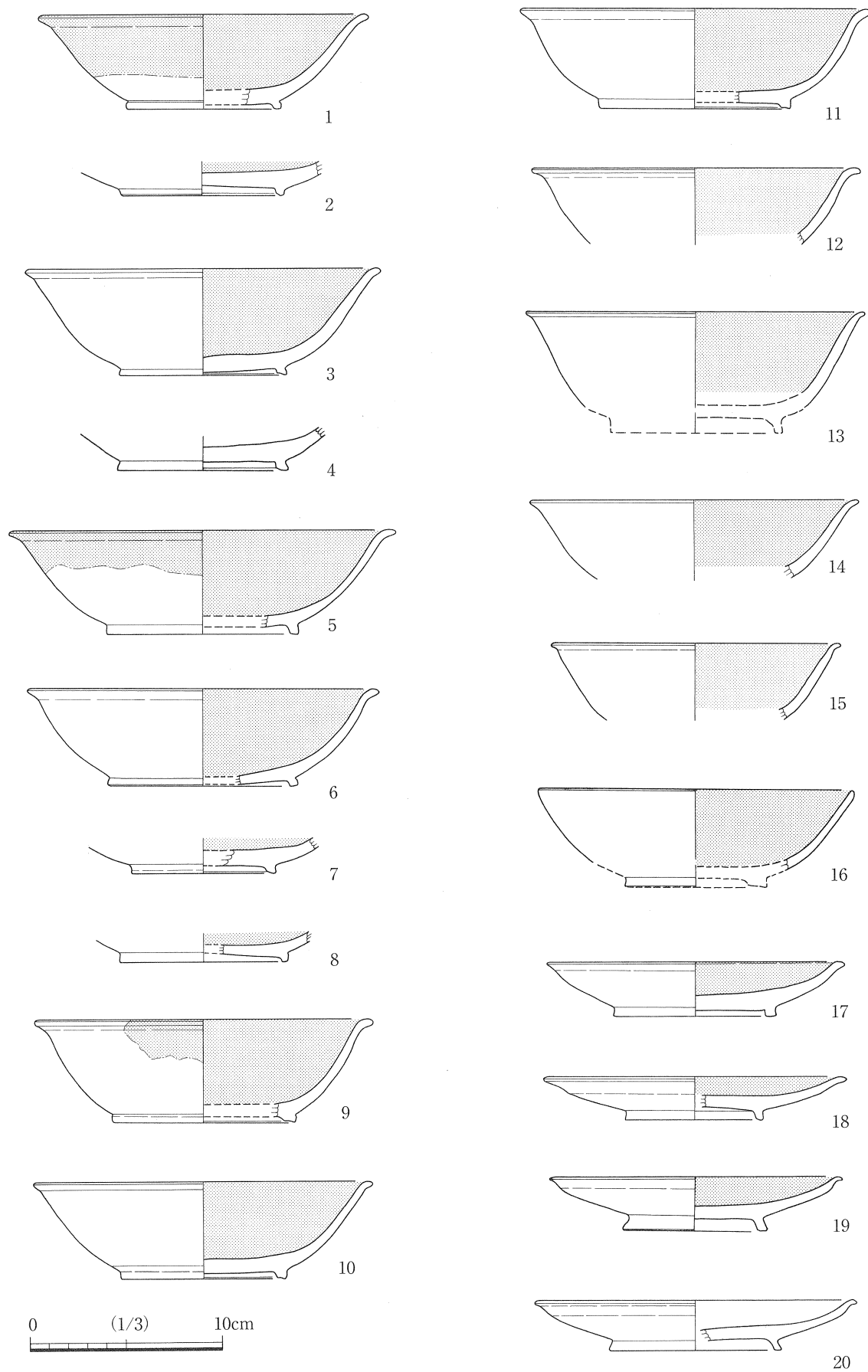
29～37は、Ⅱ期新相の灰釉陶器碗・皿類である。29は高台型2-Eの縦角型細身の碗、内外面取りする碗、30・31は碗口縁部片である。32・33は高台型2-Eの皿、34は高台型4-Aの三角状の皿、35は皿口縁片である。36・37は段皿で、36は内面に段が有り、37は、口縁が大きく開く。この中には遺構に明確に相伴するものは無いが、35・36が37住覆土から検出されている。

38～45は、Ⅲ期古相の灰釉陶器碗・皿類である。38は高台型2-Eの縦角型細身の碗、39は2-Fの碗、40は高台型2-Hの碗、41は高台型3-Aの碗、42は高台型2-Hの皿、43・44は高台型3-Bの段皿、45は段皿口縁部である。このうち44の段皿は、27住カマド燃焼部から検出され、相伴土師器とともに稲荷台Ⅲ期-a（9世紀第3～4四半期）の標準資料となる。

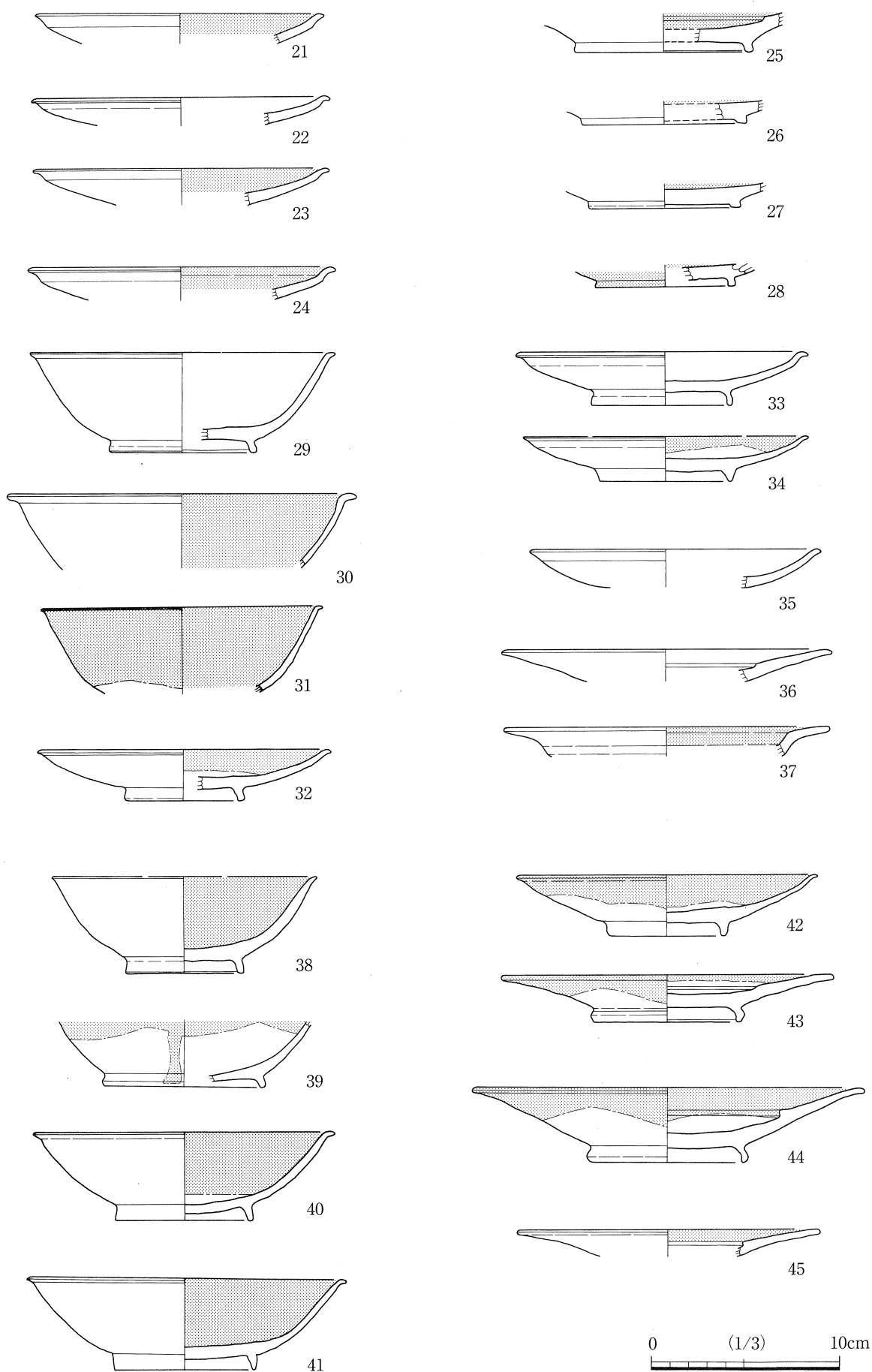
46～64は、Ⅲ期新相の灰釉陶器碗・皿類である。46は高台型2-Fの碗、47は高台型2-Hの碗、48・49は高台型2-Iの碗、50は高台型3-Aの碗、51・52は高台型3-Bの碗、53は高台型3-Cの碗、54は高台型3-Eの碗、55は内外面刷毛塗りの施釉を施す肉厚の碗口縁である。56は高台型2-Iの皿、57は高台型3-Bの皿、58は高台型4-Bの皿、59～63は段皿である。64は高台型3-Cの耳皿である。このうち、47は2号土器廃棄遺構から多数のロクロ土師器坏類と共に検出され、稲荷台Ⅲ期-b（9世紀末～10世紀初頭）の標準資料となる。

65～81は、Ⅳ期古相の灰釉陶器碗・皿類である。65は高台型2-Hの碗、66・67は高台型2-Iの碗、68は高台型2-Jの碗、69は高台型3-Aの碗、70～75は高台型3-Bの碗、76・77は高台型4-Bの碗である。78は高台型2-Hの皿か、79は高台型2-Iの皿、80は高台型4-Bの皿、81は段皿口縁である。このうち76は、3号土器廃棄遺構から多数のロクロ土師器坏と共に検出され、稲荷台Ⅳ期-a（10世紀第1四半期）の標準資料となりうるが、2号土器廃棄遺構のロクロ土師器坏に整形技法および器形の異なるものが混在し、この混在した出土状況をどのように解釈するか、今後解決しなければならない問題である。

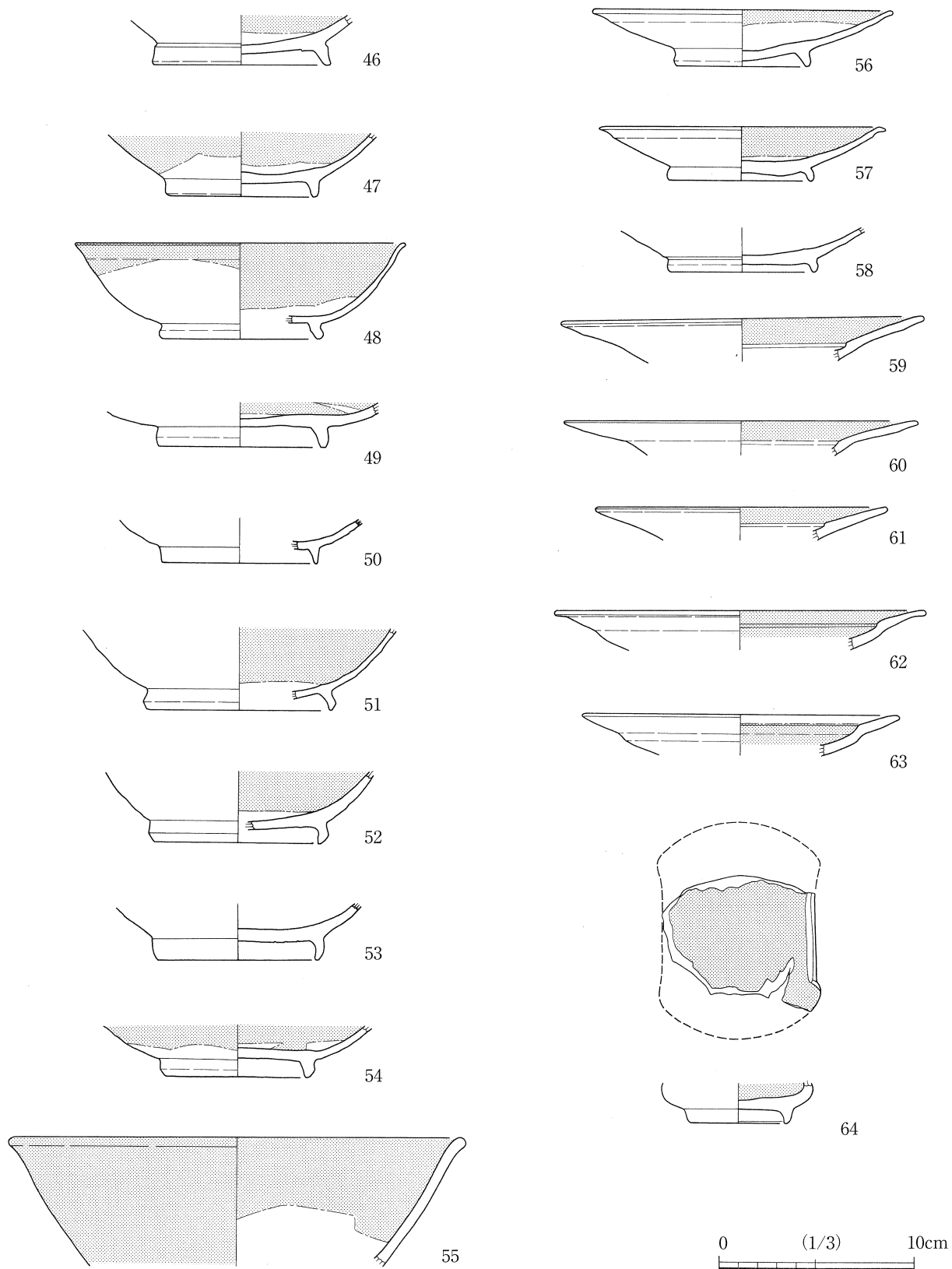
82～97は、Ⅳ期新相の灰釉陶器碗・皿類である。82・83は高台型2-Gの碗、84・85は高台型2-Hの碗、86～88は高台型2-Iの碗で、86は口径24.9cmを計り施釉は漬け掛けによる。89は高台型3-Aの碗、90は高台型3-Dの碗、91は高台型4-Bの碗、92は高台型4-Bの碗、93は高台型4-B



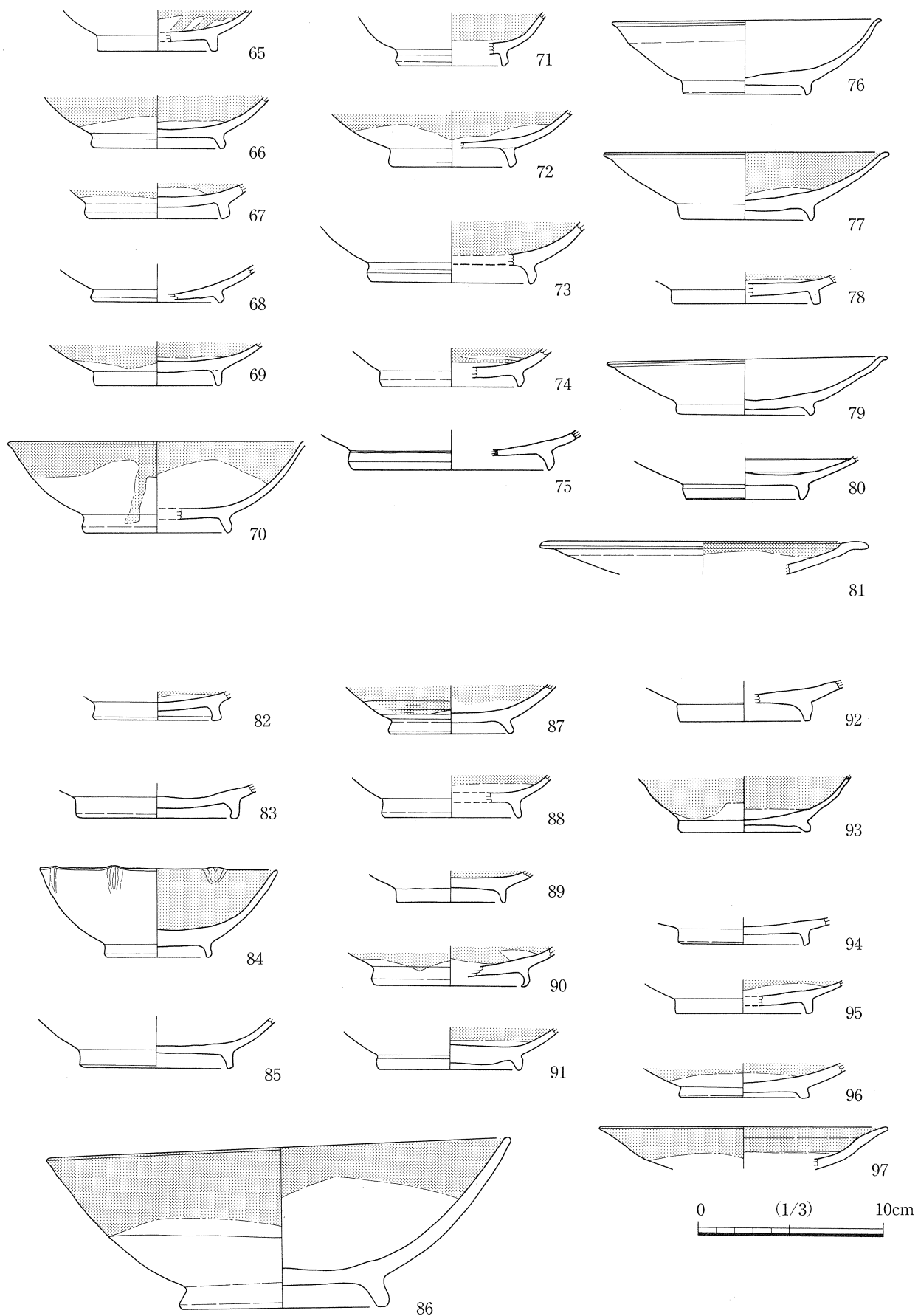
第306図 稲荷台遺跡出土の灰釉陶器(1)



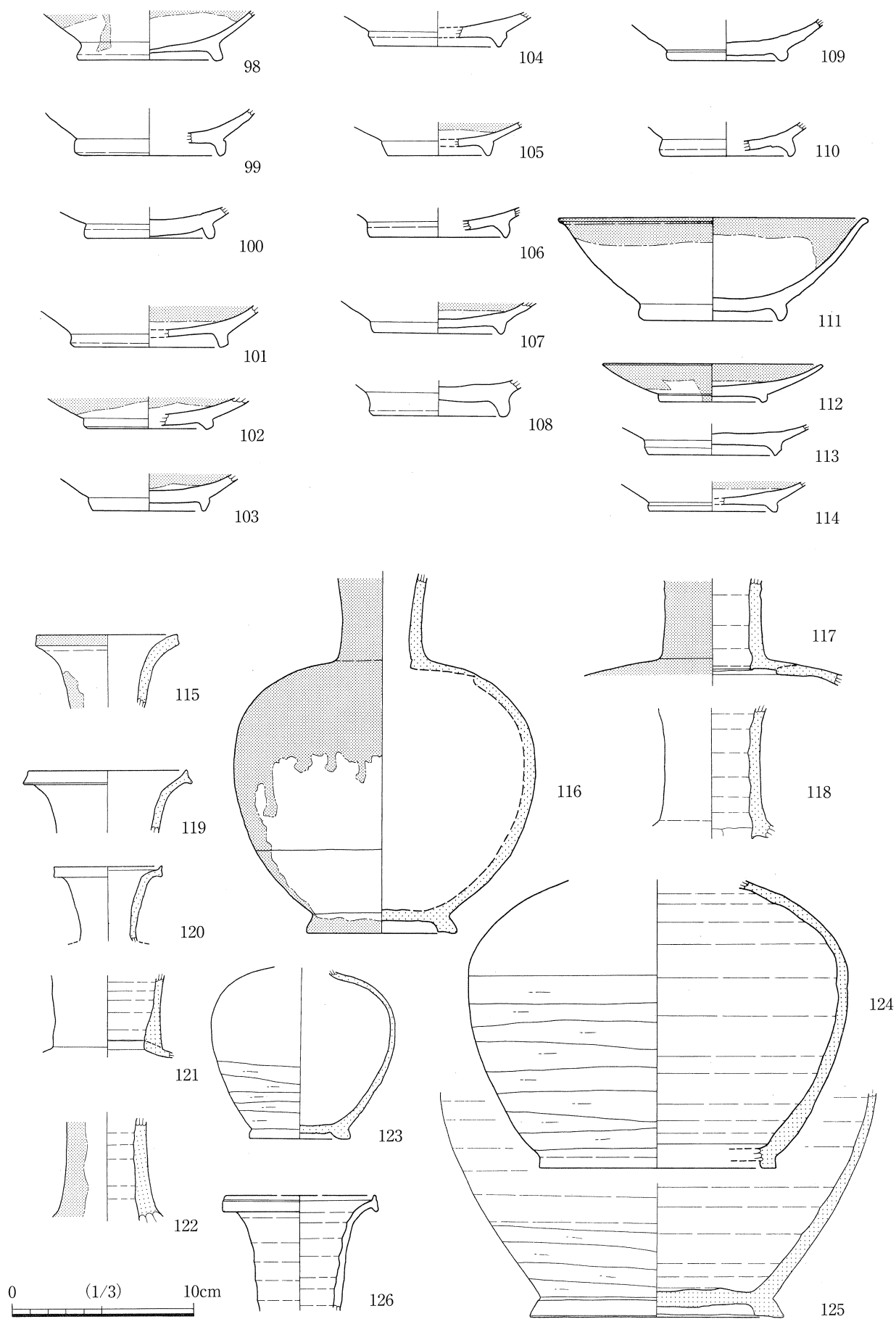
第307図 稲荷台遺跡出土の灰釉陶器(2)



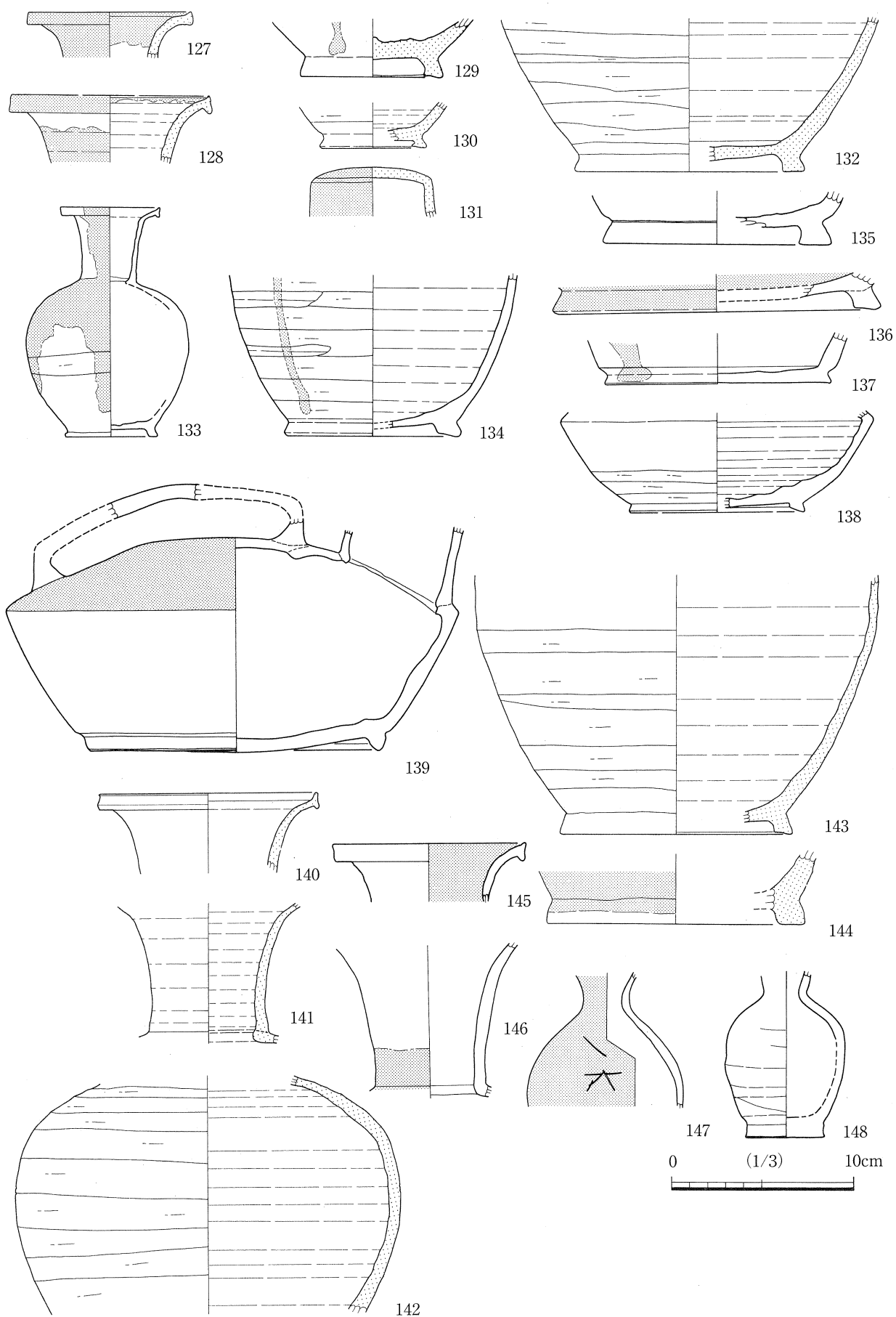
第308図 稲荷台遺跡出土の灰釉陶器 (3)



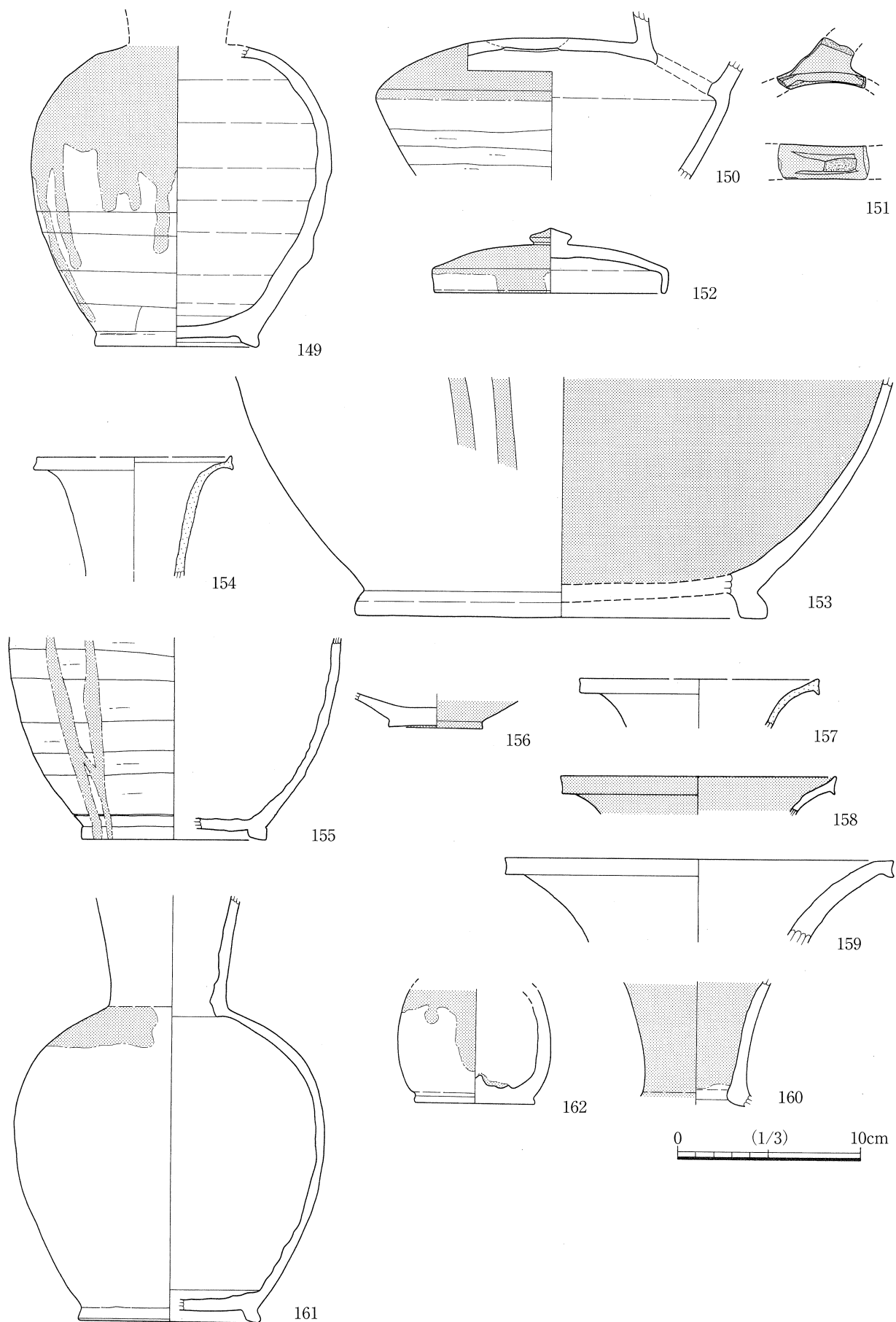
第309図 稲荷台遺跡出土の灰釉陶器(4)



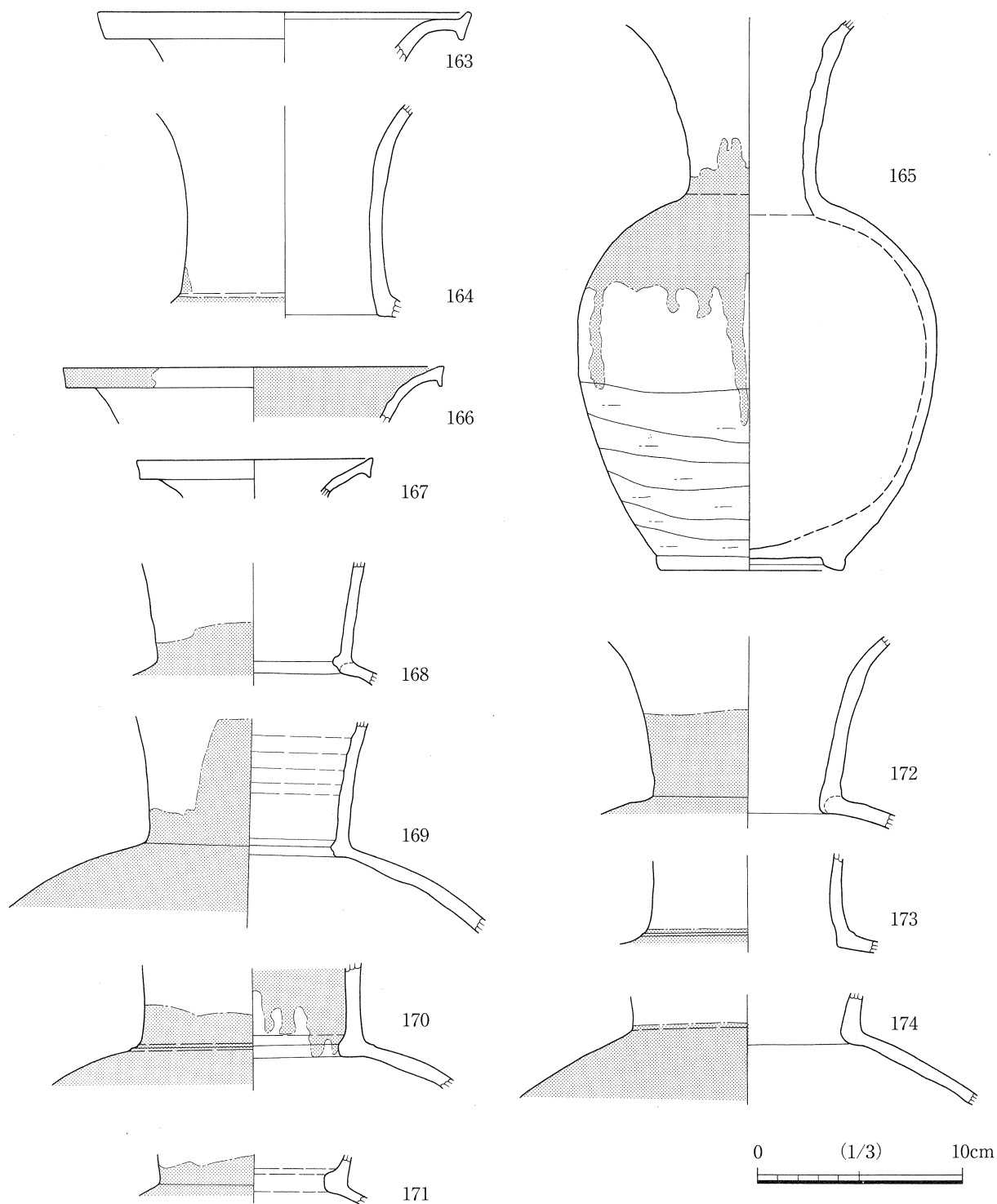
第310図 稲荷台遺跡出土の灰釉陶器(5)



第311図 稲荷台遺跡出土の灰釉陶器(6)



第312図 稲荷台遺跡出土の灰釉陶器 (7)



第313図 稲荷台遺跡出土の灰釉陶器 (8)

D の碗である。94は高台型 2-G の皿、95は高台型 2-H の皿、96は高台型 2-J の皿である。

98～114は、V期古相の灰釉陶器碗・皿類である。98～100は高台型 2-I の碗、101・102は高台型 2-J の碗、103は高台型 4-B の碗、104～106は高台型 4-C の碗、107～111は高台型 4-D の碗である。112は高台型 2-J の皿、113は高台型 4-C の皿、114は高台型 4-D の皿であろうか。

115～118の長頸壺は、稲荷台 A 期の 8 世紀代後半でも末葉の製品で、116・117は頸部 3 段構成さ

れる。117は、稲荷台遺跡南を区画する2号溝覆土から検出され、同溝の下限を示す資料と言える。

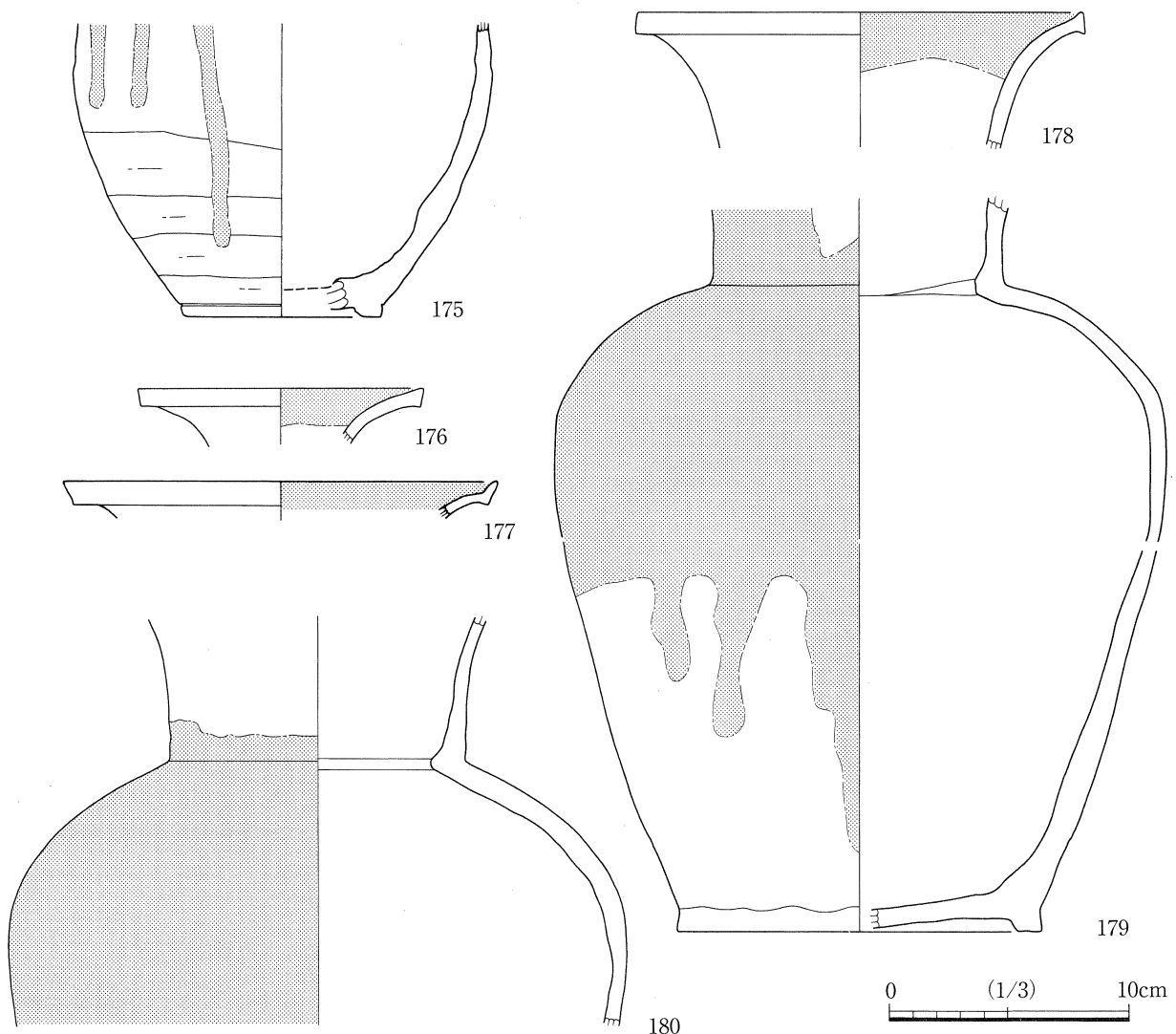
119～126の長頸壺は、Ⅰ期に分類される長頸壺である。126は灰釉長頸壺である。

127～139は、Ⅱ期古相に分類された製品である。133の長頸壺が20住、139の平瓶が49住から検出され、共に稲荷台Ⅱ期-aの基準資料となる。

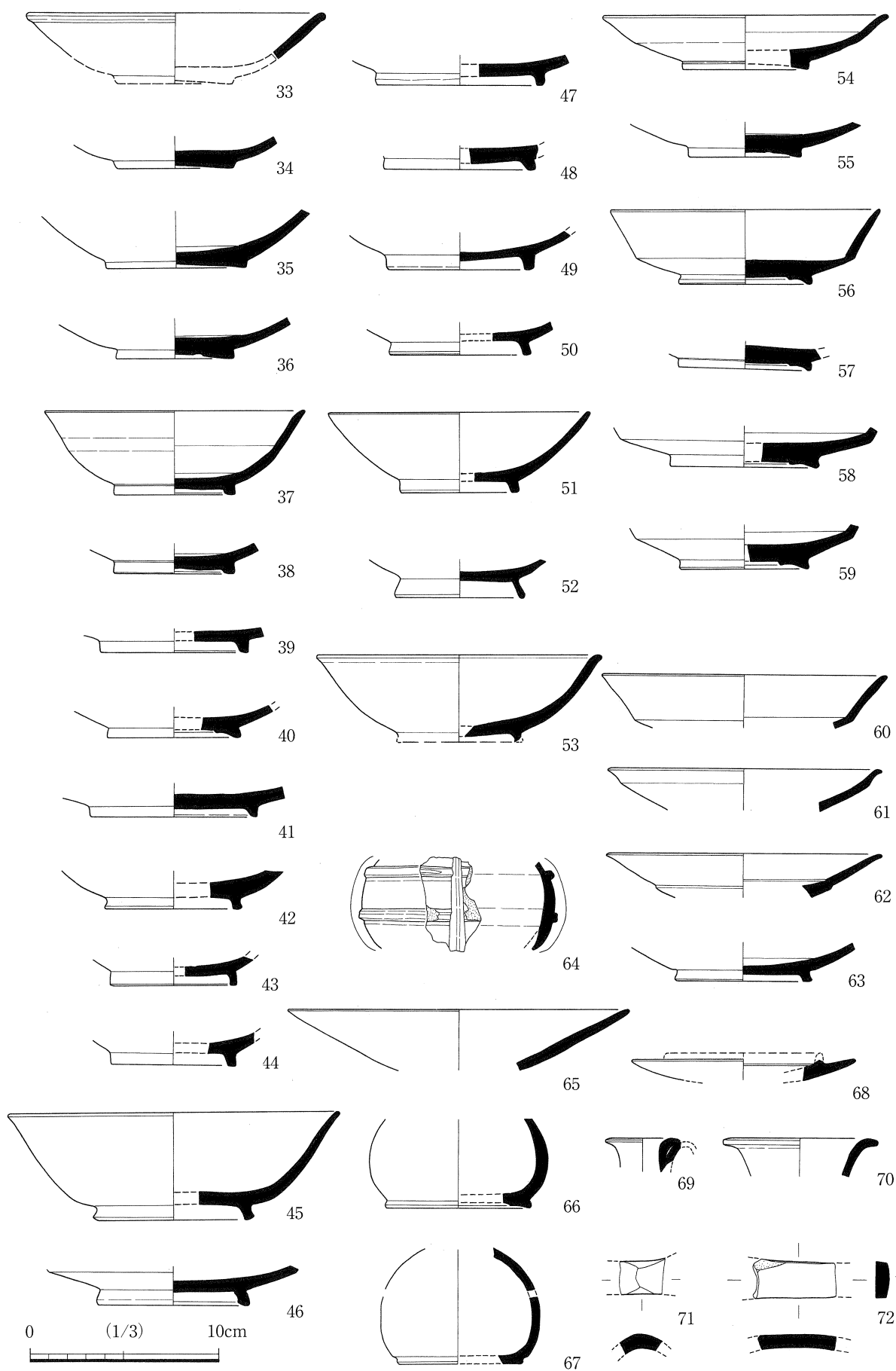
140～152は、Ⅱ期新相に分類された製品である。147灰釉小型壺には、焼成前の線刻がある。148の小型壺は47住から検出され、稲荷台Ⅱ期-bでも前半の基準資料となろう。149は、19の灰釉碗・緑釉稜碗（第328図-56）とともに、1号土器廃棄遺構から検出され、多量のロクロ土師器坏と共に共伴して検出される。19はⅡ期古相、緑釉稜碗は平安京土器編年Ⅱ期中に属すると考えられ、ややそれぞれの時期が異なるが、稲荷台Ⅱ期-b（9世紀代3四半期）に比定できよう。

154～162は、Ⅲ期に分類されるものである。

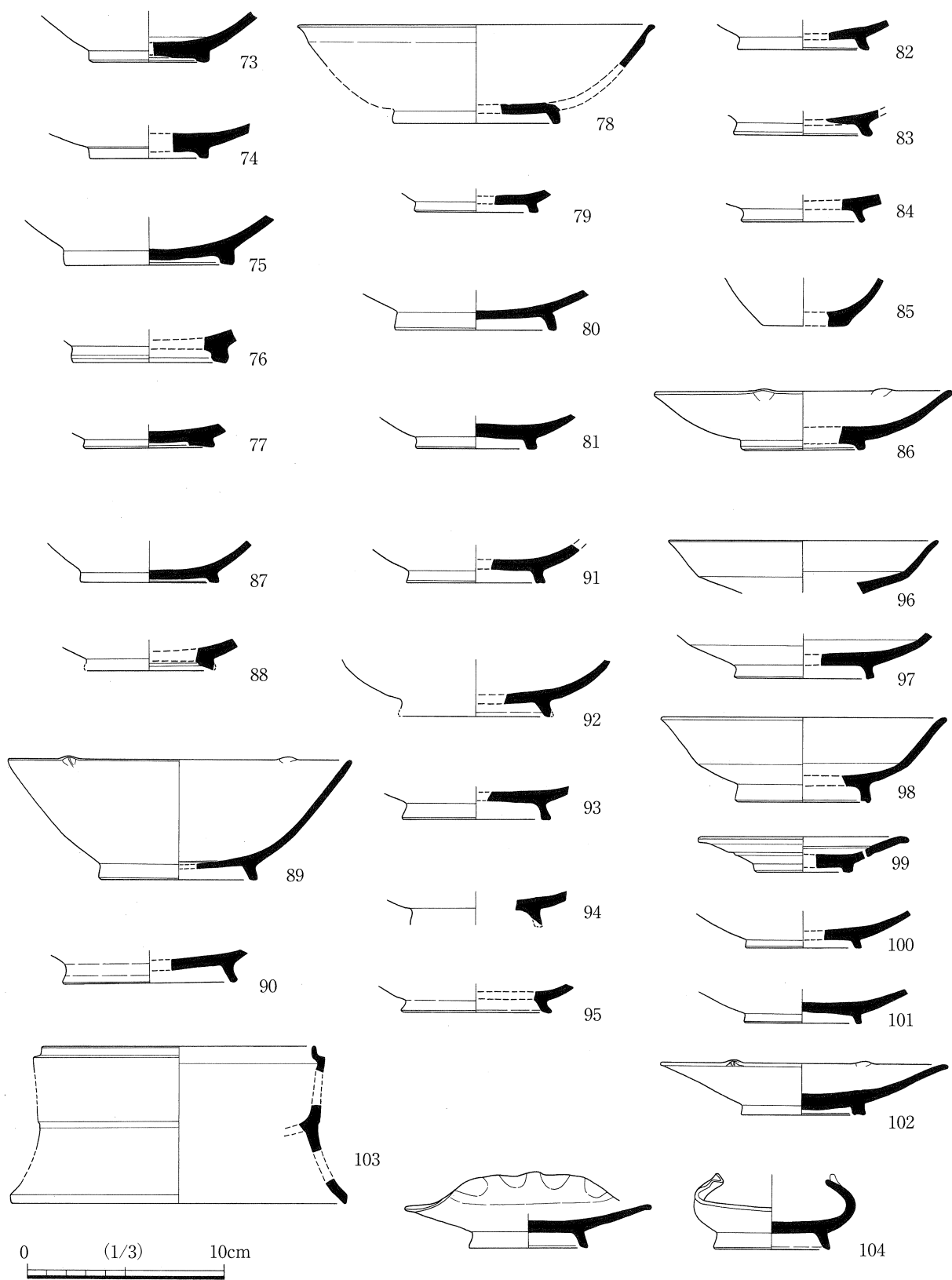
163～165は、Ⅳ期古相に分類されたものである。165は、祭祀遺構の1号土器埋納遺構から、ロク



第314図 稲荷台遺跡出土の灰釉陶器(9)



第315図 稲荷台遺跡出土の緑釉陶器 (1)



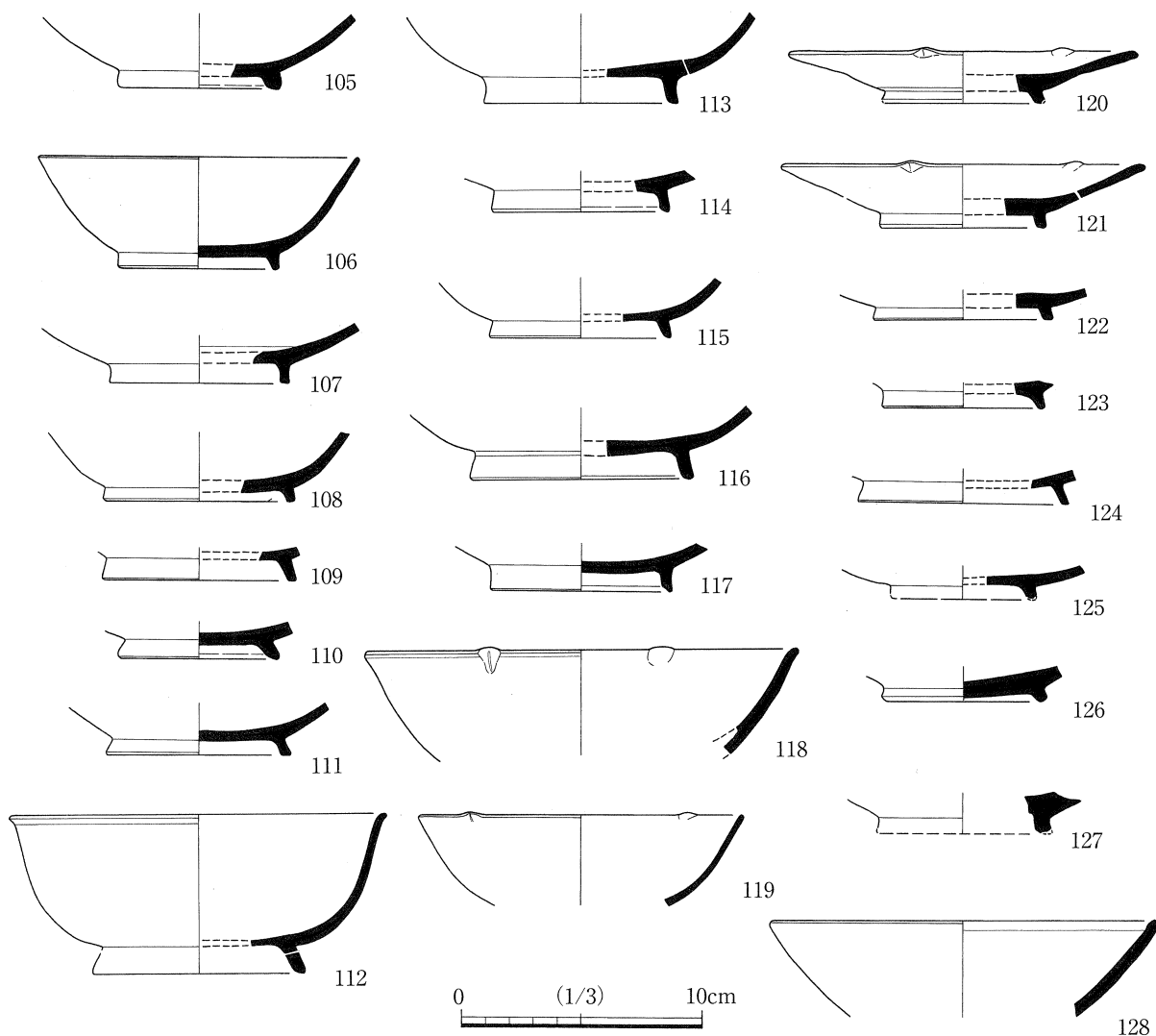
第316図 稲荷台遺跡出土の緑釉陶器 (2)

※緑釉陶器1～11は坂野第19図1～11、12～19は坂野第22図1～8、20～30は坂野第23図1～13

口土師器坏50点、椀形鉄滓2点と共に小堅穴遺構から検出されたもので、稻荷台Ⅳ期-a（10世紀第1四半期）の基準資料となる。

116～174は、Ⅳ期新相に分類されたものである。

175～180は、Ⅴ期古相に分類されたものである。



第317図 稻荷台遺跡出土の緑釉陶器(3)

緑釉陶器

1～11（坂野第19図）は、緑釉緑彩花文椀である。12～32は、（坂野第22・23図）は、緑釉陰刻花文である。遺物については坂野氏の記載による。

33～72は、平安京土器編年でⅡ期古～Ⅱ中に該当する製品であろう。34～35は、高台削り出しで平底を呈する椀である。34は、胎土灰白色を呈し、33の下半とも思われる底部である。33は27住床面から僅かに浮いて検出し、27住の出土遺物に44の灰釉段皿から稻荷台Ⅲ期-a（9世紀第3～4四半期）に比定され、両者の編年感が同じ年代を示す資料である。36は底部削り出しで、底部中央に太い沈線が巡る。37・38は、削り出しの低い角型を呈する。35～38は胎土暗灰色・釉色濃緑色を呈するなど酷似点が多くいずれも山城小塩4号窯の製品と思われる。40は蛇の目高台椀である。41は高台が低い角

型を呈するやや大形の椀で、1・2次焼成ともトチンを残し、丁寧なミガキで底部外面まで厚く施釉を施す有品である。42は、高台角型の椀である。43～47は高台が角型でやや開き気味の椀である。48～53は高台角型の椀である。54～55は、高台部削り出しの中央に太い沈線が巡る皿で、いずれも山城小塩4号窯の製品と思われる。

56～59は、蛇の目高台の稜椀であろうか。60は、稜椀口縁部である。56は、1号土器廃棄遺構から検出され、共伴遺物に19の灰釉皿と149の灰釉長頸壺がある。19はⅡ期古相（坂野）、149はⅡ期新相（坂野）、56は平安京土器編年Ⅱ期中に属すると考えられ、1号土器廃棄遺構は稻荷台Ⅱ期－b（9世紀代3四半期）に比定した。平安京土器編年Ⅱ期中の年代感は、9世紀3～4四半世紀され、やや年代感に異なりを見せる資料となる。

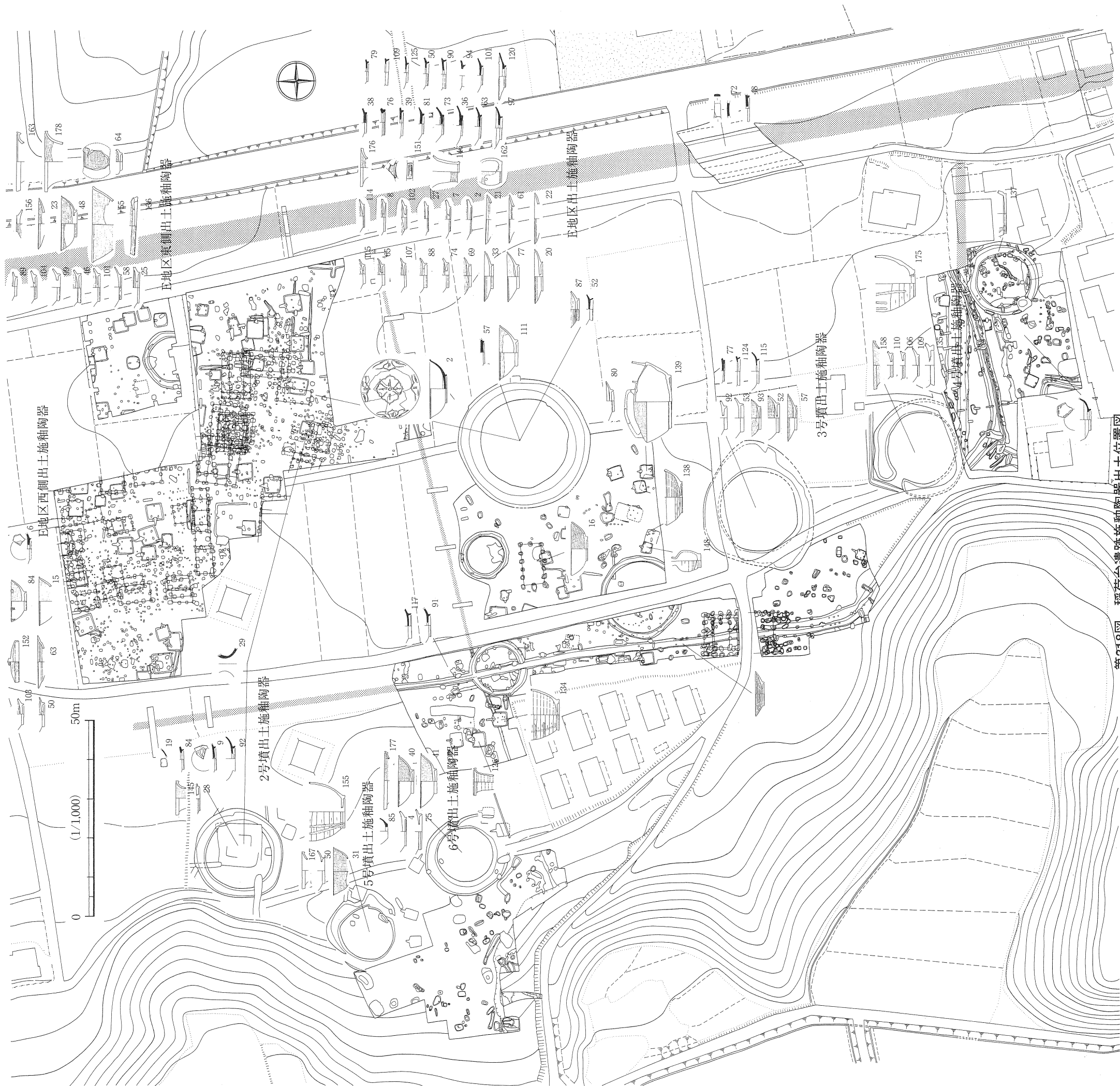
61・62は皿口縁部で、61は口縁下端に稜線、62は内外面段を有する山城小塩4号窯の製品と思われる。63は高台角型の皿である。

64は四足壺胴部片で内外面に施釉を施している。65～67は、唾壺である。65の推定口径は18cmを計り、内面には重ね具の痕跡がある。65は底部蛇の目高台で、内外面施釉を施している。67は唾壺もしくは小壺と思われ、外面に薄く施釉を施し内面には無い。86は口縁片である。69・70は、小壺の口縁片で、69は把手が付く。71・72は、把手片である。

73～86は、平安京土器編年でⅡ期中～Ⅱ期新の9世紀末葉～10世紀初頭を中心とした時期の製品であろう。73～84は碗、85は無高台碗で底部糸切り痕を残す山城産であろうか。86は高台削り出しの輪花皿で、山城小塩4号窯の製品と思われる。

87～104は、平安京土器編年でⅡ期新の10世紀前葉を中心とした時期の製品であろう。87は高台削り出しの低い角型を呈し、山城産の製品である。88の高台は、幅の狭い蛇の目の碗である。89は輪花碗。91～95は椀。96～98は稜椀。99は小皿の段皿である。103は緑釉香炉である。図示はしなかったが香炉は古墳群からも透かしのある小片が検出されている。104は耳皿である。

105～128は、平安京土器編年でⅡ期新～Ⅲ期中までの10世紀代を中心とした時期の製品であろう。



第318图 稻荷台遺跡施釉陶器出土位置图



第319図 稻荷台遺跡E地区灰釉陶器出土位置図

